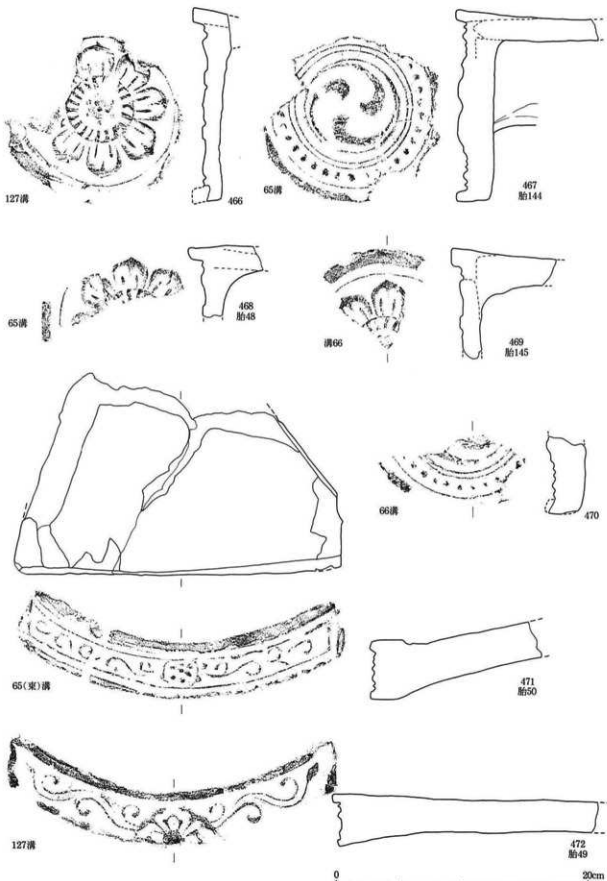


図144　（その2）65・65（東）・66・127溝　出土遺物

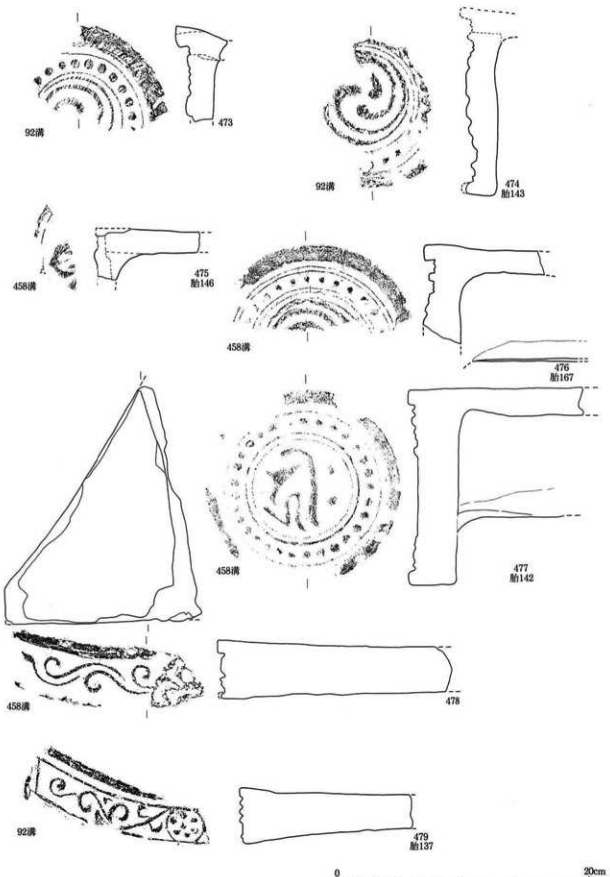


図145　（その２）92・458溝　出土遺物

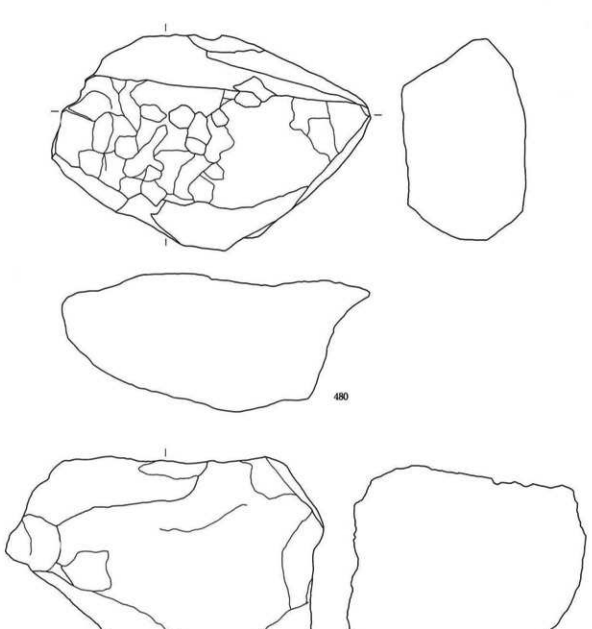


図146　（その2）66溝　出土礎石

型(307)がみられる。327・333の土師質羽釜は和泉Ｂｃの型式に近い。時期は13～14世紀代に属する。写真図版55－302は瓦器小皿外面の粘土接合痕跡である。

第6面　120溝出土遺物（図136）

中世遺物が出土している。図化したのは瓦器椀Ⅲ－2～3期(335)、13世紀前半白磁碗Ⅳ－2類(336)、須恵器こね鉢(337)である。時期は13世紀代に属する。

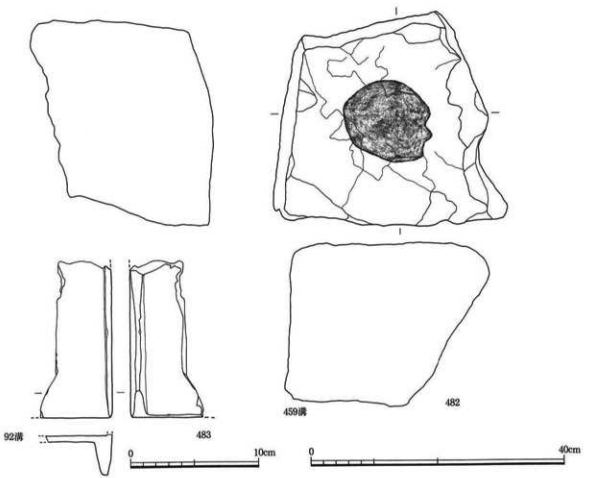


図147　（その２）92溝　出土遺物、459溝　出土礎石

第６面　123溝出土遺物（図137、写真図版51・53）

中世遺物が出土している。土師器小皿(338～340)、瓦器小皿(341)、瓦器椀Ⅲ－２～３期(342～349・352～356)、土師質羽釜河内Ｂ１ｄ型(358)、石製硯(357)、中国陶磁器(350・351)を図化している。瓦器椀は見込みに平行の暗文が施されているものが主で、ラセン状の暗文は345・349に見られる。350は16世紀末～17世紀初頭の漳州窯系白磁端反皿、351は13世紀前半の白磁碗Ⅳ－２類である。357の硯は左側が部分的に残存するが、海は欠損、縁および脚部も剝がれ落ち、ごく一部に脚部接地面の痕跡がみられる。

第６面　66溝出土遺物（図138、写真図版43・52・54・75）

中世遺物が出土している。図化したのは土師器小皿(359～367)、土師器大皿(368)、黒色土器Ａ類椀(373)、瓦器鉢(382)、瓦器小皿(376)、瓦器椀(377～381)、中国陶磁器(369～371・374・375)、須恵器こね鉢(383)、土師質羽釜大和Ｂ１ｅ型(372)、土師質羽釜河内Ｂ１ｄ型(384・385)である。372の土師質羽釜は形態の特徴から、紀伊の可能性もある。

瓦器椀はⅡ－１～２期とⅣ－２～３期のものがみられ、中国陶磁器は13世紀前半の白磁碗Ⅳ類(371)、Ⅳ－２類(370)、Ⅷ－３類？(374)、Ⅷ－３類(375)、13世紀後半の龍泉窯系青磁皿Ⅰ－５類(369)がある。

時期的には13～14世紀代のものが主である。

この他、古墳時代の土師器竈上部破片(写真図版75－1429)が出土している。

第６面　92溝出土遺物（図139、写真図版43・48・87）

中世遺物が出土している。図化したのは土師器小皿(386～393)、瓦器椀Ⅳ－２～４期(394～405)、灰釉陶器椀？(406)、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(407)、須恵器こね鉢(408)、瓦質甕(410)、常滑甕２型式(409・411)、常滑甕６ｂ型式(412)である。この他、外面がガラス化してオリーブ灰色を呈した溶解炉片(写真図版87－1466)がみられる。時期は土器からみて13～14世紀代のものである。

第６面　143溝出土遺物（図140・141、写真図版43・51・55・81）

中世遺物が出土している。それらは土師器小皿(413～421)、土師器大皿(422)、瓦器小皿(423・写真図版51－1415)、瓦器椀Ⅱ－３～Ⅲ－３期(424～426)・Ⅳ－３～４期(427～436)、須恵器こね鉢(442～444)、須恵器甕(438)、瓦質甕(437)、土師質羽釜内内Ｂ１ｅ型(441)、瓦質羽釜内内Ｄ１ａ型またはＤ１ｂ型(439・440)、巴文軒丸瓦Ｃ１型式(445)である。時期は12～14世紀代に属する。写真図版55－419は土師器小皿の外面粘土接合痕を拡大したものである。

第６面　458溝出土遺物（図142・143、写真図版43・55）

中世遺物が多く出土している。図化したのは土師器小皿(446～451)、瓦器椀Ⅳ－２～４期(452～455)、瓦器片口鉢？(456)、13世紀前半白磁碗Ⅳ類(457)、常滑甕６ａ？型式(458)、瓦質？甕(461)、須恵器こね鉢(465)、須恵器こね鉢の脚台部(464)、須恵器？甕(460)、瓦質火舎？(459)、瓦質羽釜河内Ｊａ型？(462・463)である。時期は13～14世紀に属する。写真図版55－454は瓦器椀体部外面の粘土接合痕である。

第６面　65・65(東)・66・127溝出土遺物（図144、写真図版81～83）

65溝からは複弁蓮華文軒丸瓦Ａ型式(468)、巴文軒丸瓦Ｃ２型式(467)、65(東)溝からは隅切りの唐草文軒平瓦Ｂ１型式(471)、66溝からは複弁蓮華文軒丸瓦Ａ型式(469)、巴文軒丸瓦Ｃ２型式(470)が出土している。127溝からは複弁蓮華文軒丸瓦Ａ型式(466)、唐草文軒平瓦はＢ３型式(472)が出土している。

第６面　92・458溝出土遺物（図145、写真図版81～83）

92溝からは巴文軒丸瓦Ｃ２型式(474)・Ｃ４型式(473)、唐草文軒平瓦Ｂ２型式(479)が出土している。

458溝からは複弁蓮華文軒丸瓦Ａ型式(475)、巴文軒丸瓦Ｃ１型式(476)、梵字文軒丸瓦Ｂ型式(477)、隅切りの唐草文軒平瓦Ｂ３型式(478)が出土している。

第６面　66溝出土礎石（図146、写真図版84）

礎石２点を図化している。480は上面が平坦で、やや扁平な砂岩製の礎石である。長さ50.3㎝、幅33.9㎝、厚さ21.8㎝を測る。481は上面がやや凹凸で、厚みをもつ火成岩と思われる石材である。長さ50㎝、幅43.6㎝、厚さ39㎝を測る。２点ともに成形加工した痕跡を留める。

第６面　92溝出土遺物、459溝出土礎石（図147、写真図版84・86）

92溝出土の石製硯(483)、459溝出土の礎石(482)を図化している。礎石は直方体に近く成形加工され、長さ37㎝、幅33.8㎝、厚さ25.6㎝を測る。上面中央には12.4×14.8㎝の範囲で煤が付着している(写真図版84－482)。石材は483が粘板岩、482が砂岩製である。

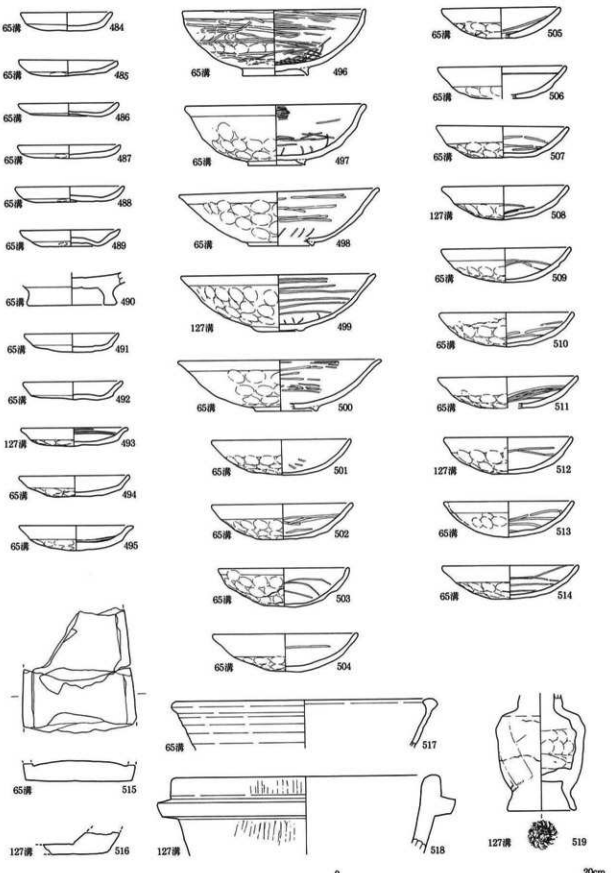


図148　（その２）65・127溝　出土遺物（１）

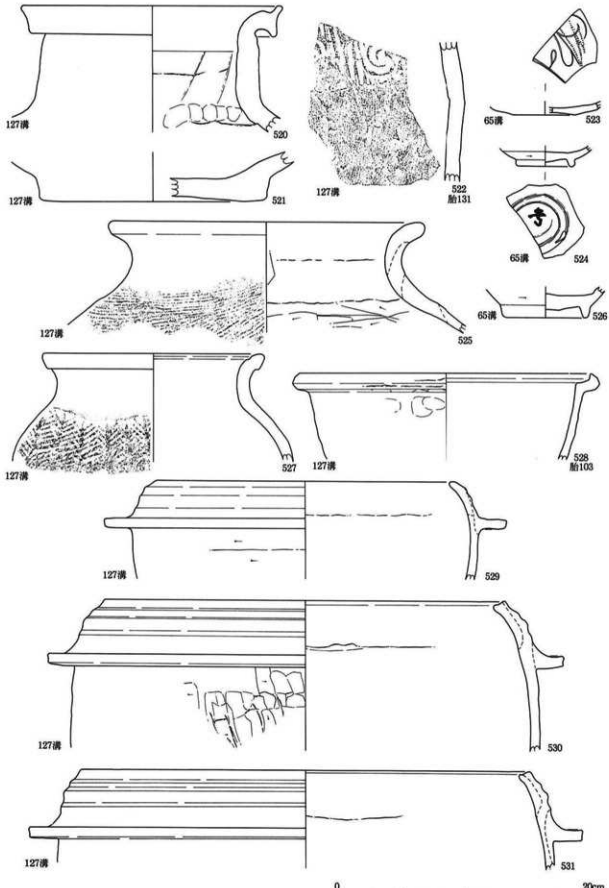


図149　（その2）65・127溝　出土遺物（2）

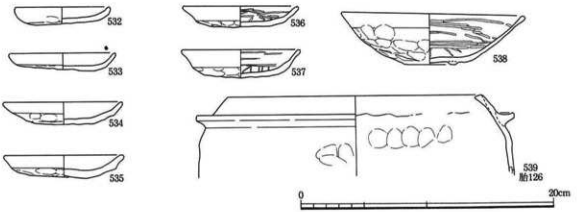


図150　（その２）57溝　出土遺物

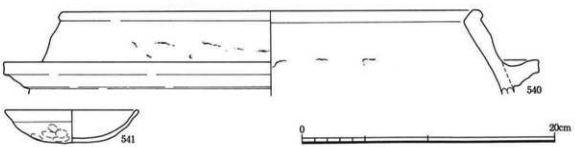


図151　（その２）440溝　出土遺物

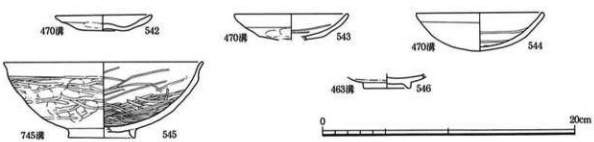


図152　（その２）463・470・745溝　出土遺物

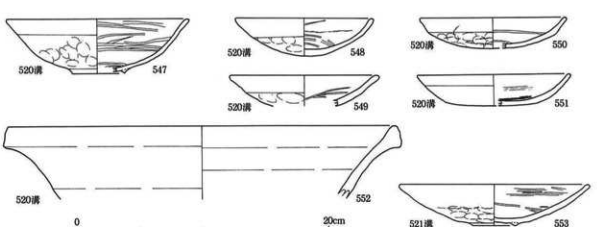


図153　（その２）520・521溝　出土遺物

第６面　65・127溝出土遺物（図148･149、写真図版42･52･53･86･87）

中世遺物が多数出土している。図化したのは土師器小皿(484～489･492)、土師器椀(490)、瓦器小皿(491･493～495)、瓦器椀(496～514)、瓦質鍋(528)、瓦質羽釜河内Ｊａ型かと思われるもの(529～531)、

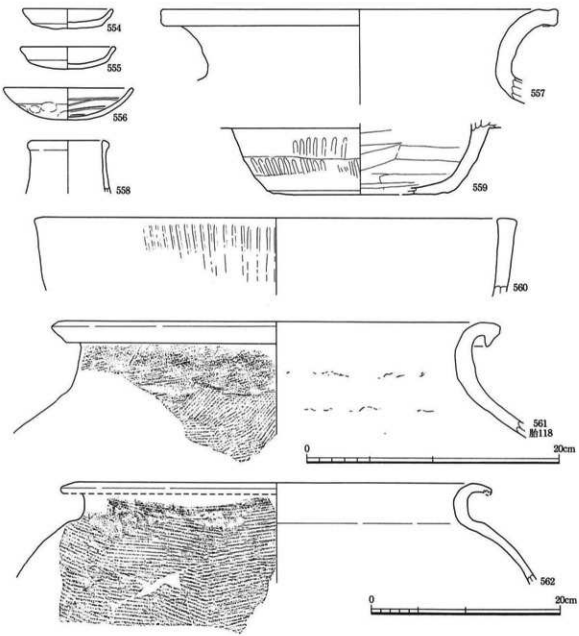


図154　（その2）280溝　出土遺物

瓦質甕(525・527)、瓦質仏花器(519)、須恵器こね鉢(517・521)、石製硯(515)、滑石製石鍋(516・518)、常滑壺(520)、常滑甕？体部破片(522)、中国陶磁器(523・524・526)である。この他、堅く焼け締まった炉壁片か不明の焼土塊(写真図版87－1467)がみられる。

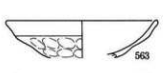


図155　（その2）424・425溝　出土遺物

瓦器椀はⅡ－2～Ⅲ－3期(496～500)、Ⅳ－3～4期(501～514)の2時期のものがみられる。瓦質甕体部には平行および綾杉状のタタキが施されている。硯は脚の無い方形状のもので、海および陸の手前側、縁は欠損している。

中国陶磁器は13世紀前半白磁碗Ⅷ類(526)、13世紀半ばから後半の同安窯系青磁皿Ⅰ－5ｂ類(523)、高台内面に墨書で「寺」と記された15世紀半ばから後半の白磁碗(524)がある。

127溝出土は493・499・508・512・516・518～522・525・527～531である。瓦器および中国陶磁器から、65・127溝の時期は12～15世紀までおよぶ。

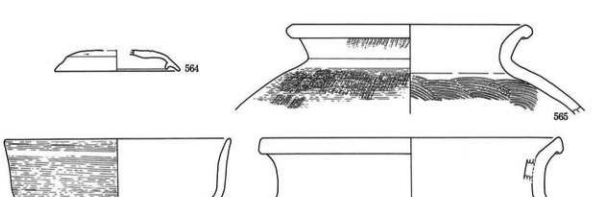


図156　（その２）878溝　出土遺物

第６面　57溝出土遺物（図150、写真図版49）

中世遺物が出土している。図化したのは土師器小皿(532～535)、瓦器小皿(536･537)、Ⅲ－２～３期の瓦器椀(538)、瓦質羽釜の河内Ｊａ'型(539)である。時期的には13～14世紀に属する。

図157　（その２）485溝　出土遺物

第６面　440溝出土遺物（図151）

瓦器椀Ⅳ－３～４期(541)、土師質羽釜河内Ｂ１ｄ型(540)を図化している。時期は13～14世紀代のものか。

第６面　463・470・745溝出土遺物（図152、写真図版43･53）

470溝では土師器小皿(542)、瓦器椀Ⅳ－４～５期(543･544)を図化している。542の土師器小皿は底部中央が少し窪んだへそ皿で、時期は14世紀に属する。

463溝出土遺物は13世紀白磁皿(546)のみ図化している。

745溝出土遺物では瓦器椀Ⅱ－１～２期(545)を図化している。時期は12世紀前半に属する。

第６面　520・521溝出土遺物（図153）

520溝では瓦器椀Ⅲ－２～３期(547)、Ⅳ－３～４期(548～551)、須恵器こね鉢(552)を図化している。時期は13～14世紀代に属する。

521溝からは瓦器椀Ⅲ－３～Ⅳ－１期(553)が出土している。

第６面　280溝出土遺物（図154、写真図版43）

土師器小皿(554･555)、瓦器椀Ⅳ－３～４期(556)、瓦質甕(561･562)、須恵器甕(557)、時期不明の陶器壺(558)、滑石製石鍋(559)、瓦質火舎？(560)を図化している。時期は13～14世紀代に属するものか。558の陶器壺は外内の器表面に褐色の釉薬がかかっており、外面は少し釉薬が飛んでいる。559の石鍋は口縁部から鍔部にかけて欠損しているが、短く立ち上がる口縁の形態をなすと推定される。外内面および破損部には煤が付着しており、割れた面のエッジは摩滅している。また、鍔直下には横方向の切り込みがみられ、何かに転用・再加工する途中のものと思われる。

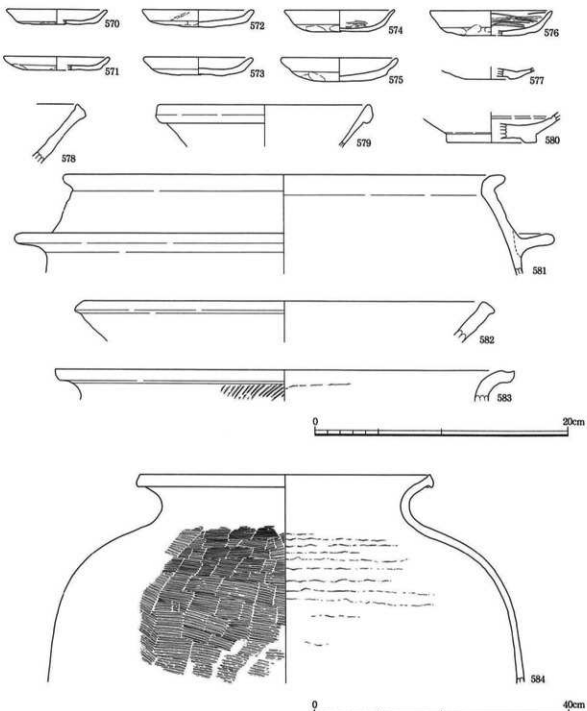


図158　（その2）36井戸　出土遺物

第5面　424・425溝出土遺物（図155）

底部の欠損した瓦器椀のⅣ－2～3期(563)にあたると思われるものを図化している。時期は13世紀後半から14世紀初頭に属するものか。

第6面　878溝出土遺物（図156）

須恵器蓋(564)、無蓋高坏？(566)、甕(565・567)を図化している。567の頸部内面には溶着が認められる。須恵器編年のⅢ－2段階にあたるものか。

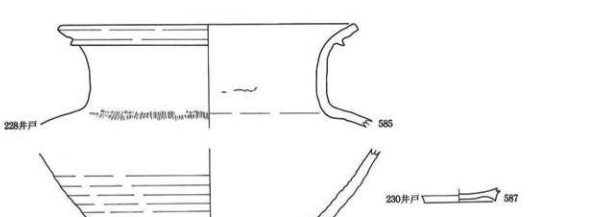


図159　（その２）228・230井戸　出土遺物

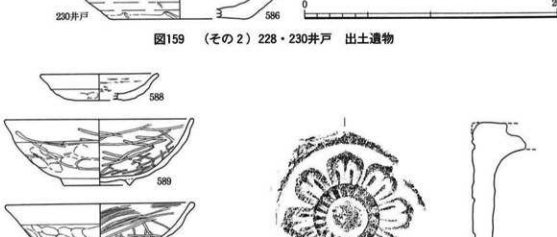


図160　（その２）129井戸　出土遺物

第６面　485溝出土遺物（図157）

須恵器蓋のつまみ部分(568･569)を図化している。IIまたはIII型式のものか不明である。

第６面　36井戸（図158、写真図版52･75）

中世遺物が出土している。それらは土師器小皿(570～573)、瓦器小皿(574～576)、中国製青白磁皿(577)、白磁碗Ⅳ－２類(579･580)、土師質羽釜河内Ｂ１ｃ型(581)、須恵器こね鉢(578)、須恵器甕(584)、瓦質擂鉢(582)、瓦質甕(583)などである。時期は12～13世紀にかけてのものである。

この他、古墳時代の土師器竈右側脚破片（写真図版75－1438)も出土している。

第６面　228・230井戸出土遺物（図159、写真図版67）

228井戸からは古墳時代の須恵器甕Ⅰ－２段階(585)が出土している。

230井戸からは瓦器椀底部破片(587)、須恵器こね鉢の底部破片かと思われるもの(586)が出土している。瓦器椀高台の特徴から13世紀前半のものか。

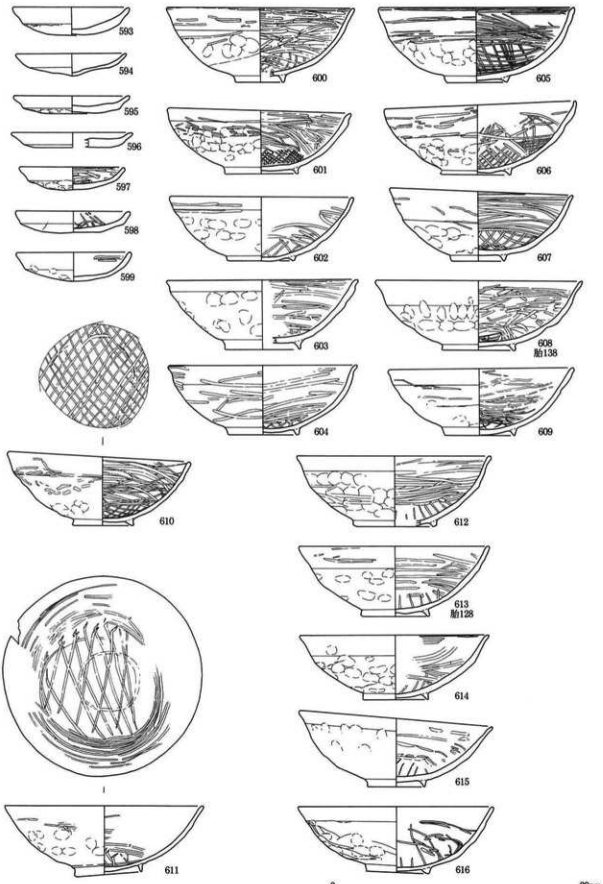


図161　（その2）170井戸　出土遺物（1）

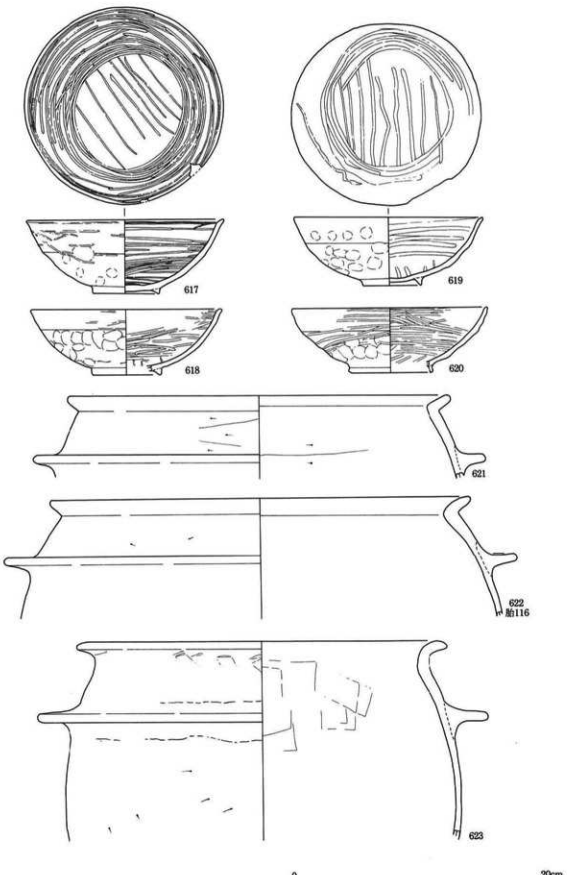


図162　（その２）170井戸　出土遺物（２）

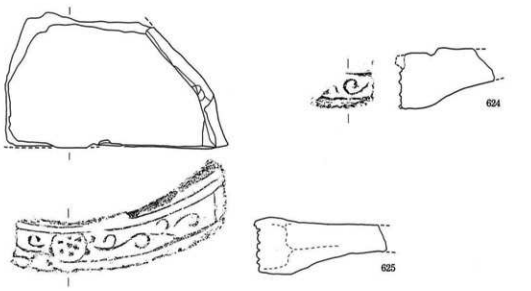


図163　（その2）170井戸　出土遺物（3）

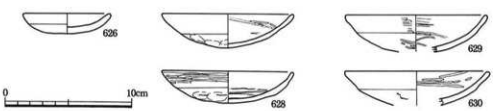


図164　（その2）90井戸　出土遺物

第6面　129井戸出土遺物（図160、写真図版47・75・81）

瓦器小皿(588)、瓦器椀Ⅱ－1～2期(589～591)、複弁蓮華文軒丸瓦A型式(592)を図化している。白磁碗Ⅳ－2類は66溝出土の破片と接合し、図138－371に掲載している。時期は12～13世紀代のものである。

この他、古墳時代の土師器竈の焚き口右手前部分の脚破片(写真図版75－1435)も出土している。

第6面　170井戸出土遺物（図161～163、写真図版44・82）

中世遺物が出土しており、土師器小皿(593～596)、瓦器小皿(597～599)、瓦器椀Ⅱ－1～3期(600～620)、土師質羽釜河内B1c型(621・622)、土師質羽釜和泉Ba型(623)、唐草文軒平瓦B1型式(624・625)を図化している。時期は12世紀代に属する。

第6面　90井戸（図164、写真図版43）

土師器小皿(626)、瓦器椀Ⅳ－3～4期(627～630)を図化している。時期は14世紀代である。

第6面　128井戸出土遺物（図165～167、写真図版45・55・77）

中世遺物が出土している。瓦器椀Ⅰ－2～Ⅱ－2期(631～645)、土師器脚台付皿(646・647・650～653)、土師器高台付耳皿(649)、須恵器こね鉢(648)、土師質羽釜和泉Ba型(654)・河内B1d型かと思われるもの(655)を図化している。時期は12世紀に属する。写真図版55－647は土師器脚台付皿の皿部外面の粘

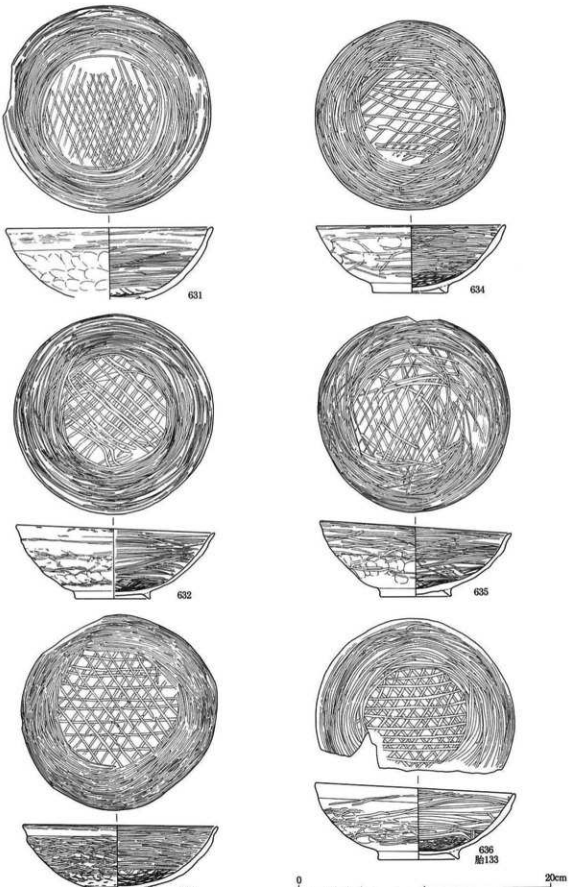


図165　（その２）128井戸　出土遺物（１）

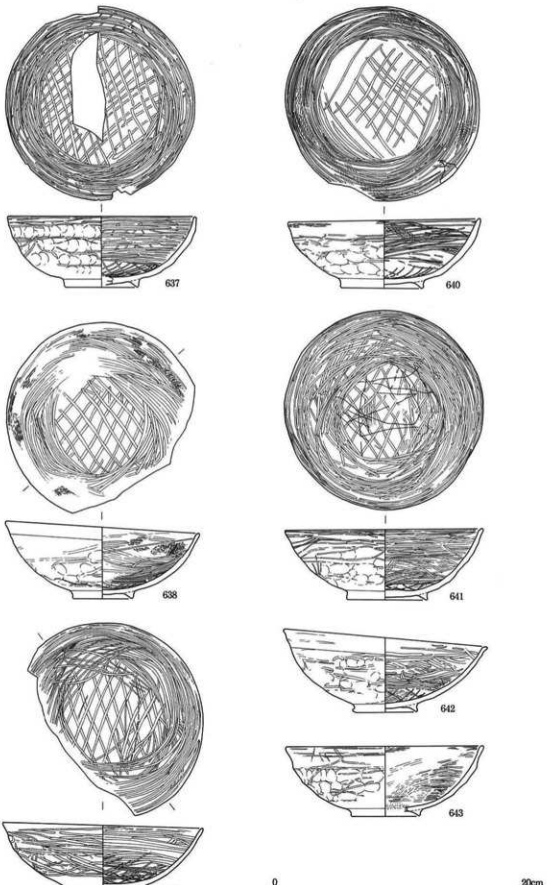


図166　（その2）128井戸　出土遺物（2）

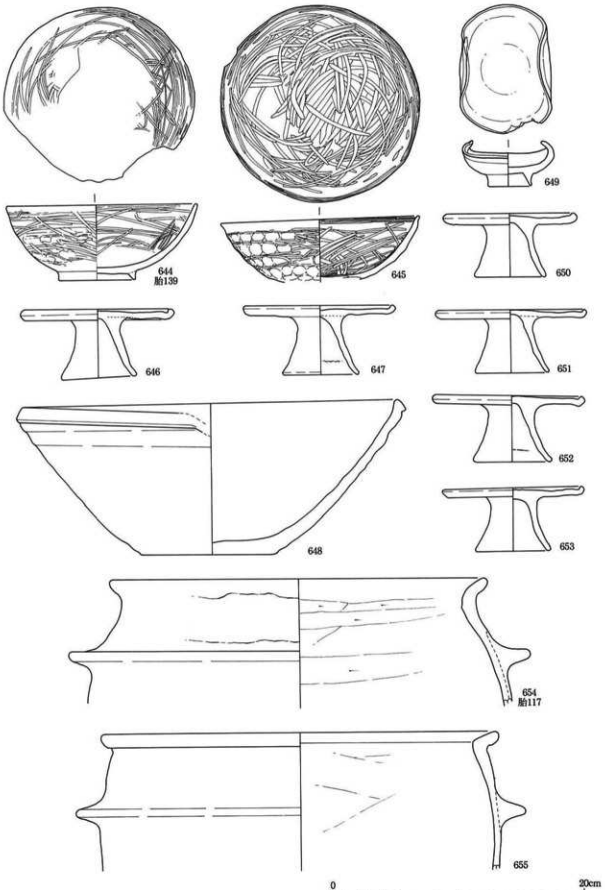


図167　（その２）128井戸　出土遺物（３）

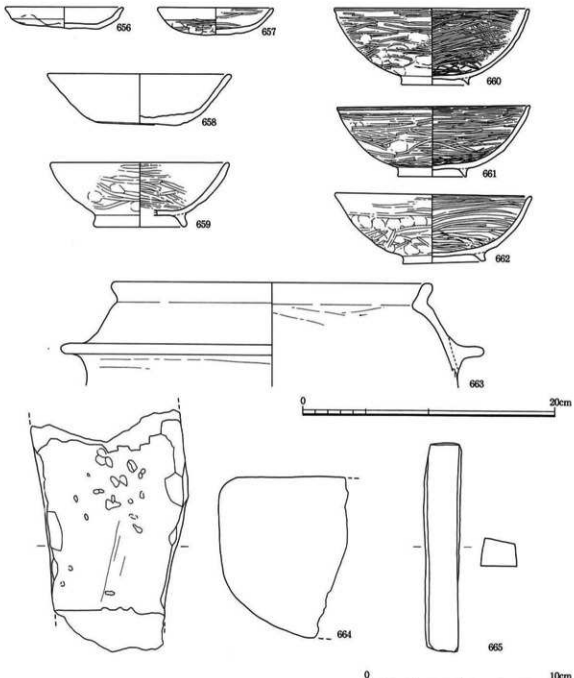


図168　（その2）147井戸　出土遺物（1）

土接合痕跡である。写真図版55－635は瓦器椀外面の粘土紐接合痕跡である。この他、初期須恵器直口壺(写真図版77－1440)が出土しており、黒色物質を塗布したものか、その表面は黒い。

第6面　147井戸出土遺物（図168～176、写真図版46･50･53～55･88～93）

図168には147井戸の比較的上層から出土した遺物および砥石を掲載している。

147井戸からは中世遺物が多量に出土している。図化したのは土師器、須恵器、黒色土器A類、瓦器、中国陶磁器、木器、石器である。

土師器では小皿(656･683～697)、大皿(699～710)、耳皿？の高台部(698)、坏(658)、甕(716)、羽釜

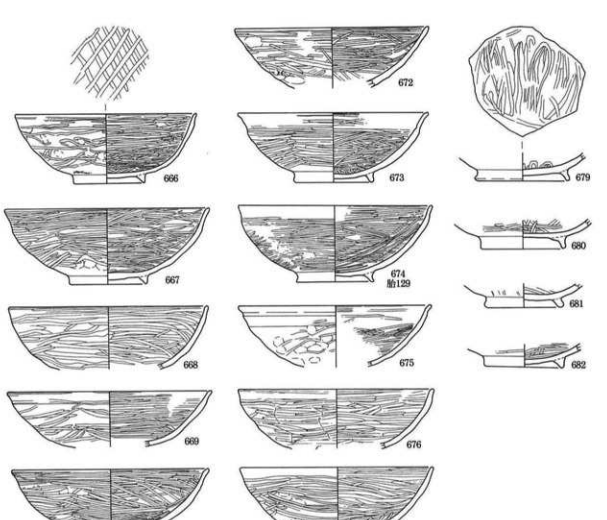


図169　（その２）147井戸　出土遺物（２）

河内Ｂ１ｃ型かと思われるもの(663)がある。土師器坏の外面底部には糸切りの痕跡(写真図版55－658)を留める。写真図版55－702は土師器大皿の外面粘土接合痕跡である。

須恵器にはこね鉢の底部(717)がある。黒色土器Ａ類は椀(659・679)のみである。瓦器は小皿(657・711～713)、高台付の小皿(714・715)、椀Ⅰ－２～Ⅱ－１期(660～662・666～678・680～682)がある。高台付小皿の715は器壁が薄手であるが、火を受け赤く変色し、器表面が剝落している。

中国陶磁器では皿と、碗高台部を図化している。12世紀の白磁皿(718)、白磁碗Ⅳ－２ｃ類(719)、13世紀前半の白磁碗Ⅳ類(720)である。

664・665は147井戸出土の砥石である。665は４面ともに研ぎ面をなす。

木器は多種多様なものが数多く出土している(図171～176)。それらは刀子(721・722)、斎串？(723)、容器(724)、墨書のある加工木片(729)、扁平な木球状に上下に貫通した孔と側面にめくら穴のある用途不明の木製品(725)、曲物類(726～728・730～733)、下駄(735・736)、下駄？(734)、木錘(737)、栓？

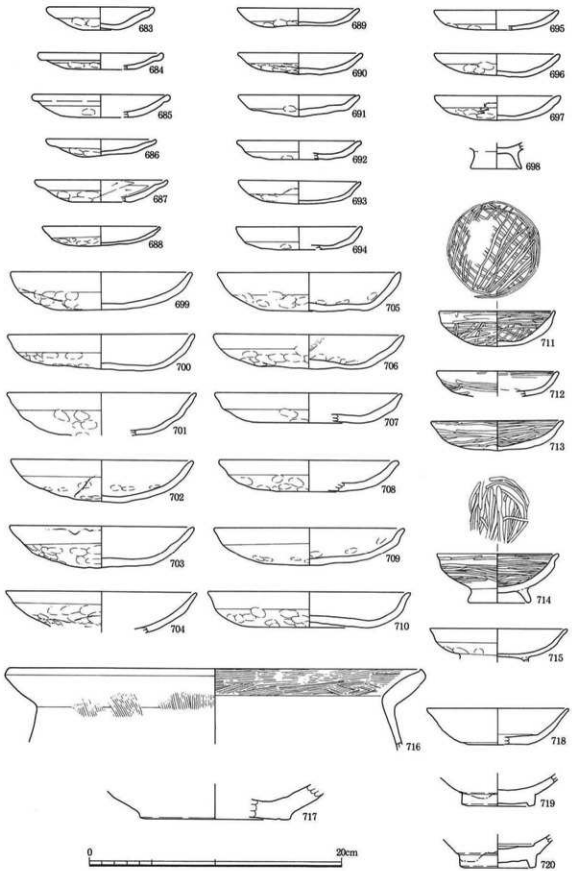


図170　（その2）147井戸　出土遺物（3）

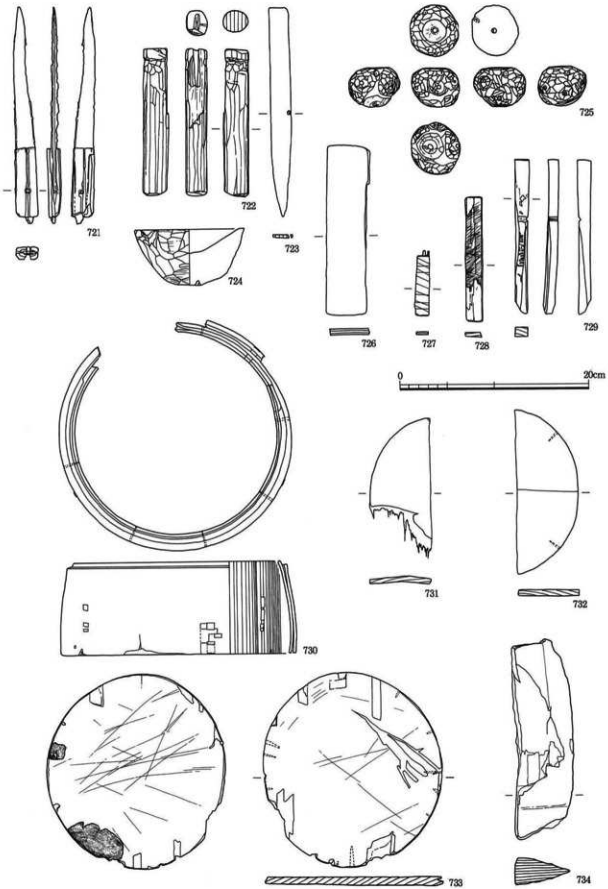


図171　（その２）147井戸　出土遺物（４）

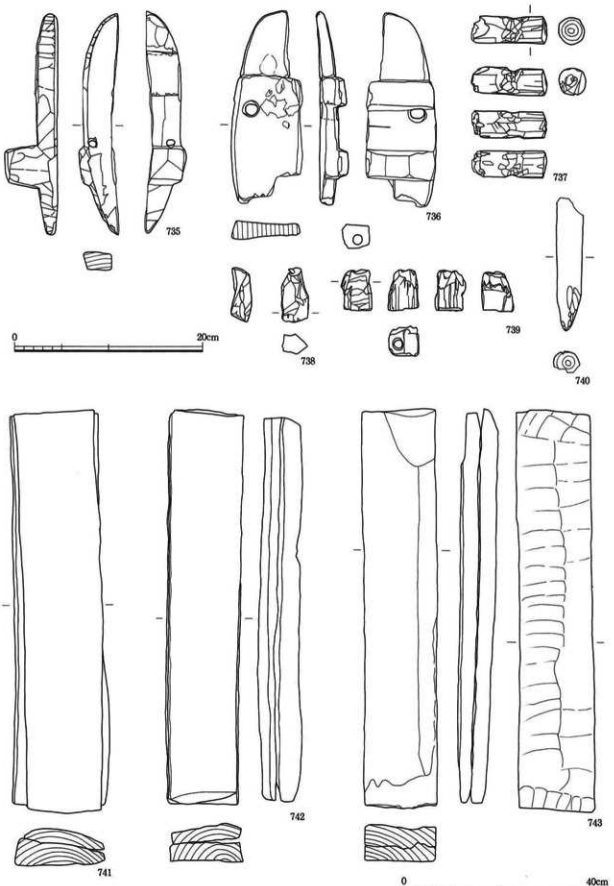


図172　（その2）147井戸　出土遺物（5）

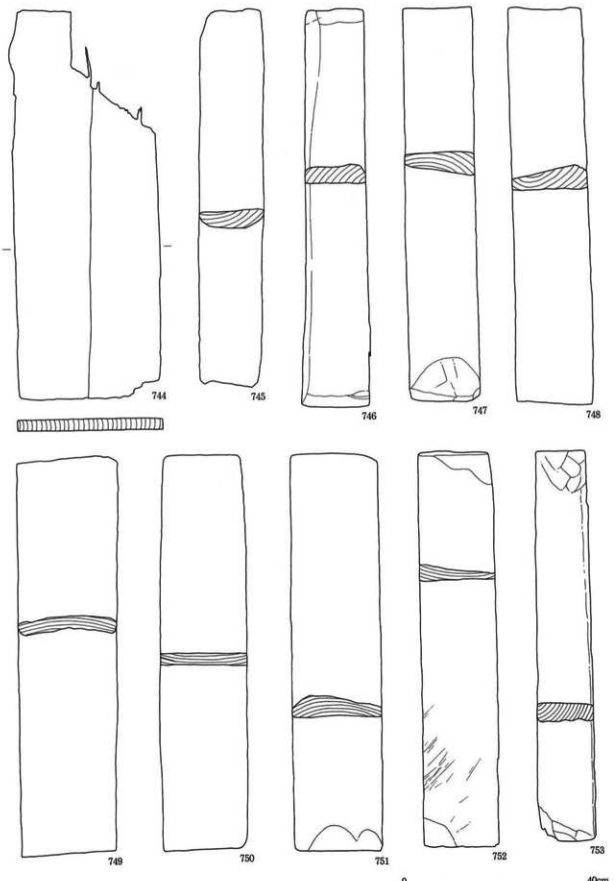
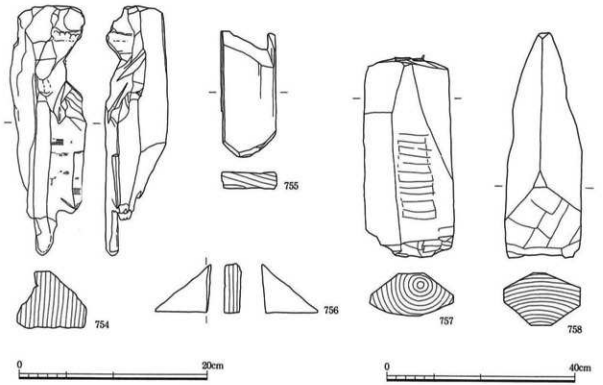


図173　（その２）147井戸　出土遺物（６）



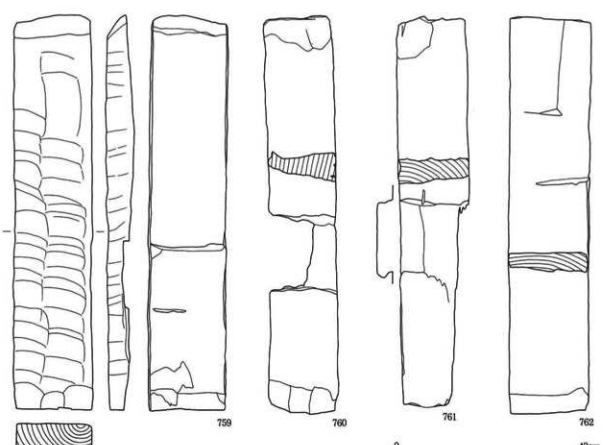


図174　（その2）147井戸　出土遺物（7）

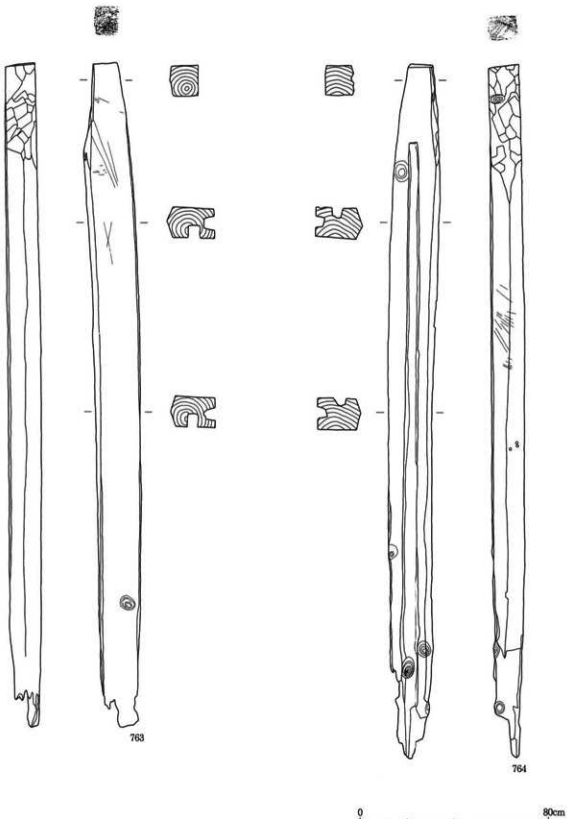


図175　（その２）147井戸　出土遺物（８）

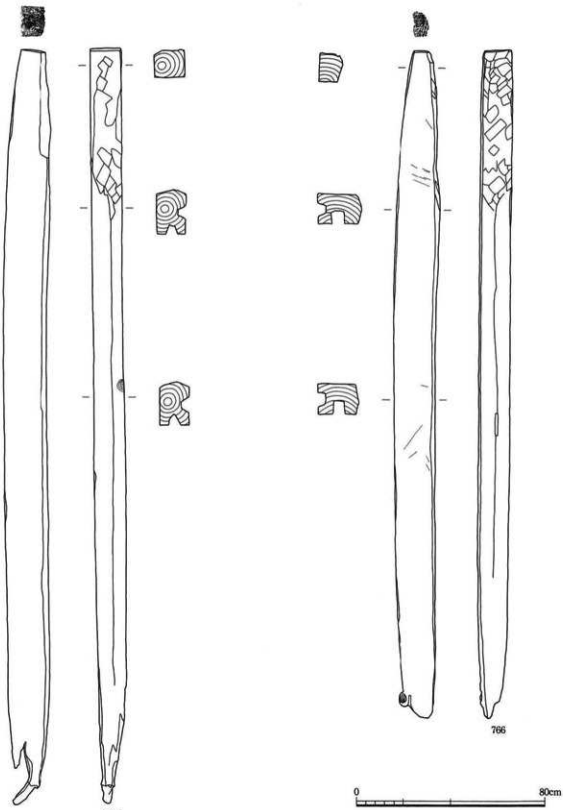


図176　（その2）147井戸　出土遺物（9）

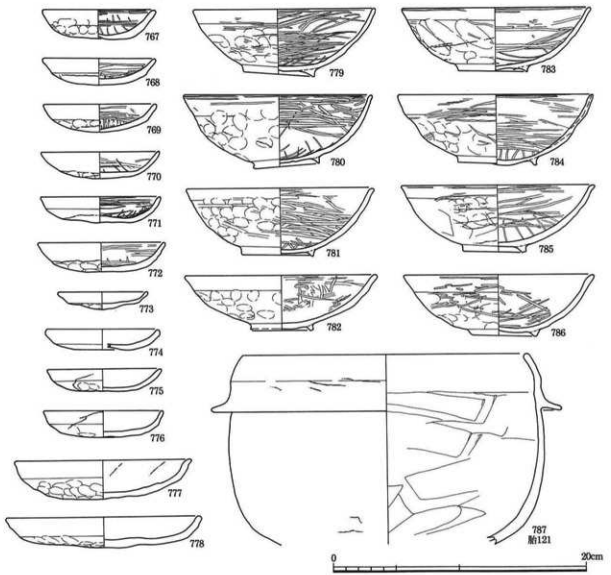


図177　（その２）465井戸　出土遺物

(738・739)、杭(740)、井戸枠転用板材(写真図版90－1470)、井戸枠転用板材？(741～753)、建築部材(754)、不明(755)、板材(756)、井戸枠転用柱材？(757)、井戸枠を支える木(758)、井戸枠転用時に枘を切り込んだ建築部材の板材？(759～762)、井戸枠の四隅に転用された隅木(763～766)などである。隅木は井戸の上部に出ていた箇所は朽ちており、長軸方向には井戸枠転用時の溝が彫り込まれている。また、板材には左右２枚に割ったものや、厚みを前後に２分したものなどがある。加工痕は明確な部分のみ図に示した。写真図版93は隅木および板材の加工痕である。写真図版89－730の曲物には樹皮で結わえた痕跡を留める。写真図版88－725の扁球状の木製品は上下に貫通した孔と、側面に未貫通の穴がみられる。写真図版90－724の刳りものは未完成品か。

時期は瓦器椀、中国陶磁器等より、12～13世紀代に属するものか。

第６面　465井戸出土遺物（図177・179、写真図版47・95）

中世の土器、木器が出土している。土器では土師器小皿(773～776)、土師器大皿(777・778)、瓦器小皿(767～772)、瓦器椀Ⅱ－２～Ⅲ－１期(779～786)、瓦質羽釜大和Ｈ２？型(787)を、木器(図179)では

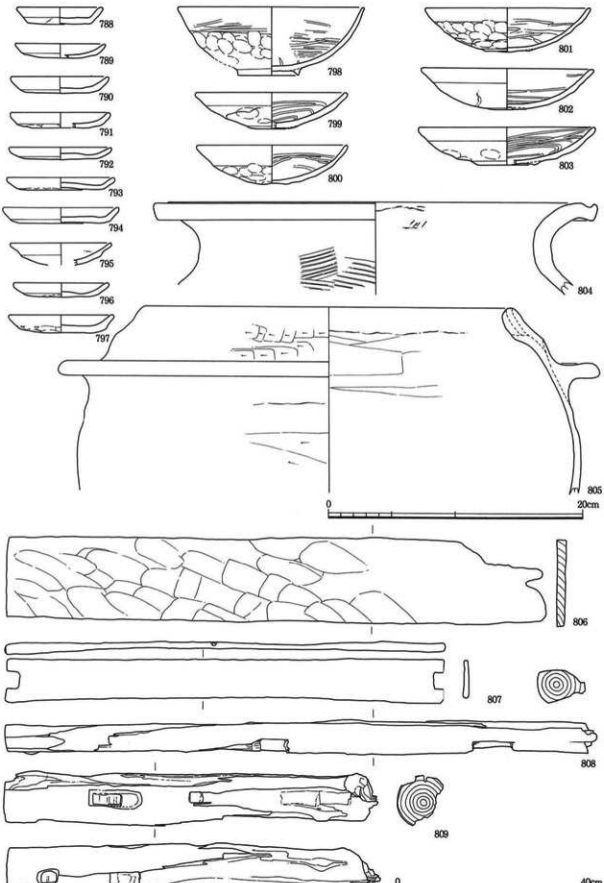


図178　（その2）466井戸　出土遺物

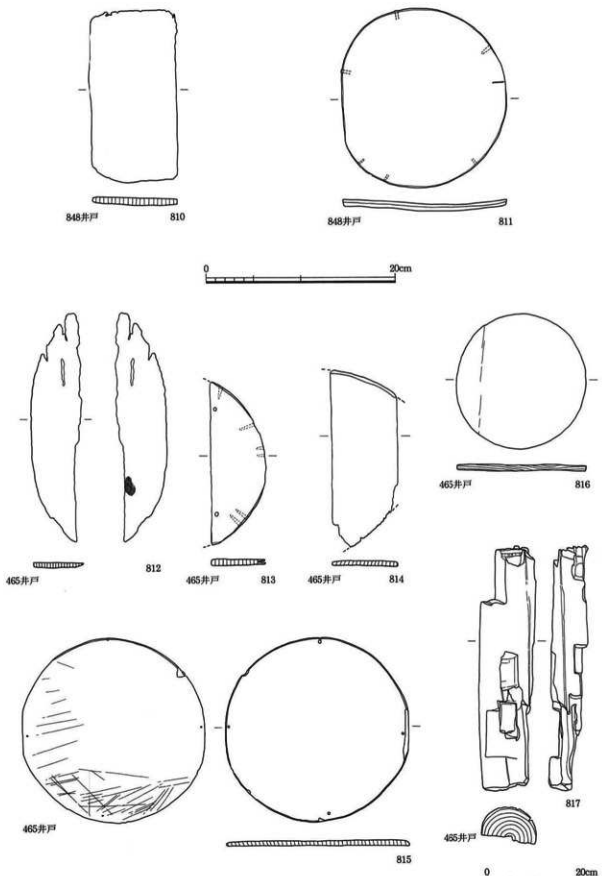


図179　（その２）465・848井戸　出土遺物

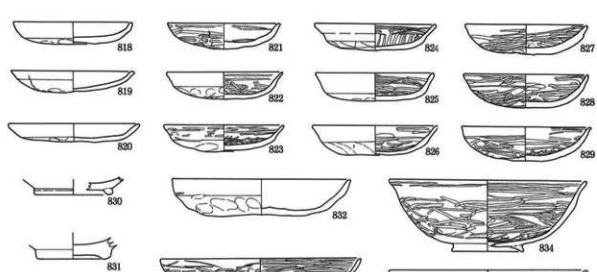


図180　（その2）848井戸　出土遺物

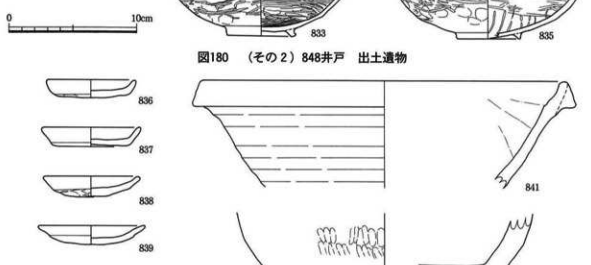


図181　（その2）214井戸　出土（1）

曲物の底板(812～816)、枘穴のある建築部材(817)を図化している。曲物底板の811・815には釘穴が、812の一部には焼け焦げた痕跡が残る。時期は瓦器椀からみて12世紀代のものか。

第6面　466井戸出土遺物（図178、写真図版51・74・94）

土師器小皿(788～794)、瓦器小皿(795～797)、瓦器椀Ⅱ－2～3期(798)、Ⅳ－1～2期(799～803)、須恵器甕(804)、土師質羽釜河内Ja'型と思われるもの(805)、板材(806)、建築部材の板材(807)、柱材(808・809)、曲物底板(写真図版94－1471)が出土している。806の板には加工痕がみられる。808・809の柱材には枘穴が穿たれている。時期は瓦器椀からみて、12～14世紀代に属する。

この他に、古墳時代遺物として、体部外面に格子タタキを施した土師質の韓式系土器甕類片(写真図版74－1418)が出土している。

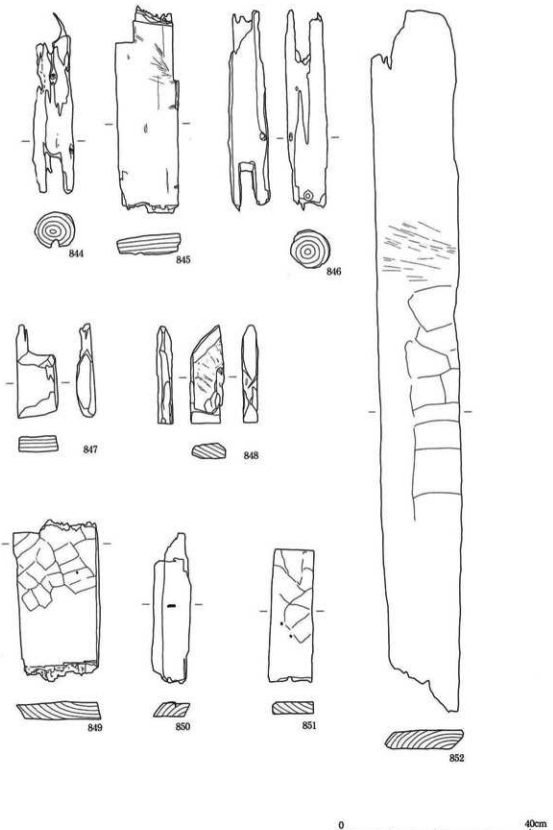


図182　（その２）214井戸　出土遺物（２）

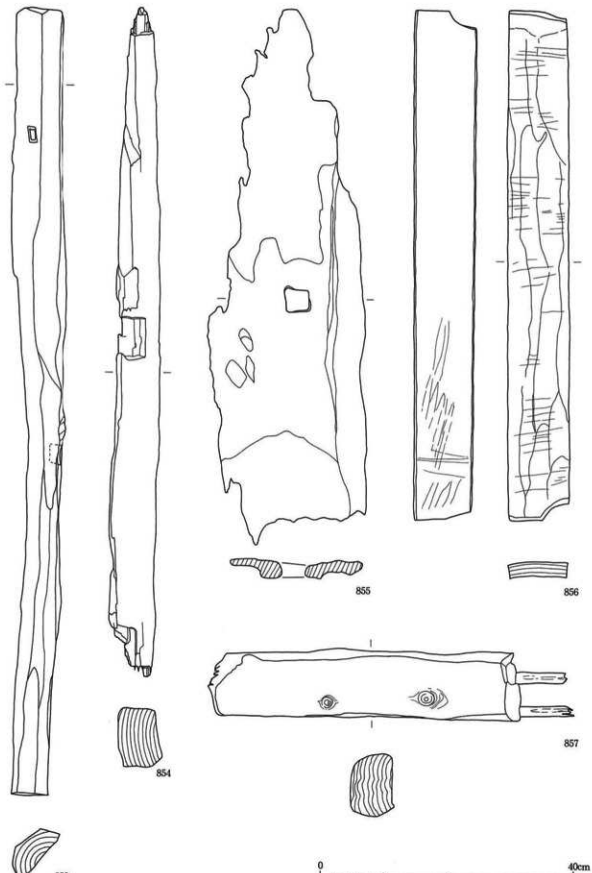


図183　（その2）214井戸　出土遺物（3）

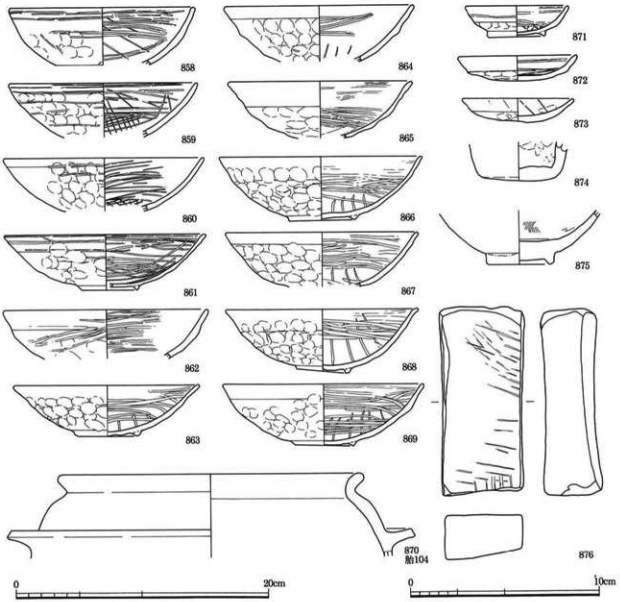


図184　（その２）819井戸　出土遺物（１）

第６面　848井戸出土遺物（図179・180、写真図版50・54・55・99）

土師器小皿(818～820)、大皿(832)、瓦器小皿(821～829)、瓦器椀Ⅱ－１～３期(833～835)、緑釉陶器椀？(830)、13世紀前半白磁碗Ⅳ－２ａ類(831)、曲物の底板(図179－810・811)を図化している。時期は12～13世紀代に属する。写真図版55－828は瓦器小皿底部外面の４分割ミガキである。

第６面　214井戸出土遺物（図181～183、写真図版43・87・96～99）

中世土器と木器を図化している。土器は土師器小皿(836～839)、瓦器椀Ⅳ－３～４期(840)、須恵器こね鉢(841)、滑石製石鍋の底(842)、瓦質火舎の底部かと思われるもの(843)がある。この他、外面のガラス化して黒色ないし赤黒色を呈した、中世と思われる大きな輸羽口片(写真図版87－1468)が出土している。時期は14世紀に属する。

木器は枘のついた柱材(844・846・853・854)、中央に四角い孔を開けた不明板材(855)、板材などの建築部材を割ったようなもの(845・847～852)、加工痕の残る井戸枠の板材(写真図版96－856)、不明加工木

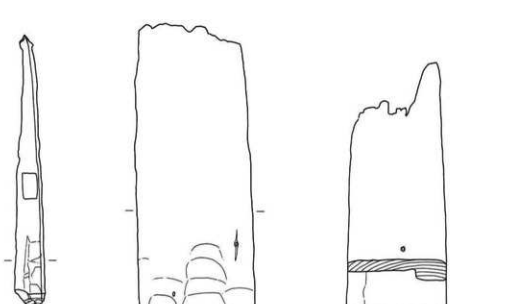


図185　（その2）819井戸　出土遺物（2）

(857)などがみられる。

第6面　819井戸出土遺物（図184・185、写真図版49・52・55・96）

瓦器小皿(872,873)、瓦器高台付小皿(871)、土師器不明平底(874)、瓦器椀Ⅲ－1～2期(858～869)、13世紀末龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2a類(875)、口縁部の欠損した土師質羽釜河内Ｂ1ｃ型かと思われるもの(870)、砥石(876)を図化している。砥石は両端部を除く4面を研ぎ面として使用している。時期は瓦器椀からみて、12～13世紀に属する。

写真図版55－872は瓦器小皿外面の粘土接合痕跡である。

木器(図185)は柄のある柱材(877)、加工痕のある板材(878・879)を図化しており、879は径0.6㎝の穴が1カ所開けられている。

第6面　846井戸出土遺物（図186、写真図版50）

土師器小皿(880～902)、土師器大皿(903・905・909)、黒色土器Ａ類皿(904)、黒色土器Ａ類椀(906・911)、黒色土器Ｂ類？椀(910)、瓦器椀Ⅰ－2～Ⅱ－1期(907・908、912～915)を図化している。時期は11世紀後半から12世紀前半のものか。

第6面　601井戸出土遺物（図187、写真図版49・81・83・84・99）

瓦器ミニチュア椀(919)、瓦器椀Ⅱ－1～2期(916～918)、土師質羽釜河内Ｂ1ｄ型(921)、瓦質羽釜河内Ｄ1ａ型(922)、瓦質羽釜河内Ｊａ'型(920)、常滑甕６ｂ型式(923)、須恵器こね鉢(924)、巴文軒丸瓦Ｃ1型式？(927)、唐草文軒平瓦Ｂ5型式？(925)、鬼瓦(926)、剣形木製品(928)、板材(929)を図化している。927の軒丸瓦は瓦当面が焼け、煤が厚く覆っている。926の鬼瓦は扁平で、裏面は砂の付着した縄タタキ目である。時期は瓦器椀などから12～13世紀代のものか。

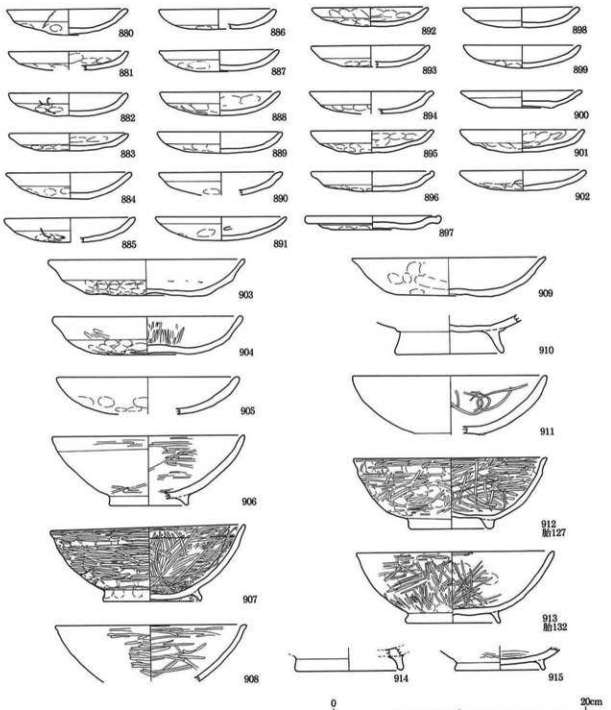


図186　（その２）846井戸　出土遺物

第６面　1481・1482（601内）井戸出土遺物（図188、写真図版67）

1481（601内）井戸出土遺物では土師器甕？底(932)、須恵器長頸壺(930)を図化している。時期は須恵器編年のII型式の後半段階に属するものか。

1482（601内）出土遺物では土師器小皿(931)を図化している。時期は13世紀代に属すると思われる。

第６面　508井戸出土遺物（図189、写真図版48）

土師器大皿(933)、瓦器小皿(934)、瓦器椀Ⅲ－１～２期(935～937)、土師質羽釜河内Ｂ１ｃ型(938)・

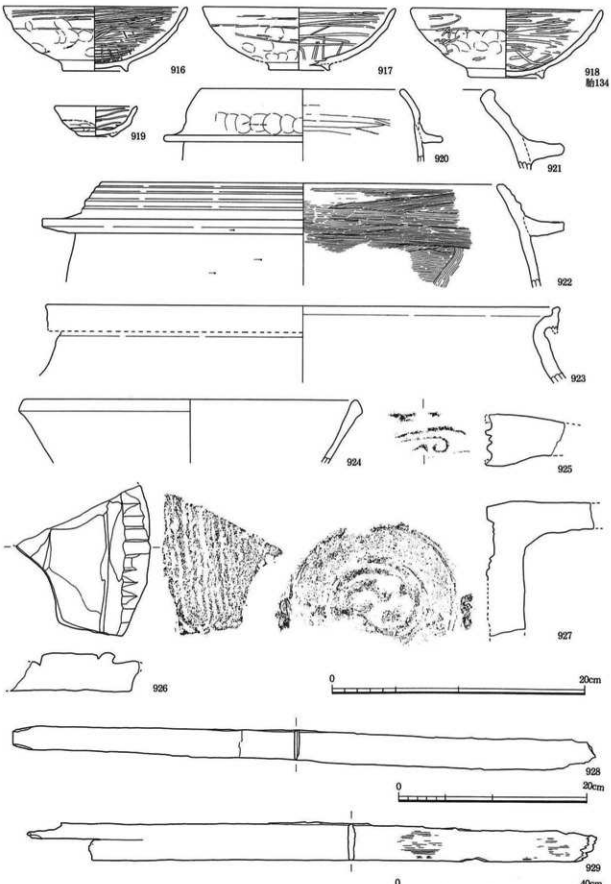


図187　（その2）601井戸　出土遺物

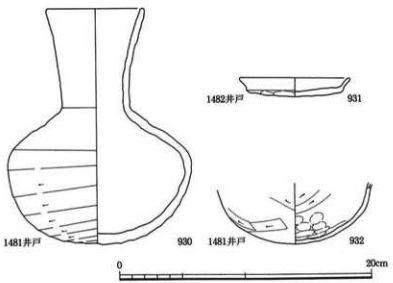


図188　（その２）1481・1482（601内）井戸　出土遺物

て２カ所に認められる。時期は13世紀代に属する。

1483井戸出土遺物では土師器小皿(961)、土師器大皿(962･963)、瓦器小皿(964)、瓦器椀Ⅲ－３～Ⅳ

Ｂ１ｄ型かと思われるもの(939)を図化している。時期は12～13世紀代に属する。

第６面　441・504・1483井戸出土遺物（図190、写真図版48･49･51･81）

504井戸では土師器小皿(940･941)、瓦器小皿(942)、小形の瓦器椀(943)、瓦器椀Ⅲ－２～３期(944～957)、土師質羽釜Ｂ１ｄ型かと思われるもの(958･960)、複弁蓮華文軒丸瓦Ａ型式(959)を図化している。958の羽釜は口縁部に焼成後の穿孔が３㎝離れ

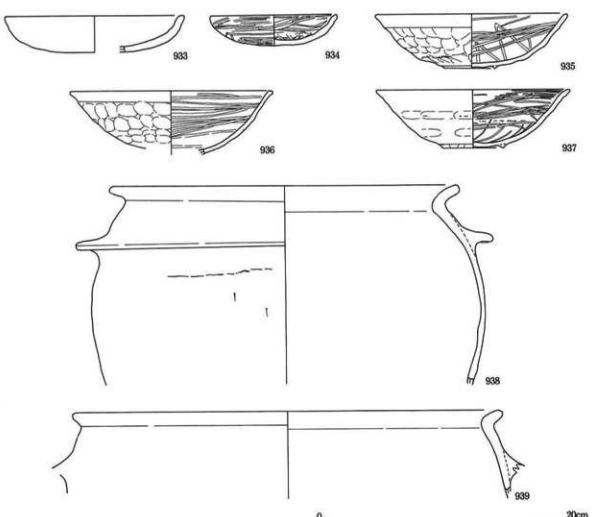


図189　（その２）508井戸　出土遺物

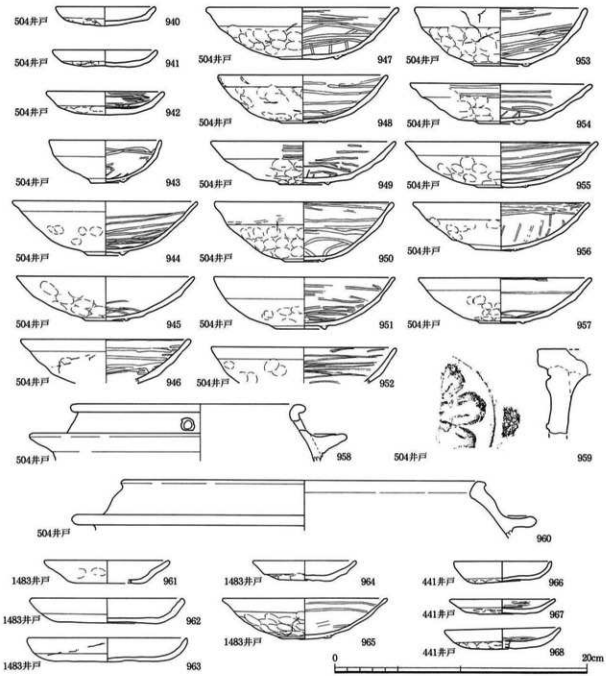


図190　（その2）441・504・1483井戸　出土遺物

－1期(965)を図化している。時期は13世紀代に属するものか。

441井戸出土遺物は土師器小皿(966)、瓦器小皿(967・968)を図化している。時期は13世紀代か。

第6面　504井戸出土遺物（図191）

瓦質羽釜河内Ｊａ型(969)、瓦質甕(970)、須恵器甕(971)を図化している。時期は14世紀代に属する。

第6面　1458井戸出土遺物（図192）

瓦器椀Ⅲ－2～3期(972・973)、瓦質羽釜河内Ｊａ'型(974)、土師質羽釜河内Ｂ1ｄ型(975)を図化した。時期は13～14世紀代のものか。

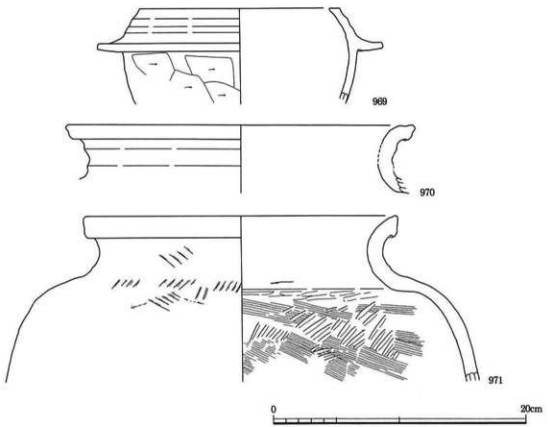


図191　（その２）504井戸　出土遺物

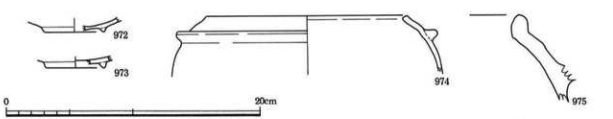


図192　（その２）1458井戸　出土遺物

第６面　60土坑出土遺物（図193、写真図版50・54）

図化したのは瓦器片口鉢(976)、13世紀前半中国白磁碗Ⅷ－３類の底部(977)である。

第６面　58土坑出土遺物（図194、写真図版49）

中世遺物が出土している。図化したのは土師器小皿(978)、Ⅲ－２～３期の瓦器椀(979～981)、土師質羽釜河内Ｂ１ｄ型(982)である。時期は13世紀代に属する。

第６面　442土坑出土遺物（図195、写真図版47）

土師器小皿(984・985)、瓦器小皿(988)、瓦器椀Ⅱ－２～３期(986・987)を図化している。時期は12世紀代に属する。983の鉄製品は全体に厚く錆びがまわっており、刀子か不明である。

第６面　715・851（内）ピット、124・549・614黒褐色シルト出土遺物（図196、写真図版48）

715ピットでは土師器小皿(997)、瓦器椀Ⅰ－３～Ⅱ－１期(998)を図化した。時期は11世紀末～12世

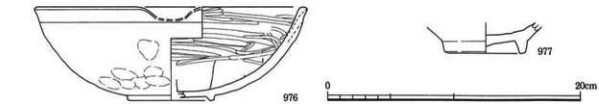


図193　（その2）60土坑　出土遺物

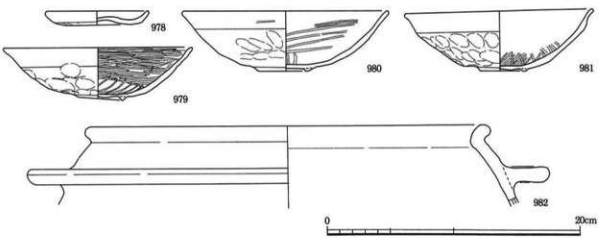


図194　（その2）58土坑　出土遺物

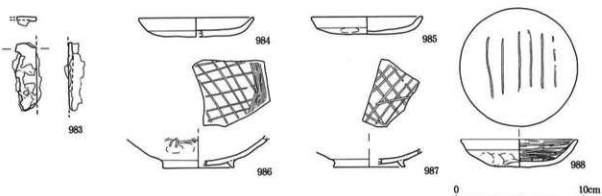


図195　（その2）442土坑　出土遺物

紀初め頃のものか。

851（内）ピットでは瓦器椀Ⅲ－1～2期(999)と土師質羽釜河内Ｂ1ｄ型(1000)を図化した。時期は13世紀代に属する。

124黒褐色シルトでは土師器小皿(989)を図化しており、時期は12～13世紀のものか。

549黒褐色シルトでは土師器大皿(991)、瓦器小皿(990)、瓦器椀Ⅱ－1～2期(992･995･996)を図化し、時期は12世紀代に属する。

614黒褐色シルトでは土師器大皿(993)、瓦器椀Ⅱ－1～2期(994)を図化し、時期は12世紀代に属する。

第6面　503ピット出土遺物（図197、写真図版82）

巴文軒丸瓦Ｃ2型式(1001)を図化している。同じ型式の瓦は65･66･92溝から出土しており、時期は13～14世紀代のものか。

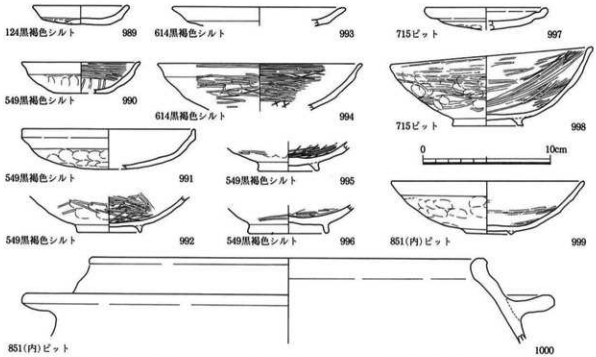


図196　（その２）715・851（内）ピット、124・549・614黒褐色シルト　出土遺物

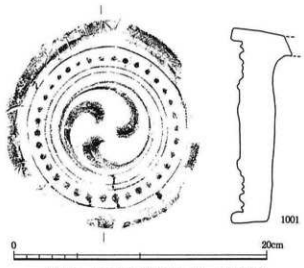


図197　（その２）503ピット　出土遺物

第６面　198・229・628・940・1344ピット出土遺物（図198、写真図版49･50･55）

628ピット出土遺物では黒色土器Ａ類椀(1002)を図化している。時期は10世紀代のものか。

229ピット出土遺物では瓦器椀Ⅱ－３～Ⅲ－２期(1003～1005)を図化している。時期は13世紀代に属する。

1344ピット出土遺物では黒色土器Ｂ類椀(1006)を図化している。時期は11世紀代に属する。（写真図版55－1006）は黒色土器Ｂ類椀外面の粘土接合痕跡である。

198ピット出土遺物では瓦器椀Ⅲ－１～２期(1007)を図化している。12～13世紀代に属する。

940ピット出土遺物では、瓦器椀Ⅱ－２～３期(1008･1009)を図化している。時期は12世紀半ば頃にあたる。

第６面　262ピット出土遺物（図199、写真図版51）

土師器大皿(1010)、瓦器椀Ⅱ－３～Ⅲ－２期(1011～1016)を図化しており、時期は12～13世紀に属する。

第６面　543ピット出土遺物（図200、写真図版49）

瓦器小皿(1017)、瓦器椀Ⅱ－１～２期(1018～1023)を図化している。時期は12世紀代に属する。

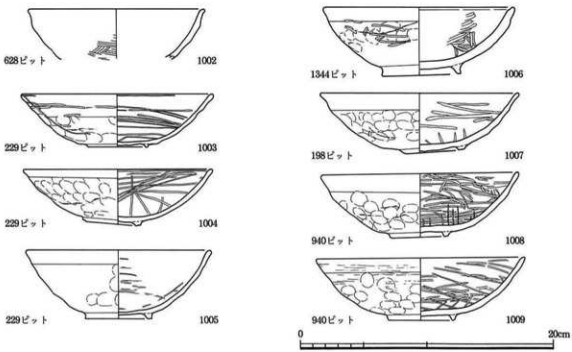


図198　（その２）198・229・628・940・1344ピット　出土遺物

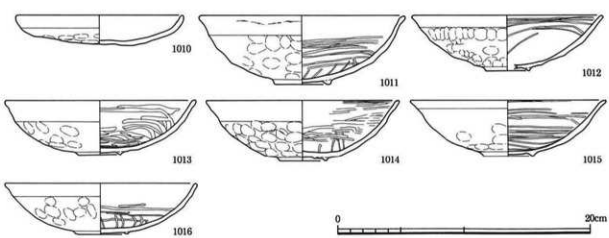


図199　（その２）262ピット　出土遺物

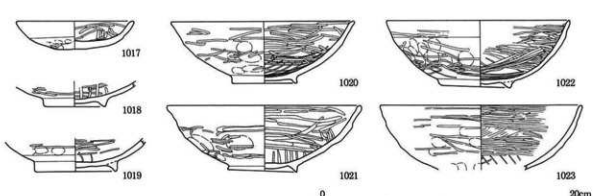


図200　（その２）543ピット　出土遺物

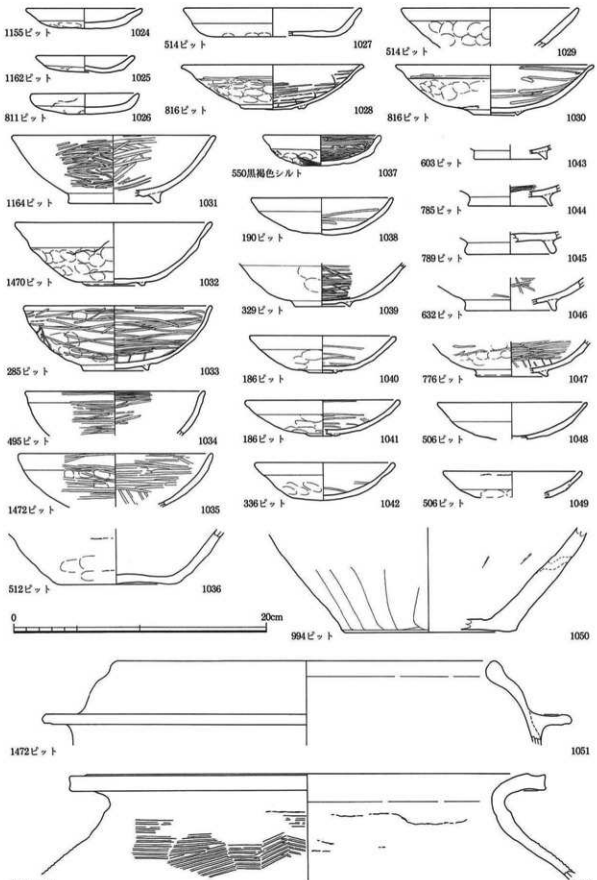


図201　（その２）ピット、550黒褐色シルト出土遺物

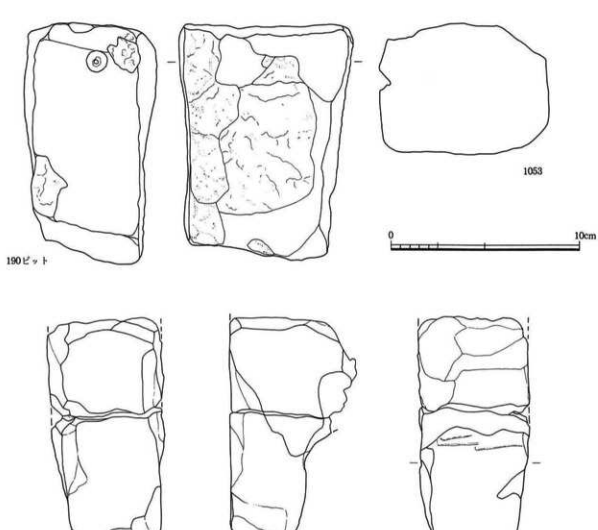


図202　（その2）190・1309ピット　出土遺物

第6面　ピット、550黒褐色シルト出土遺物（図201、写真図版49•50）

1155ピット出土遺物では土師器小皿(1024)を図化している。時期は11～12世紀代のものか。

1162ピット出土遺物では土師器小皿(1025)を図化している。時期は13世紀代のものか。

811ピット出土遺物では土師器小皿(1026)を図化した。時期は12～13世紀代のものか。

514ピット出土遺物では土師器大皿(1027)、土師器椀(1029)を図化し、他に須恵器甕体部がある。時期は11～12世紀代のものか。

816ピット出土遺物では瓦器椀Ⅲ－2～3期(1028•1030)を図化した。時期は13世紀前半か。

1164ピット出土遺物は瓦器椀Ⅰ－2～3期(1031)がある。12世紀代に属するものか。

1470ピット出土遺物は瓦器椀Ⅲ－1～2期(1032)を図化している。時期は12世紀代に属する。

285ピット出土遺物は瓦器椀Ⅱ－2～3期(1033)を図化している。時期は12世紀半ばから後半に属する。

495ピット出土遺物は瓦器椀Ⅱ－1～2期(1034)を図化している。時期は12世紀代に属する。

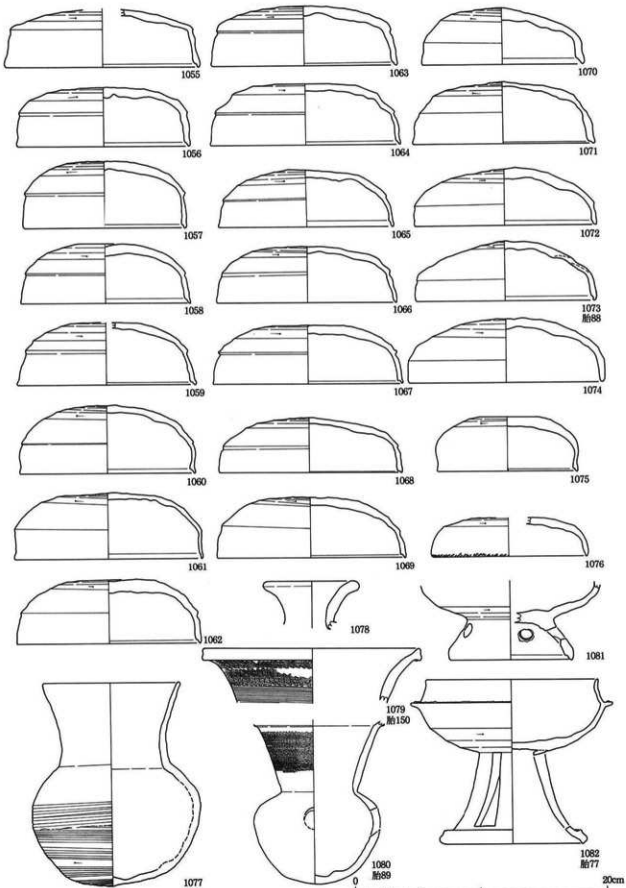


図203　（その２）460井戸　出土遺物（１）

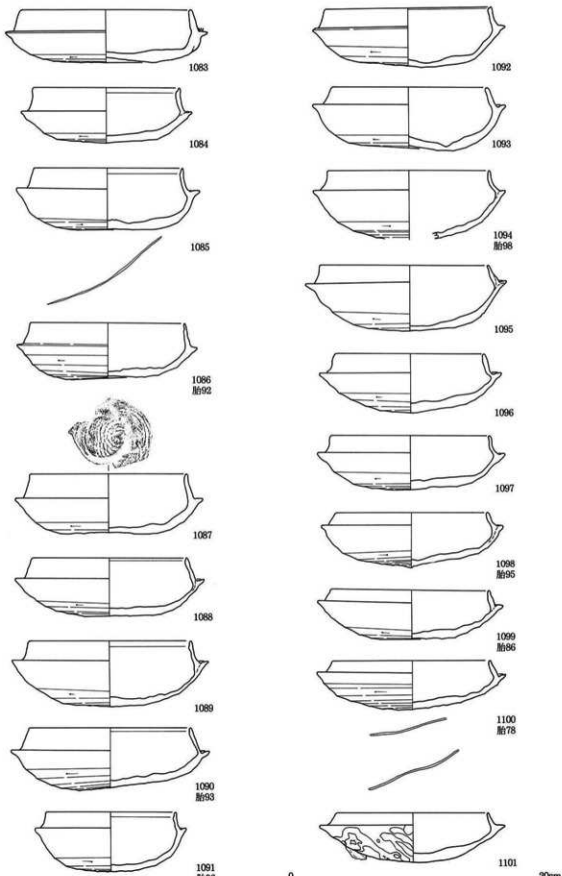


図204　（その2）460井戸　出土遺物（2）

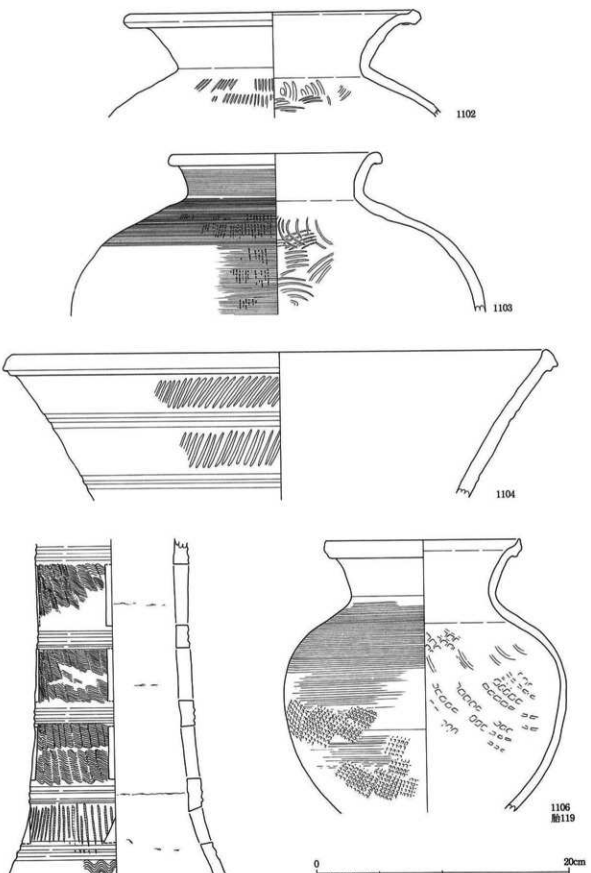


図205　（その２）460井戸　出土遺物（３）

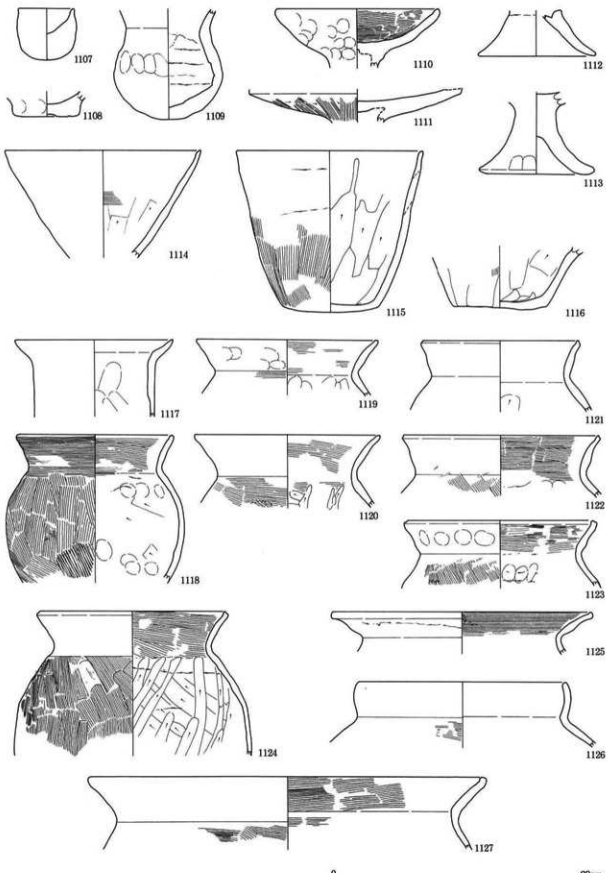


図206　（その2）460井戸　出土遺物（4）

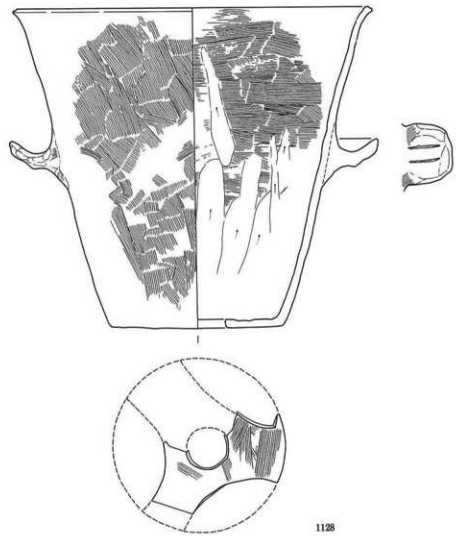


図207　（その２）460井戸　出土遺物（５）

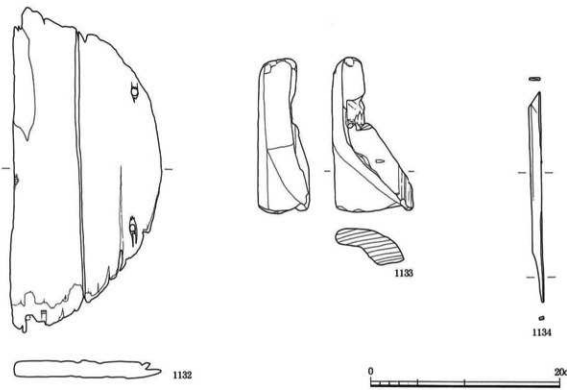


図208　（その２）460井戸　出土遺物（６）

1472ピット出土遺物は瓦器椀Ⅱ－２～３期(1035)、土師質羽釜河内Ｂ１ｅ型(1051)を図化している。時期は12世紀と14世紀代のものか。

512ピット出土遺物は須恵器甕(1052)、瓦質鉢か不明底部(1036)を図化している。1036は外内面をナデており、底部中央は僅かに窪んでいる。時期は12世紀代のものと、14世紀代のものか。

550黒褐色シルト出土遺物は瓦器小皿１点(1037)を図化した。時期は11～12世紀代のものか。

190ピット出土遺物には瓦器椀Ⅳ－３～４期(1038)がある。

329ピット出土遺物は瓦器椀Ⅱ－３～Ⅲ－１期(1039)を図化しており、時期は12世紀後半に属する。

186ピット出土遺物は瓦器椀Ⅲ－２～３期(1040･1041)を図化している。時期は13世紀代に属する。

336ピット出土遺物は瓦器椀Ⅳ－３～４期(1042)を図化しており、時期は13～14世紀に属する。

603ピット出土遺物は瓦器椀Ⅱ－３～Ⅲ－１期にあたると思われる高台破片(1043)を図化している。時期は12世紀代に属するものか。

785ピット出土遺物は瓦器椀Ⅰ－３～Ⅱ－１期(1044)を図化している。時期は11～12世紀にあたる。

789ピット出土遺物は瓦器椀Ⅰ－２～３期(1045)と思われるものを図化している。1045の高台径は大きく、厚みをもつ。時期は11世紀代のものか。

632ピット出土遺物は黒色土器Ｂ類椀(1046)を図化している。1046の外内には僅かに暗文が残る。時期は11世紀代のものか。

776ピット出土遺物は瓦器椀Ⅱ－１～２期(1047)を図化している。時期は12世紀前半に属する。

506ピット出土遺物は底部欠損した瓦器椀のⅣ－３～４期と思われるもの(1048･1049)と、須恵器こね鉢がある。時期は13～14世紀代に属する。

994ピット出土遺物は常滑甕底部(1050)を図化している。13世紀代に属する。

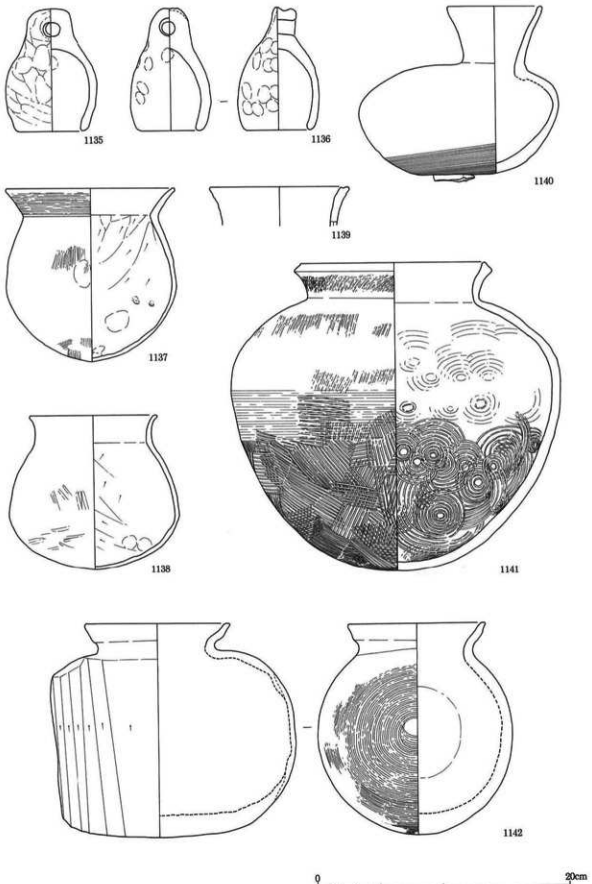


図209　（その２）778井戸　出土遺物

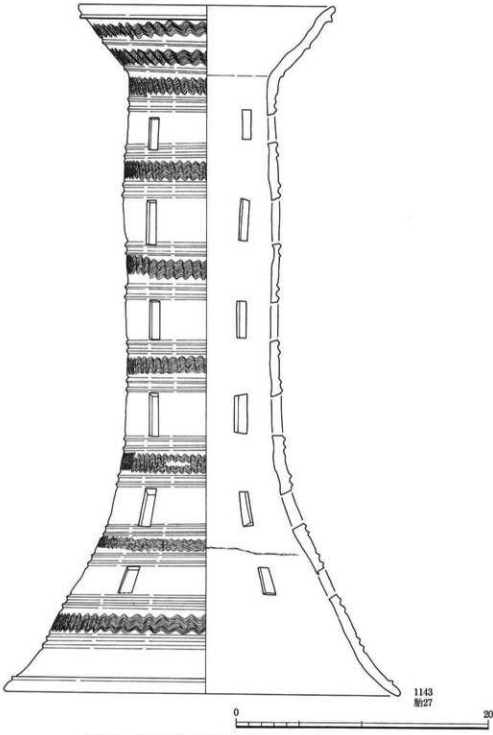


図210　（その2）427井戸　出土遺物（1）

第6面　190・1309ピット出土遺物（図202、写真図版85）

1309ピット出土遺物では凝灰岩製不明石製品(1054)を図化した。1054は厚みのある直方体状を呈し、残存する中央部で横方向に割れている。下部はアーチ状に窪み、上方と右方は欠損しており不明である。表面は火を受けており、下部に煤が付着している。建物に付随する石製品か。

190ピット出土遺物では先述の瓦器椀Ⅳ－3～4期(1038)と凝灰岩製？の砥石(1053)を図化している。砥石の表面は一カ所に穿孔途中の穴がみられ、その面を研ぎ面としており、研ぎ面と相対する面もわずかだが使用痕跡がみられる。他の面は剥離面を残す。時期は瓦器椀から14世紀代に属する。

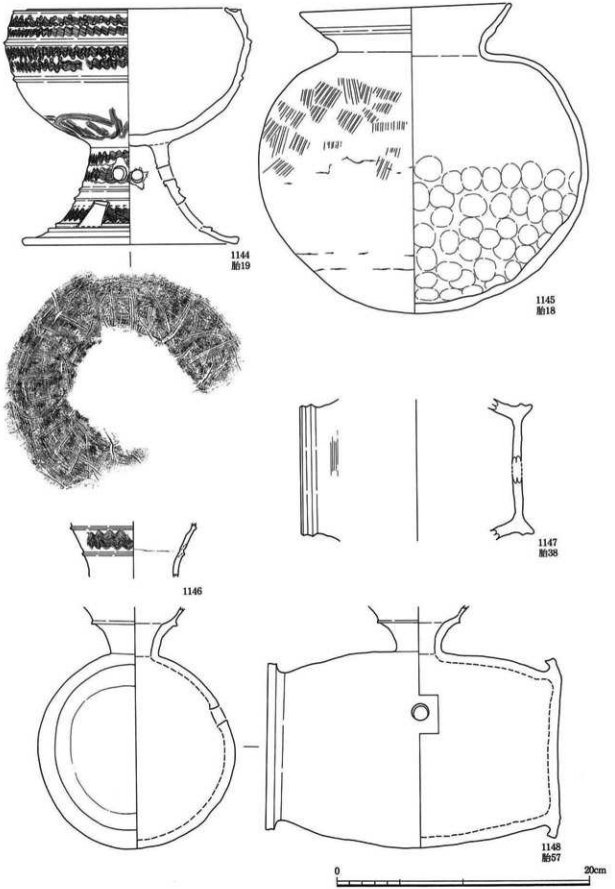


図211　（その２）427井戸　出土遺物（２）

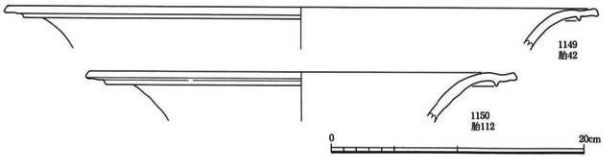


図212　（その2）427井戸　出土遺物（3）

第6面　460井戸出土遺物（図203～208、写真図版55～57・74・76・77・99）

古墳時代の遺物が多量に出土している。須恵器には蓋(1055～1076)、坏(1083～1101)、有蓋高坏(1082)、高坏(1081)、甕(1080)、提瓶(1078)、直口壺(1077)、壺(1079)、甕(1102～1104・1106)、筒形器台(1105)がみられる。土師器ではミニチュア鉢(1107)、壺(1109)、壺?(1126)、鉢(1114・1115)、把手付鉢(1116)、高坏(1110～1113)、甕(1117～1125・1127)、甑(1128・1130)、不明口縁部(1129)、不明底部(1131)があり、1129・1131は一見埴輪のような印象をもち、埴輪の可能性が考えられる。この他、弥生か不明の平底(1108)もみられる。木器には桶の底板か不明の半円形状の板(1132)、不明加工木(1133)、斎串(1134)がある。

写真図版74－1421は土師器の鍋か不明の把手破片である。

須恵器坏底部外面にはヘラ記号が2点(1085・1100)みられ、坏内底面には当て具痕を留めるもの(1086)も1点ある。須恵器坏(1101)の外面にべったりと自然釉が溶けて流れたような痕跡のもの(写真図版55－1101)が1点認められた。この井戸出土遺物の時期は須恵器の編年でⅠ－5～Ⅱ－5段階にあたる。

第6面　778井戸出土遺物（図209、写真図版58）

須恵器直口壺？(1139)、甕(1141)、平瓶(1140)、横瓶(1142)、蛸壺(1135・1136)、土師器甕(1137)・壺(1138)を図化している。時期は須恵器編年のⅡ－4～5段階か。

第6面　427井戸出土遺物（図210～215、写真図版59～61・76・78）

土師器、初期須恵器が共伴して出土している。図化した須恵器には筒形器台(1143)、脚付有蓋鉢(1144)、甕(1145・1149・1150)、壺(1146)、樽形瓶(1147・1148)がある。樽形瓶は側面を円板状粘土で蓋をした部分の破片(写真図版76－1439)もみられる。須恵器甕口縁端部には丸くおさめたもの(1145)と、角張ったもの(1149・1150)がみられる。

1143の筒形器台は透かしが6方向に6段穿たれている。脚部が一部欠損しているが、非常に残存状態が良好である。1144の脚付有蓋鉢は口縁端部が極僅かに残っており、かなり内傾して口縁部を作り出している。脚部の透かしは上段が円形で6方向、下段は長方形状で3方向と推定される。上段の円形透かしには外面に面取りが、下段の長方形状透かしには外内に面取りが施されている。鉢部上半は波状文、竹管文、突帯で施文され、鉢部底外面には櫛状工具により、組紐文のような文様が施されている。1144の表面は鉄釉によるものか、全体に黒い。1145の甕は体部外面に僅かに平行タタキ目を留めるが、全体に丁寧にナデ調整が施されている。須恵器はⅠ－1～2段階の時期のものか。

図化した土師器には二重口縁の壺(1151～1153)、甕(1154～1157・1174)、高坏(1158～1168)、小型丸

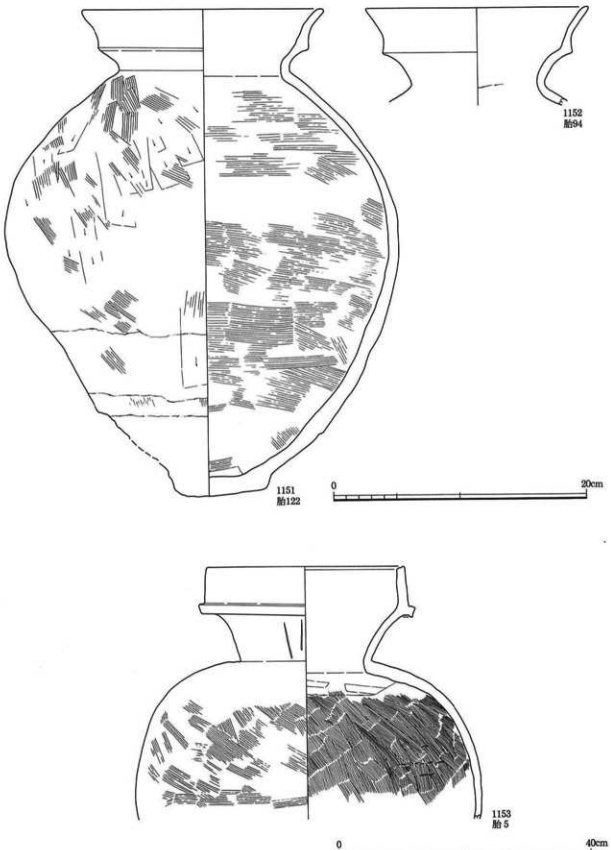


図213　（その２）427井戸　出土遺物（４）

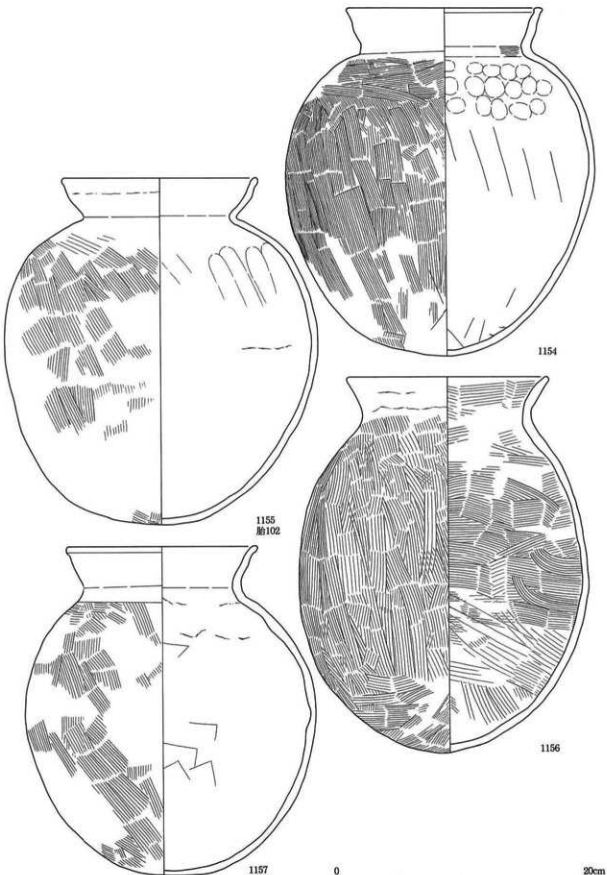


図214　（その2）427井戸　出土遺物（5）

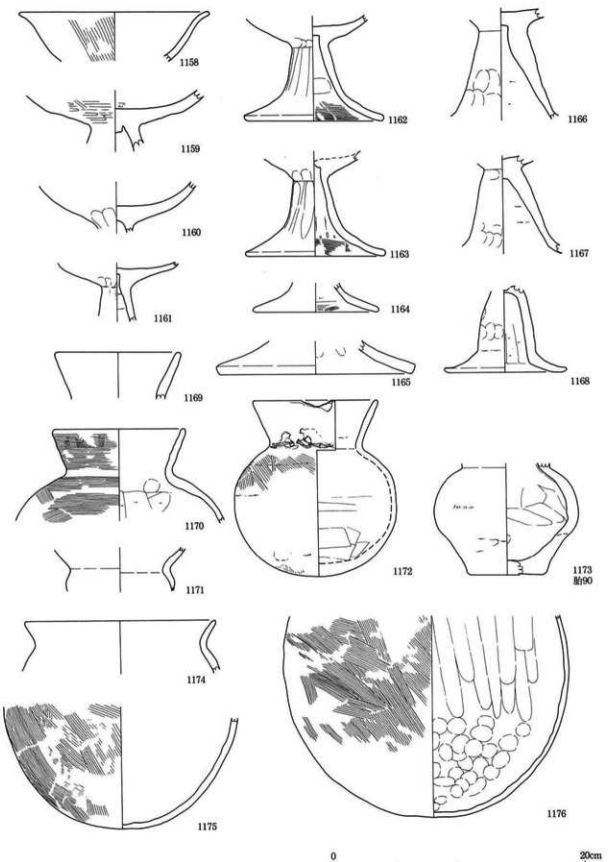


図215　（その２）427井戸　出土遺物（６）

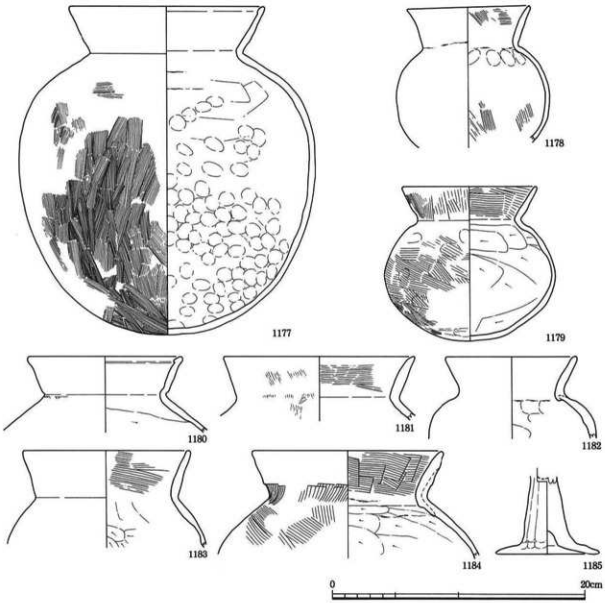


図216　（その2）426井戸　出土遺物

底壺(1171)、壺(1169・1170・1172)、甕？体部(1175・1176)がある。

二重口縁壺は口縁が外反し端部の丸いもの(1151・1152)と、口縁部がほぼ直立し、端部が少し内傾した平坦面をなすもの(1153)がみられる。体部の調整は外内ともにハケ目であるが、1151はハケ目の下に砂粒の動きがみられる。1153の頸部には2条の線刻がある。

甕は布留の退化した形態(1154・1155)と、口縁部が外反して丸くおさめるもの(1156、1157)がある。後者の1点(1156)は少し長胴化しており、外内面にはハケ目調整が施されている。1156以外の甕は内面をナデているが、1154は篦削りの痕跡を留め、1157は板状のものでナデた跡が認められる。

高坏は坏部が浅く、丸みをもつ。高坏脚部は緩やかに弧を描いて広がる裾部(1162～1165)と、脚柱部と裾部の境が屈曲するもの(1168)がある。いずれも脚柱部内面はヘラケズリを施している。

壺の1172は頸部にツルで巻いた痕跡を留め、口縁の一部に打ち欠いたものか不明であるが、欠損箇所がある。土師器は布留の新しい段階のものか。

この他、1173のように弥生後期の壺体部かと思われるものも出土している。

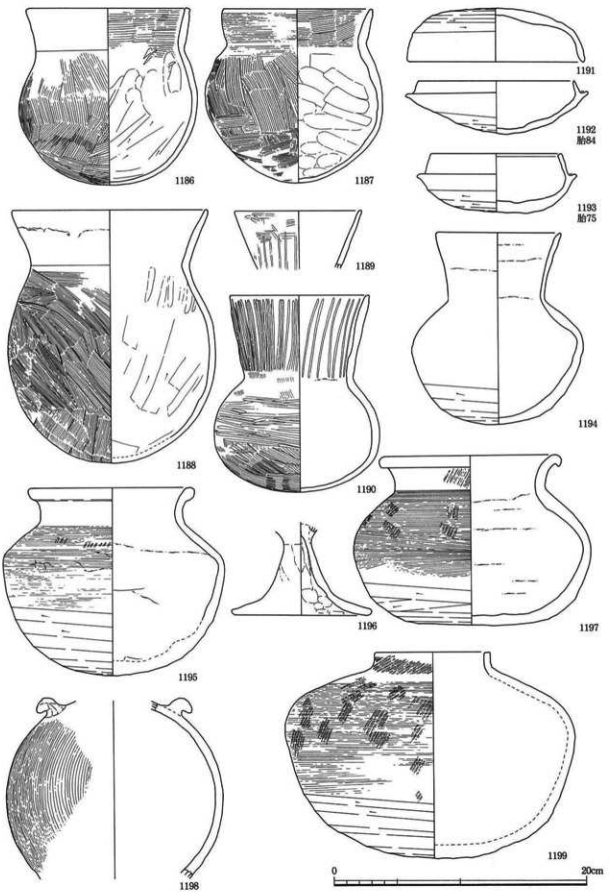


図217　（その２）1299井戸　出土遺物（１）

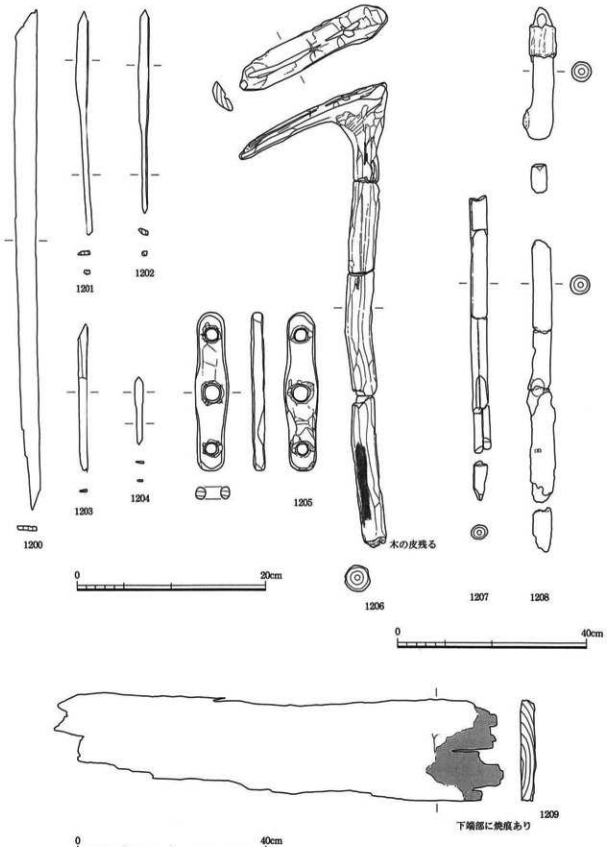


図218　（その2）1299井戸　出土遺物（2）

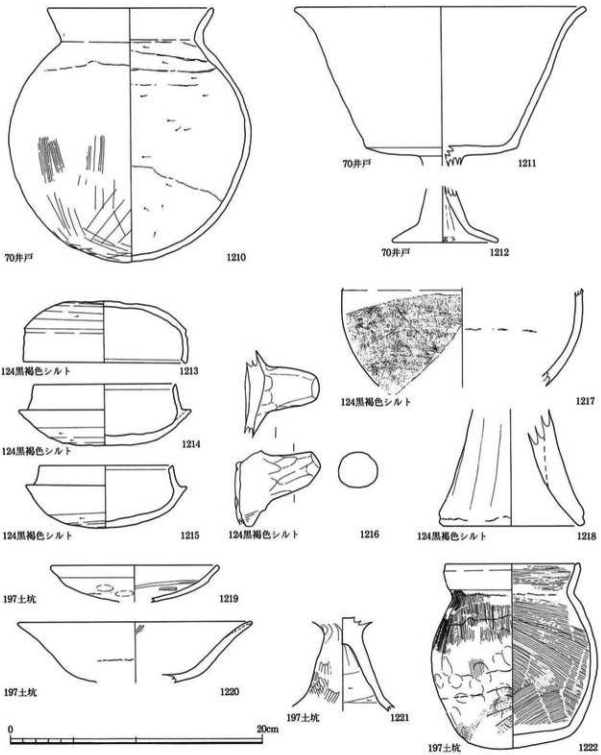


図219　（その２）70井戸、197土坑、124黒褐色シルト　出土遺物

第６面　426井戸出土遺物（図216、写真図版65・66）

古墳時代の土師器壺(1178・1179・1182)、甕(1177・1180・1181・1183・1184)、高坏(1185)を図化している。甕は口縁端部の肥厚が退化した布留式(1177・1180)と、口縁端部を薄く丸くおさめるもの(1181・1183・1184)がみられる。壺、甕ともに調整は外面をハケ目、内面をヘラケズリしたものと、内面を指押さえ、ハケ目を施したものがみられる。高坏は脚柱部がヘラケズリされず、中実である。時期は布留の新しい段階のものか。

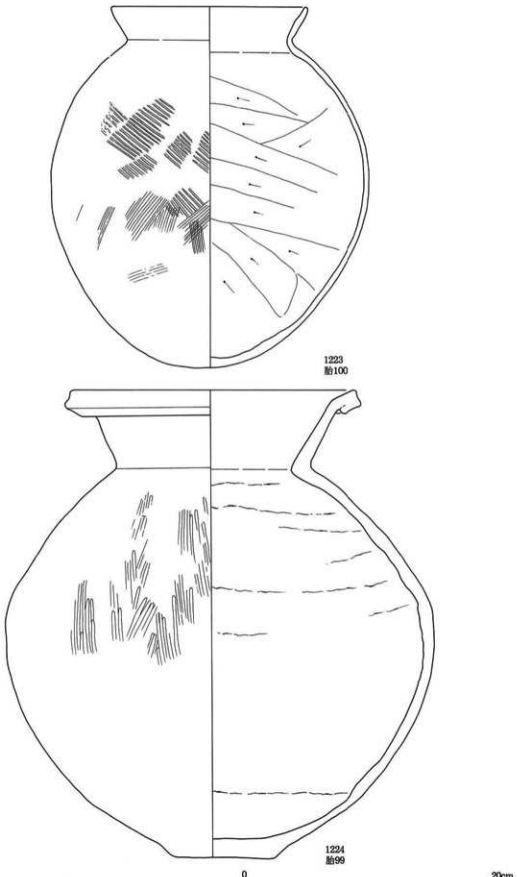


図220　（その2）53土坑　出土遺物

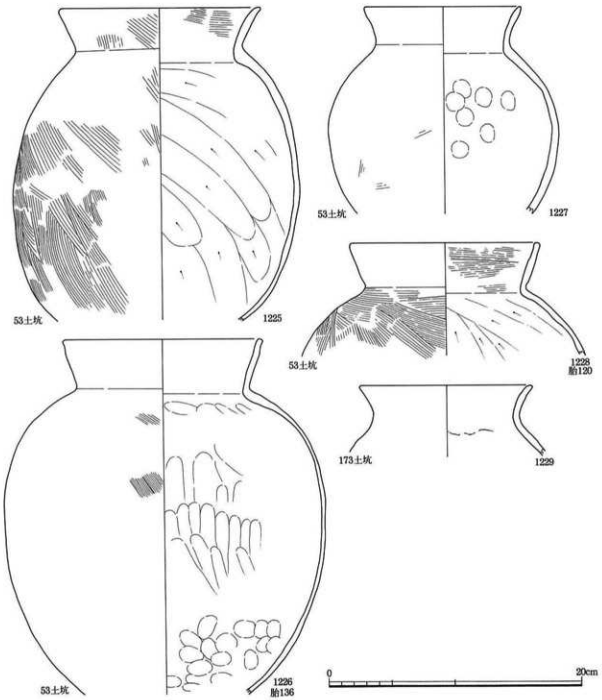


図221　（その２）53・173土坑　出土遺物

第６面　1299井戸出土遺物（図217・218、写真図版62・63・100・101）

古墳時代の土師器、須恵器、木器、石器が出土している。

土師器では甕(1186・1187)、甕？(1188)、直口壺(1189・1190)、高坏(1196)、須恵器では蓋(1191)、坏(1192・1193)、直口壺(1194)、甕(1195・1197)、短頸壺(1199)、提瓶(1198)を図化している。木器では刀状木製品(1200)、鍬の柄(1206)、鎌形木製品(1201・1202・1204)、斎串(1203)、不明木製品(1205)、棒状木製品(1207・1208)、板材(1209)などを図化している。1206の柄の一部には樹皮が残っている。1209の一端は焼け焦げた跡がみられる。この他、一部に煤の付着した砥石も出土している。

時期は須恵器編年でⅠ－４～５段階とⅡ－４～５段階にあたる。

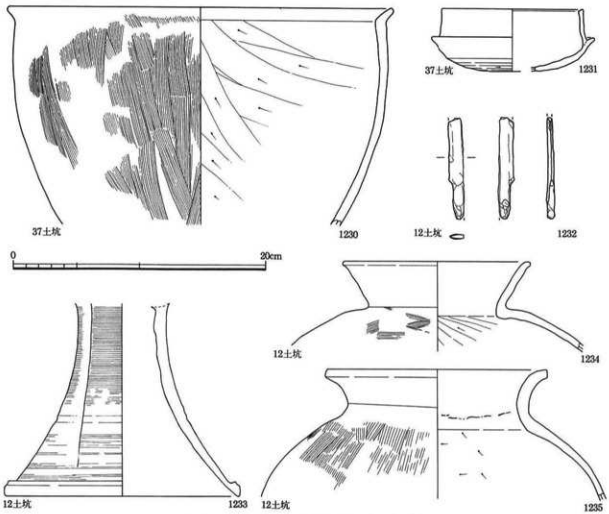


図222　（その2）12・37土坑　出土遺物

第6面　70井戸、197土坑、124黒褐色シルト出土遺物（図219、写真図版66）

70井戸出土遺物では古墳時代の土師器甕(1210)、高坏(1211・1212)を図化している。甕は球体の胴部に「く」の字状に外反する口縁部をもつ。調整は外面ハケ目、内面ヘラケズリで、外内に粘土紐の継ぎ目を残す。

高坏は坏部が深く底が平らでほぼ直線的に斜め上方へ伸び、口縁端部寄りで外反する。脚部は欠損しており不明である。このほか、脚部破片では脚柱部と裾部の境に屈曲を有し、脚柱部内面に粘土の絞り目を留める。時期は布留の新しい段階のものか。

124黒褐色シルト出土遺物では古墳時代須恵器、土師器を図化している。須恵器の蓋(1213)、坏(1214・1215)ともにⅠ－4～5段階にあたる。1217は初期須恵器の脚台付有蓋鉢の体部破片か。1216は土師器把手である。1218は土師器高坏脚にしてはぶ厚く、内面には靱痕が多く残存し、外面には火を受けているため、輪の羽口状の土製品と推測する。

197土坑出土遺物には古墳時代および中世のものがある。瓦器椀はⅣ－3～4期(1219)にあたり、時期は13～14世紀に属する。古墳時代の遺物には土師器平底鉢(1222)、高坏(1220・1221)がある。1222は口縁部の屈曲が緩い平底の鉢で、韓式系土器に類似した器形をなす。調整は外内ともにハケ目を施している。高坏(1220)は坏部が浅く、坏底部から大きく外上方に開く。高坏脚部破片(1221)は脚柱部と裾部の境が緩く屈曲する。外面はヘラミガキ、内面は粘土の絞り目と横方向のヘラケズリ調整が施されている。

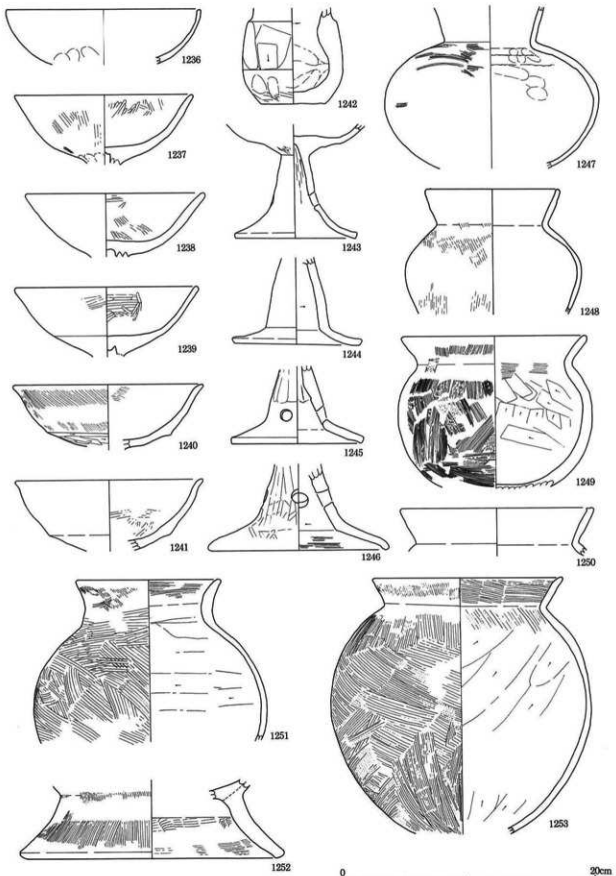


図223　（その２）486土坑　出土遺物（１）

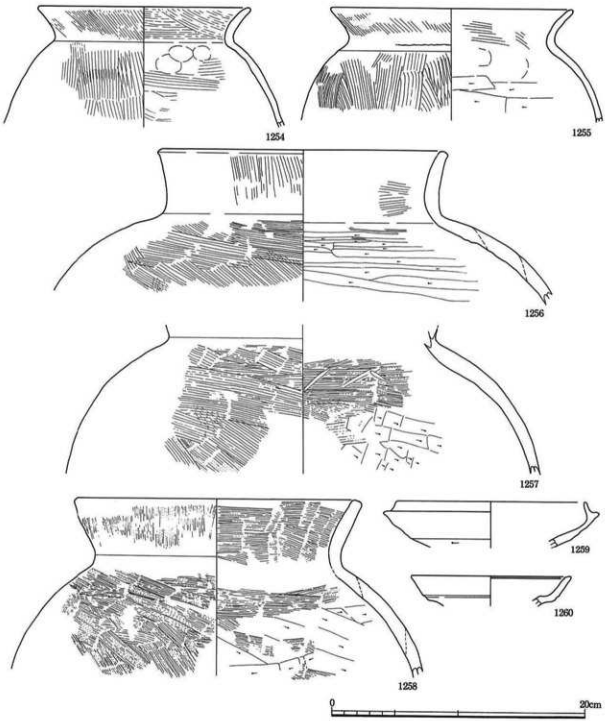


図224　（その2）486土坑　出土遺物（2）

第6面　53・173土坑出土遺物（図220・221、写真図版64）

53土坑出土遺物では古墳時代の土師器壺、甕を図化している。壺(1224)は直線的に外反する口縁の端を外面に折り返して断面長方形状を呈する。体部は外面をヘラミガキ、内面には粘土接合痕が残る。底部は平底である。形態的に近畿地方の土師器に類例がみられず、他地域の土器の搬入と考えられる。

1227は壺としたが、甕の器形と類似し、甕と壺の中間的な器形を呈する。

甕は口縁端部の肥厚が殆ど無くなった布留式の退化したもの(1226・1228)と、外反する口縁端部が薄く丸く納められたもの(1223・1225)とがみられる。甕の外面調整はハケ目であるが、後者の口縁形態の

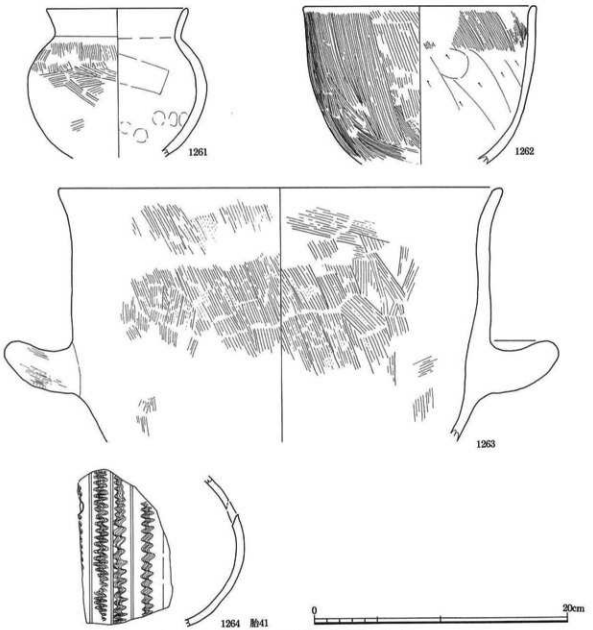


図225　（その２）486土坑　出土遺物（３）

ものに１点、タタキを残すものもみられる。甕の体部内面の調整はヘラケズリが主であるが、指押さえ、指ナデも口縁部の２形態ともにみられる。これら土師器以外に、須恵器の体部破片が１点出土しており、外面は細い平行タタキ、内面はナデ調整が施されている。初期須恵器の出現する頃の時期のものか。

173土坑出土遺物では古墳時代土師器甕口縁部(1229)を図化している。残存状態が悪く調整は不明である。頸部の緩やかな「く」の字状に屈曲し、口縁端部を丸くおさめた形態から、５世紀後半頃のものか。

第６面　12・37土坑出土遺物（図222、写真図版86）

37土坑出土遺物では古墳時代の土師器甕(1230)、Ⅰ－２～３段階の須恵器坏(1231)を図化している。甕は口縁を短く外反させたもので、内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整を施している。

12土坑出土遺物には鉄鏃(1232)、土師器壺(1234・1235)、須恵器高坏脚部(1233)などがある。

鉄鏃は片刃鏃である。刃部、頸部、茎部が欠損しており、刃部、頸部は残存長がそれぞれ5.2cm、2.8

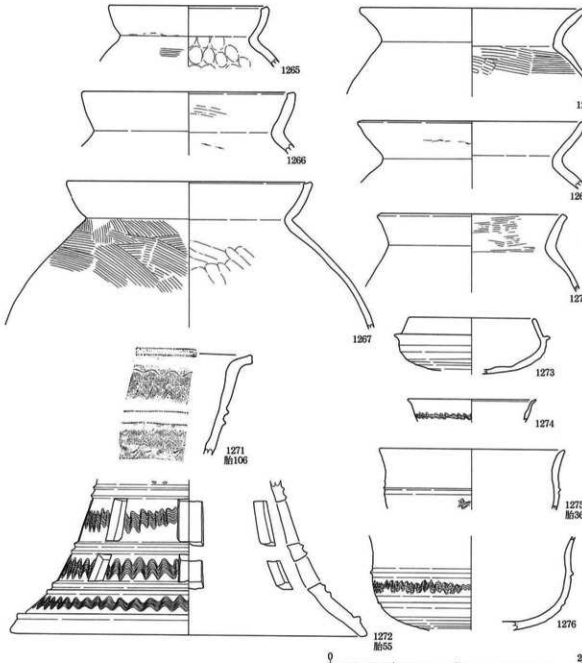


図226　（その2）585土坑　出土遺物（1）

cmを測る。茎部は完全に失われている。刃部は両切刃造で関、頸部は断面方形を呈する。鏃身が細長く伸長する特徴から、この鉄鏃の時期は古墳時代中期と考えられる。（鉄鏃：清水）

時期は須恵器の編年からⅡ－1～2段階のものか。

第6面　486土坑出土遺物（図223～225、写真図版65・67・76・79）

古墳時代の土師器、須恵器を図化している。土師器は坏または高坏(1236)、高坏(1237～1241・1243～1246)、ミニチュア不明(1242)、直口壺(1247)、壺(1248・1251・1256・1258)、壺か不明(1257)、甕(1249・1250・1253～1255・1261)、不明脚台(1252)、鉢(1262)、甑(1263)がある。1242は形態が一見塩壺状を呈するが、器壁が厚く口縁端部が欠損しており、不明である。

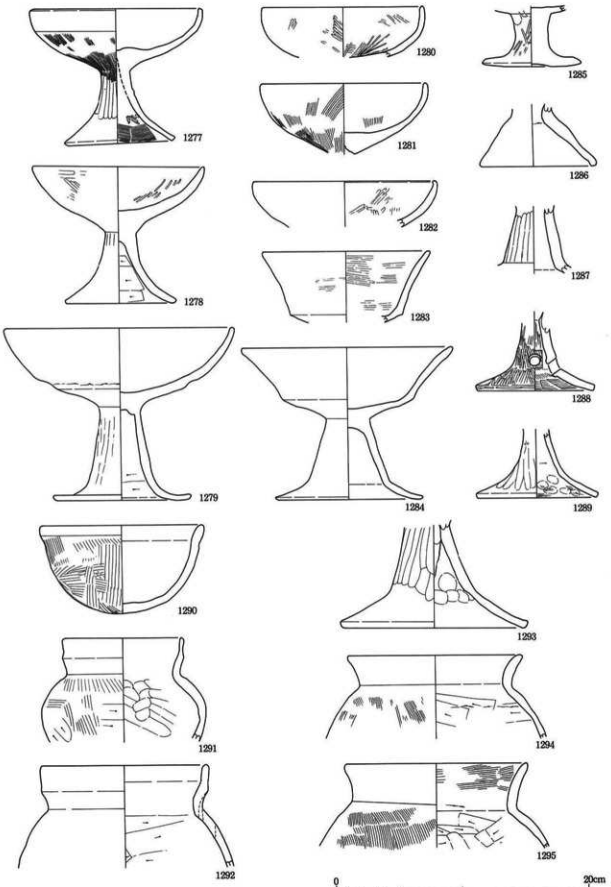


図227　（その２）585土坑　出土遺物（２）

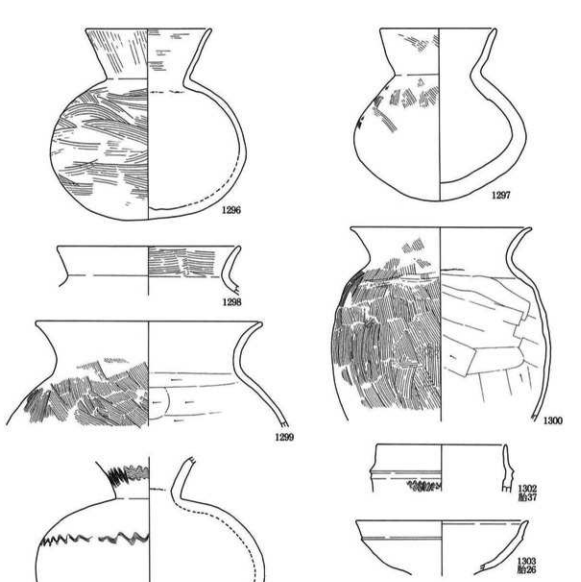


図228　（その2）858土坑　出土遺物

須恵器はII－4～5段階の坏(1259)、甕(1260)、I－2～3段階の樽形甕(1264)がある。この他、製塩土器(写真図版79－1448～1450)が出土しており、1448・1450は外面貝殻条痕、内面はナデ調整で、それら以外のものは外内面ともナデである。

第6面　585土坑出土遺物（図226・227、写真図版68・76・78）

古墳時代の土師器、須恵器が出土している。図化したのは土師器では坏または高坏(1280)、鉢(1290)、高坏(1277～1279・1281～1289・1293)、壺(1291・1292)、甕(1265～1270・1294・1295)である。1291・1292は二重口縁状の形態をなす。須恵器では坏(1273)、無蓋高坏(1275・1276)、甕(1274)、器台(1271・1272)が

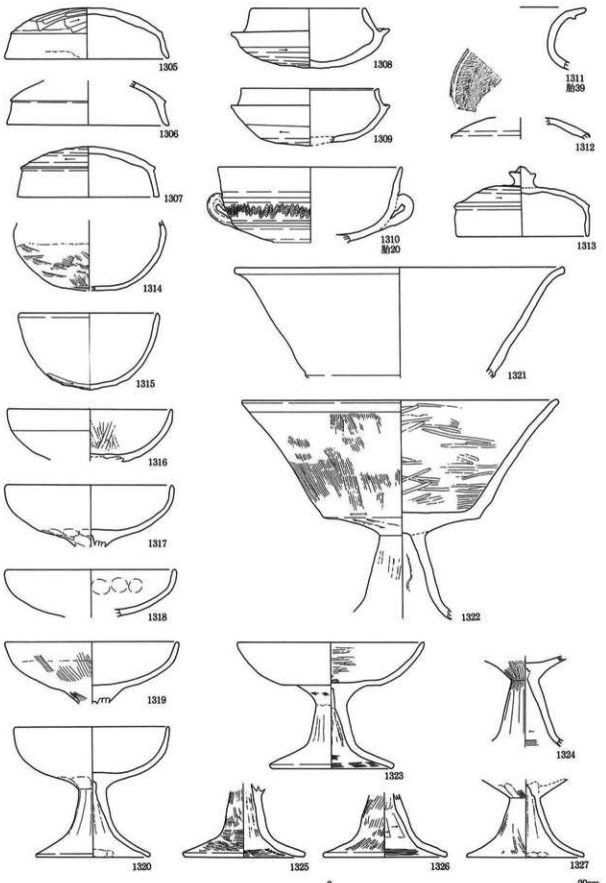


図229　（その２）851土坑　出土遺物（１）

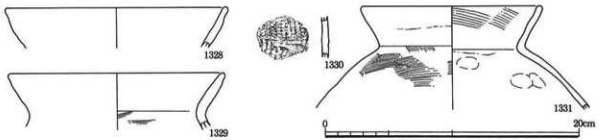


図230　（その2）851土坑　出土遺物（2）

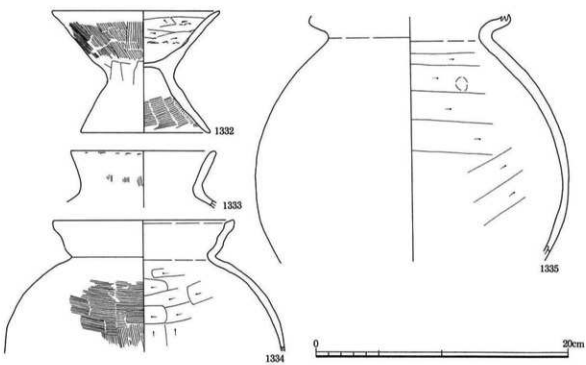


図231　（その2）1039土坑　出土遺物

ある。時期は須恵器のⅠ－2～3段階のものか。

第6面　858土坑出土遺物（図228、写真図版69・76・77）

土師器の直口壺(1296)、壺(1297)、甕(1298～1300)、須恵器の塊(1302)、無蓋高坏または蓋(1303)、鼈？(1301)、壺(1304)を図化している。時期は須恵器編年のⅠ－1～4段階にあたると思われる。

第6面　851土坑出土遺物（図229・230、写真図版70・76・77）

古墳時代土師器、須恵器が出土している。

土師器では坏(1315)、高坏(1316～1327)、甕(1328・1329・1331)、韓式系土器の体部に格子タタキのある甕？破片(1330)、不明体部(1314)、須恵器では蓋(1305～1307)、坏(1308・1309)、無蓋高坏(1310)、高坏蓋(1312・1313)、甕(1311)がある。時期は須恵器の編年でⅠ－1～4段階にあたる。

第6面　1039土坑出土遺物（図231、写真図版65）

土師器鼓形器台(1332)、甕(1333～1335)を図化している。時期は布留式甕の特徴を示すものが1点みられること、粗雑な器台の特徴などから、須恵器出現前の時期と思われる。

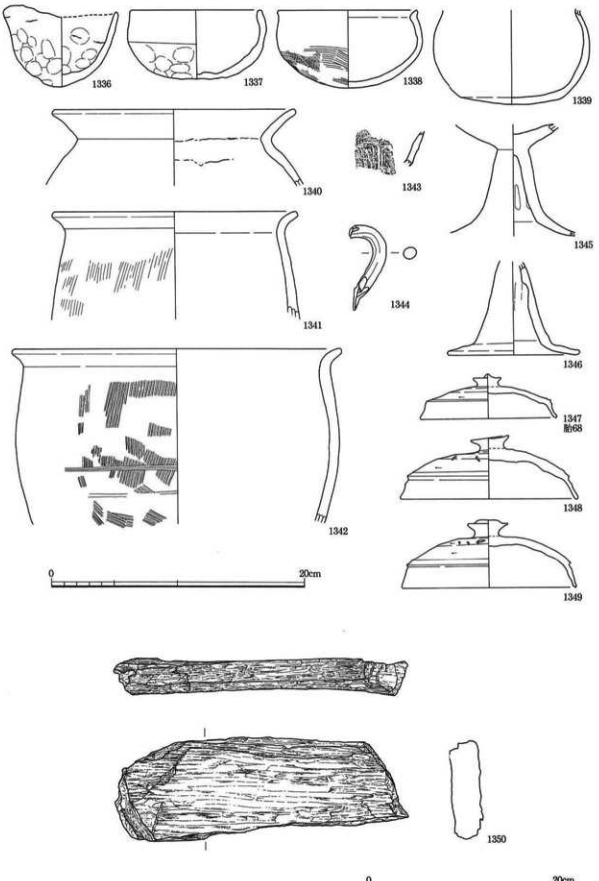


図232　（その２）1290土坑　出土遺物

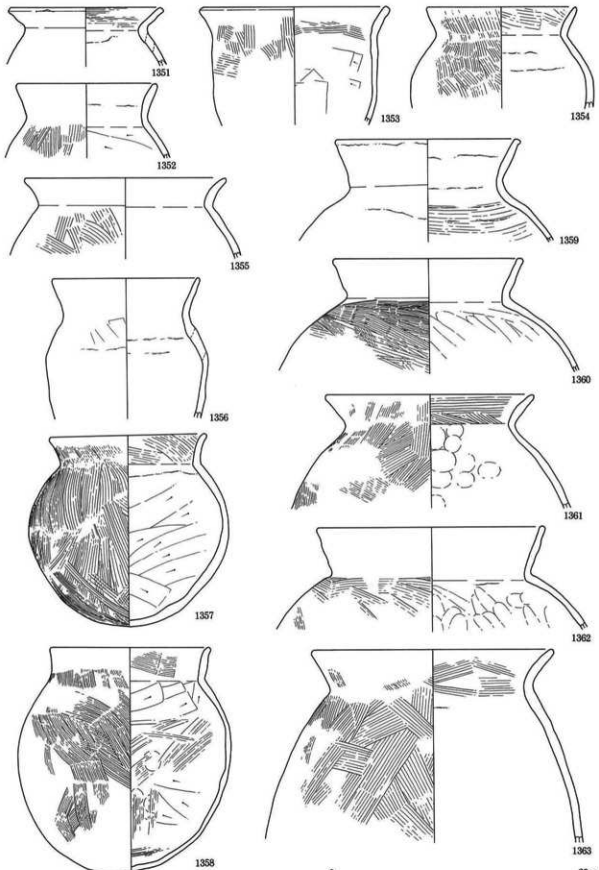


図233　（その2）34土坑　出土遺物（1）

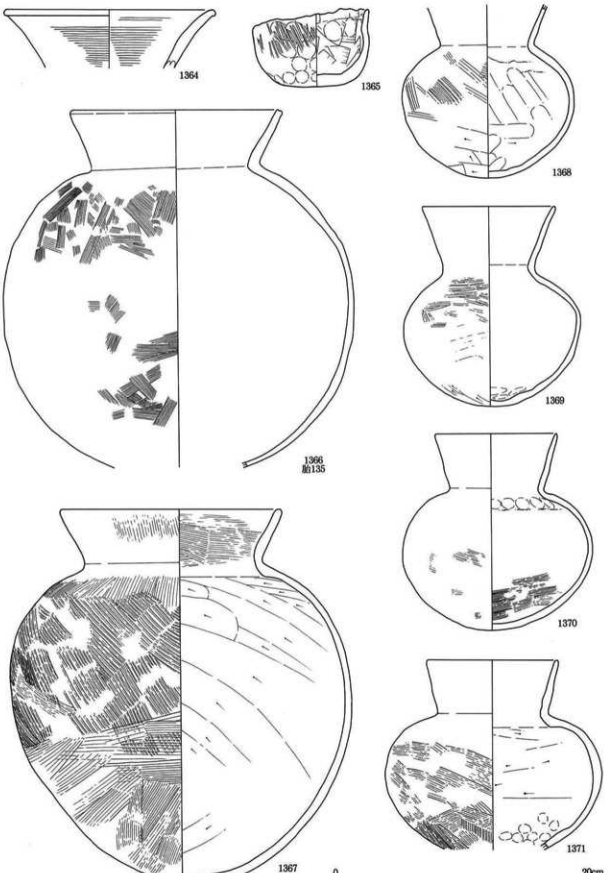


図234　（その２）34土坑　出土遺物（２）

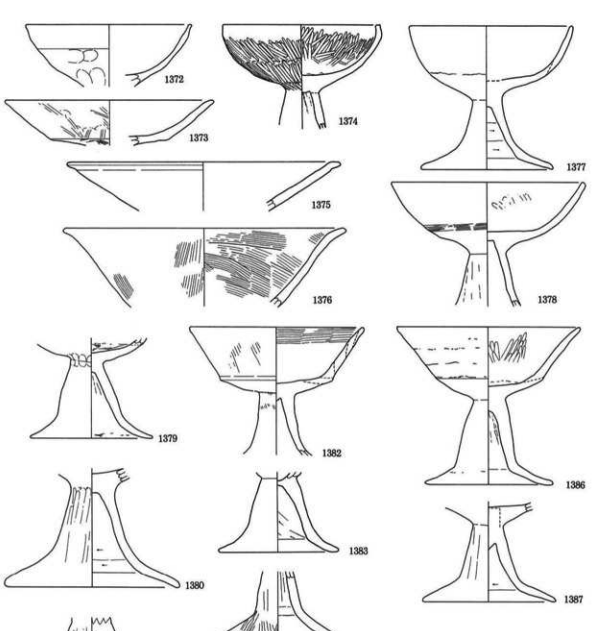


図235　（その2）34土坑　出土遺物（3）

第6面　1290土坑出土遺物（図232、写真図版70・77・85）

古墳時代の土師器、須恵器、石を出土している。土師器では鉢(1336)、坏(1337・1338)、高坏(1345・1346)、甕(1340～1342)、韓式系かと思われる鉢か不明の破片(1343)、不明(1339)がある。須恵器では高坏蓋(1347～1349)、埦？把手(1344)があり、1348・1349の天井部外面には列点文が施されている。このほか、石では緑色片岩の板状素材(1350)があり、周縁は打ち欠いているものか、詳細は不明である。時期は須恵器編年でⅠ－1～3段階にあたる。

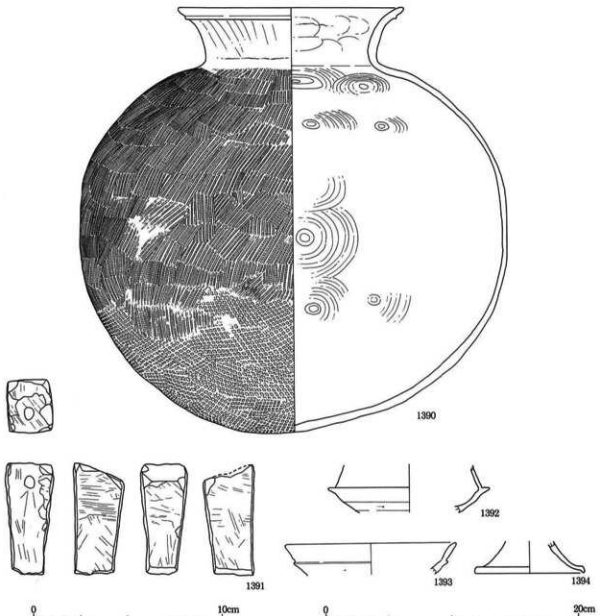


図236　（その２）34土坑　出土遺物（４）

第６面　34土坑出土遺物（図233～237、写真図版71～73・85・100）

古墳時代の土師器、須恵器が多く出土している。土師器では直口壺(1368～1371)、甕(1351～1363・1366・1367)、高坏(1372～1388)、鉢(1365)、製塩土器脚部か不明(1389)がある。1364は土師器の壺か不明としたが、須恵器生焼けの可能性がある。須恵器ではⅠ－２段階前後の坏(1392)、無蓋高坏か蓋か不明のもの(1393)、高坏脚(1394)、甕(1390)などが出土している。このほか、琴かと思われる加工された板材(1395)や、携帯用に紐を結わえるための穿孔を施したかのような砥石(1391)がみられる。この土坑出土遺物では初期須恵器と土師器の共伴と、土師器の高坏の出土が比較的多い点、さらに琴が含まれている点が特徴的である。

第６面　1291土坑出土遺物（図238）

須恵器坏(1397)、甕(1396)を図化している。坏底部外面には平行線のヘラ記号が刻まれている。時期

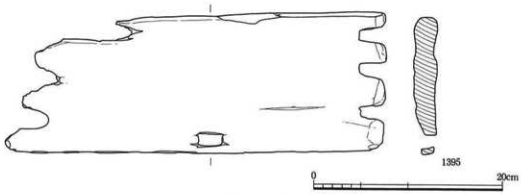


図237　（その2）34土坑　出土遺物（5）

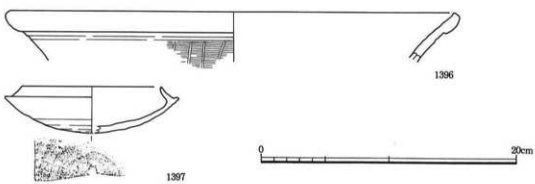


図238　（その2）1291土坑　出土遺物

はII－4～5段階にあたる。

第6面　609・631土坑出土遺物（図239）

609土坑では古墳時代の土師器高坏(1400)を図化している。時期は5世紀後半頃と思われる。

631土坑では須恵器器台の鉢部か不明のもの(1398)、韓式系と思われる土師器甕？体部破片(1399)を図化している。時期は初期須恵器の段階か。

第6面　689・690土坑出土遺物（図240）

689土坑では古墳時代土師器甕(1403)を図化している。時期は不明である。

690土坑では土師器小型丸底壺(1402)、布留式甕(1401)を図化している。時期は布留の新しい段階のものか。

第6面　ピット、614黒褐色シルト出土遺物（図241、写真図版66・67・70・79）

517ピットでは土師器ミニチュア鉢(1404)を図化している。時期は古墳時代のものか。

876ピットでは外面格子タタキの土師器甕？体部破片(1405)を図化している。

216ピットでは土師器壺(1406)を図化している。時期は5世紀後半頃か。

1220ピットでは土師器甕(1407)を図化した。時期は5世紀後半～6世紀代のものか。

641ピットでは古墳時代の土師器壺(1408)を図化している。時期は6世紀代のものか。この他、製塩土器(写真図版79－1447)が出土しており、外面はナデ、内面は貝殻条痕により調整されている。

1056ピットでは土師器甕(1409)を図化している。「く」の字状に屈曲する頸部と口縁端部を肥厚せず

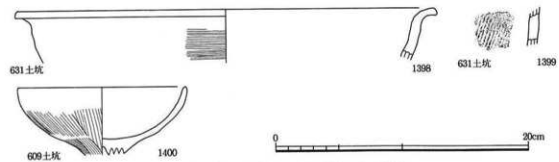


図239　（その２）609・631土坑　出土遺物

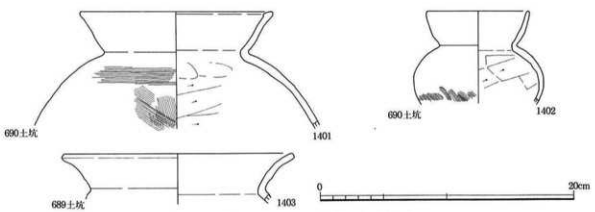


図240　（その２）689・690土坑　出土遺物

に四角くおさめる形状から、５世紀代のものか不明である。

614黒褐色シルトでは須恵器蓋Ⅰ－４～５段階(1410)のものを図化している。

1003ピットでは須恵器坏Ⅰ－４～５段階(1411)のものを図化している。

671ピットでは須恵器壺？(1412)を図化している。内面および外面の一部に灰を被り、脚台の可能性も考えられるもので、時期はⅠ－４～５段階のものか。

1474ピットでは古墳時代土師器甕(1413)を図化した。時期は５世紀後半頃のものか。

587ピットでは土師器甕(1414)を図化している。時期は布留の新しい段階のものか不明である。

写真のみ掲載遺物

第６面　44井戸出土遺物（写真図版78）

初期須恵器器台口縁部細片(写真図版78－1446)が出土している。口縁端部は平坦で下部へ僅かに拡張し、口縁端部直下に高くてシャープな凸帯１条と波状文が施されている。

第６面　103ピット出土遺物（写真図版86）

方形の石製硯が出土している。写真図版86－1464は幅3.4㎝、長さ2.6㎝、厚さ0.5㎝と小振りで、携帯用のものか。1464の裏は剥離面、下端部には擦切の痕跡を留めるため、転用品の可能性も考えられる。時期は中世のものか不明である

第６面　462溝出土遺物（写真図版74）

外面に平行タタキを施した韓式系の土師器甑(写真図版74－1417)が出土している。

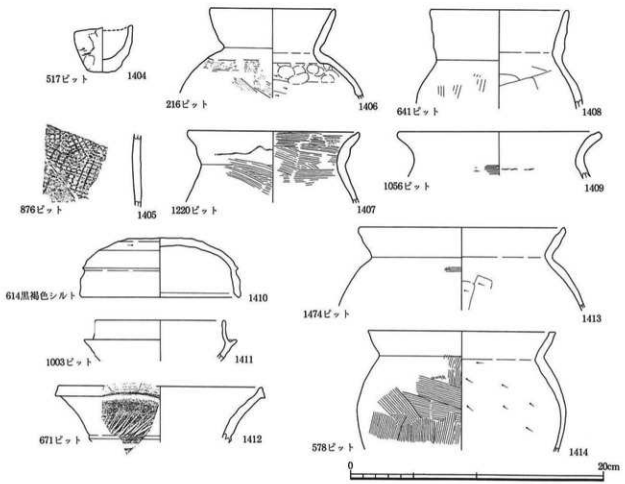


図241　（その2）ピット、614黒褐色シルト　出土遺物

第6面　464黒褐色シルト出土遺物（写真図版52）

13世紀後半龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5b類（写真図版52－1416）が出土している。

第6面　783ピット出土遺物（写真図版87）

輪羽口が1点出土している（写真図版87－1469）。

第6面　1258ピット出土遺物（写真図版74）

外面格子タタキの韓式系土師器甕体部破片（写真図版74－1419）が出土している。

註

1）赤木克視1992「第５章　中～近世の遺構と遺物－新田開発（乾田化）の時代」『小阪遺跡－近畿自動車松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－本文編』

2）㈶大阪市文化財協会1991『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

3）㈶東大阪市文化財協会1990『西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告書』

4）原山充志・小森俊寛1984「左京二条二坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』

5）原山充志・小森俊寛1988「左京三条二坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』

6）五十川伸也1991「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ－京都大学病院構内遺跡の調査－』中世から近世にかけての粘土取り穴に関して五十川氏により詳細な検討がなされており、類例２）～５）の抽出は五十川氏の手によるもので、大和川今池遺跡の比較検討の材料をさせていただいた。

7）西口陽一1996『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅻ大阪府教育委員会、地村邦男1998『大和川・今池遺跡』大阪府教育委員会

8）森村健一編1979『大和川・今池遺跡－第１地区発掘調査報告－』大和川・今池遺跡調査会

参考文献

石野博信・関川尚功1976『纒向』桜井市教育委員会

大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』雄山閣

菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　同朋社

杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集８』奈良県立橿原考古学研究所（鉄鏃の部位等の名称は全てこの文献に拠った。）

田辺昭三・原口正三1962『船橋Ⅱ』平安学園考古学クラブ

中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

中村浩1980『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1999『平成十一年度秋季特別展　古墳のための年代学』～近畿の古式土師器と初期埴輪～　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

藤井利章1980『大和郡山市発志院遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊　奈良県立橿原考古学研究所編　奈良県教育委員会

間壁忠彦1992『備前焼』考古学ライブラリー60　ニュー・サイエンス社

森郁夫1986『瓦』考古学ライブラリー43　ニュー・サイエンス社

米田敏幸1991「土師器の編年　１近畿」『古墳時代の研究　第６巻』雄山閣

表2　（その1）遺物観察表（1）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　　種	地　区	遺構面	遺構名	層　　名	備　　考
12		1	土師器甕	C16e6	2	1土坑		
17		2	肥前系碗	C16d4	3	2土坑	第2層	
17		3	染付碗	C16e5	3	2土坑	第2層（第4層以下も含む）	見込み蛇の目釉剥ぎ
17	18	4	朝鮮王朝粉青沙器皿	C16d5	3	2土坑	第2層（灰色粘質土）	
17		5	土師器小皿	C16e5	3	2土坑	第2層（第4層以下も含む）	
17		6	口禿白磁皿Ⅸ−1c類	C16e5	3	2土坑	第2層（第4層以下も含む）	
17		7	土師質羽釜	C16d5	3	2土坑		
17		8	瓦器小皿	C16d5	3	2土坑		
17		9	須恵器埦	C16e5	3	2土坑	第2層（下層）	
17		10	須恵器壺	C16d5	3	2土坑	第2層（灰色粘質土）	
17		11	須恵器壺	C16d5	3	2土坑		
17		12	須恵器蓋	C16e6	3	2土坑	第2層	
17		13	須恵器坏	C16e6	3	2土坑	第2層	
17		14	須恵器擂鉢	C16d5	3	2土坑	第2層（灰色粘質土）	
17	28	15	軒丸瓦	C16d4	3	2土坑	第2層（下層灰色）	胎159
17	28	16	軒丸瓦	C16d3	3	2土坑	第2層	胎158
17	28	17	軒平瓦	C16c3	3	2土坑	第2層（礫まじり灰色粘質土）	胎164
17	28	18	軒平瓦	C16d3	3	2土坑	灰色粘質土（粗砂含）	胎166
17	28	19	軒平瓦	C16d4	3	2土坑	第2層	胎165
19	19	20	土師質擂鉢	C16e5	4	6土坑	第2層	
19	19	21	土師質擂鉢	C16e5	4	6土坑	第2層	
19		22	須恵器甕	C16e5	4	6土坑		
19	29	23	滑石製紡錘車	C16e5	4	6土坑		23.12g
19	28	24	軒平瓦	C16e5	4	6土坑	第2層（下層）	胎163
19	28	25	軒平瓦	C16e5	4	6土坑		
19	28	26	軒平瓦	C16e5	4	6土坑	第2層	胎162
20		27	須恵器坏	C16f6			第1層	
20	26	28	須恵器坏	C16e4			第2層	胎2・29
20		29	龍泉窯系青磁碗	C16e4			第2層	
20	28	30	軒丸瓦	C16d4			第2層（灰色粘質土）	胎157
20	28	31	軒丸瓦	C16d5			第2層（第4層以下含む）	胎154
20	28	32	軒丸瓦	C16e5			第2層（1部下層）	胎156
20	28	33	軒平瓦	C16e5			第2層（第4層以下含む）	胎161
20	28	34	軒平瓦	C16e5			第2層（灰色粘質土）	胎160
20	18	35	龍泉窯系青磁水注	C16g4			第3層（下層）	
20	18	36	白磁碗Ⅷ−3類	C16e3			第3層（2層含む）	墨書あり
20	18	37	波佐見窯系白磁碗	C16h5			第3層	（17C後半高台内〇線描コバルト染付釉）
20		38	国産陶器	C16c4			第3層（2層含む）	
20		39	須恵器蓋	C16g5			第3層	
20		40	須恵器坏	C16g5			第3層	
20	19	41	瓦器椀	C16d3			第3層	
21	29	42	馬鍬	D17a2			第3層	124.3g
21	29	43	宋銭	C16g5			第3層	1.7g
24	19	44	瓦器小皿	拡張	5	11土坑		
24	19	45	瓦器小皿	拡張	5	11土坑		
24	19	46	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	47	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	48	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	49	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	50	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	51	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	52	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24	19	53	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
24		54	瓦器椀	拡張	5	11土坑		
26		55	須恵器坏	C17j3	5	12土坑		ヘラ記号
26		56	土師器甑？	C17j3	5	12土坑		
31	20	57	土師器鉢	C16e8	5	16土坑		
31		58	土師器壺？	C16e8	5	16土坑		
31		59	土師器甕	C16e8	5	16土坑		
31	20	60	土師器甕	C16e8	5	16土坑		
31		61	土師器甕？	C16e8	5	16土坑		
31	20	62	土師器高坏or埦	C16e8	5	16土坑		
31	20	63	土師器高坏	C16e8	5	16土坑		
31	20	64	土師器高坏	C16e8	5	16土坑		
31		65	土師器高坏	C16e8	5	16土坑		
31		66	土師器鉢？	C16e8	5	16土坑		韓式系？
31	29	67	滑石製臼玉	C16e8	5	16土坑		0.32g　側面僅かに稜有
33	21	68	土師器甕	C16e8	5	17土坑		
33	21	69	土師器甕	C16e8	5	17土坑		
33	21	70	土師器壺？	C16e8	5	17土坑		
33	21	71	土師器壺	C16e8	5	17土坑		関東の土器？
33	21	72	土師器鉢	C16e8	5	17土坑		韓式系
34		73	須恵器甕	C16e8	5	17土坑		胎43　生焼け
34		74	土師器高坏	C16e8	5	17土坑		
34	21	75	土師器高坏	C16e8	5	17土坑		
34	22	76	土師器高坏	C16e8	5	17土坑		
34	22	77	土師器高坏	C16e8	5	17土坑		
34	29	78	滑石製臼玉	C16e8	5	17土坑		0.13g
34	29	79	滑石製臼玉	C16e8	5	17土坑		0.13g　赤色顔料付着
34	29	80	滑石製臼玉	C16e8	5	17土坑		0.12g
34	29	81	滑石製臼玉	C16e8	5	17土坑		0.21g
34	29	82	滑石製臼玉	C16e8	5	17土坑		0.09g　側面僅かに稜有
39		83	土師器不明		5	15溝		弥生後期？
39		84	土師器壺	C16f6	5	19土坑		須恵器䍐模倣
39	22	85	土師器高坏	C16f5•6	5	27土坑		
39	22	86	土師器直口壺	C16f5	5	26土坑		
39	22	87	土師器不明	C16f6	5	21土坑		埴輪？

表2　（その1）遺物観察表（2）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　　種	地　　区	遺構面	遺構名	層　　名	備　　考
39		88	土師器直口壺	C16f5	5	27土坑		
39		89	土師器高坏	C16f5	5	30土坑		
39		90	土師器高坏	C16f5	5	30土坑		
39		91	土師器不明	C16f5	5	30土坑		
39		92	土師器甕	C16f5	5	31土坑		
39		93	土師器甕	C16f5	5	31土坑		
39		94	土師器把手	C16f5	5	31土坑		
39	22	95	土師器甕	C16f4・5	5	33土坑		
39		96	土師器？壺	C16f4	5	37土坑		
44		97	土師器甕	C16g3	5	66土坑		
44	23	98	土師器甕	C16g3	5	66土坑		
44	23	99	土師器甕	C16g3	5	66土坑		
44	23	100	土師器甕	C16g3	5	66土坑		
44	23	101	土師器甕	C16g3	5	66土坑		
44	23	102	土師器甕	C16g3	5	66土坑		
44	23	103	土師器小型丸底壺？	C16g3	5	66土坑		
44	23	104	土師器小型丸底壺	C16g3	5	66土坑		
44	23	105	土師器小型丸底壺	C16g3	5	66土坑		
44	23	106	土師器小型丸底壺	C16g3	5	66土坑		
48	24	107	土師器甕	C16f2	5	80土坑		
48	24	108	土師器甕	C16f2	5	80土坑		
48	24	109	土師器甕	C16f2	5	80土坑		
48	24	110	土師器壺	C16f2	5	80土坑		外煤付着
48	24	111	土師器甕	C16f2	5	80土坑		
48	24	112	土師器甕	C16f2	5	80土坑		
49		113	土師器甕	C16f2	5	80土坑		
49		114	土師器甕？	C16f2	5	80土坑		
49	25	115	土師器直口壺	C16f2	5	80土坑		
51	25	116	土師器甕	C16f2	5	81土坑		
51	25	117	土師器高坏	C16f2	5	81土坑		
51	25	118	土師器小型丸底壺	C16f2	5	81土坑		
52		119	土師器壺	C16f4	5	40土坑		外煤付着
52		120	土師器壺	C16f4	5	40土坑		
52		121	土師器壺	C16f4	5	40土坑		外煤付着
52	25	122	土師器直口壺	C16f3・4	5	43土坑		
52		123	土師器壺	C16g3	5	64土坑		
52		124	土師器不明	C16g2	5	67土坑		
52		125	土師器壺	C16e・f3	5	70土坑		
52		126	土師器甕	C16e・f3	5	70土坑		
52		127	土師器甕	C16e3	5	71土坑		
52		128	土師器不明	C16f3	5	72土坑		
52	25	129	土師器甕	C16f3	5	72土坑		
52		130	土師器壺	C16f3	5	74土坑		
52		131	土師器壺？	C16f3	5	76土坑		
52	25	132	土師器壺	C16f3	5	76土坑		
52	25	133	土師器壺	C16f2	5	78土坑		
52		134	土師器壺	C16f2	5	82土坑		
52		135	土師器甕	C16f2	5	83土坑		
52		136	土師器？壺	C16f2	5	83土坑		弥生後期？　外底木の葉圧痕
52		137	土師器把手	C16ef2・3	5	85土坑		
53	27	138	須恵器無蓋高坏	C17j2			第4層	胎1
53	26	139	須恵器蓋	C16f6			第4層	胎3
53	26	140	須恵器器台	C16g9			第5層	胎44　コンパス文
53	26	141	須恵器器台	C16f5			第5層	
53	26	142	須恵器䆃	C16e7			第4層	胎66
53		143	土師器小型壺				第4層	
53		144	須恵器蓋	C16j9			第5層	
53		145	須恵器蓋	C17i1			第5層	
53		146	須恵器坏？	C16f4			第4層	
53		147	須恵器蓋		5		精査時出土	
53		148	須恵器蓋		5		精査時出土	
53		149	須恵器盤？	C16g8			第4層	
53		150	須恵器高台付坏	C17g2			第4層	
53		151	須恵器高台付坏	C16f6			第4層	
53		152	須恵器高台付坏	C16f6			第4層	
53		153	須恵器壺？		5		精査時出土	
53		154	須恵器壺	拡張区			第5層	
53		155	須恵器壺	C16e6			第4層	
53		156	須恵器瓶子	C16i10			第4層	糸切り痕
53		157	須恵器こね鉢	C16f6			第4層	
54	29	158	石鏃（凹基式）	C16h8			第4層	サヌカイト　風化　1.92g
54	29	159	石鏃（突基有茎式）	C16i6			第4層	サヌカイト　2.24g
54	29	160	袋状鉄斧	D17a2			第4層	123.39g
	26	161	須恵器埦	C16g3	5	53土坑		
	26	162	須恵器不明	C16c4			第2層	胎169　縄蓆文
	26	163	須恵器器台	C16d5	3	2土坑	第2層（第4層以下を含む）	鋸歯文
	26	164	須恵器器台			攪乱		
	26	165	須恵器壺	C16e4			第4層	
	26	166	須恵器壺？	C16h8			第4層	
	27	167	須恵器無蓋高坏	C17i2			第4層	
	27	168	須恵器無蓋高坏	C16e8	5	17土坑		
	27	169	須恵器把手	C16e8	5	17土坑		
	27	170	須恵器甕	C16e8	5	17土坑		胎4
	27	171	須恵器壺	C16de4・5	3	2土坑		
	27	172	須恵器甕	C16f5	5	28土坑		溶着痕のある須恵器
	28	173	軒平瓦		3	5溝		
	29	174	石皿	C16i10	5	15溝		3236g

表３　（その２）遺物観察表（１）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構図	遺　構　名	層　名	備　考
123	48	175	瓦器小皿	C15c8			第１層	
123		176	須恵器壺	C15c10			第１層	
123		177	石鏃	C15b6			第２層	
123	83	178	軒平瓦	C15b6			第２層	胎140
123		179	土師器小皿	C15b9	3		精査時出土	
123		180	土師器小皿	C15b5			第５層	
123	48	181	瓦器高台付小皿	C15b5			第５層	
123		182	瓦器椀	C15b6			第５層	
123	55	183	瓦器椀	C15b6			第５層	
123		184	瓦器椀	C16b1			第５層	
123		185	土師器鉢	C15c5			第５層	
123		186	土師器甕	C15b3			第５層	鐘式系
123	77	187	須恵器蓋	B15b1			第５層	胎63
123		188	須恵器壺	C15b6			第５層	
123		189	須恵器壺	C15b6			第５層	
123		190	須恵器壺	C15b5			第５層	
123		191	須恵器壺？	C15d10			第５層	
123		192	須恵器器台	C16d3			第５層	
123	86	193	刀子？	C15d9			第５層	鉄製　重さ46.96ｇ
123		194	須恵器壺	C15c6			第５層	
123		195	砥石	C16d2			第５層	重さ128.14ｇ
123	85	196	双孔円板	C15d9			第５層	滑石製　重さ5.03ｇ
124	85	197	勾玉	C15c10			第４層	滑石製　重さ10.42ｇ
124		198	須恵器蓋	B15j2			第４層	
124		199	須恵器器台	C16c3			第４層	
124	77	200	須恵器壺	C15d9			第４層	
124		201	須恵器器台？	C16d3			第４層	
124	85	202	尖頭器	B15j2			地上直上	サヌカイト基部欠　重さ5.07ｇ
124		203	瓦質壺	C15d7			第４層	
124		204	軒丸瓦	C15b6			第４層	
124	53	205	白磁椀	C16f1			第４層	愚寄（３つまる）
124	84	206	鬼瓦	C15d5			第４層	
124		207	土師器小皿			中央倒壊		
124		208	常滑Ga型式	C15a7		攪乱		遺物番号458と同一
124		209	須恵器小形長頸壺	拡張区		倒壊		
124		210	須恵器椀			掘削土		
124		211	石鏃	C15a7		攪乱		滑石製
124		212	須恵器壺	拡張区		東側壊		
124		213	須恵器器台	C15b6	6	攪乱		
124		214	須恵器不明	拡張区		東側壊		縄蓆文
124		215	須恵器器台	C15c5・C6b1		南側壊		組紐文
124		216	須恵器器台			南側壊		
125		217	土師器高坏	C15c10	3	１粒土取り穴		
125		218	土師器小皿	C15c10	3	１粒土取り穴		
125		219	瓦器椀	C15c10	3	１粒土取り穴		
125		220	瓦器椀	C15b9	3	１粒土取り穴		
125		221	土師器高坏	C15c10	3	１粒土取り穴		
125		222	土師器高坏	C15c10	3	１粒土取り穴		
125		223	須恵器坏	C15a10	3	１粒土取り穴		
125		224	黒色土器Ａ類椀	C15b9	3	１粒土取り穴		
125		225	土製品	東半	3	１粒土取り穴		
125		226	常滑甕	C15e10	3	１粒土取り穴		12c,後半
125	83	227	軒平瓦	C15c9	3	１粒土取り穴		胎52
126	83	228	軒平瓦	C15e10	4	11落ち		胎141
126	82	229	軒丸瓦	C15e10	4	11落ち		
126	82	230	軒平瓦	C15e8	4	11落ち		
127		231	瓦質火舎	C15e10	4	2溝		
127		232	土師質鉢？	C16c3	4	2溝		
127		233	瓦器小皿	C16d2	4	2溝		赤変
128	49	234	土師器小皿	C16d3	4	151溝		
128		235	瓦器椀	C16d3	4	151溝		
128		236	白磁椀Ⅳ－2類	C16d3	4	151溝	13c,前半	
128		237	土師質羽釜	C15d3	4	151溝		
128		238	土師質羽釜	C15d3	4	151溝		
129		239	土師器小皿	C15d9	5	22溝		
129	51	240	土師器小皿	C15c5東半	5	22溝		
129		241	土師器小皿	C15c5東半	5	22溝		
129		242	瓦器小皿	C15d8	5	22溝		
129	51	243	瓦器椀	C15c6東半	5	22溝		
129		244	瓦質燭鉢	C15d8	5	22溝		
129		245	瓦質羽釜	C15c7	5	22溝		
129		246	瓦質壺	C15c7	5	22溝		
129		247	瓦質壺	C15c6東半	5	22溝		
129		248	羽虫？台形土器	C15c7	5	22溝		
129	82	249	軒平瓦	C15d9	5	22溝		胎111
130	48	250	土師器小皿	C15b6	6	519ピット		

表3 （その2）遺物観察表（2）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器種	地区	遺構図	遺構名	層名	備考
130		251	土師器小皿	C15b6	6	519ピット		
130		252	土師器鉢	C15b6	6	519ピット		
130		253	須恵器蓋	C15b6	6	519ピット		
130		254	須恵器蓋	C15b6	6	519ピット		
130	78	255	須恵器器台	C15b6	6	519ピット		
130		256	土師器壺	C15b6	6	519ピット		陳式系
130		257	須恵器甕	C15b6	6	519ピット		
130		258	須恵器甕	C15b6	6	519ピット		
131		259	須恵器蓋	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		260	須恵器蓋	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		261	須恵器蓋	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		262	須恵器蓋	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		263	須恵器蓋	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		264	須恵器蓋	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		265	須恵器坏	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		266	須恵器坏	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		267	須恵器坏	C15b6	6		549黒褐色シルト	
131		268	土師器壺	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		269	瓦質鍋	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		270	須恵器短頸壺	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		271	須恵器短頸壺	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131	48	272	土師器ミニチュア鉢	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		273	土師器ミニチュア鉢	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		274	土師器ミニチュア鉢	C15c5	6		549黒褐色シルト	
131		275	土師器ミニチュア鉢	C15c6	6		549黒褐色シルト	
131		276	土師器高坏	C15c5	6		549黒褐色シルト	
132	85	277	灰釉陶	C15c6	6	504井戸		サヌカイト 重さ7.44g
132		278	土師器甕	C15a7	6	143溝		
132		279	土師器甕	C15a7	6	143溝		
132	48	280	土師器鉢？	C15e9	6	127溝		胎76
132	78	281	須恵器甕	C15e8	6	127溝		胎40
132		282	土師器甕	C15d9	6	127溝		
132		283	土師器甕？	C15e9	6	127溝		
132		284	土師器高坏	C15e9	6	127溝		
132		285	土師器高坏	C15e9	6	127溝		
132	42	286	土師器ミニチュア壺	C16d1	6	65溝		
132		287	土師器ミニチュア壺？	C15d9	6	65（東）溝		
132		288	土師器甕	C15d10	6	65溝		
132		289	須恵器壺	C15d9	6	65溝		
132		290	土師器高坏	C15d9	6	65（東）溝		
132		291	土師器高坏	C15d9	6	65（東）溝		
132		292	須恵器甕	C15d9	6	65（東）溝		
132		293	土師器高坏	C15b5	6	508井戸		
132		294	須恵器坏	C15a8	6	463溝		
132	76	295	須恵器把手付鉢	C15d8	6	92溝		胎70
132		296	須恵器小型長頸壺	C15d9	6	92溝		
133	42	297	土師器小皿	C15d8	6	65（東）溝		
133		298	土師器小皿	C15d9	6	65（東）溝		
133	42	299	土師器小皿	C15d9	6	65（東）溝		
133	42	300	瓦器小皿	C15d9	6	65（東）溝		
133		301	瓦器小皿	C15d9	6	65（東）溝		
133	42、55	302	瓦器小皿	C15d8	6	65（東）溝		
133		303	瓦器小皿	C15d9	6	65（東）溝		
133	42	304	瓦器小皿	C15d8	6	65（東）溝		
133		305	瓦器小皿	C15d8	6	65（東）溝	下層含む	
133		306	須恵器こね鉢	C15d8	6	65（東）溝	下層含む	
133		307	土師質羽釜	C15d9	6	65（東）溝		
133		308	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		309	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133	42	310	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		311	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		312	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		313	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝	下層含む	
133	42	314	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		315	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		316	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133	42	317	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		318	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝	下層含む	
133	42	319	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		320	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		321	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		322	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		323	瓦器椀	C15d8	6	65（東）溝		
133		324	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
133		325	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝	下層含む	
134		326	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		

表3　（その2）遺物観察表（3）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
134		327	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
134		328	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
134		329	土師質羽釜	C15d9	6	65（東）溝		
134		330	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
134		331	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
134		332	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
134		333	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝		
135		334	土師質羽釜	C15d8	6	65（東）溝	下層含む	
136		335	瓦器椀	C16b1	6	120溝		
136		336	白磁碗Ⅳ－2類	C16b・c1	6	120溝		13c.前半
136		337	須恵器こね鉢	C16c1	6	120溝		
137		338	土師器小皿	C15b10	6	123溝		
137		339	土師器小皿	C15b10	6	123溝		
137	51	340	土師器小皿	C15b10	6	123溝		
137		341	瓦器小皿	C15b10	6	123溝		
137	51	342	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		343	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		344	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		345	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		346	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		347	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		348	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		349	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137	53	350	龍泉窯系白磁端反皿	C16b1	6	123溝	5層含む	16c.末～17c.初
137		351	白磁碗Ⅳ－2類	C16b1	6	123溝	5層含む	13c.前半
137		352	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		353	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137	51	354	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137	51	355	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		356	瓦器椀	C15b10	6	123溝		
137		357	硯	C15b10	6	123溝		石製
137		358	土師質羽釜	C15b10	6	123溝		
138		359	土師器小皿	C16d2	6	66溝		
138	43	360	土師器小皿	C16c2	6	66溝		
138		361	土師器小皿	C16d2	6	66溝		
138		362	土師器小皿	C15d10	6	66溝		
138		363	土師器小皿	C15d10	6	66溝		
138		364	土師器小皿	C15d10	6	66溝		
138		365	土師器小皿	C16d1	6	66溝		
138		366	土師器小皿	C16d1	6	66溝		
138		367	土師器小皿	C15d10	6	66溝		
138		368	土師器火鉢	C15d10・C16d1	6	66溝		
138	52	369	龍泉窯系青磁皿1－5類	C16d1	6	66溝		13c.後半
138	54	370	白磁碗Ⅳ－2類	C16d2	6	66溝		13c.前半
138	54	371	白磁碗Ⅳ類	C16c2	6	66溝		
138		372	土師質羽釜（紀伊？）	C16d1	6	66溝		
138		373	黒色A類椀	C16c2	6	66溝		
138	54	374	白磁碗Ⅷ－3類？	C16d1	6	66溝		13c.前半
138		375	白磁碗Ⅷ－3類	C16c2	6	66溝		13c.前半
138		376	瓦器小皿	C16d1	6	66溝		
138		377	瓦器椀	C16d1	6	66溝		
138		378	瓦器椀	C16c1	6	66溝		
138		379	瓦器椀	C16c2	6	66溝		
138		380	瓦器椀	C16c1	6	66溝		
138	43	381	瓦器椀	C16d2	6	66溝		
138		382	瓦器椀	C16d1	6	66溝		
138		383	須恵器こね鉢	C16c2	6	66溝		
138		384	土師質羽釜	C16d2	6	66溝		
138		385	土師質羽釜	C16d2	6	66溝		
139		386	土師器小皿	C15d・e8	6	92溝		
139	48	387	土師器小皿	C15d9	6	92溝	東西畦	
139	48	388	土師器小皿	C15d8	6	92溝		
139		389	土師器小皿	C15d9	6	92溝		
139	48	390	土師器小皿	C15d9	6	92溝	東西畦	
139		391	土師器小皿	C15d・e8	6	92溝		
139	48	392	土師器小皿	C15d9	6	92溝		
139		393	土師器小皿	C15d9	6	92溝		
139		394	瓦器椀	C15d9	6	92溝		
139		395	瓦器椀	C15d9	6	92溝		
139		396	瓦器椀	C15d9	6	92溝		
139		397	瓦器椀	C15d9	6	92溝		
139		398	瓦器椀	C15d9	6	92溝		
139		399	瓦器椀	C15d・e8	6	92溝		
139		400	瓦器椀	C15d・e8	6	92溝		
139		401	瓦器椀	C15d9	6	92溝	東西畦	
139		402	瓦器椀	C15d9	6	92溝	東西畦	

表3　（その2）遺物観察表（4）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺 構 名	層　名	備　考
139		403	瓦器椀	C15d8	6	92溝		
139	43	404	瓦器椀	C15d8	6	92溝		
139	48	405	瓦器椀	C15d9	6	92溝		
139		406	灰釉陶器椀？	C15d9	6	92溝		
139		407	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	C15d8	6	92溝		13c.後半
139		408	須恵器こね鉢	C15d9	6	92溝		
139		409	常滑甕Ⅱ型式	C15d8	6	92溝		12c.第3四半紀
139		410	瓦質鍋	C15d8	6	92溝		
139		411	常滑甕Ⅱ型式	C15d8	6	92溝		12c.第3四半紀
139		412	常滑甕6b型式	C15d9	6	92溝		13c.第4四半紀
140		413	土師器小皿	C15a7	6	143溝		
140		414	土師器小皿	C15c7東半	6	143溝		
140		415	土師器小皿	C15c7	6	143溝		
140		416	土師器小皿	C15a7	6	143溝		
140	43	417	土師器小皿	C15a7	6	143溝		
140		418	土師器小皿	C15b7	6	143溝		
140	43、55	419	土師器小皿	C15c7東半	6	143溝		
140		420	土師器小皿	C15b7	6	143溝	暗	
140		421	土師器小皿	C15b7	6	143溝	暗	
140	43	422	土師器大皿	C15d7	6	143溝		
140		423	瓦器小皿	C15b7	6	143溝		
140		424	瓦器椀	C15b7	6	143溝		
140		425	瓦器椀	C15b7	6	143溝		
140		426	瓦器椀	C15b7	6	143溝		
140		427	瓦器椀	C15c7	6	143溝		
140		428	瓦器椀	C15d7	6	143溝		
140	43	429	瓦器椀	C15a7	6	143溝		
140		430	瓦器椀	C15c7東半	6	143溝		
140		431	瓦器椀	C15a7	6	143溝		
140		432	瓦器椀	C15a7	6	143溝		
140		433	瓦器椀	C15c7	6	143溝		
140		434	瓦器椀	C15c7東	6	143溝		
140		435	瓦器椀	C15c7	6	143溝		
140		436	瓦器椀	C15c7	6	143溝		
140		437	瓦質鍋	C15d7	6	143溝		
140		438	須恵器甕	C15d7	6	143溝		
140		439	瓦質羽釜	C15d7	6	143溝		
140		440	瓦質羽釜	C15b7	6	143溝		
141		441	土師質羽釜	C15b7	6	143溝	暗	
141		442	須恵器こね鉢	C15b7	6	143溝		
141		443	須恵器こね鉢	C15b7	6	143溝		
141		444	須恵器こね鉢	C15b7	6	143溝		
141	81	445	軒丸瓦	C15c7	6	143溝		胎168
142		446	土師器小皿	C15c7	6	458溝		
142		447	土師器小皿	C15c7	6	458溝		
142	43	448	土師器小皿	C15b7	6	458溝		
142		449	土師器小皿	C15d7	6	458溝		
142		450	土師器小皿	C15d7	6	458溝		
142		451	土師器小皿	C15d7	6	458溝		
142		452	瓦器椀	C15b7	6	458溝		
142		453	瓦器椀	C15b7	6	458溝		
142	43、55	454	瓦器椀	C15c7	6	458溝		
142		455	瓦器椀	C15c7	6	458溝		
142		456	瓦器片口鉢？	C15d1	6	458溝		
142		457	白磁碗Ⅳ類	C15d7	6	458溝		13c.前半
142		458	常滑甕6b型式？	C15c6・7・d7	6	458溝		遺物番号208と同一
142		459	瓦質火舎？	C15c7	6	458溝		
142		460	須恵器？壺	C15b7	6	458溝		
142		461	瓦質？壺	C15d7	6	458溝		
143		462	瓦質羽釜	C15b7	6	458溝		
143		463	瓦質羽釜	C15a7	6	458溝		
143		464	須恵器こね鉢	C15d7	6	458溝		
143		465	須恵器こね鉢	C15c7	6	458溝		
144	81	466	軒丸瓦	C15e9	6	127溝		
144	81	467	軒丸瓦	C16d2	6	66溝		胎144
144	81	468	軒丸瓦	C15d10	6	66溝		胎48
144		469	軒丸瓦	C16c2	6	66溝		胎145
144	82	470	軒丸瓦	C16d1	6	66溝		
144	82	471	軒平瓦	C15d8	6	65（東）溝		胎50
144	83	472	軒平瓦	C15e8	6	127溝		胎49
145	82	473	軒丸瓦	C15d9	6	92溝		
145	82	474	軒丸瓦	C15d9	6	92溝	第5層（黒）	胎143
145		475	軒丸瓦	C15b7	6	458溝		胎146
145	82	476	軒丸瓦	C15d7	6	458溝		胎167
145	81	477	軒丸瓦	C15d7	6	458溝		胎142
145	83	478	軒平瓦	C15d7	6	458溝		

表３　（その２）遺物観察表（５）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
145	83	479	軒平瓦	C15d8	6	92溝		胎137
146	84	480	砥石	C15d10	6	66溝		砥石－1
146	84	481	砥石	C15d10	6	66溝		砥石－2
147	84	482	砥石	C15a7	6	459溝		砥石－3　砂岩
147	86	483	硯	C15d8	6	92溝		粘板岩
148		484	土師器小皿	C16d1	6	65溝		
148		485	土師器小皿	C15e10	6	65溝		
148		486	土師器小皿	C15d10	6	65溝		
148		487	土師器小皿	C15d10	6	65溝		
148		488	土師器小皿	C15e10	6	65溝		
148		489	土師器小皿	C16d1	6	65溝		
148		490	土師器椀	C15e10	6	65溝		
148	42	491	瓦器小皿	C16d1	6	65溝		
148		492	土師器小皿	C16d1	6	65溝		
148		493	瓦器小皿	C15e9	6	127溝		
148	42	494	瓦器小皿	C16d2	6	65溝		
148		495	瓦器小皿	C16d2	6	65溝		
148		496	瓦器椀	C16d2	6	65溝		
148		497	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		498	瓦器椀	C15e10	6	65溝		
148		499	瓦器椀	C15e8	6	127溝		
148		500	瓦器椀	C15e10	6	65溝		
148		501	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		502	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148	42	503	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		504	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		505	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		506	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		507	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		508	瓦器椀	C15d8	6	127溝		
148	42	509	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		510	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		511	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148		512	瓦器椀	C15e9	6	127溝		
148		513	瓦器椀	C16d2	6	65溝		
148		514	瓦器椀	C16d1	6	65溝		
148	86	515	硯	C15d10	6	65溝		粘板岩
148		516	石鍋	C15e8	6	127溝		滑石製　底部
148		517	須恵器こね鉢	C16d2	6	65溝		
148		518	石鍋	C15e9	6	127溝		滑石製
149		519	瓦質仏花器	C15d8	6	127溝		
149		520	常滑壺	C15e9	6	127溝		
149		521	須恵器こね鉢	C15e8	6	127溝		
149		522	常滑壺？	C15e8	6	127溝		胎131
149	52	523	同安窯系青磁皿Ⅰ－5b類	C16d10	6	65溝		13c.中～後半
149	53	524	白磁碗	C16d1	6	65溝		15c.中～後半　「寺」の墨書
149		525	瓦質壺	C15e8	6	127溝		
149		526	白磁碗類似	C16d1	6	65溝		13c.前半
149		527	瓦質壺	C15e8	6	127溝		
149		528	瓦質鍋	C15e8	6	127溝		胎103
149		529	瓦質羽釜	C15e8	6	127溝		
149		530	瓦質羽釜	C15e9	6	127溝		
149		531	瓦質羽釜	C15e9	6	127溝		
150		532	土師器小皿	C16c2	6	57溝		
150		533	土師器小皿	C16c2	6	57溝		
150		534	土師器小皿	C16c2	6	57溝		
150		535	土師器小皿	C16c2	6	57溝		
150	49	536	瓦器小皿	C16c2	6	57溝		
150		537	瓦器小皿	C16c2	6	57溝		
150		538	瓦器椀	C16c2	6	57溝		
150		539	瓦質羽釜	C16c2	6	57溝		胎126
151		540	土師質羽釜	C15d7	6	440溝		
151		541	瓦器椀	C15d7	6	440溝		赤変
152		542	土師器小皿	C15b8	6	470溝		
152		543	瓦器椀	C15b8	6	470溝		
152	43	544	瓦器椀	C15b8	6	470溝		
152		545	瓦器椀	C15b8	6	745溝		
152	53	546	白磁皿	C15a8（東）	6	463溝		13c.
153		547	瓦器椀	C15b3・4	6	530溝		
153		548	瓦器椀	C15b4	6	530溝		
153		549	瓦器椀	C15b4	6	530溝		一部赤変
153		550	瓦器椀	C15b3	6	530溝		
153		551	瓦器椀	C3b4	6	530溝		
153		552	須恵器こね鉢	C15e3	6	530溝		
153		553	瓦器椀	C15a4	6	521溝		
154	43	554	土師器小皿	C15a9	6	260溝		

表3　（その2）遺物観察表（6）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
154		555	土師器小皿	C15a8	6	280溝		
154		556	瓦器椀	C15a9	6	280溝		
154		557	須恵器甕	C15a8	6	280溝		
154		558	陶器皿	C15a8	6	280溝		
154		559	石鍋	C15a8	6	280溝		滑石製
154		560	瓦質火舎？	C15a8	6	280溝		
154		561	瓦質甕	C15a9	6	280溝		胎11B
154		562	瓦質甕	C15a9	6	280溝		
155		563	瓦器椀	B14j10	5	424・425溝		
156		564	須恵器蓋	C15a3	6	878溝		
156		565	須恵器甕	C8a3	6	878溝		
156		566	須恵器無蓋高坏？	C15a3	6	878溝		
156		567	須恵器甕	C15a3	6	878溝		胎151
157		569	須恵器蓋	C15a7	6	485溝		
157		569	須恵器蓋	C15a7東	6	485溝		
158		570	土師器小皿	C15c8	6	36井戸	下層	
158		571	土師器小皿	C16c3	6	36井戸		
158		572	土師器小皿	C16c2	6	36井戸		
158		573	土師器小皿	C15c3	6	36井戸	下層	
158		574	瓦器小皿	C15c3	6	36井戸	下層	
158		575	瓦器小皿	C16c3	6	36井戸	5層＋黒	
158		576	瓦器小皿	C16c2	6	36井戸		
158	52	577	青白磁皿	C15c3	6	36井戸	下層	12c.
158		578	須恵器こね鉢	C15c3	6	36井戸		
158		579	白磁碗Ⅳ－2類	C16c3	6	36井戸		13c.前半
158		580	白磁碗Ⅳ－2類	C16c3	6	36井戸		13c.前半
158		581	土師質羽釜	C15c3	6	36井戸	下層	
158		582	瓦質擂鉢	C16c2	6	36井戸		
158		583	瓦質甕	B14j10	6	36井戸		
158		584	須恵器甕	C15b・c3・C16c3	6	36井戸	5層、5層＋黒	
159	67	585	須恵器甕	C16c2	6	228井戸		
159		586	須恵器こね鉢	C16c1	6	230井戸		
159		587	瓦器椀	C16c1	6	230井戸		
160		588	瓦器小皿	C16c1	6	129井戸		
160	47	589	瓦器椀	C16c1	6	129井戸		
160		560	瓦器椀	C16c1	6	129井戸		
160		561	瓦器椀	C16c1	6	129井戸		
160	81	562	軒丸瓦	C16c1	6	129井戸		胎47
161		563	土師器小皿	C16c1	6	170井戸		
161	44	564	土師器小皿	C16c1	6	170井戸		
161		565	土師器小皿	C16c1	6	170井戸		
161		566	土師器小皿	C16c1	6	170井戸		
161	44	567	瓦器小皿	C16c1	6	170井戸		
161		568	瓦器小皿	C16c1	6	170井戸	畦	
161	44	569	瓦器小皿	C16c1	6	170井戸		
161		600	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161	44	601	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161		602	瓦器椀	C16c1	6	170井戸	畦	
161		603	瓦器椀	C16c1	6	170井戸	畦	
161		604	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161		605	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161	44	606	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161	44	607	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161		608	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		胎138
161	44	609	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161	44	610	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161	44	611	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161		612	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161		613	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		胎128
161		614	瓦器椀	C16c1	6	170井戸	畦	
161	44	615	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
161		616	瓦器椀	C16c1	6	170井戸	畦	
162	44	617	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
162		618	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
162	44	619	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
162		620	瓦器椀	C16c1	6	170井戸		
162		621	土師質羽釜	C16c1	6	170井戸	畦	
162		622	土師質羽釜	C16c1	6	170井戸		胎116
162		623	土師質羽釜	C16c1	6	170井戸		
163	82	624	軒平瓦	C16c1	6	170井戸		
163	82	625	軒平瓦	C16c1	6	170井戸		
164		626	土師器小皿	C15c・d9	6	90井戸		
164	43	627	瓦器椀	C15d9	6	90井戸		
164	43	628	瓦器椀	C15d9	6	90井戸		
164		629	瓦器椀	C15c・d9	6	90井戸		
164		630	瓦器椀	C15c・d9	6	90井戸		

表3　（その2）遺物観察表（7）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器種	地区	遺構面	遺構名	層名	備考
165	45	631	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
165	45	632	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
165		633	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
165	45	634	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
165	45、55	635	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
165		636	瓦器椀	C15e5	6	12B井戸		胎133
166		637	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
166		638	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
166		639	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
166		640	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
166	45	641	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
166	45	642	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
166		643	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
167		644	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		胎139
167		645	瓦器椀	C15e9	6	12B井戸		
167	45	646	土師器脚台付皿	C15e9	6	12B井戸		
167	45、55	647	土師器脚台付皿	C15e9	6	12B井戸		
167	45	648	須恵器こね鉢	C15e9	6	12B井戸		
167	45	649	土師器高台付耳皿	C15e9	6	12B井戸		
167		650	土師器脚台付皿	C15e9	6	12B井戸		
167		651	土師器脚台付皿	C15e9	6	12B井戸		
167		652	土師器脚台付皿	C15e9	6	12B井戸		
167	45	653	土師器脚台付皿	C15e9	6	12B井戸		
167		654	土師質羽釜	C15e9	6	12B井戸		胎117
167		655	土師質羽釜	C16e9	6	12B井戸		
168	50	656	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
168		657	瓦器小皿	C15d7	6	14T井戸		
168	50、55	658	土師器杯	C15d7	6	14T井戸		
168		659	黒色土器A類椀	C15d7	6	14T井戸		
168		660	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
168		661	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
168	50	662	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
168		663	土師質羽釜	C15d7	6	14T井戸		
168		664	砥石	C15d7	6	14T井戸		重さ1139.62ｇ
168		665	砥石	C15d7	6	14T井戸		重さ61.81ｇ
169	46	666	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		667	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		668	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		669	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		670	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		671	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		672	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		673	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		674	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		胎129
169		675	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		676	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		677	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169	46	678	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		679	黒色土器A類椀	C15d7	6	14T井戸		
169		680	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		681	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
169		682	瓦器椀	C15d7	6	14T井戸		
170		683	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		684	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		685	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	686	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		687	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		688	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	689	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	690	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		691	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		692	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	693	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		694	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	695	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		696	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	697	土師器小皿	C15d7	6	14T井戸		
170		698	土師器耳皿？	C15d7	6	14T井戸		
170	46	699	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	700	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		
170		701	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46、55	702	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	703	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		
170		704	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		赤変
170	46	705	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		
170	46	706	土師器大皿	C15d7	6	14T井戸		

表3　（その2）遺物観察表（8）

掲図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
170		707	土師器大皿	C15d7	6	147a井戸		
170		708	土師器大皿	C15d7	6	147a井戸		
170	46	709	土師器大皿	C15d7	6	147a井戸		
170		710	土師器大皿	C15d7	6	147a井戸		
170	46	711	瓦器小皿	C15d7	6	147a井戸		
170		712	瓦器小皿	C15d7	6	147a井戸		
170		713	瓦器小皿	C15d7	6	147a井戸		
170	46	714	瓦器高台付小皿	C15d7	6	147a井戸		
170		715	瓦器高台付小皿	C15d7	6	147a井戸		
170		716	土師器甕	C15d7	6	147a井戸		
170		717	須恵器こね鉢	C15d7	6	147a井戸		
170	53	718	白磁皿	C15d7	6	147a井戸		12c.
170	54	719	白磁碗Ⅳ－2c類	C15d7	6	147a井戸		12c.中国か
170		720	白磁碗Ⅳ類	C15d7	6	147a井戸		12c.前半
177	47	767	瓦器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177		768	瓦器小皿	C15b8	6	465a井戸		一部赤変
177		769	瓦器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177	47	770	瓦器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177	47	771	瓦器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177	47	772	瓦器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177		773	土師器小皿	C15b8東	6	465a井戸		
177		774	土師器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177	47	775	土師器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177		776	土師器小皿	C15b8	6	465a井戸		
177	47	777	土師器大皿	C15b8	6	465a井戸		
177		778	土師器大皿	C15b8	6	465a井戸		
177		779	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177		780	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177		781	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177		782	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177	47	783	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177		784	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177		785	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177		786	瓦器椀	C15b8	6	465a井戸		
177	47	787	瓦質羽釜	C15b8	6	465a井戸		胎121
178		788	土師器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		789	土師器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		790	土師器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		791	土師器小皿	C15b7	6	466a井戸		
178		792	土師器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		793	土師器小皿	C15b7	6	466a井戸		
178		794	土師器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		795	瓦器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		796	瓦器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178	51	797	瓦器小皿	C15b8	6	466a井戸		
178		798	瓦器椀	C15b8	6	466a井戸		
178		799	瓦器椀	C15b7	6	466a井戸		
178	51	800	瓦器椀	C15b8	6	466a井戸		
178		801	瓦器椀	C15b8	6	466a井戸		
178		802	瓦器椀	C15b8	6	466a井戸		
178		803	瓦器椀	C15b8	6	466a井戸		
178		804	須恵器甕	C15b8	6	466a井戸		
178		805	土師質羽釜	C15b8	6	466a井戸		
180		818	土師器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		819	土師器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		820	土師器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		821	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180	50	822	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180	50	823	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		824	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		825	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180	50	826	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		827	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180	50、55	828	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		829	瓦器小皿	C15c4	6	848a井戸		
180		830	緑釉陶器椀？	C15c4	6	848a井戸		
180	54	831	白磁碗Ⅳ－2a類	C15c4	6	848a井戸		13c.前半
180		832	土師器大皿	C15c4	6	848a井戸		
180	50	833	瓦器椀	C15c4	6	848a井戸		
180		834	瓦器椀	C15c4	6	848a井戸		
180		835	瓦器椀	C15c4	6	848a井戸		
181		836	土師器小皿	C15c8	6	214a井戸		
181	43	837	土師器小皿	C15c8	6	214a井戸		
181		838	土師器小皿	C15c8	6	214a井戸		
181		839	土師器小皿	C15c8	6	214a井戸		
181		840	瓦器椀	C15c8	6	214a井戸		

表3　（その2）遺物観察表（9）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
181		841	須恵器こね鉢	C15c8	6	214井戸		
181		842	石鍋	C15c8	6	214井戸		滑石製　底部
181		843	瓦質火舎？	C15c8	6	214井戸		胎125
184		858	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		859	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		860	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		861	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		862	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		863	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		864	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		865	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184	49	866	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		867	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		868	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		869	瓦器椀	C15b7	6	819井戸		
184		870	土師質羽釜	C15b7	6	819井戸		胎104
184	49	871	瓦器高台付小皿	C15b7	6	819井戸		
184	49、55	872	瓦器小皿	C15b7	6	819井戸		
184		873	瓦器小皿	C15b7	6	819井戸		
184		874	土師器不明	C15b7	6	819井戸		
184	52	875	龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2a類	C15b7	6	819井戸		13c.末
184		876	砥石	C15b7	6	819井戸		重さ207.7ｇ
186		880	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		881	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		882	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		883	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186	50	884	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		885	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		886	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		887	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		888	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		889	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		890	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		891	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		892	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		893	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		894	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		895	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		896	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		897	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		898	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		899	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186	50	900	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		外底に糸切り底
186		901	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		902	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		903	土師器小皿	B15j5	6	846井戸		
186		904	黒色土器Ａ類皿	B15j5	6	846井戸		
186		905	土師器大皿	C15j5	6	846井戸		
186		906	黒色土器Ａ類椀	B15j5	6	846井戸		
186		907	瓦器椀	C15c4	6	846井戸		
186		908	瓦器椀	C15j5	6	846井戸		外面赤変？
186		909	土師器大皿	B15j5	6	846井戸		
186		910	黒色土器Ｂ類？椀	B15j5	6	846井戸		
186		911	黒色土器Ａ類椀	C15j5	6	846井戸		
186		912	瓦器椀	C15c4	6	846井戸		胎127
186		913	瓦器椀	C15c4	6	846井戸		胎132
186		914	瓦器椀	B15j5	6	846井戸		
186		915	瓦器椀	B15j5	6	846井戸		
187		916	瓦器椀	C15b4	6	601井戸		
187		917	瓦器椀	C15b4	6	601井戸		
187		918	瓦器椀	C15b4	6	601井戸		胎134
187	49	919	瓦器ミニチュア椀	C15b4	6	601井戸		
187		920	瓦質羽釜	C15b4	6	601井戸		
187		921	土師質羽釜	C15b4	6	601井戸	底	
187		922	瓦質羽釜	C15b4東	6	601井戸		
187		923	常滑甕Ｄ型式	C15b4・7	6	601井戸		
187		924	信楽型こね鉢	C15b4	6	601井戸		
187	83	925	軒平瓦	C15b4	6	601井戸		
187	84	926	鬼瓦	C15b4	6	601井戸		
187	81	927	軒丸瓦	C15b4	6	601井戸		
188	67	930	須恵器糸切底	C15b4	6	1481（601内）井戸		
188		931	土師器小皿	C15b4	6	1481（601内）井戸		
188		932	土師器甕？	C15b4	6	1481（601内）井戸		
188		933	土師器大皿	C15b5	6	938井戸		
189	48	934	瓦器小皿	C15c5	6	938井戸		
189		935	瓦器椀	C15c5	6	938井戸		

表３　（その２）遺物観察表（10）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺構名	層　名	備　考
189		936	瓦器椀	C15e5	6	506井戸		
189		937	瓦器椀	C15d5	6	506井戸		
189		938	土師質羽釜	C15b5	6	506井戸		
189		939	土師質羽釜	C15b5	6	506井戸		
190	49	940	土師器小皿	C15d6	6	504井戸		
190	49	941	土師器小皿	C15d5	6	504井戸		
190		942	瓦器小皿	C15d6	6	504井戸		
190		943	瓦器椀	C15e6	6	504井戸		
190		944	瓦器椀	C15e5	6	504井戸		
190		945	瓦器椀	C15e6	6	504井戸		
190		946	瓦器椀	C15e5	6	504井戸		
190		947	瓦器椀	C15d6	6	504井戸		赤変
190	49	948	瓦器椀	C15d5	6	504井戸		
190		949	瓦器椀	C15e5	6	504井戸		
190		950	瓦器椀	C15d5	6	504井戸		
190	51	951	瓦器椀	C15e5	6	504井戸		
190		952	瓦器椀	C15e5	6	504井戸		
190		953	瓦器椀	C15e・d6	6	504井戸		
190		954	瓦器椀	C15e・d6	6	504井戸		
190		955	瓦器椀	C15d6	6	504井戸		
190		956	瓦器椀	C15d5	6	504井戸		
190		957	瓦器椀	C15e5	6	504井戸		
190		958	土師質羽釜	C15e5	6	504井戸		
190	51	959	軒丸瓦	C15e5	6	504井戸		
190		960	土師質羽釜	C15d5	6	504井戸		
190		961	土師器小皿	C15d5	6	1483井戸		
190	48	962	土師器大皿	C15d6	6	1483井戸		
190		963	土師器大皿	C15d6	6	1483井戸		
190	48	964	瓦器小皿	C15d6	6	1483井戸		
190	48	965	瓦器椀	C15d6	6	1483井戸		
190	49	966	土師器小皿	C15e8	6	441井戸		
190		967	瓦器小皿	C15e8	6	441井戸		
190		968	瓦器小皿	C15e8	6	441井戸		
191		969	瓦質羽釜	C15e5	6	504井戸		
191		970	瓦質鍋	C15e5	6	504井戸		
191		971	須恵器甕	C15e5	6	504井戸		
192		972	瓦器椀	C15d5	6	1458井戸		
192		973	瓦器椀	C15d5	6	1458井戸		
192		974	瓦質羽釜	C15d5	6	1458井戸		
192		975	土師質羽釜	C15d6	6	1458井戸		
193	50	976	瓦器片口鉢	C16c3	6	60土坑		
193	54	977	白磁碗Ⅳ－3類	C16c3	6	60土坑		13c.前半
194	49	978	土師器小皿	C16c3	6	58土坑		
194		979	瓦器椀	C16c3	6	58土坑		
194		980	瓦器椀	C16c3	6	58土坑		
194		981	瓦器椀	C16c3	6	58土坑		
194		982	土師質羽釜	C16c3	6	58土坑		
195		983	刀子	C15e9	6	442土坑		鉄製　重さ14.59ｇ
195		984	土師器小皿	C15e9	6	442土坑		
195	47	985	土師器小皿	C15e9	6	442土坑		
195		986	瓦器椀	C15e9	6	442土坑		
195		987	瓦器椀	C15e9	6	442土坑		
195	47	988	瓦器小皿	C16d2	6	442土坑		
196	48	989	土師器小皿	C15d9	6		124黒褐色シルト	
196		990	瓦器小皿	C15e5	6		549黒褐色シルト	
196		991	土師器大皿	C15e5	6		549黒褐色シルト	
196		992	瓦器椀	C15e5	6		549黒褐色シルト	
196		993	土師器大皿	C15e5	6		614黒褐色シルト	
196		994	瓦器椀	C15e5	6		614黒褐色シルト	
196		995	瓦器椀	C15e5	6		549黒褐色シルト	
196		996	瓦器椀	C15e6	6		549黒褐色シルト	
196	48	997	土師器小皿	C15b6	6	715ピット		
196		998	瓦器椀	C15b6	6	715ピット		
196		999	瓦器椀	C15a5	6	851（内）ピット		
196		1000	土師質羽釜	C15b5	6	851（内）ピット		
197	52	1001	軒丸瓦	C15d6	6	503ピット		
198		1002	黒色土器Ａ類椀	C15e6	6	628ピット		
198		1003	瓦器椀	C16c1	6	229ピット		
198	49	1004	瓦器椀	C16c1	6	229ピット		
198		1005	瓦器椀	C16c1	6	229ピット		
198	50、55	1006	黒色土器Ｂ類？椀	C15a5	6	1344ピット		
198		1007	瓦器椀	C15d8	6	198ピット		
198	50	1008	瓦器椀	C15b3	6	940ピット		
198		1009	瓦器椀	C15b3	6	940ピット		
199		1010	土師器大皿	C16b2	6	262ピット		
199		1011	瓦器椀	C16b2	6	262ピット		

表３　（その２）遺物観察表（11）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺構名	層　名	備　考
199		1012	瓦部鉢	C16b2	6	362ピット		
199	51	1013	瓦部鉢	C16b2	6	362ピット		
199		1014	瓦部鉢	C16b2	6	362ピット		
199		1015	瓦部鉢	C16b2	6	362ピット		
199	51	1016	瓦部鉢	C16b2	6	362ピット		
200		1017	瓦部小皿	C15e4	6	543ピット		
200		1018	瓦部鉢	C15e4	6	543ピット		
200		1019	瓦部鉢	C15e4	6	543ピット		
200		1020	瓦部鉢	C15e4	6	543ピット		
200	49	1021	瓦部鉢	C15e4	6	543ピット		
200		1022	瓦部鉢	C15e4	6	543ピット		
200		1023	瓦部鉢	C15e4	6	543ピット		
201	50	1024	土師器小皿	C15b5	6	1155ピット		
201		1025	土師器小皿	C15b6	6	1162ピット		
201		1026	土師器小皿	C15a5	6	811ピット		
201		1027	土師器大皿	C15a8	6	514ピット		
201		1028	瓦部鉢	C15a4	6	816ピット		
201		1029	土師器椀	C15a8	6	514ピット		
201		1030	瓦部鉢	C15a4	6	816ピット		
201		1031	瓦部鉢	C15e5	6	1164ピット		
201		1032	瓦部鉢	C15b4	6	1470ピット		
201		1033	瓦部鉢	C16e1	6	285ピット		
201		1034	瓦部鉢	C15b6	6	495ピット		
201		1035	瓦部鉢	B15j7	6	1472ピット		
201		1036	瓦質鉢？	C15e9	6	512ピット		
201		1037	瓦部小皿	C15e5	6		550黒褐色シルト	
201		1038	瓦部鉢	C15d10	6	190ピット		
201		1039	瓦部鉢	C15e10	6	329ピット		
201		1040	瓦部鉢	C15e10	6	186ピット		
201		1041	瓦部鉢	C15e10	6	186ピット		
201		1042	瓦部鉢	C15b8	6	336ピット		
201		1043	瓦部鉢	C15b6	6	603ピット		
201		1044	瓦部鉢	C15b5	6	785ピット		
201		1045	瓦部鉢	C15b6	6	789ピット		
201		1046	黒色土器Ｂ類椀	C15b6	6	602ピット		
201		1047	瓦部鉢	C15b6	6	776ピット		
201		1048	瓦部鉢	C15e5	6	506ピット		赤変
201		1049	瓦部鉢	C15e5	6	506ピット		赤変
201		1050	常滑甕	C15a5	6	994ピット		13c.
201		1051	土師質羽釜	B15j7	6	1472ピット		
201		1052	黒色土器	C15d10	6	512ピット		
202		1053	砥石	C15d10	6	190ピット		輝沃岩？　重さ1043.38ｇ
202	85	1054	不明石製品	C15b6	6	1309ピット		輝沃岩　重さ581.54ｇ
203		1055	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1056	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203	56	1057	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1058	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1059	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1060	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1061	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1062	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1063	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1064	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203	56	1065	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1066	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1067	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1068	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1069	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203	56	1070	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1071	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		当具痕
203		1072	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1073	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		胎88
203	56	1074	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1075	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203		1076	須恵器蓋	C15b6	6	460井戸		
203	57	1077	須恵器直口壺	C15b6	6	460井戸		胎97
203		1078	須恵器横瓶	C15b6	6	460井戸		
203	77	1079	須恵器壺	C15b6	6	460井戸		胎150
203		1080	須恵器鉢	C15b6	6	460井戸		胎89
203	76	1081	須恵器高坏	C15b6	6	460井戸		
203	56	1082	須恵器有蓋高坏	C15b6	6	460井戸		胎77
204		1083	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1084	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204	56	1085	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		ヘラ記号
204		1086	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		胎92
204		1087	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		当具痕

表３　（その２）遺物観察表（12）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構図	遺　構　名	層　名	備　考
204		1088	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1089	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1090	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		胎93
204		1091	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		胎96
204	56	1092	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204	56	1093	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1094	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		胎98
204		1095	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1096	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1097	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		
204		1098	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		胎95
204		1099	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		胎86
204	56	1100	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		ヘラ記号　胎78
204	55	1101	須恵器坏	C15b6	6	460井戸		自然釉？
205		1102	須恵器壺	C15b6	6	460井戸		
205		1103	須恵器壺	C15b6	6	460井戸		
205		1104	須恵器甕	C15b6	6	460井戸		
205		1105	須恵器長頸壺台	C15b6	6	460井戸		
205	57	1106	須恵器甕	C15b・c6	6	460井戸		胎119
206		1107	土師器ミニチュア鉢	C15b6	6	460井戸		
206		1108	敲石？不明	C15b6	6	460井戸		外底に木の葉圧痕
206		1109	土師器壺	C15b6	6	460井戸		
206		1110	土師器高坏	C15b6	6	460井戸		
206		1111	土師器高坏	C15b6	6	460井戸		
206		1112	土師器高坏	C15b6	6	460井戸		
206	57	1113	土師器高坏	C15b6	6	460井戸		
206		1114	土師器鉢	C15b6	6	460井戸		
206		1115	土師器鉢	C15b6	6	460井戸		
206		1116	土師器把手付鉢	C15b6	6	460井戸		
206		1117	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206	57	1118	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1119	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1120	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1121	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1122	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1123	土師器甕	C15b6・c6	6	460井戸		"
206		1124	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1125	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
206		1126	土師器壺？	C15b6	6	460井戸		
206		1127	土師器甕	C15b6	6	460井戸		
207		1128	土師器甑	C15b6	6	460井戸		
207		1129	土師器補輪？	C15b6	6	460井戸		
207		1130	土師器甑	C15b6	6	460井戸		
207		1131	土師器補輪？	C15b6	6	460井戸		
209	58	1135	土師器鉢壺	C15b5	6	778井戸		
209	58	1136	土師器鉢壺	C15b5	6	778井戸		
209		1137	土師器甕	C15b5	6	778井戸		
209		1138	土師器壺	C15b5	6	778井戸		
209		1139	須恵器直口壺？	C15b5	6	778井戸		
209	58	1140	須恵器平瓶	C15b5	6	778井戸		
209	58	1141	須恵器壺	C15b5	6	778井戸		
209	58	1142	須恵器横瓶	C15b5	6	778井戸		
210	59	1143	須恵器長脚形器台	B15b1	6	427井戸	上層	胎27
211	59	1144	須恵器脚付有蓋鉢	B15b1	6	427井戸		胎19
211	59	1145	須恵器壺	B15b1	6	427井戸	上層	胎18
211		1146	須恵器壺	B15b1	6	427井戸	下層	
211	76	1147	須恵器横形鏡	B15b1	6	427井戸		胎38
211	59	1148	須恵器横形鏡	B15b1	6	427井戸	上層	胎57
212		1149	須恵器壺	B15b1	6	427井戸		胎42
212	78	1150	須恵器壺	B15b1	6	427井戸		胎112、胎72同一？
213	60	1151	土師器壺	B15b1	6	427井戸		胎122
213		1152	土師器壺	B15b1	6	427井戸		胎94
213	60	1153	土師器壺	B15b1	6	427井戸		胎 5
214	61	1154	土師器甕	B15b1	6	427井戸	下層	
214	61	1155	土師器甕	B15b1	6	427井戸		胎102
214	61	1156	土師器甕	B15b1	6	427井戸	下層	
214	61	1157	土師器甕	B15b1	6	427井戸		胎101
215		1158	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1159	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1160	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1161	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1162	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215	59	1163	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1164	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1165	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		
215		1166	土師器高坏	B15b1	6	427井戸		

表３　（その２）遺物観察表（13）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
215		1167	土師器高坏	B15h1	6	427井戸		
215		1168	土師器高坏	B15h1	6	427井戸		
215		1169	土師器壺	B15h1	6	427井戸		
215		1170	土師器壺	B15h1	6	427井戸		
215		1171	土師器小型丸底壺	B15h1	6	427井戸		
215	60	1172	土師器壺	B15h1	6	427井戸	下層	
215		1173	弥生？壺	B15h1	6	427井戸		胎90
215		1174	土師器壺	B15h1	6	427井戸		
215		1175	土師器壺？	B15h1	6	427井戸		
215		1176	土師器壺？	B15h1	6	427井戸	下層	
216	65	1177	土師器壺	B15j5	6	426井戸		
216	66	1178	土師器直口壺	B15h1・j5	6	426井戸		
216	66	1179	土師器壺	B15h1	6	426井戸		
216		1180	土師器壺	B15h1	6	426井戸		
216		1181	土師器壺	B15h1	6	426井戸		
216		1182	土師器壺	B15h1	6	426井戸		
216		1183	土師器壺	B15h1	6	426井戸		
216		1184	土師器壺	B15h1	6	426井戸		
216		1185	土師器高坏	B15h1	6	426井戸		
217	63	1186	土師器壺	B14i10	6	1299井戸		
217	63	1187	土師器壺	B14i10	6	1299井戸		
217	62	1188	土師器壺？	B14i10	6	1299井戸		
217		1189	土師器直口壺	B14i10	6	1299井戸		
217	63	1190	土師器直口壺	B14i10	6	1299井戸		
217	62	1191	須恵器蓋	B14i10	6	1299井戸		
217	62	1192	須恵器坏	B14i10	6	1299井戸		胎64
217		1193	須恵器坏	B14i10	6	1299井戸		胎75
217	63	1194	須恵器直口壺	B14i10	6	1299井戸		
217	62	1195	須恵器壺	B14i10	6	1299井戸		
217		1196	土師器高坏	B14i10	6	1299井戸		
217	62	1197	土師器壺	B14i10	6	1299井戸		
217		1198	須恵器提瓶	B14i10	6	1299井戸		
217	62	1199	須恵器短頸壺	B14i10	6	1299井戸		
219	66	1210	土師器壺	C15e10	6	70井戸		
219		1211	土師器高坏	C15e10	6	70井戸		
219		1212	土師器高坏	C15e10	6	70井戸		
219		1213	須恵器蓋	C15d9	6		124黒褐色シルト	
219		1214	須恵器坏	C15d9	6		124黒褐色シルト	
219	66	1215	須恵器坏	C15d9	6		124黒褐色シルト	
219		1216	土師器把手	C15d9	6		124黒褐色シルト	
219		1217	須恵器脚台付有蓋鉢？	C15d9	6		124黒褐色シルト	
219		1218	鞴羽口？	C15d9	6		124黒褐色シルト	
219		1219	瓦器椀	C15d8	6	197土坑		
219		1220	土師器高坏	C15d8	6	197土坑		
219		1221	土師器高坏	C15d8	6	197土坑		
219	66	1222	土師器平底鉢	C15d8	6	197土坑		精式系？
220	64	1223	土師器壺	C16f2	6	53土坑		胎100
220	64	1224	土師器壺	C16f2	6	53土坑		胎99
221		1225	土師器壺	C16f2	6	53土坑		
221		1226	土師器壺	C16f2	6	53土坑		胎136
221		1227	土師器壺？	C16f2	6	53土坑		
221		1228	土師器壺	C16f2	6	53土坑		胎120
221		1229	土師器壺	C16f2	6	173土坑		
222		1230	土師器壺	C16d3	6	37土坑		
222		1231	須恵器坏	C16d3	6	37土坑		
222	86	1232	鉄鏃	C15e9	6	12土坑		
222		1233	須恵器高坏	C15e9	6	12土坑		
222		1234	土師器壺	C15e9	6	12土坑		
222		1235	土師器壺	C15e9	6	12土坑		
223		1236	土師器坏または高坏	C15a7	6	486土坑		
223	65	1237	土師器高坏	C15a7	6	486土坑		
223		1238	土師器高坏	C15a7・8	6	486土坑		
223		1239	土師器高坏	C15a7	6	486土坑		
223		1240	土師器高坏	C15a8	6	486土坑		
223		1241	土師器高坏	C16a7	6	486土坑		
223		1242	土師器ミニチュア不明	C15a8	6	486土坑		
223		1243	土師器高坏	C15a7	6	486土坑		
223		1244	土師器高坏	C15a7	6	486土坑		
223		1245	土師器高坏	C15a8	6	486土坑		
223		1246	土師器高坏	C15a7	6	486土坑		
223		1247	土師器直口壺	C15a7・8	6	486土坑		
223		1248	土師器壺	C15a8	6	486土坑		
223		1249	土師器壺	C15a7	6	486土坑		
223		1250	土師器壺	C15a8	6	486土坑		
223	65	1251	土師器壺	C15a6	6	486土坑		
223		1252	土師器不明	C15a8	6	486土坑		

表３　（その２）遺物観察表（14）

掲図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺　構　名	層　名	備　考
223	65	1253	土師器甕	C15a7・8・a8東	6	486土坑		
224	65	1254	土師器甕	C15a8	6	486土坑		
224		1255	土師器甕	C15a7	6	486土坑		
224		1256	土師器壺	C15a7東・a8	6	486土坑		
224		1257	土師器壺？	C15a7・8	6	486土坑		
224		1258	土師器壺	C15a7	6	486土坑		
224		1259	須恵器坏	C15a7	6	486土坑		
224		1260	須恵器鉢	C15a8	6	486土坑		
225	67	1261	土師器甕	C15a8	6	486土坑		
225	67	1262	土師器鉢	C15a8	6	486土坑		
225		1263	土師器甑	C15a8	6	486土坑		
225	76	1264	須恵器横形鉢	C15a8	6	486土坑		胎41
226		1265	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
226		1266	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
226		1267	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
226		1268	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
226		1269	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
226		1270	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
226	78	1271	須恵器台付	C15b6	6	585土坑		胎106
226	78	1272	須恵器台付	C15b6	6	585土坑		胎65
226		1273	須恵器坏	C15b6	6	585土坑		
226		1274	須恵器鉢	C15b6	6	585土坑		
226		1275	須恵器無蓋高坏	C15b6	6	585土坑		胎36
226	76	1276	須恵器無蓋高坏	C15b6	6	585土坑		
227	68	1277	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227	68	1278	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227	68	1279	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1280	土師器坏または高坏	C15b6	6	585土坑		放射状暗文
227	68	1281	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1282	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1283	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1284	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1285	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227	68	1286	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1287	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227	68	1288	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1289	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227	68	1290	土師器鉢	C15b6	6	585土坑		
227		1291	土師器壺	C15b6	6	585土坑		二重口縁壺？
227		1292	土師器壺	C15b6	6	585土坑		
227		1293	土師器高坏	C15b6	6	585土坑		
227		1294	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
227	68	1295	土師器甕	C15b6	6	585土坑		
228	69	1296	土師器直口壺	C15b6	6	858土坑	下層	
228	69	1297	土師器壺	C15b8	6	858土坑		
228		1298	土師器甕	C15b6	6	858土坑		
228		1299	土師器甕	C15b6	6	858土坑		
228	69	1300	土師器甕	C15b6	6	858土坑		
228	69	1301	須恵器蓋？	C15b6	6	858土坑		
228	76	1302	須恵器鉢	C15b6	6	858土坑		胎37
228	77	1303	須恵器無蓋高坏または蓋	C15b6	6	858土坑		胎26
228	77	1304	須恵器壺	C15b6	6	858土坑		
229	77	1305	須恵器蓋	C15b5	6	851土坑		
229	77	1306	須恵器蓋	C15a・b5	6	851土坑		
229		1307	須恵器蓋	C15a5	6	851土坑		
229	70	1308	須恵器坏	C15a5	6	851土坑		
229		1309	須恵器坏	C15b5	6	851土坑		
229	76	1310	須恵器無蓋高坏	C15a5	6	851土坑		胎20
229		1311	須恵器壺	C15a5	6	851土坑		胎39
229		1312	須恵器高坏蓋	C15b5	6	851土坑		
229	70	1313	須恵器高坏蓋	C15a・b5	6	851土坑		
229		1314	土師器不明	C15b5	6	851土坑		
229		1315	土師器坏	C15b5	6	851土坑		
229		1316	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229		1317	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229		1318	土師器高坏	C15a・b5	6	851土坑		
229		1319	土師器高坏	C15a・b5	6	851土坑		
229		1320	土師器高坏	C15a・b5	6	851土坑		
229		1321	土師器高坏	C15a・b5	6	851土坑		
229		1322	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229		1323	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229		1324	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229	70	1325	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229	70	1326	土師器高坏	C15b5	6	851土坑		
229		1327	土師器高坏	C15a5	6	851土坑		
230		1328	土師器壺	C15a・b5	6	851土坑		

表３　（その２）遺物観察表（15）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構面	遺構名	層　名	備　考
230		1329	土師器甕	C15a・b5	6	851土坑		
230		1330	土師器甕？	C15b5	6	851土坑	第６層	鐘式系
230		1331	土師器甕	C15a5	6	851土坑		
231	65	1332	土師器鉢形器台	B15j5	6	1039土坑		
231		1333	土師器甕	B15j5	6	1039土坑		
231		1334	土師器甕	B15j5	6	1039土坑		
231		1335	土師器甕	B15j5	6	1039土坑		
232	70	1336	土師器鉢	B15h2	6	1290土坑		
232	70	1337	土師器杯	B15h2	6	1290土坑		
232	70	1338	土師器杯	B15h2	6	1290土坑		
232		1339	土師器不明	B15h2	6	1290土坑		
232		1340	土師器甕	B15h2	6	1290土坑		
232		1341	土師器甕	B15h2	6	1290土坑		
232		1342	土師器甕	B15h2	6	1290土坑		
232		1343	土師器鉢？	B15h2	6	1290土坑		鐘式系
232		1344	須恵器壺？把手	B15h2	6	1290土坑		生焼け
232		1345	土師器高杯	B15h2	6	1290土坑		
232		1346	土師器高杯	B15h2	6	1290土坑		
232	77	1347	須恵器高杯蓋	B15h2	6	1290土坑		胎68
232	70	1348	須恵器高杯蓋	B15h2	6	1290土坑		
232	70	1349	須恵器高杯蓋	B15h2	6	1290土坑		
232	85	1350	緑色片岩	B15h2	6	1290土坑		重さ1830.25ｇ
233		1351	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233		1352	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233		1353	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233		1354	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233		1355	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233		1356	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233	71	1357	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233	71	1358	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233	72	1359	土師器甕	B14j10・B15j10	6	34土坑		
233		1360	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
233		1361	土師器甕	B14j10・C16e1	6	34土坑		
233		1362	土師器甕	B14j10・B15h1	6	34土坑		
233	72	1363	土師器甕	B14j10	6	34土坑		
234		1364	土師器壺？	B14j10	6	34土坑		須恵器生焼け？
234	71	1365	土師器鉢	B14j10	6	34土坑		
234	72	1366	土師器甕	B14j10	6	34土坑		胎135
234	72	1367	土師器甕	B14j10・C15b6	6	34土坑		
234		1368	土師器直口壺	B14j10	6	34土坑		
234	71	1369	土師器直口壺	B14j10	6	34土坑		
234	71	1370	土師器直口壺	B14j10	6	34土坑		
234	71	1371	土師器直口壺	B14j10	6	34土坑		
235		1372	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1373	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1374	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1375	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1376	土師器高杯	拡張区	6	34土坑		
235	73	1377	土師器高杯	拡張区B14j10	6	34土坑		
235		1378	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1379	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1380	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1381	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1382	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235	72	1383	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1384	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1385	土師器高杯	拡張区	6	34土坑		
235	73	1386	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1387	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235	72	1388	土師器高杯	B14j10	6	34土坑		
235		1389	土師器製塩土器？	B14j10	6	34土坑		
236	73	1390	須恵器壺	B14j10	6	34土坑		
236	85	1391	砥石	B14j10	6	34土坑		穿孔あり　重さ56.93ｇ
236		1392	須恵器杯	B14j10	6	34土坑		
236		1393	須恵器蓋または無蓋高杯	B14j10	6	34土坑		
236		1394	須恵器高杯	B14j10	6	34土坑		
238		1396	須恵器壺	B15h1	6	1291土坑		
238		1397	須恵器杯	B15h1	6	1291土坑		ヘラ記号
239		1398	須恵器台？	C15a6	6	631土坑		
239		1399	土師器甕？	C15a6	6	631土坑		鐘式系
239		1400	土師器高杯	C15a6	6	609土坑		
240		1401	土師器壺	B15h1	6	660土坑		
240		1402	土師器小型丸底壺	B15h1	6	660土坑		
240		1403	土師器壺	B15h1	6	689土坑		
241	70	1404	土師器ミニチュア鉢	C15a8	6	517ピット		
241		1405	土師器甕？	C15b3	6	876ピット		鐘式系

表３　（その２）遺物観察表（16）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器　種	地　区	遺構図	遺構名	層　名	備　考
241	66	1406	土師器壺	C15e8	6	216ピット		
241		1407	土師器甕	B15j6	6	1220ピット		
241		1408	土師器壺	C15a4	6	641ピット		
241		1409	土師器甕	C15a5	6	1056ピット		
241	67	1410	須恵器蓋	C15c5	6		614黒褐色シルト	
241		1411	須恵器坏	B15j4	6	1003ピット		
241		1412	須恵器壺？	B15h1	6	671ピット	第５層（黒）	
241		1413	土師器甕	C15a3	6	1474ピット		
241		1414	土師器甕	C15b5	6	597ピット		
	51	1415	瓦塔小皿	C15a7	6	143溝		
	52	1416	龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5b類	C15c5・6	6		464黒褐色シルト	13c.後半
	74	1417	土師器甕	C15d8	6	462溝		鎌式系
	74	1418	土師器甕	C15b7	6	466井戸		鎌式系
	74	1419	土師器甕	C15b6	6	1258ピット		鎌式系
	74	1420	土師器不明	B15j2			第４層	鎌式系
	74	1421	土師器把手	C15b6	6	460井戸		
	74	1422	土師器把手	C16d3	4	151溝		
	74	1423	土師器把手	B14i10			第３、４層	
	74	1424	土師器把手	C16d3			第５層	
	74	1425	土師器把手	C15d9	6	92溝		
	74	1426	土師器把手		6		精査時出土	
	74	1427	土師器把手	C15d10	6	65溝		
	74	1428	土師器把手	C15d18	6	65（東）溝		
	75	1429	土師器鍋	C16c2	6	66溝		
	75	1430	土師器鍋	B14i10			第３、４層	
	75	1431	土師器鍋	B14i10			第３、４層	
	75	1432	土師器鍋	C15d2			第５層	
	75	1433	土師器鍋	C15d9			第５層	
	75	1434	土師器鍋	C15d9	6	65（東）溝		
	75	1435	土師器鍋	C16c1	6	129井戸		
	75	1436	土師器鍋	C15d8	5	22溝		
	75	1437	土師器鍋	C15d9	6	92溝		
	75	1438	土師器鍋	C16c3	6	36井戸		
	76	1439	須恵器褐形鉢	B15b1	6	427井戸		胎105
	77	1440	須恵器直口壺	C15e6	6	138井戸		
	77	1441	須恵器坏		6		精査時出土	
	77	1442	須恵器坏蓋または脚	C16b1			第５層	
	77	1443	須恵器坏？	C15d9	6	92溝	第５層（黒）	
	77	1444	須恵器甕	B15h1			第５層	
	78	1445	須恵器壺または甕	C15e9	4	11落ち		
	78	1446	須恵器器台	C16e1・2	6	44井戸		
	79	1447	製塩土器	C15e4	6	641ピット		
	79	1448	製塩土器	C15e8	6	486土坑		
	79	1449	製塩土器	C15e8	6	486土坑		
	79	1450	製塩土器	C15e8	6	486土坑		
	79	1451	製塩土器	C15e4			第３層	
	80	1452	擂鉢底	C15c10	3	１粘土取り穴		
	80	1453	擂鉢底	B15j10			第３、４層	
	80	1454	擂鉢底	拡張区			第５層	
	80	1455	擂鉢底	C16c3			第５層	胎35
	80	1456	擂鉢底	B15h1			第３、４層	
	80	1457	擂鉢底	B15h10			第５層	
	80	1458	土錘	C16d1			第４層	
	80	1459	土錘	C15d10	6	65溝		
	80	1460	土錘	C15d9			第５層	
	80	1461	土錘	C15d9			第５層	
	80	1462	土錘	C16d2			第５層	
	80	1463	土錘	C16c3			第５層	
	86	1464	硯	C16c1	6	103ピット	第５層	粘板岩
	87	1465	焼土塊	C15d9	4	2溝	第４層	すさ入り
	87	1466	溶解炉	C15d9	6	92溝		外面ガラス化
	87	1467	焼土塊	C15d9	6	127溝		固く焼けしまっている
	87	1468	鞴羽口	C15c8	6	214井戸		大形　外面ガラス化
	87	1469	鞴羽口	C15e4	6	783ピット		

表4　（その2）木器観察表（1）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器種	地区	面	遺構名	樹種名	備考	木取り	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	その他
171	088	721	刀子	C15d7	6	147井戸	ヤブニッケイ			22.8	2.4	1.3	
171	088	722	刀子柄	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		板目	15.6	2.6	2.3	装着部に繊維質の付着物有
171		723	箸か？	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		征目板	22.0	2.1	0.4	
171	090	724	容器	C15d7	6	147井戸	二葉松等	アカマツ、クロマツ等		（外径）11.5	器高6.0	底部3.4	
171	088	725	不明	C15d7	6	147井戸	針葉樹	劣化激しいため樹種の同定不可		5.5	5.1	4.2	
171		726	曲物底板	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		板目	18.0	4.2	0.7	
171		727	曲物側板	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		板目	（残存）6.8	（残存）1.4	0.3	
171		728	曲物側板	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		板目	（残存）13.3	（残存）1.8	0.3	未製品？
171	088	729	加工木片	C15d7	6	147井戸	ヒノキ			16.3	1.5	1.0	墨書
171	089	730	曲物	C15d7	6	147井戸	ヒノキ			直径24.7	高さ9.8	内側0.3外側0.3	
171		731	曲物底板	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		追征材	（残存）16.3	（残存）6.6	0.6	側面木釘有
171		732	曲物底板	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		本板目材	17.4	（残存）6.6	0.7	
171	089	733	曲物底板	C15d7	6	147井戸	ヒノキ			20.7	18.9	1.0	
171		734	下駄？	C15d7	6	147井戸	ブナ科（クヌギ節；クヌギ、アベマキ等コナラ節：カシワ、ミズナラ、コナラ等			21.0	5.8	2.8	
172	089	735	下駄	C15d7	6	147井戸	ヒノキ			23.4	（残存）3.0	1.9~5.5	
172	089	736	下駄	C15d7	6	147井戸	トチノキ			（残存）20.5	（残存）7.2	1.9	厚み最大3.0cm
172	091	737	木錘	C15d7	6	147井戸	二葉松等	アカマツ、クロマツ等		（残存）8.0	2.8	2.7	
172	088	738	栓？	C15d7	6	147井戸	ツバキ			（残存）5.7	2.7	2.1	
172	088	739	栓？	C15d7	6	147井戸	ツバキ			（残存）4.8	2.9	2.6	
172	091	740	杭	C15d7	6	147井戸	マテバシイ			（残存）14.1	2.8	2.7	
172	093	741	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				83.9	17.7	3.4	
172	093	741	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				81.9	18.6	5.2	
172	093	742	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				82.0	8.6	3.3	
172	092	743	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				85.3	15.6	4.5	
173	092	743	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				84.1	7.6	7.6	
173	90	744	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				82.4	30.8	2.5	
173		745	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				79.7	13.9	3.9	
173		746	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				84.3	14.4	4.0	
173		747	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				83.1	15.0	5.8	
173		748	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸	ヒノキ			84.0	16.0	5.2	
173		749	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				84.8	21.7	3.1	
173		750	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				83.6	18.6	2.7	
173		751	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				84.2	19.0	4.5	
173		752	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				83.6	16.0	3.6	
173		753	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				82.8	12.0	4.0	
174	091	754	建築部材	C15d7	6	147井戸				26.5	7.4	7.8	
174	091	755	不明	C15d7	6	147井戸			板目	（残存）13.4	（残存）5.7	（残存）1.6	
174		756	板材	C15d7	6	147井戸			辺材　板目	5.1	6.0	1.7	
174	091	757	井戸枠　転用柱材？	C15d7	6	147井戸	ヒノキ		心持	41.7	19.1	9.0	
174	091	758	井戸枠を支える木	C15d7	6	147井戸				46.9	16.1	11.0	
174	092	759	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				83.9	16.4	6.0	
174		760	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				84.0	15.5	6.0	
174	090	761	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸	ヒノキ			82.8	15.2	5.1	
174		762	井戸枠　転用板材？	C15d7	6	147井戸				82.7	17.2	2.9	
175	093	763	井戸枠　転用隅木	C15d7	6	147井戸	スギ			378.0	14.0	20.0	
175		764	井戸枠　転用隅木	C15d7	6	147井戸	スギ			294.0	14.2	20.6	
176		765	井戸枠　転用隅木	C15d7	6	147井戸	スギ			318.7	13.4	19.0	
176		766	井戸枠　転用隅木	C15d7	6	147井戸				362.2	13.2	18.8	
178	094	806	板材	C15b8	6	466井戸	モミ			（残存）114.5	（残存）17.5	（残存）2.2	
178	094	807	建築部材　板材	C15b8	6	466井戸	スギ			93.4	8.2	1.3	
178	094	808	建築部材　柱材	C15b8	6	466井戸	スギ			（残存）125.9	（残存）6.9	（残存）10.0	
178	094	809	建築部材　柱材	C15b8	6	466井戸	ヒノキ			（残存）77.7	（残存）10.9	（残存）11.2	
179	099	810	曲物底板？	C15c1	6	848井戸	ヒノキ			（残存）18.2	（残存）9.2	0.8	
179		811	曲物底板	C15c1	6	848井戸	ヒノキ			18.8	（残存）17.5	0.8	
179	095	812	曲物底板	C15b8	6	465井戸	ヒノキ		本柾目板	（残存）24.0	（残存）5.3	0.6	
179		813	曲物底板	C15b8	6	465井戸	ヒノキ		柾目	（残存）17.2	（残存）6.9	0.7	中央に綾刺有
179	095	814	曲物底板	C15b8	6	465井戸	ヒノキ		柾目板	（残存）18.5	（残存）7.0	（残存）6.6	
179	095	815	曲物底板	C15b8	6	465井戸	ヒノキ		板目材	14.2	13.6	0.9	
179	095	816	曲物底板	C15b8	6	465井戸	ヒノキ			19.3	19.6	0.6	
179	095	817	建築部材	C15b8	6	465井戸	ヒノキ			51.7	11.6	11.9	
182	097	844	建築部材　柱材	C15c8	6	214井戸	コウヤマキ			（残存）37.8	（残存）8.9	7.3	
182	097	845	建築部材　板材	C15c8	6	214井戸				（残存）38.6	12.9	4.0	
182	097	846	建築部材　柱材	C15c8	6	214井戸	マツ			（残存）41.9	18.3	8.3	
182	097	847	板材	C15c8	6	214井戸				（残存）19.8	8.6	4.0	
182	097	848	建築部材　加工板材	C15c8	6	214井戸	ヒノキ			20.6	7.0	3.2	
182		849	板材	C15c8	6	214井戸				33.9	18.2	3.6	釘の跡有　廃棄時の加工痕有

表4　（その2）木器観察表（2）

挿図番号	写真図版番号	遺物番号	器種	地区	面	遺構名	樹種名	備考	木取り	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	その他
182		850	板材	C15c8	6	214井戸				30.2	7.8	3.2	
182		851	板材	C15c8	6	214井戸				28.0	9.4	2.5	鉄釘有　廃棄時の折損痕有
182	098	852	建築部材　板材	C15c8	6	214井戸				145.6	17.9	4.0	
183	098	853	建築部材　柱材	C15c8	6	214井戸	ヒノキ			（残存）122.4	（残存）7.2	（残存）3.6	
183	099	854	建築部材　柱材	C15c8	6	214井戸	ヒノキ科	ヒノキ、アスナロ、サワラ等		（残存）106.1	（残存）6.8	9.2	
183	097	855	建築部材？不明	C15c8	6	214井戸	クスノキ			（残存）85.6	（残存）24.8	（残存）2.6	
183	096	856	井戸枠―11　板材	C15c8	6	214井戸	スギ			81.4	9.4	2.3	
183	098	857	不明	C15c8	6	214井戸				58.1	10.7	6.6	
185		877	柱材	C15b6-7	6	819井戸				57.5	6.4	5.8	
185	096	878	板材	C15b7	6	819井戸	スギ			61.4	24.7	2.8	
185	096	879	板材	C15b6-7	6	819井戸	ヒノキ			52.7	21.3	4.4	
187	099	928	刳形木製品	C15b4	6	601井戸	スギ			（残存）61.7	3.1	0.6	
187	099	929	建築部材　板材	C15b4	6	601井戸				（残存）121.3	（残存）7.8	（残存）1.2	
208	099	1132	楊の底板？	C15b6	6	460井戸	ヒノキ		板目	（残存）34.2	（残存）16.2	1.9	穴4カ所有
208	099	1133	栗？もしくは桐材？	C15b6	6	460井戸	クリ			16.2	8.2	3.3	
208	099	1134	蓋巾	C15b6	6	460井戸	スギ			22.2	1.3	0.3	
218	100	1200	刀状木製品	B14i10	6	1299井戸	スギ			52.4	2.1	0.5	
218	100	1201	鍬形木製品	B14i10	6	1299井戸	スギ			23.5	1.3	0.4	
218	100	1202	鍬形木製品	B14i10	6	1299井戸	スギ			21.3	1.1	0.5	
218		1203	蓋巾	B14i10	6	1299井戸	スギ			15.6	1.0	0.3	
218	101	1204	鍬形木製品	B14i10	6	1299井戸				7.2	0.9	0.2	
218	101	1205	不明	B14i10	6	1299井戸	アカガシ亜属	アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等		16.8	3.6	1.2	
218	101	1206	鍬の柄	B14i10	6	1299井戸	ヤマグワ			48.7	2.7	2.7	
218	101	1207	棒状木製品	B14i10	6	1299井戸	ツバキ			62.9	4.0	3.7	結わえた時の縄締質の付着有
218		1208	棒状木製品？	B14i10	6	1299井戸				98.9	18.9	16.2	
218	100	1209	板材	B14i10	6	1299井戸				93.7	21.2	3.2	掘り跡有
237	100	1395	曲形木製品	B14j10	6	34土坑	ヒノキ		追柾	（残存）40.3	（残存）14.5	（残存）2.4	
	080	1470	井戸枠　転用板材	C15d7	6	147井戸				59.0	20.8	5.6	
	094	1471	曲物底板	C15b8	6	466井戸	ヒノキ			18.3	（残存）7.7	0.8	

第5章　自然科学分析

第1節　大和川今池遺跡出土硬質土器の粘土の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻利一

1）はじめに

全国各地の遺跡（前方後円墳、住居址を含む）から出土する初期・古式須恵器の中に相当数の陶邑産の須恵器を含むのに対し、地方窯の製品は在地の遺跡からしか出土しないというのが筆者の胎土分析によるデータである。

それでは畿内の遺跡から出土する初期・古式須恵器の胎土はどうなのか、これももう一つの大きな問題である。はたして、朝鮮半島産の陶質土器や地方窯産の須恵器が出土するのだろうか。

上記、2つの視点から、畿内および全国各地の遺跡から出土する初期・古式須恵器の胎土分析が進められている。

本報告では大和川今池遺跡から出土した初期須恵器はじめ、瓦、瓦質土器、土師器それに、今池遺跡周辺の粘土を分析した結果について報告する。

2）分析結果

はじめに、粘土の分析結果から説明する。今池遺跡を中心にして、大和川沿いに数メートル間隔で10地点（図242）を選び、1地点で数点の粘土試料を採集した。

粘土試料は研究室へ持ち帰り、電気乾燥器で150℃で数時間乾燥したのち、粉砕した。粉末試料は10トンの圧力を加えて固め、錠剤試料を作成して蛍光X線分析を行った。

分析値は表5にまとめられている。全分析値は岩石標準試料JG－1による標準化値で表示されている。標準化値は各元素の含有量を示すので、%やppm濃度表示に変換することはできるが、いちいち変換しなくても、標準化値のままでデータ解析を行っている。しかし、標準化値はもともと含有量を表わすものであるから、図表上にプロットすると、含有量の多少がわかり、全体を比較する上には便利である。そのため、K、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの各測定因子について一次元のグラフを作成し、各地点における粘土中の含有元素量の多少を比較してみることにした。

図243にはK因子を比較してある。K含有量は0.3～0.7の範囲でばらついているが、各地点ごとによりまとまりを示している。K量の少ないのは第3、4、5地点で、逆に、多いのは第1、6地点である。他の地点の粘土はこれらの中間に分布している。

図244にはCa因子を比較してある。Ca量はどの地点でも少ない。実はこれが大阪層群の粘土の特徴の一つである。この中でCa含有量が多いのは第5地点で、少ないのは第1、2、3、6地点である。このように、各地点を比較するとばらつきはあるものの、Ca因子でも各地点ごとにまとまることがわかる。

そうすると、K－Ca分布図を作成すると、粘土は各地点ごとにまとまることが予想される。図245の上段に、K－Ca分布図を示す。もちろん、これらの粘土が須恵器の素材となり得るかどうかはわからない。しかし、粘土は採取地点ごとにまとまることを図245の結果は示している。そして、採取地点がず

れると、主成分元素で表示されるK－Ca分布図でも、分布位置が少しずつずれることがわかる。

図246にはFe因子を比較してある。Feは粘土を構成する主成分元素の中で唯一の有色元素である。図246をみると、Fe因子も粘土採取地点ごとによりまとまりを示している。そして、採取地点ごとにFe含有量も変動していることがわかる。とくに、第5地点では庄内式土師器が出土する粘土層や古墳時代、平安時代に対応する土層の粘土を採取した。しかし、これらの粘土はいずれの因子でもよくまとまって分布しており、同一地点では粘土の化学特性は年代には無関係であることを示している。

第8、9点の粘土のFe含有量がもっとも高く、第1地点の粘土のFe含有量がもっとも少ない。その範囲はJG－1の標準化値にして、1.0から4.5にまでわたる。全国各地の窯跡出土須恵器のFe量もほぼこの範囲でばらつくので、Fe因子は地域差を表し難い元素である。

図247にはRb因子を比較してある。Rb因子も各地点ではよくまとまるが、採取地点が変わると、微妙に変動する。Rb量が少ないのは第3、4地点、多いのは第1、6地点である。

図248にはSr因子を比較してある。Sr因子も他の因子と同様、各地点ごとにまとまり、採取地点が変わると、微妙にずれる。変動の巾は0.4から0.7程度、それ程大きなズレでもない。したがって、Rb－Sr分布図を作成すると、K－Ca分布図での分布同様、各地点ごとにまとまって分布し、全体としては少し広がった分布になることが予想される。粘土のRb－Sr分布図は図245の下段に示す。今池遺跡の粘土群はある程度広がって分布するものの、でたら目な分布をする訳でもないことがわかる。図245の両分布図には陶邑領域を示してあるが、今池遺跡の粘土は陶邑領域には対応しないことがわかる。粘土を高温（1000°C以上）で焼成しても、化学特性には変動が起らないことが実験データで示されているから、この粘土は陶邑産須恵器の素材粘土とは別物であることがわかる。もし、今池遺跡から出土する初期須恵器が粘土と同じ領域に分布すれば、この粘土を素材として、今池遺跡でも初期須恵器を焼成した可能性が出てくる。実証するには窯跡の実在が必要であるのだが。

図249にはNa因子を比較してある。Na因子も各地点ごとにまとまるが、採取地点がずれると、Naの含有量もばらつく。Na量の少ないのは第1～5地点で、多いのは第6～10地点である。

以上にみてきたように、同一採取地点で採取した粘土はどの因子でもよくまとまっており、同一化学特性をもつことがわかる。しかし、採取地点を10メートル、20メートルとずらしていくと、粘土の化学特性も微妙にずれることが示された。勿論、これらの粘土が須恵器の素材となり得るかどうかはわからない。しかし、低温で焼成する軟質土器には使用できる可能性は大いにある。そして、外見上の観察でも、ある地点ではキメの細かい粘土であるにもかかわらず、別の地点では明らかに細かい砂粒が包含されていた。これらのことから、粘土を分析して、須恵器をはじめ、古代土器の産地を推定することは非常に難しいことが予測できる。むしろ、窯跡から出土する須恵器が一定の化学特性をもつことが実証できれば、窯跡に結び付けて、須恵器の産地を推定する方がずっと研究は進め易いのである。

次に、土器の分析結果について説明する。表6には、今池遺跡から出土した土器の分析データを示す。これらのデータを説明するためには、前述したように分析値は含有量を表わすから、分布図を作成するのがもっとも手っ取り早い。含有量の多少が明確に分布図上に表わされるからである。

まず、図250には初期須恵器の両分布図を示す。同時に、この図には陶邑産須恵器が分布する領域を示してある。この領域は定量的な領界を示している訳ではないが、比較対応させる上には大変便利なものである。図250をみると、今池遺跡出土の初期須恵器はほとんどが陶邑領域に対応することがわかる。図245と比較すると、今池遺跡の粘土に対応するものはほとんどないこともわかる。今池遺跡で採集し

た粘土は今池遺跡から出土した初期須恵器の素材粘土ではなかったのである。しかし、興味深いデータが一つある。№169は縄席文土器である。縄席文土器の胎土は明らかに、陶邑産須恵器の胎土とは異質である。最近、縄席文土器の分析データが少しずつ集積されはじめたが、これまでに分析されている数点の縄席文土器の胎土はことごとく、陶邑産の土器ではないことを示した。なお、No.35の須恵器（壺）も陶邑の製品ではない。このように、両分布図でも窯領域に対応させて、須恵器の産地を探ることはできるが、きちんと産地推定をするには判別分析にかけなければならない。

図251には陶邑群、伽耶群間の2群間判別分析の結果を示す。両軸にはそれぞれ、陶邑群、伽耶群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をとってある。この値の計算にはK、Ca、Rb、Srの4因子を使用した。

この結果を5％危険率をかけたホテリングのT^2検定にかけると、陶邑群の領域はD^2（陶邑）≦10であり、伽耶群の領域はD^2（伽耶）≦10となる。図251をみると、今池遺跡出土初期須恵器のほとんどはD^2（陶邑）≦10という陶邑群への帰属条件を満足し、陶邑産の製品といえることがわかる。しかし、多くの資料はD^2（伽耶）≦10という伽耶群への帰属条件をも満足することがわかる。つまり、陶邑領域と伽耶領域が重複する領域があるのである。しかし、理想境界線を挟んで上側の陶邑領域では伽耶産と誤判別される確率が少ないことがわかっており、今池遺跡の大部分の初期須恵器は陶邑産の須恵器と推定される。これに対して、理想境界線の下側で、D^2（陶邑）＞5の領域では伽耶産の陶質土器が混ざる確率は大きくなる。この領域に10点ほどの資料が分布しているが、この中に伽耶産陶質土器が含まれている可能性がある。表6では伽耶（？）としておいた。№11、12、17、19、21、53、72、112、114、115の10点である。また、理想境界線付近にあるものは陶邑（？）としておいた。恐らく、この中の大部分の資料は陶邑産とみられる。

縄席文土器と№35の須恵器はK－Ca，Rb－Srの両分布図でも陶邑領域をずれたが、図251の判別分析図でも不明領域［D^2（伽耶）＞10、D^2（陶邑）＞10］に分布し、非陶邑産であることを示している。

図252には初期須恵器ではない須恵器の両分布図を示す。この図にも陶邑領域を示してあるが、ほとんどの資料は陶邑領域に分布することがわかる。従って、一応、これらの須恵器も陶邑産の須恵器と推定される。そこで、これらの須恵器の2群間判別図を図253に示す。大部分のものは陶邑産の須恵器であることがわかる。伽耶産と誤判別される確率が高い領域に2点の資料が分布している。№92、97の2点である。そして№106の窯台は不明領域に分布し、非陶邑産の須恵器と判断された。なお、№96も非陶邑産とした。この結果、初期須恵器、須恵器とも大部分のものが陶邑産の須恵器と考えられ、今池遺跡で採取した粘土を素材とした須恵器はほとんど検出できなかった。したがって、須恵器の胎土からみる限り、今池遺跡に初期須恵器の窯跡が存在する可能性は小さいと思われる。

図254には瓦の両分布図を示す。比較対照のため、須恵器の陶邑領域を描いておいた。そうすると、大部分の瓦も陶邑領域にほぼ対応することがわかる。しかし、図250の初期須恵器、図252の須恵器の両分布図での分布位置と比較すると、少しずれて分布しており、これらの須恵器とは別胎土であることがわかる。それでも胎土は類似しており、陶邑的胎土であることには相違ない。瓦について注目すべき点は大部分のものが両分布図に集中して分布する点である。これらは全く同じ胎土であり、同一窯で製作された瓦である可能性が高い。

図255には瓦質土器と羽釜の両分布図を示す。瓦質土器、5点もまとまって陶邑領域に分布しており、1ヶ所で製作された可能性が高い。これに対して、羽釜の胎土は少し異なる。Rb－Sr分布図では2点

の羽釜は少し離れて分布しているが、K－Ca分布図では並んで分布しており、同じ地域内の粘土を素材とした可能性もある。図255と図245を比較すると、両者の分布位置が類似するところから、瓦質土器と羽釜は今池遺跡の粘土を素材とした可能性が十分考えられる。

最後に、図256には土師器の両分布図を示す。須恵器、瓦、瓦質土器に比べて、大きくばらついて分布しており、集中度が悪い点が特徴である。しかし、図245の今池遺跡で採取した粘土の分布を比較すると、No.5，91，99の3点を除く他の土師器は粘土の分布と重なっており、土師器も今池遺跡の粘土を素材として製作したという推定も成り立つ。その中でとくに、K－Ca分布図で大きく離れて分布するNo.5、91、99の3点は他の土師器胎土とは異なる。これら3点は別の地域で作られたものである可能性が高い。No.99とNo.152は外見上から、韓式系土器とみられるものであるが、これら2点の胎土は別物である。No.152は他の土師器と一緒に分布しているのに対し、No.99はNo.91、No.5とともに、他の土師器群から離れて分布し、韓式系土器でも、胎土、したがって、素材粘土は別物であり、別の場所で作られた韓式系であることがわかる。なお、韓式系土器が胎土からみて、朝鮮半島産であると判断する根拠は目下のところない。窯跡が見つかっていないので、判断をするのが難しい状況にある。しかし、もし、No.99が本物の韓式系土器とすると、No.152は今池遺跡の粘土を使って、形だけを真似て作った倭製韓式系土器ということになる。

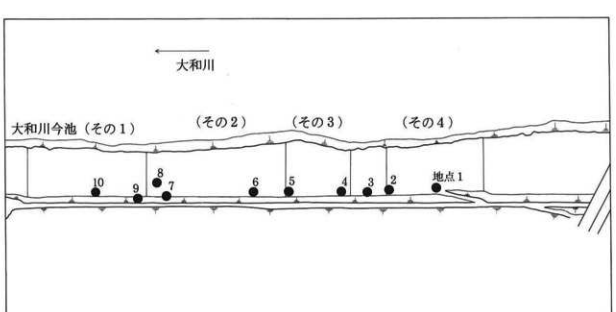


図242　分析試料（粘土）採取位置模式図

表5　大和川今池遺跡出土粘土の分析データ

試料No.			採取地点	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	11	2282	1	0.707	0.180	1.190	0.698	0.468	0.346
2		2283	1	0.648	0.208	1.580	0.665	0.468	0.278
3	11	2284	2	0.603	0.157	1.830	0.642	0.409	0.235
4		2285	2	0.615	0.177	1.870	0.638	0.438	0.226
5		2286	2	0.560	0.180	2.350	0.569	0.404	0.202
6	11	2287	3	0.377	0.216	1.880	0.391	0.492	0.296
7		2288	3	0.358	0.218	1.780	0.373	0.513	0.271
8	11	2289	4	0.395	0.254	2.430	0.426	0.448	0.277
9		2290	4	0.406	0.252	2.170	0.431	0.478	0.287
10		2291	4	0.310	0.285	2.330	0.392	0.567	0.240
11	11	2292	5	0.321	0.383	1.930	0.472	0.578	0.167
12		2293	5	0.338	0.383	2.000	0.484	0.565	0.188
13		2294	5	0.422	0.304	1.980	0.559	0.533	0.235
14		2295	5	0.406	0.364	1.930	0.536	0.773	0.193
15		2296	5	0.404	0.318	1.530	0.546	0.554	0.237
16		2297	5	0.357	0.387	1.600	0.501	0.767	0.195
17	11	2298	6	0.663	0.212	1.550	0.750	0.465	0.355
18		2299	6	0.690	0.235	1.790	0.631	0.523	0.520
19		2300	6	0.639	0.212	1.460	0.742	0.495	0.379
20		2301	6	0.665	0.198	1.630	0.777	0.422	0.325
21		2302	6	0.648	0.210	1.540	0.762	0.470	0.354
22		2303	6	0.676	0.218	1.650	0.656	0.508	0.485
23		2304	6	0.649	0.209	1.680	0.719	0.484	0.369
24		2305	6	0.686	0.234	1.550	0.644	0.552	0.535
25	11	2306	7	0.603	0.290	1.850	0.555	0.655	0.527
26		2307	7	0.635	0.259	1.350	0.609	0.640	0.547
27	11	2308	8	0.527	0.296	3.080	0.528	0.489	0.342
28		2309	8	0.527	0.300	3.610	0.497	0.497	0.343
29	11	2310	9	0.551	0.254	4.280	0.442	0.459	0.382
30		2311	9	0.558	0.256	3.330	0.507	0.478	0.439
31	11	2312	10	0.519	0.291	2.730	0.568	0.522	0.339
32		2313	10	0.528	0.275	2.330	0.594	0.544	0.334
33		2314	10	0.531	0.285	2.130	0.583	0.529	0.351
34		2315	10	0.531	0.279	2.280	0.561	0.562	0.380
35		2316	10	0.487	0.305	2.420	0.485	0.580	0.398
36		2317	10	0.489	0.327	2.250	0.472	0.671	0.516
37		2318	10	0.446	0.289	2.340	0.460	0.564	0.378

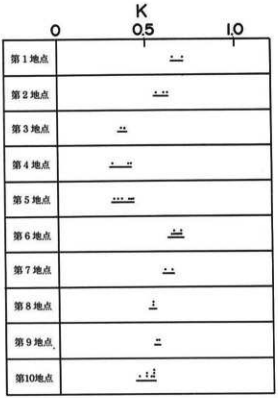


図243　粘土のK因子の変動

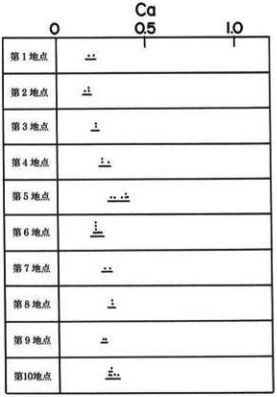


図244　粘土のＣａ因子の変動

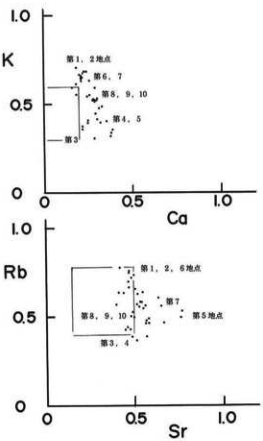


図245　粘土の両分布図

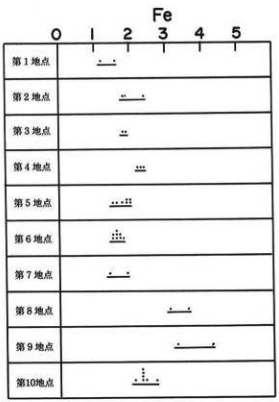


図246　粘土のＦｅ因子の変動

図247　粘土のＲｂ因子の変動

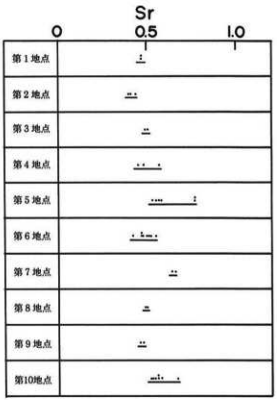


図248　粘土のＳｒ因子の変動

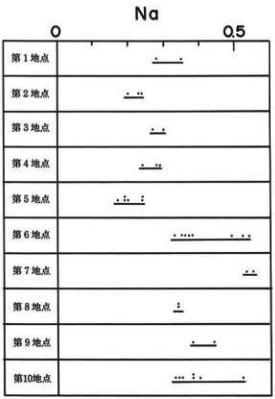


図249　粘土のＮａ因子の変動

表 6　大和川今池遺跡出土遺物の分析データ（1）

試料No.				K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D² (陶邑)	D² (伽耶)	推定産地
1	11	2319	初期須恵器	0.367	0.070	2.890	0.449	0.213	0.274	2.60	31.30	陶邑
2		2320	初期須恵器	0.499	0.098	3.370	0.567	0.269	0.310	2.90	7.50	陶邑
3		2321	初期須恵器	0.467	0.085	3.150	0.523	0.269	0.270	1.50	9.40	陶邑
4		2322	初期須恵器	0.465	0.128	3.010	0.507	0.311	0.345	1.70	8.80	陶邑
5		2323	土師器	0.412	0.697	2.500	0.325	0.744	0.333			
6		2324	須恵器	0.501	0.177	2.690	0.594	0.348	0.235	4.90	4.70	陶邑（?）
7		2325	初期須恵器	0.508	0.195	2.210	0.589	0.393	0.325	4.40	3.40	陶邑
8		2326	初期須恵器	0.558	0.061	2.640	0.640	0.239	0.253	9.60	8.20	陶邑
9		2327	初期須恵器	0.477	0.149	2.110	0.705	0.351	0.219	3.00	9.30	陶邑
10		2328	初期須恵器	0.420	0.137	2.090	0.688	0.330	0.169	5.10	18.30	陶邑
11		2329	初期須恵器	0.528	0.221	2.160	0.613	0.424	0.341	6.90	2.40	伽耶（?）
12		2330	初期須恵器	0.526	0.227	2.090	0.609	0.435	0.346	7.10	2.50	伽耶
13		2331	初期須恵器	0.559	0.064	2.550	0.648	0.236	0.240	9.90	8.10	陶邑（?）
14		2332	初期須恵器	0.466	0.134	2.510	0.565	0.318	0.356	1.00	6.60	陶邑（?）
15		2333	初期須恵器	0.472	0.134	2.520	0.570	0.321	0.379	1.00	6.00	陶邑
16		2334	初期須恵器	0.545	0.179	2.030	0.650	0.426	0.371	1.90	0.65	陶邑（?）
17		2335	初期須恵器	0.535	0.230	2.130	0.603	0.428	0.353	8.60	3.00	伽耶（?）
18		2336	初期須恵器	0.516	0.129	2.460	0.586	0.341	0.368	1.40	3.60	陶邑（?）
19		2337	初期須恵器	0.554	0.238	1.920	0.621	0.483	0.453	6.40	0.94	伽耶（?）
20		2338	初期須恵器	0.470	0.071	1.730	0.554	0.311	0.124	2.10	7.10	陶邑
21		2339	初期須恵器	0.535	0.226	2.200	0.607	0.423	0.352	8.20	2.90	伽耶（?）
22		2340	初期須恵器	0.567	0.081	2.560	0.665	0.291	0.262	7.00	5.60	陶邑（?）
23		2341	初期須恵器	0.496	0.217	1.980	0.572	0.400	0.300	7.80	3.50	陶邑（?）
24		2342	初期須恵器	0.473	0.133	2.490	0.572	0.330	0.377	0.60	5.50	陶邑
25		2343	初期須恵器	0.442	0.137	2.030	0.668	0.337	0.207	2.70	12.20	陶邑
26		2344	初期須恵器	0.540	0.094	2.750	0.638	0.290	0.274	4.20	4.80	陶邑
27		2345	初期須恵器	0.516	0.098	2.520	0.621	0.295	0.275	3.10	4.80	陶邑
28		2346	初期須恵器	0.530	0.141	3.100	0.499	0.374	0.308	3.40	7.00	陶邑
29		2347	初期須恵器	0.497	0.097	3.370	0.575	0.272	0.324	2.40	7.00	陶邑
30		2348	須恵器	0.541	0.174	2.290	0.581	0.441	0.402	2.00	1.20	陶邑（?）
31		2349	初期須恵器	0.573	0.064	2.610	0.643	0.241	0.246	11.50	8.80	陶邑（?）
32		2350	初期須恵器	0.550	0.069	2.550	0.641	0.239	0.231	8.70	8.10	陶邑
33		2351	初期須恵器	0.486	0.133	1.850	0.637	0.419	0.340	2.00	5.50	陶邑
34		2352	初期須恵器	0.513	0.188	2.390	0.588	0.393	0.433	3.60	2.90	陶邑（?）
35	11	2353	初期須恵器	0.349	0.448	2.810	0.502	0.561	0.255	100.00	62.70	非陶邑
36		2354	初期須恵器	0.367	0.086	2.420	0.462	0.188	0.120	4.50	24.40	陶邑
37		2355	初期須恵器	0.517	0.140	2.120	0.640	0.331	0.313	2.30	3.20	陶邑
38		2356	初期須恵器	0.364	0.032	2.390	0.381	0.146	0.099	8.90	41.00	陶邑
39		2357	初期須恵器	0.525	0.137	3.220	0.542	0.324	0.309	4.20	7.00	陶邑
40		2358	初期須恵器	0.508	0.181	2.420	0.582	0.392	0.439	2.70	2.90	陶邑（?）
41		2359	初期須恵器	0.534	0.137	2.860	0.579	0.368	0.361	1.90	3.10	陶邑（?）
42		2360	初期須恵器	0.518	0.188	2.190	0.625	0.409	0.312	2.70	1.80	陶邑（?）
43		2361	初期須恵器	0.382	0.162	3.510	0.395	0.312	0.169	8.70	22.40	陶邑（?）
44		2362	初期須恵器	0.507	0.149	1.820	0.699	0.463	0.255	4.00	8.70	陶邑
45		2363	初期須恵器	0.443	0.139	2.280	0.557	0.340	0.325	0.89	7.50	陶邑
46		2364	初期須恵器	0.463	0.131	3.070	0.509	0.301	0.342	2.30	9.60	陶邑
47		2365	軒丸瓦	0.605	0.128	2.220	0.618	0.429	0.350			
48		2366	軒丸瓦	0.622	0.146	2.780	0.572	0.531	0.300			
49		2367	軒平瓦	0.697	0.124	2.050	0.625	0.463	0.333			
50		2368	軒平瓦	0.619	0.141	2.420	0.583	0.443	0.297			
51		2369	軒丸瓦	0.589	0.116	1.760	0.587	0.339	0.289			
52		2370	軒平瓦	0.610	0.148	2.320	0.609	0.434	0.289			
53		2371	初期須恵器	0.546	0.238	1.990	0.623	0.492	0.425	6.30	1.00	伽耶（?）
54		2372	初期須恵器	0.502	0.185	2.420	0.575	0.388	0.417	3.30	3.60	陶邑（?）
55		2373	初期須恵器	0.472	0.101	2.100	0.622	0.299	0.262	0.50	6.90	陶邑
56		2374	初期須恵器	0.475	0.121	1.750	0.581	0.352	0.364	0.10	4.70	陶邑
57		2375	初期須恵器	0.548	0.082	2.610	0.663	0.285	0.269	5.30	5.30	
58		2376	初期須恵器	0.489	0.126	1.720	0.602	0.345	0.351	0.16	4.10	陶邑
59		2377	初期須恵器	0.447	0.175	2.830	0.490	0.402	0.167	3.50	7.10	陶邑
60		2378	初期須恵器	0.498	0.077	2.190	0.613	0.262	0.273	2.50	7.00	陶邑
61		2379	初期須恵器	0.367	0.041	2.870	0.461	0.169	0.095	2.90	23.30	陶邑
62		2380	初期須恵器	0.350	0.042	2.860	0.481	0.190	0.068	3.00	23.30	陶邑
63		2381	初期須恵器	0.479	0.101	2.140	0.612	0.285	0.238	0.96	6.60	陶邑
64		2382	初期須恵器	0.493	0.150	3.160	0.618	0.304	0.159	4.50	5.70	陶邑（?）
65		2383	初期須恵器（?）	0.500	0.163	2.110	0.654	0.383	0.196	1.40	3.60	陶邑
66		2384	初期須恵器	0.501	0.113	2.310	0.612	0.329	0.300	0.78	4.30	陶邑
67		2385	初期須恵器	0.482	0.110	2.220	0.619	0.333	0.289	0.20	5.20	陶邑
68		2386	初期須恵器	0.432	0.080	2.550	0.496	0.268	0.332	1.00	11.40	陶邑
69	11	2387	初期須恵器	0.574	0.125	2.110	0.766	0.357	0.315	5.30	4.90	陶邑（?）
70		2388	初期須恵器	0.539	0.148	2.080	0.639	0.384	0.309	0.46	3.40	陶邑
71		2389	初期須恵器	0.489	0.112	2.770	0.654	0.288	0.229	2.20	6.70	陶邑
72		2390	初期須恵器	0.546	0.197	2.220	0.619	0.402	0.340	5.30	1.70	伽耶（?）
73		2391	須恵器	0.464	0.139	2.320	0.690	0.340	0.183	2.50	10.30	陶邑
74		2392	初期須恵器	0.516	0.109	2.100	0.657	0.300	0.289	2.40	4.50	陶邑
75		2393	須恵器	0.454	0.050	2.510	0.574	0.271	0.215	2.50	9.80	陶邑
76		2394	土師器	0.362	0.296	2.470	0.508	0.553	0.255			
77		2395	須恵器	0.530	0.122	1.880	0.627	0.351	0.304	1.40	2.70	陶邑（?）
78		2396	須恵器	0.490	0.177	2.650	0.690	0.383	0.238	4.00	7.70	陶邑（?）
79		2397	須恵器	0.542	0.179	1.860	0.629	0.449	0.414	1.50	0.58	陶邑（?）
80		2398	初期須恵器	0.492	0.080	1.730	0.569	0.312	0.137	1.80	6.00	陶邑
81		2399	初期須恵器	0.538	0.106	2.130	0.671	0.301	0.317	3.00	4.30	陶邑（?）
82		2400	初期須恵器	0.534	0.148	2.360	0.667	0.352	0.290	2.60	2.38	陶邑
83		2401	初期須恵器	0.516	0.101	2.080	0.656	0.301	0.295	2.10	4.80	陶邑
84		2402	須恵器	0.515	0.053	2.240	0.671	0.250	0.162	5.10	8.50	陶邑
85		2403	初期須恵器	0.369	0.082	2.480	0.516	0.282	0.244	3.00	16.90	陶邑

表6　大和川今池遺跡出土遺物の分析データ（2）

試料No.				K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D¹（陶邑）	D²（伽耶）	推定産地
86	2404	須恵器		0.460	0.133	2.150	0.588	0.339	0.186	0.37	6.10	陶邑
87	2405	陶器		0.438	0.115	1.560	0.479	0.378	0.378			
88	2406	須恵器		0.480	0.137	2.210	0.550	0.353	0.233	0.56	4.70	陶邑
89	2407	須恵器		0.507	0.068	2.420	0.558	0.297	0.211	3.60	7.20	陶邑
90	2408	弥生？		0.574	0.417	1.750	0.576	0.421	0.256			
91	2409	土師器		0.450	0.843	1.810	0.178	0.986	0.268			
92	2410	須恵器		0.524	0.204	2.500	0.644	0.396	0.247	6.00	2.40	伽耶（？）
93	2411	須恵器		0.478	0.146	1.930	0.691	0.368	0.189	2.00	8.30	陶邑
94	2412	土師器		0.635	0.399	1.440	0.522	0.631	0.403			
95	2413	須恵器		0.470	0.099	2.280	0.672	0.271	0.143	2.30	9.50	陶邑
96	2414	須恵器		0.378	0.213	3.360	0.416	0.664	0.131			非陶邑
97	2415	須恵器		0.565	0.151	2.700	0.617	0.342	0.391	6.10	3.60	伽耶（？）
98	2416	須恵器		0.476	0.102	2.250	0.633	0.286	0.332	1.10	7.10	陶邑
99	2417	韓式系土師器		0.523	0.903	1.880	0.218	0.943	0.343			
100	2418	土師器		0.514	0.179	1.250	0.547	0.464	0.335			
101	2419	土師器		0.497	0.360	1.460	0.440	0.711	0.392			
102	2420	土師器		0.490	0.158	1.400	0.605	0.356	0.351			
103	11 2421	瓦質土器		0.540	0.251	2.460	0.673	0.450	0.158			
104	2422	土師器		0.537	0.215	2.070	0.490	0.583	0.431			
105	2423	初期須恵器		0.286	0.032	2.380	0.415	0.140	0.107	6.80	37.30	陶邑
106	2424	須恵器		0.546	0.478	1.970	0.619	0.769	0.303	61.60	24.60	非陶邑
107	2425	初期須恵器		0.485	0.119	2.650	0.585	0.303	0.269			
108	2426	初期須恵器		0.431	0.104	2.590	0.439	0.369	0.211	5.00	8.80	陶邑
109	2427	初期須恵器		0.454	0.149	2.600	0.518	0.344	0.286	1.70	7.50	陶邑
110	2428	軒平瓦		0.609	0.117	2.020	0.618	0.449	0.402			
111	2429	軒平瓦		0.565	0.112	2.220	0.597	0.381	0.360			
112	2430	初期須恵器		0.555	0.198	2.220	0.631	0.398	0.346	6.20	1.60	伽耶（？）
113	2431	初期須恵器		0.372	0.063	2.100	0.519	0.191	0.153	2.50	20.90	陶邑
114	2432	初期須恵器		0.609	0.236	3.320	0.633	0.448	0.351	12.60	4.00	伽耶（？）
115	2433	初期須恵器		0.535	0.192	2.190	0.632	0.408	0.317	3.60	1.30	伽耶（？）
116	2434	羽釜		0.397	0.291	2.110	0.349	0.615	0.252			
117	2435	羽釜		0.435	0.267	1.990	0.459	0.916	0.365			
118	2436	瓦質土器		0.372	0.123	2.490	0.534	0.342	0.151			
119	2437	須恵器		0.453	0.141	3.540	0.645	0.326	0.099			
120	2438	土師器		0.469	0.137	1.220	0.668	0.360	0.124			
121	2439	瓦質土器		0.436	0.151	2.510	0.413	0.462	0.346			
122	2440	土師器		0.712	0.275	2.500	0.708	0.537	0.165			
123	2441	庄内甕		0.086	1.930	3.360	0.043	0.901	0.153			
124	2442	庄内甕		0.056	1.910	3.030	0.049	1.080	0.149			
125	2443	瓦質土器		0.520	0.192	2.330	0.529	0.372	0.097			
126	2444	瓦質土器		0.543	0.186	1.930	0.629	0.379	0.156			
127	2445	瓦器	椀	0.525	0.157	2.230	0.579	0.453	0.364			
128	2446	瓦器	椀	0.422	0.114	2.050	0.566	0.311	0.149			
129	2447	瓦器	椀	0.432	0.107	2.730	0.514	0.354	0.082			
130	2448	土師器	甕	0.441	0.126	3.520	0.381	0.306	0.239			
131	2449	雪舟		0.436	0.126	1.540	0.485	0.323	0.167			
132	2450	瓦器	椀	0.481	0.327	3.000	0.586	0.826	0.242			
133	2451	瓦器	椀	0.514	0.136	2.150	0.561	0.361	0.289			
134	2452	瓦器	椀	0.473	0.276	2.110	0.546	0.572	0.289			
135	2453	土師器	甕	0.518	0.287	1.060	0.538	0.666	0.372			
136	2454	土師器	甕	0.336	0.238	1.620	0.351	0.575	0.330			
137	11 2455	軒平瓦		0.562	0.109	2.060	0.616	0.398	0.301			
138	2456	瓦器	椀	0.419	0.122	2.690	0.416	0.411	0.364			
139	2457	瓦器	椀	0.507	0.232	1.460	0.567	0.933	0.271			
140	2458	軒平瓦		0.618	0.133	2.110	0.633	0.455	0.441			
141	2459	軒平瓦		0.604	0.134	2.240	0.610	0.431	0.309			
142	2460	軒丸瓦		0.570	0.143	2.290	0.586	0.427	0.294			
143	2461	軒丸瓦		0.784	0.119	1.780	0.635	0.434	0.273			
144	2462	軒丸瓦		0.603	0.120	2.110	0.603	0.426	0.314			
145	2463	軒丸瓦		0.594	0.105	2.240	0.621	0.437	0.356			
146	2464	軒丸瓦		0.629	0.132	2.310	0.620	0.428	0.314			
147	2465	土師器		0.542	0.141	2.240	0.535	0.535	0.508			
148	2466	土師器		0.473	0.326	1.400	0.548	0.579	0.384			
149	2467	土師器		0.648	0.184	2.050	0.526	0.425	0.357			
150	2468	須恵器		0.617	0.095	1.390	0.735	0.364	0.332	9.70	6.80	陶邑（？）
151	2469	須恵器		0.512	0.145	2.460	0.660	0.346	0.215	1.80	3.40	陶邑
152	2470	韓式系土器		0.570	0.341	2.450	0.518	0.547	0.366			
153	2471	軒丸瓦		0.608	0.101	1.990	0.457	0.339	0.257			
154	2472	軒丸瓦		0.545	0.117	1.750	0.584	0.335	0.123			
155	2473	軒丸瓦		0.553	0.041	2.770	0.493	0.208	0.097			
156	2474	軒丸瓦		0.456	0.077	1.910	0.484	0.208	0.061			
157	2475	軒丸瓦		0.560	0.143	2.830	0.497	0.348	0.263			
158	2476	軒丸瓦		0.687	0.119	2.360	0.564	0.397	0.272			
159	2477	軒瓦		0.398	0.064	2.500	0.368	0.237	0.102			
160	2478	軒平瓦		0.555	0.123	1.300	0.460	0.426	0.208			
161	2479	軒平瓦		0.596	0.136	2.670	0.525	0.417	0.305			
162	2480	軒平瓦		0.586	0.119	2.060	0.584	0.432	0.395			
163	2481	軒平瓦		0.606	0.159	2.070	0.501	0.422	0.354			
164	2482	軒平瓦		0.593	0.111	2.050	0.606	0.435	0.351			
165	2483	軒平瓦		0.560	0.119	2.010	0.591	0.445	0.394			
166	2484	軒平瓦		0.590	0.116	2.080	0.592	0.432	0.346			
167	2485	軒丸瓦		0.592	0.116	2.030	0.598	0.440	0.338			
168	2486	軒丸瓦		0.610	0.118	2.050	0.604	0.415	0.314			
169	2487	須恵器	鐘摩文	0.422	0.416	3.640	0.429	0.538	0.168	74.10	46.50	非陶邑

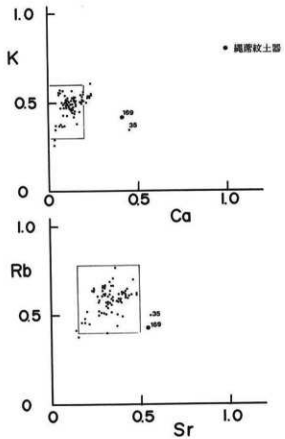


図250　初期須恵器の両分布図

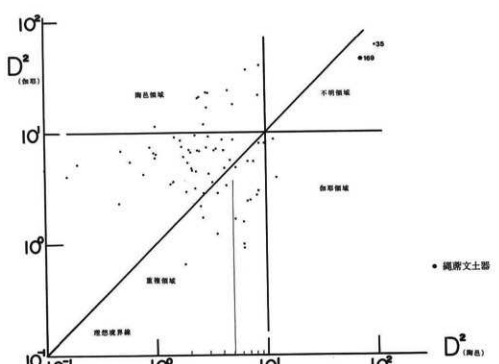


図251　大和川今池遺跡出土初期須恵器の産地推定

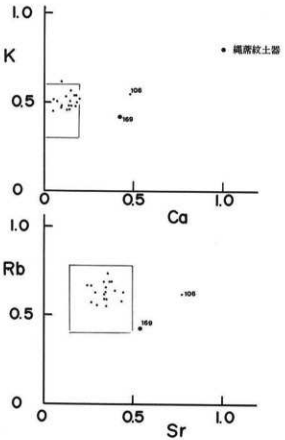


図252　須恵器の両分布図

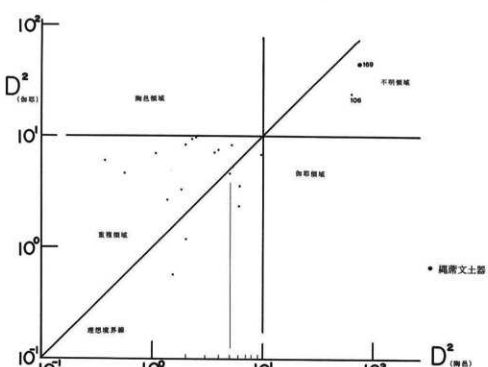


図253　大和川今池遺跡出土須恵器の産地推定

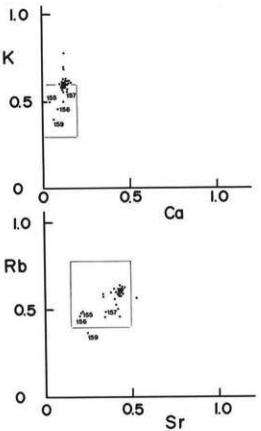


図254　瓦の両分布図

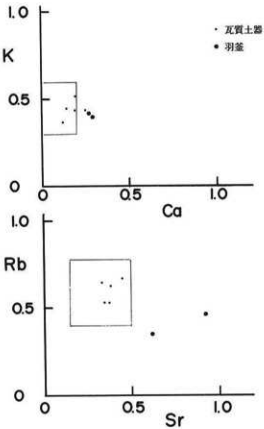


図255　瓦質土器と羽釜の両分布図

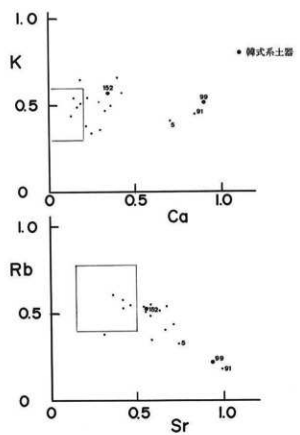


図256　土師器の両分布図

表７　大和川今池遺跡出土遺物胎土分析試料一覧（１）

試料番号	調査年度	報告書遺物番号	器種	部分	地区	遺構面	遺構名	層名	備考	推定産地
1	（その１）	138	無蓋高坏	体部	C17j２			第４層	初期須恵器	陶邑
2	（その１）	28	坏	口縁	C16e４			第２層	初期須恵器	陶邑
3	（その１）	139	高坏蓋	口縁	C16f６			第４層	初期須恵器	陶邑
4	（その１）	170	壺	頸部	C16e８	第５面	17土坑		初期須恵器	陶邑
5	（その２）	1153	二重口縁壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		土師器	
6	（その２）	無	壺	体部	B14ｊ10	第６面	34土坑		須恵器	陶邑（？）
7	（その２）	無	壺	頸部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
8	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ２	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
9	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
10	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
11	（その２）	無	壺	頸部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
12	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
13	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
14	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
15	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
16	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
17	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
18	（その２）	1145	壺		B15ｂ１	第６面	427井戸	上層	初期須恵器	陶邑（？）
19	（その２）	1144	脚付有蓋坏		B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
20	（その２）	1310	無蓋高坏	体部	C15ａ５	第６面	851土坑		初期須恵器	陶邑
21	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
22	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
23	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
24	（その２）	無	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
25	（その２）	無	壺	頸部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
26	（その２）	1303	無蓋高坏か蓋		C15ｂ６	第６面	858土坑		初期須恵器	陶邑
27	（その２）	1143	無形器台	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
28	（その１）	無	壺	体部	C16f５	第５面	28土坑		初期須恵器	陶邑
29	（その１）	28	坏	口縁	C16e４			第２層	試料番号2と同一個体	陶邑
30	（その２）	無	平底鉢	体部	C15ｄ９	第６面	65（東）溝		須恵器	陶邑（？）
31	（その２）	無	壺	頸部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
32	（その２）	無	壺	体部	B15ｊ３	第６面	520溝		初期須恵器	陶邑
33	（その２）	無	壺	体部	C15ｅ９	第６面	207溝		初期須恵器	陶邑
34	（その２）	無	壺	体部	C15ｄ９	第６面	92溝		初期須恵器	陶邑（？）
35	（その２）	1455	壺	口縁	C16ｃ３			第５層	初期須恵器	非陶邑
36	（その２）	1275	無蓋高坏	体部	C15ｂ６	第６面	585土坑		初期須恵器	陶邑
37	（その２）	1302	坩	体部	C15ｂ６	第６面	858土坑		初期須恵器	陶邑
38	（その２）	1147	壺形土師	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑
39	（その２）	1311	壺	体部	C15ａ５	第６面	851土坑		初期須恵器	陶邑
40	（その２）	381	壺	体部	C15ｅ８	第６面	127溝		初期須恵器	陶邑（？）
41	（その２）	1264	壺形土師	体部	C16ａ８	第６面	486土坑		初期須恵器	陶邑（？）
42	（その２）	1149	壺	体部	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
43	（その１）	73	壺	口縁部	C16ｅ８	第５面	17土坑		初期須恵器	陶邑（？）
44	（その１）	140	器台	体部	C16g９			第5層	初期須恵器+コンパス文	陶邑
45	（その１）	無	壺	体部	C16ｅ８	第５面	17土坑		初期須恵器	陶邑
46	（その１）	無	壺	体部	C16ｅ８	第５面	17土坑		初期須恵器	陶邑
47	（その２）	592	軒丸瓦		C16ｃ１	第６面	129土坑			
48	（その２）	468	軒丸瓦		C15ｄ10	第６面	65溝			
49	（その２）	472	軒平瓦		C15ｅ８	第６面	127溝			
50	（その２）	471	軒平瓦		C15ｄ８	第６面	65（東）溝			
51	（その２）	無	軒丸瓦				攪乱			
52	（その２）	527	軒平瓦		C15ｅ９	第３面	1粘土取り穴			
53	（その２）	187	蓋		B15ｈ１			第５層	初期須恵器	陶邑（？）
54	（その２）	無	壺	体部	C15ｅ９			第４層	初期須恵器	陶邑（？）
55	（その２）	1272	器台	体部	C15ｂ６	第６面	585土坑		初期須恵器	陶邑
56	（その２）	無	壺	口縁	C16ｄ３			第４層	初期須恵器	陶邑
57	（その２）	1148	壺形土師		B15ｂ１	第６面	472井戸		初期須恵器	
58	（その２）	無	器台	脚部	C16ｅ３			第４層	初期須恵器	陶邑
59	（その２）	無	壺	体部	拡張区		東側溝		初期須恵器	陶邑
60	（その２）	無	壺	口縁	拡張区		東側溝		初期須恵器	陶邑
61	（その２）	無	器台	体部	C15ｄ10			第５層	初期須恵器	陶邑
62	（その２）	無	壺	口縁	C15ｂ５			第５層	初期須恵器	陶邑
63	（その２）	無	器台	体部	C15ｄ７	第６面	440溝		初期須恵器	陶邑
64	（その２）	無	壺	口縁			南側溝		初期須恵器	陶邑（？）
65	（その２）	無	壺	口縁	C15ｃ10			第１層	初期須恵器？	陶邑
66	（その１）	142	鉢	体部	C16ｅ７			第４層	初期須恵器	陶邑
67	（その１）	無	壺	体部	C16ｅ８	第５面	17土坑		初期須恵器	陶邑
68	（その２）	1347	高坏蓋	体部	B15ｂ２	第６面	1250土坑		初期須恵器	陶邑
69	（その２）	無	壺	口縁	B15ｈ１	第６面	671ピット		初期須恵器	陶邑（？）
70	（その２）	295	把手付鉢	体部	C15ｄ８	第６面	92溝		初期須恵器	陶邑
71	（その２）	無	坏？		C15ｄ10	第６面	65溝		初期須恵器	陶邑
72	（その２）	1150#一？	壺	口縁	B15ｂ１	第６面	427井戸		初期須恵器	陶邑（？）
73	（その２）	無	壺	体部	B15ｈ１	第６面	427井戸		須恵器	陶邑
74	（その２）	無	壺	口縁	C15ｄ９			第４層	初期須恵器	陶邑
75	（その２）	1193	坏	体部	B14ｉ10	第６面	1299井戸		須恵器	陶邑
76	（その２）	280	鉢？		C15ｅ９	第６面	127溝		土師器	
77	（その２）	1082	有蓋高坏	体部	C15ｂ６	第６面	460井戸		須恵器	陶邑（？）
78	（その２）	1100	坏	体部	C15ｂ６	第６面	460井戸		須恵器	陶邑（？）
79	（その２）	無	壺	口縁	C15ｅ９・10	第４面	11落ち		須恵器	陶邑（？）
80	（その２）	無	無蓋高坏	体部	C15ａ５	第６面	851土坑		初期須恵器	陶邑
81	（その２）	無	壺	体部	C15ｄ９	第６面	65（東）溝		初期須恵器	陶邑（？）
82	（その２）	無	無蓋高坏	体部	C15ｂ６			第５層	初期須恵器	陶邑
83	（その２）	無	壺	体部	C15ｄ９			第４層	初期須恵器	陶邑
84	（その２）	1192	坏	体部	B14ｉ10	第６面	1299井戸		須恵器	陶邑
85	（その２）	無	高坏蓋	坏蓋	C15ｂ５	第６面	851土坑		初期須恵器	陶邑

表7　大和川今池遺跡出土遺物胎土分析試料一覧（2）

試料番号	調査年度	報告書遺物番号	器種	部分	地区	遺構面	遺構名	層名	備考	推定産地
86	（その2）	1099	坏	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑
87	（その2）	無	不明		C15a8	第6面	514ピット		陶器	
88	（その2）	1073	坏蓋	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑
89	（その2）	1080	䏻	口縁	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑
90	（その2）	1173	平底壺	体部	B15h1	第6面	427井戸		弥生？	
91	（その1）	無	平底壺	体部	C16e8	第5面	17土坑		土師器	
92	（その2）	1086	坏	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	伽耶（？）
93	（その2）	1090	坏	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑
94	（その2）	1152	二重口縁壺	口縁	B15h1	第6面	427井戸		土師器	
95	（その2）	1098	坏	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑
96	（その2）	1091	坏	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	非陶邑
97	（その2）	1077	壺	口縁	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	伽耶（？）
98	（その2）	1094	坏	体部	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑
99	（その2）	1224	平底壺		C16f2	第6面	53土坑		土師器（韓式系土器）	
100	（その2）	1223	甕	口縁	C16f2	第6面	53土坑		土師器	
101	（その2）	1157	甕	体部	B15h1	第6面	427井戸		土師器	
102	（その2）	1155	甕	体部	B15h1	第6面	427井戸		土師器	
103	（その2）	528	鍋		C15e8	第6面	127溝		瓦質土器	
104	（その2）	870	羽釜		C15b7	第6面	819井戸		土師器	
105	（その2）	1439	樽形䏻	体部	B15h1	第6面	427井戸		初期須恵器	陶邑
106	（その2）	1271	器台	体部	C15b6	第6面	585土坑		須恵器	非陶邑
107	（その2）	無	不明		C15a6	第6面	631土坑		初期須恵器	
108	（その1）	無	壺	体部	C16e8	第5面	17土坑		初期須恵器	陶邑
109	（その2）	無	直口壺	口縁	C15e10	第6面	70土坑(33井戸内)		初期須恵器	陶邑
110	（その2）	無	軒平瓦		C15b4	第6面	601井戸			
111	（その2）	249	軒平瓦		C15d9	第5面	22溝			
112	（その2）	1150	甕	体部	B15h1	第6面	427井戸		初期須恵器	伽耶（？）
113	（その2）	無	甕	体部	C15e10	第4面	11落ち		初期須恵器	陶邑
114	（その2）	無	壺	体部	C15d9	第6面	124土坑		初期須恵器	伽耶（？）
115	（その2）	無	甕	口縁	B15h1	第6面	427井戸		初期須恵器	伽耶（？）
116	（その2）	622	羽釜	口縁	C16c1	第6面	170井戸		土師質土器	
117	（その2）	654	羽釜		C15e9	第6面	128井戸		土師質土器	
118	（その2）	561	甕	体部	C15a9	第6面	280溝		瓦質土器	
119	（その2）	1106	甕	体部	C15b・c6	第6面	460井戸		須恵器	
120	（その2）	1228	甕		C16f2	第6面	53土坑		土師器	
121	（その2）	787	羽釜		C15b8	第6面	465井戸		瓦質土器	
122	（その2）	1151	壺		B15h1	第6面	427井戸		土師器	
123	（その4）	無	甕		B14e1	第6面	192ピット		土師器（庄内）	
124	（その4）	無	甕		B13b8	第6面	95土坑		土師器（庄内）	
125	（その2）	843	火舎？	底	C15c8	第6面	214井戸		瓦質土器	
126	（その2）	539	羽釜		C16c2	第6面	57溝		瓦質土器	
127	（その2）	912	椀		C15c4	第6面	846井戸		瓦器	
128	（その2）	613	椀		C16c1	第6面	170井戸		瓦器	
129	（その2）	674	椀		C15d7	第6面	147井戸		瓦器	
130	（その2）	無	甕	体部	C15d7			第4層	土師器	
131	（その2）	522	甕？		C15e8	第6面	127溝		常滑	
132	（その2）	913	椀		C15c4	第6面	846井戸		瓦器	
133	（その2）	636	椀		C15e5	第6面	128井戸		瓦器	
134	（その2）	918	椀		C15b4	第6面	601井戸		瓦器	
135	（その2）	1366	甕		B14j10	第6面	34土坑		土師器	
136	（その2）	1226	甕		C16f2	第6面	53土坑		土師器	
137	（その2）	479	軒平瓦		C15d8	第6面	92溝			
138	（その2）	608	椀		C16c1	第6面	170井戸		瓦器	
139	（その2）	644	椀		C15e9	第6面	128井戸		瓦器	
140	（その2）	178	軒平瓦		C15b6			第2層		
141	（その2）	228	軒平瓦		C15e10	第4面	11落ち			
142	（その2）	477	軒丸瓦		C15d7	第6面	458溝			
143	（その2）	474	軒丸瓦		C15d9	第6面	92溝			
144	（その2）	467	軒丸瓦		C16d2	第6面	65溝			
145	（その2）	469	軒丸瓦		C16c2	第6面	66溝			
146	（その2）	475	軒丸瓦		C15b7	第6面	458溝			
147	（その2）	無	甑		C15b6	第6面	460井戸		土師器	
148	（その2）	無	甑		C15a8	第6面	540土坑		土師器	
149	（その2）	無	壺	体部	B14j10	第6面	34土坑		土師器	
150	（その2）	1079	壺	口縁	C15b6	第6面	460井戸		須恵器	陶邑（？）
151	（その2）	567	甕		C15a3	第6面	878溝		須恵器	陶邑
152	（その2）	無	不明	体部	C15b3			第5層	土師器（韓式系土器）	
153	（その1）	無	軒丸瓦		C16f5			第2層		
154	（その1）	31	軒丸瓦		C16d5			第2層		
155	（その1）	無	軒丸瓦		C16d4	第3面	2土坑	第2層		
156	（その1）	32	軒丸瓦		C16e5			第2層		
157	（その1）	30	軒丸瓦		C16d4			第2層		
158	（その1）	16	軒丸瓦		C16d3	第3面	2土坑	第2層		
159	（その1）	15	軒丸瓦		C16d4	第3面	2土坑	第2層		
160	（その1）	34	軒平瓦		C16e5			第2層		
161	（その1）	33	軒平瓦		C16e5			第2層		
162	（その1）	26	軒平瓦		C16e5	第4面	6土坑			
163	（その1）	24	軒平瓦		C16e5	第4面	6土坑			
164	（その1）	17	軒平瓦		C16c3	第3面	2土坑	第2層		
165	（その1）	19	軒平瓦		C16d4	第3面	2土坑	第2層		
166	（その1）	18	軒平瓦		C16d3	第3面	2土坑			
167	（その2）	476	軒丸瓦		C15d7	第6面	458溝			
168	（その2）	445	軒丸瓦		C15c7	第6面	143溝			
169	（その1）	162	不明		C16c4			第2層	須恵器（縄蓆文）	非陶邑

第２節　大和川今池遺跡（その１～４）発掘調査に係る微化石分析

渡辺正巳

はじめに

大和川今池遺跡は大阪府松原市天美西地内に立地する。また、大阪府のほぼ中央、いわゆる「河内平野」の南端を東から西に流れる大和川の南岸に位置する。

本報告は、大和川今池遺跡（その１～４）発掘調査に伴い、財団法人大阪府文化財調査研究センターが川崎地質株式会社に委託して実施した微化石分析調査の一部をまとめ直した物である。

試料について

分析試料は、図257に示す各地点で採取された。花粉分析処理は渡辺（1995a）、珪藻分析処理は渡辺（1995b）、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従った。

分析結果

各地点の花粉分析結果を図258～268、珪藻分析結果を図269～274、プラント・オパール分析を図275～282に示した。

花粉ダイアグラムでは、各種類毎に木本花粉総数を基数とした百分率を算出しスペクトルで示した。珪藻ダイアグラムでは、各種類毎に珪藻総数を基数とした百分率を算出しスペクトルで示した。プラント・オパールダイアグラムでは、各種類毎に１グラムあたりの含有数を算出しスペクトルで示した。

考察

（１）花粉分帯

花粉組成の特徴から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、各工区での花粉帯と推定堆積時期の関係を表８に示す。

Ⅴ帯

ハンノキ属が卓越し、ツガ属、ヤマモモ属を伴う。草本花粉ではキク亜科が高率を示す。

Ⅳ帯

アカガシ亜属が卓越するほか、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亜属などが出現する。

（その２）No.６地点では試料No.９でのみキク亜科が高率になることから、試料No.９をｂ亜帯、試料No.８、７をａ亜帯とした。

（その３）No.２地点ではアカガシ亜属、ツガ属が負の相関を示し、アカガシ亜属が最下位の試料No.９と最上位の試料No.５で高率を示す。このことから、試料No.９をC亜帯、試料No.８～６をB亜帯、試料No.５をA亜帯とした。

Ⅲ帯

アカガシ亜属、ムクノキ属－エノキ属が特徴的に出現する。

（その４）ではⅢ帯の時期（平安～鎌倉時代：９～14C）にアカガシ亜属が卓越し、（その２）、（その３）と異なる様相を示す。このことからⅢ’帯として、区別した。

II帯

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、ハンノキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。

（その4）ではII帯の時期（中世頃：15～17C）にアカガシ亜属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）、ツガ属、スギ属、コナラ亜属を伴い、他地区と異なる様相を示す。このことからII'帯として、区別した。

（その1）No.1地点では試料No.3でハンノキ属がやや高率になることから、試料No.5、4をb亜帯、試料No.3をa亜帯とした。

I帯

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、ハンノキ属を伴う。

（2）珪藻分帯

珪藻分析結果をもとに、地域珪藻帯を設定した。以下に珪藻帯の特徴を示す。また珪藻帯の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。

①（その1）No.1地点

1－II帯（試料No.6～2）

淡水種の割合が40～60%を占める。淡水種では、浮遊種が30～80%を占める。

1－I帯（試料No.1）

淡水種が80%程度を占める。淡水種の中では底生種、陸生種が多く、特に陸生の*Hantzschia amphioxys*が高率を示す。

②（その2）No.2地点

2－II帯（試料No.4、3）

淡水種のみからなり、ほとんどが底生種である。*Pinnularia*属、*Stauroneis phoenicenteron*が高率を示す。

2－I帯（試料No.1）

淡水種のみからなり、ほとんどが底生種である。*Pinnularia*属、*Eunotia biareoteraが*高率を示す。

（3）既知の結果との比較

大和川今池遺跡内では、川崎地質株式会社（1992）により花粉分析結果が報告されている。既知の結果では、I帯下部が古墳時代以降、I帯上部からIV帯までが中世から近世の植生を反映していると考えられている。今回の結果と既知の結果の対比結果は表8に示した通りであり、よく一致する。

一方大阪府中部地域では、中世にはすでに二次林化（マツ属（複維管束亜属花粉）の増加とアカガシ亜属の減少）が認められている（たとえば西大井遺跡（川崎地質株式会社，1995a）、志紀遺跡（川崎地質株式会社，1995b））。大和川今池遺跡内では花粉組成変遷がほぼ一致するのに対し、周辺地域と比較した場合に今回の結果は特異である。このことから、今回の結果は大和川今池遺跡内あるいは近辺での局地的な植生の変化を表している可能性が極めて高いと考えられる。

この現象の説明として、以下の事柄が考えられる。

①周辺地域で二次林化は進んでいたが、西除川あるいは遺跡周辺を流れていた中小河川の自然堤防上にアラカシなどを要素とする自然堤防林が発達していた。

②また、長期にカシ林が残存した原因に、人間による何らかの干渉が示唆される。

（４）（その１）87溝の堆積環境について

（その１）内で検出された、古墳時代～奈良時代以前に埋まった87溝（No.２地点試料No.３、４）について、埋積環境を推定する。

図259、271、272から明らかなように、87溝内の試料には珪藻化石は充分に含有されていたが、花粉化石はほとんど含有されていなかった。

大和川付け替え前の西除川が遺跡近辺を流れていたことは、現在の地割りから推測される。このことから、87溝は西除川の造る湿原内の三日月湖あるいは後背湿地の様な状況であったと考えられる。珪藻化石の特徴も、前述の様に酸性・底生種がほとんどを占め、湿地環境が推定できる。したがって、87溝は西除川により形成された三日月湖、あるいは西除川の後背湿地であったと考えられる。

また、花粉化石がほとんど含有されなかったこと、検出された花粉化石の花粉膜が痛んでいたことなどから、紫外線の影響による花粉粒の消滅が推測される。したがって、87溝内は湿地状の堆積環境であったが、常に水が溜まった状況ではなく乾燥する時期もあったと考えられる。

一方、僅かであるがイネのプラント・オパールが検出されている。このことから、遺跡内あるいは近辺で稲作が行われていた可能性が指摘できる。

（５）溝内外の環境について

（その２）での溝の埋土（No.２地点：458溝，No.３地点：143溝，No.４地点：280溝）は、地点により多少の時期差があるものの13～14世紀の堆積物であると考えられている。一方（その２）のNo.５、６地点はともに溝と100年程度の堆積年代の差があることから、比較の対象とすることに難点がある。また遺跡内他地区の結果も数100年にわたる長い期間の変化であり、堆積物の欠如が無いとは断言できない。以上のような問題点を含むものの、今回の溝埋土の分析結果は従来知られている同遺跡内他地区の分析結果といくつかの点で異なる。「居館の周溝」という観点からすれば、居館内あるいは周辺の局地的な植生（例えば、庭園の植木など）を反映している可能性もある。

埋積時の溝の様子（埋土そのものの様相）には３地点ともに大きな差は考えにくい。底生種、陸生種が50％以上を占めることから、沼沢湿地的な環境（どちらかといえば湿地）が推定できる。また、No.２地点ではヨモギ属の検出量が多く、No.２地点周辺ではこれらの草本が特に繁茂していたと考えられる。

またイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現し、溝の近くで稲作が行われていたことが示唆される。「居館の周溝」という観点からすれば、居館の周りで稲作が行われていた可能性もある。

一方、アカザ科－ヒユ科も各地点でやや高率を示す。アカザ科－ヒユ科には、アカザ、ホウレンソウ、サトウダイコン、マツナなどの栽培種があるが、イノコズチやイヌビユなどのような田畑の雑草もあり、区別が付かない。いずれにしろ、これらの草本が溝の近くに生育していたと考えられる。

（６）井戸について

（その２）No.７地点は、12C後半の井戸（128井戸）であった。ここでの分析結果（図263）では、ツユクサ属、キュウリ属という、通常の堆積物からは検出されることが極めて珍しい（検出されても数％程度まで）種類の花粉化石が多量に検出された。しかし、このような傾向は井戸内の堆積物の花粉分析

結果では一般的である（たとえば、芝ノ垣外遺跡：川崎地質株式会社，1993)。芝ノ垣外遺跡ではミカン属が高率で検出されたが、同時期の遺跡内の分析結果からはミカン属の花粉化石は全く検出されていなかった。同様に、今回の遺跡内の他地点ではツユクサ属、キュウリ属ともに全く検出されていない。

一方、井戸と同様な傾向は「便所遺構」でも報告されているが（たとえば、金原，1998)、同時に寄生虫卵も検出される。寄生虫卵が花粉分析処理中に壊れることはごく希であり、寄生虫卵の含有量の多い試料から作成した花粉化石観察用プレパラートには寄生虫卵が多く含まれる。しかし、今回作成したプレパラートから寄生虫卵は確認できなかった。したがって、本遺構が便所であった可能性は低い。

№7地点から検出された特異な花粉の内、ツユクサ属花粉はツユクサ、オオボウシバナなどに由来する可能性がある。これらは道ばたの雑草として生育するが、染色に用いられることから時に栽培されることもある。またキュウリ属花粉はキュウリのほか、シロウリ、マクワウリなどに由来する可能性があるが、いずれも食用で、栽培種である。またイネ科（40ミクロン以上）花粉、アカザ科－ヒユ科花粉も高率を示す。イネ科（40ミクロン以上）花粉はイネに由来すると考えられるが、アカザ科－ヒユ科については栽培と雑草の両方の可能性がある。

これらの特異な花粉につては井戸の近くで栽培されていた、あるいは雑草として生育していたものが混入した可能性が指摘できる。一般にイネ科（40ミクロン以上）花粉、アカザ科－ヒユ科花粉は遺構内や耕作土層中から多産する傾向にあるが、前述の様にツユクサ属花粉、キュウリ属花粉は検出されることすらごく希である。したがって、井戸の近くで栽培、あるいは雑草として生育していたものが混入した可能性が否定できないものの、極めて低い。ツユクサ属、キュウリ属の花は夏から秋にかけて咲くことから、この季節に何らかの目的で多量の花を井戸に投入したのではなかろうか。

（7）古環境変遷

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果、珪藻分析結果、プラント・オパール分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。また、前述の（その1）87溝、（その2）458・143・280溝、（その2）128井戸については、再度記述する。

①Ⅴ帯期（Ⅳ帯期の前の時期）

ハンノキ属花粉が卓越することから遺跡周辺は西除川の後背湿地で、ハンノキ属を主要素とする沼沢林で被われていたと考えられる。また、イネ科花粉やキク亜科花粉が高率になることから、後背湿地内にはこれらに属する湿地生植物が生育していたと考えられる。

花粉化石がほとんど検出されないことから、花粉帯の設定にあたり（その1）87溝の試料を除外していた。しかし、Ⅳ帯期に先立つ時期ということで、あえてⅤ帯期に含め、87溝についてここで記述することにする。87溝は西除川の造る湿地の一部であったと考えられる。しかし常に水が溜まった状況ではなく、乾燥する時期もあったと考えられる。また、遺跡内あるいは近辺で稲作が行われていた可能性が指摘できる。

②Ⅳ帯期（古墳～奈良時代）

（その1～4）のほとんどの地点でイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高く、イネプラント・オパールも多量に検出されていることから、遺跡内から周辺にかけて水田が広がっていたと考えられる。

また、（その1）東部（No.1地点）の第4層からはソバ属花粉も検出され、田の畦や、休耕田を利用したソバ栽培が行われていたと考えられる。一方で（その2）No.6地点では、b亜帯期にキク亜科花粉が高率になることから、この時期に局所的にキク亜科の植物が繁茂していたと考えられる。キク亜科の植物は畦に成育していたか、近辺でまとまった広さの草地を成していた可能性がある。

（その1）では、東部と中央部（No.2地点）で土地利用形態の違いが考えられる。（その1）全体に分布する第4面直下の第4層について、東部ではイネ科（40ミクロン以上）花粉や、イネプラント・オパールが多く検出される。また淡水種のうち湿地生の珪藻が多いなど、第4層が水田耕作土であったことが示唆される。一方、中央部ではイネプラント・オパールは全く検出されず、花粉化石、珪藻化石の含有量もきわめて少ないことから、ここでの第4層が水田耕作土であった可能性は極めて低い。この原因として、第4層の堆積環境の違いと第4面での土壌化の過程における土地利用形態の差（東部が水田で、中央部が草地あるいは居住域など）があったことが推定される。また、中央部の第4面直上の層（試料No.1層準）は、中央部にのみ分布する。ここではイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率は低いものの、イネプラント・オパール、淡水・底生珪藻も多産する。したがって、中央部では東部よりやや遅れて第4面上位で水田耕作が行われたと考えられる。

前述のように遺跡周辺で水田の分布が予想されることや、二次林要素の1つであるマツ属（複維管束亜属）花粉が低率のままであることから、この時期に遺跡周辺に森林はなく、水田あるいは人為的な草地（人間の生活空間）が広がっていた可能性が高い。したがって今回検出された木本花粉の多くは羽曳野丘陵や美原丘陵、泉北丘陵に由来すると考えられる。植生の垂直分布から考えると、これらの地域、あるいは背後の金剛・葛城山地の山麓にはカシ類を主要素とする照葉樹林やナラ・クヌギ類を要素とする二次林としての落葉広葉樹林が分布していたと考えられる。また、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギなどの温帯針葉樹林（中間温帯林）要素は金剛・葛城山地の中腹から山頂部に分布していたと考えられる。

一方、（その3）No.2地点ではⅣ帯B亜帯ではアカガシ亜属花粉が低率になり、ツガ属花粉が顕著に出現する。同様の傾向が他の針葉樹花粉やブナ属花粉などにも認められることから、この時期には丘陵部の照葉樹林が伐採され一時的に荒野となり、さらに遠方の金剛・葛城山地の中腹から山頂部に分布する樹木に由来する花粉が、相対的に増えたと考えられる。

③Ⅲ帯期（平安頃？～鎌倉頃？）

前時期同様にイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高く、イネプラント・オパールも多量に検出されていることから、遺跡内から周辺にかけては前時期と同様に水田が広がっていたと考えられる。また、（その2）、（その3）ではソバ属花粉が検出され、ソバの栽培が行われたと考えられる。

また、前述の（その2）458，143，280溝、128井戸はこの時期のものであり、井戸から検出されたツユクサ属やキュウリ属の有用植物が、遺構周辺あるいは遺跡内で栽培されていた可能性もある。

一方、ムクノキ属－エノキ属花粉が（その2）No.6地点、（その3）No.1地点で高率を示し、（その2）、（その3）境界付近にムクノキ類（あるいはエノキ類）が成育していたことを示唆する。

今回の分析結果および川崎地質株式会社（1992）では、周辺他地域でアカガシ亜属花粉が低率になり、マツ属（複維管束亜属）花粉が高率になる古墳時代以降、中世にいたってもアカガシ亜属花粉が高率を示すという現象が認められた。ムクノキ属－エノキ属は、一般には自然堤防林などの河畔林構成要素である。このことと関連付ければ、前述のようにアカガシ亜属花粉はカシ類でも先駆的性質を持つアラカ

シなどに由来し、ムクノキ、エノキなどとともに自然堤防林を形成していた可能性が示唆される。

④II帯期（15C～）

前時期同様にイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高く、イネのプラント・オパールも多量に検出されていることから、遺跡内から周辺にかけては前時期と同様に水田が広がっていたと考えられる。分析を行った全ての地点でソバ属花粉が検出され、ソバ栽培が行われていたことも解る。また（その2）No.5地点で顕著であるが、ワタ属花粉の出現、アブラナ科花粉の高率での出現などワタやナタネなどの栽培も行われたと考えられる。一方、（その1）で行った珪藻分析では海～汽水産珪藻の検出量が多い。またこれらは、淡水種のうち浮遊種と相関が強いことから、西除川上流部の大阪層群や、段丘堆積層からの二次堆積である可能性が極めて高い。発掘の成果から試料採取地近辺に取水口があった可能性が指摘される（担当者談）など、水田にはかなり豊富に水が供給されていたと考えられる。

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）花粉が高率になり、前時期に（その2）、（その3）で卓越したムクノキ属－エノキ属花粉が激減する。一方、（その4）においてはアカガシ亜属花粉が高率である。このことから、アラカシにムクノキ、エノキなどを伴った自然堤防林からムクノキ、エノキが消え、アラカシあるいは他のカシ類を主要素とする林に遷移していったと考えられる。この傾向は（その4）で顕著である。

一方、この時期にマツ属（複維管束亜属）花粉が高率を示すことは周辺他地域と調和的であり、ここでのマツ属（複維管束亜属）花粉をはじめとする多くの花粉は、羽曳野丘陵や美原丘陵、泉北丘陵に由来すると考えられる。植生の垂直分布から考えると、これらの地域、あるいは背後の金剛・葛城山地の山麓にはアカマツ（一部ではクロマツ）、ナラ・クヌギ類を要素とする「里山」が分布していたと考えられる。また、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギなどの温帯針葉樹林（中間温帯林）要素は金剛・葛城山地の中腹から山頂部に分布していたと考えられる。

また、上位に向かいハンノキ属花粉が増加する。遺跡近くに湿地が広がるようになり、ハンノキ林が局地的な植生として生育したことが示唆される。

⑤I帯期（18C～）

大和川付け替え前後の植生を示していると考えられる。

ハンノキ属花粉が高率を示し、イネ科（40ミクロン以上）花粉は低率であることから、遺跡周辺にハンノキ湿地林が広がっており、水田耕作はごく狭い範囲で行われていたと考えられる。（その2）No.1地点ではワタ属花粉やソバ属花粉が出現し、いわゆる「掻き上げ田」が存在した可能性もある。

一方、（その2）No.6地点の大和川付け替え後と考えられる堆積物ではマツ属（複維管束亜属）が卓越するものの、ハンノキ属花粉の出現率も低くない。このことから、大和川付け替え後にも分布面積が縮小するものの、引き続きハンノキ湿地林が広がっていたと考えられる。

まとめ

（1）大和川今池遺跡（その1～4）の発掘調査に伴い実施した花粉、珪藻分析をもとに、花粉分帯、珪藻分帯を行った。その結果を以下に示す。

①花粉分析結果から、本地域の地域花粉帯としてI～V帯を設定した。

②さらに同時期の植生を示すが、明らかに異なる花粉組成を示すものとして、II帯に対するII'帯、III帯に対するIII'帯を設定した。

③また、各地点毎に認められる詳細な変化をもとにII帯a、b亜帯、IV帯a、b亜帯、IV帯A、B、C亜帯を設定した。

（2）花粉分帯をもとに、遺跡内の既知の結果および周辺地域の既知の結果との花粉組成の比較をした。その結果、以下のことが明らかになった。

①大和川今池遺跡内では、花粉組成変遷に良い一致をみた。しかし、今回のV帯とIII帯の花粉組成は従来認められていなかったものであった。局地的なものか、地層が欠如していたものかの判断が、さらに必要になる。

②周辺地域の比較ではマツ属（複維管束亜属花粉）の増加、アカガシ亜属花粉の減少の時期が大きく異なった。このことは、中世末頃まで大和川今池遺跡内あるいは近辺にカシ類が分布していたことを示唆する結果となった。

③ムクノキ属－エノキ属との関連から、上述のアカガシ亜属花粉は自然堤防林を構成するアラカシに由来する可能性が指摘できる。

④また、長期に渡り特異な林が維持されることから、人間によるなんらかの干渉があったことが示唆される。

（3）花粉分析、珪藻分析、およびプラント・オパール分析結果をもとに（その1）、（その2）のいくつかの地点周辺の環境を推定した。

①（その1）87溝の堆積環境および、周辺の古環境を推定した。

②（その2）の143，280，458溝の堆積環境および、周囲の古植生を推定した。

③（その2）の128井戸の性格について推定した。

（6）時期未定のV帯期以降の古植生を中心とする古環境変遷について考察した。特筆すべき点として以下のことがあげられる。

①前述の様に遺跡周辺には、中世末頃までカシ林が分布した。

②古墳時代～平安時代の間で、（その2）、（その3）の境界付近を中心にムクノキ類（あるいはエノキ類）が分布した。

③中世末以降遺跡周辺にハンノキ林が分布した。

④（その2）128井戸よりツユクサ属花粉やキュウリ属花粉が検出され、これらの作物が井戸の埋まった12世紀後半頃に栽培されていた。

⑤中世後半ころよりワタ属花粉が検出され、アブラナ科花粉も高出現率を示した。このことから、ワタ、ナタネの栽培が明らかになった。

引用文献
金原正明（1998）トイレ跡は生活のるつぼ：排泄物の生物学．遺伝，52，39－45．
川崎地質株式会社（1992）花粉分析，プラント・オパール分析．大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅸ，40－46．大阪府教育委員会．
川崎地質株式会社（1993）芝ノ垣外遺跡における花粉・珪藻分析．主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う芝ノ垣外遺跡Ⅱ－発掘調査報告書－本文編，㈱大阪府埋蔵文化財協会報告書，78，393－413．
川崎地質株式会社（1995a）西大井遺跡（93年度調査）における花粉・珪藻分析．西大井遺跡－大和川下流東部流域下水道事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書－，㈱大阪府文化財調査研究センター調査報告書，1，149－174．
川崎地質株式会社（1995b）志紀遺跡（93－西区）における花粉・珪藻分析．志紀遺跡－大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書－，㈱大阪府埋蔵文化財協会報告書，91，67－76．
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15－29．
渡辺正巳（1995a）花粉分析法．考古資料分析法，84，85．ニュー・サイエンス社
渡辺正巳（1995b）珪藻分析法．考古資料分析法，86，87．ニュー・サイエンス社

表8　花粉帯と年代

今回の結果						川崎地質(1992)	
花粉帯	特徴	推定年代 (その4)	推定年代 (その3)	推定年代 (その2)	推定年代 (その1)	花粉帯	推定時代
Ⅰ	マツ属			18C頃			
Ⅱ	マツ属（複維管束亜属）アカガシ亜属	15C～17C	鎌倉以降～平安～鎌倉	～15C	中世	Ⅳ	中世～近世
						Ⅱ,Ⅲ	
Ⅲ	エノキ属－ムクノキ属	9C～14C	古墳～平安				
Ⅳ	アカガシ亜属	古墳時代	古墳時代	6C～古墳中	古墳～奈良	Ⅰ	古墳以降
Ⅴ	ハンノキ属						

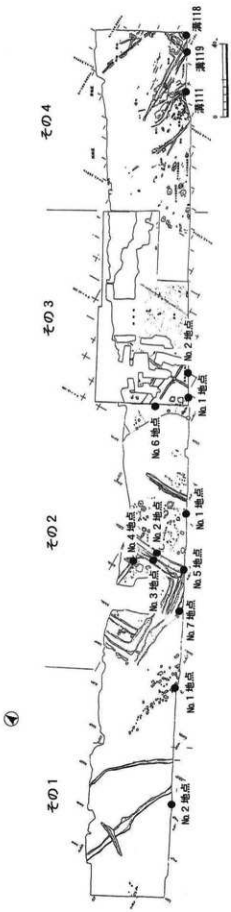

その1
その2
その3
その4
No.2地点
No.1地点
No.7地点
No.3地点
No.4地点
No.2地点
No.5地点
No.1地点
No.6地点
No.1地点
No.2地点
湯111
湯119
湯118

図257　試料採取地点

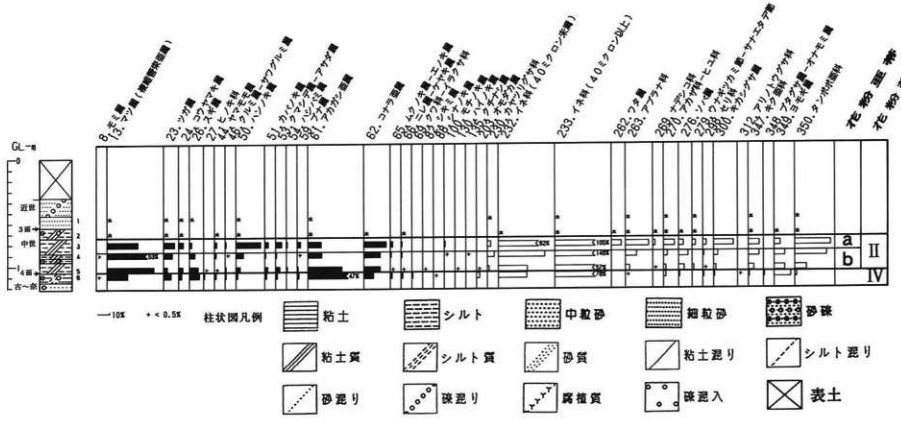


図258　（その1）No. 1地点の花粉ダイアグラム

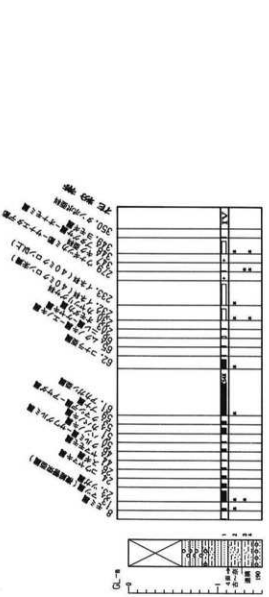


図259　（その1）No. 2地点（87溝）の花粉ダイアグラム

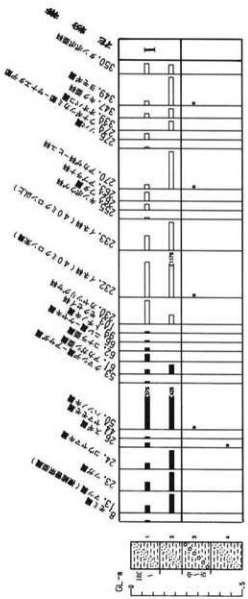


図260　（その2）No. 1地点の花粉ダイアグラム

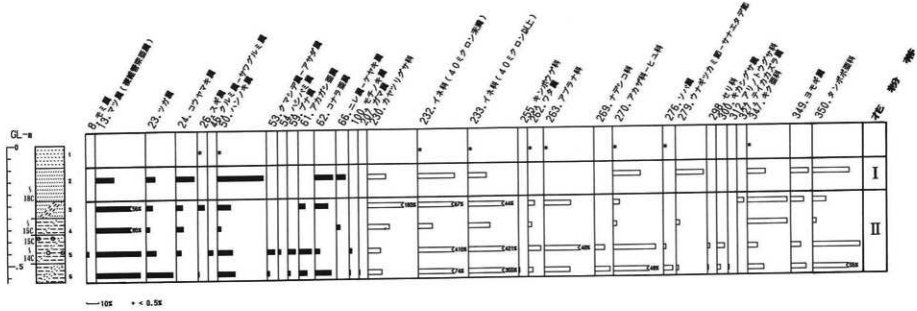


図261　（その２）No. 5 地点の花粉ダイアグラム

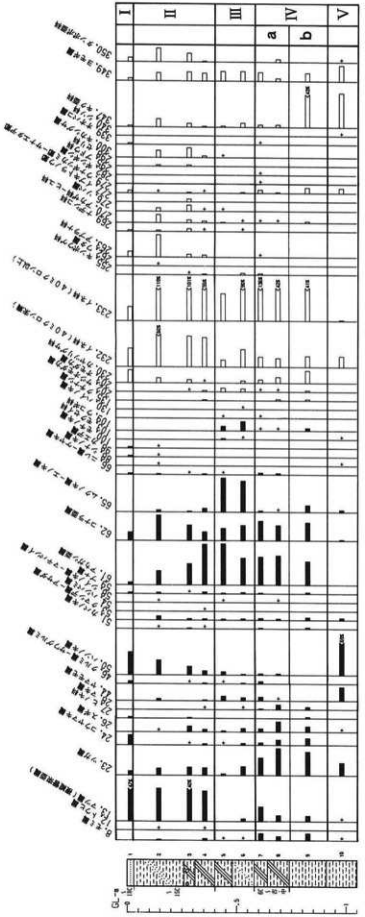


図262　（その２）No. 6地点の花粉ダイアグラム

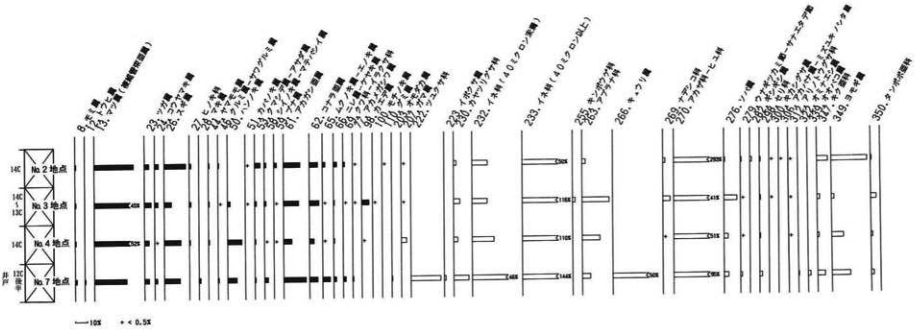


図263　（その2）458溝（No. 2地点）、143溝（No. 3地点）、280溝（No. 4地点）、128井戸（No. 7地点）の花粉ダイアグラム

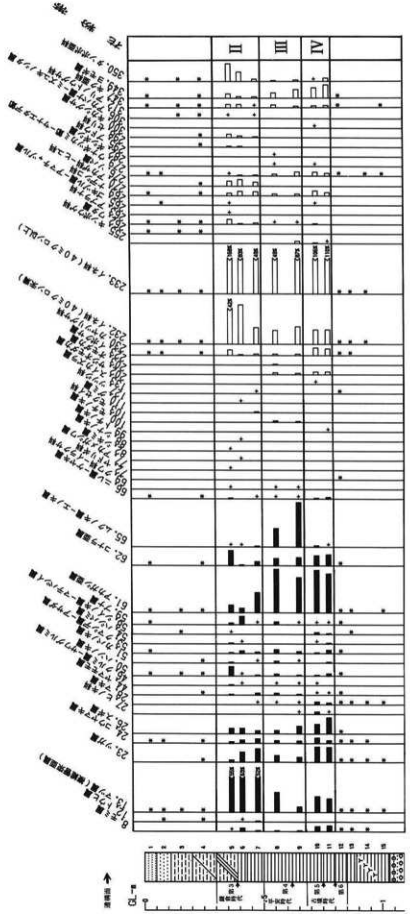


図264　（その３）No.１地点の花粉ダイアグラム

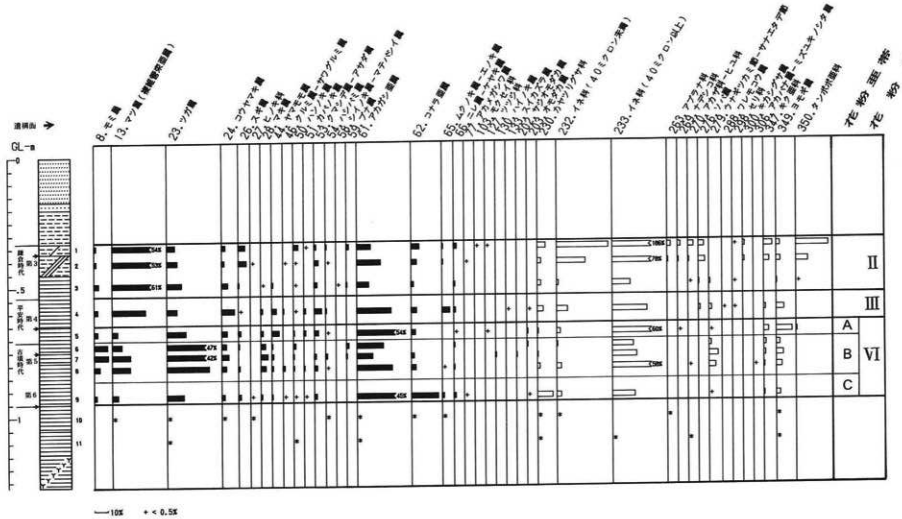


図265　（その３）No. ２地点の花粉ダイアグラム

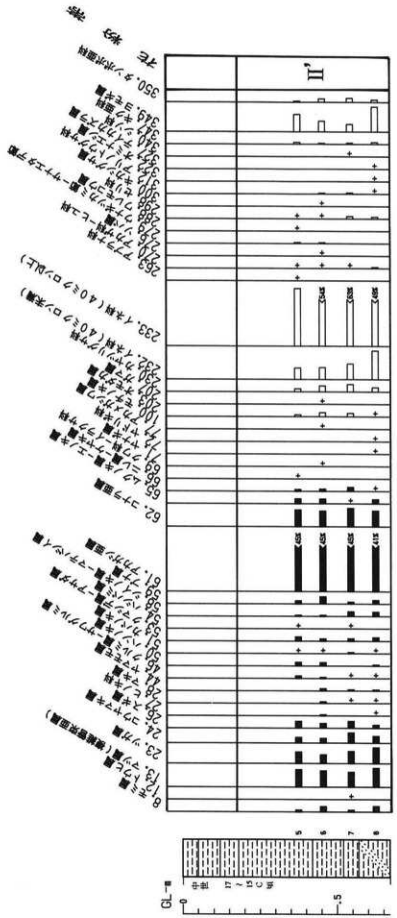


図266　（その4）溝111の花粉ダイアグラム

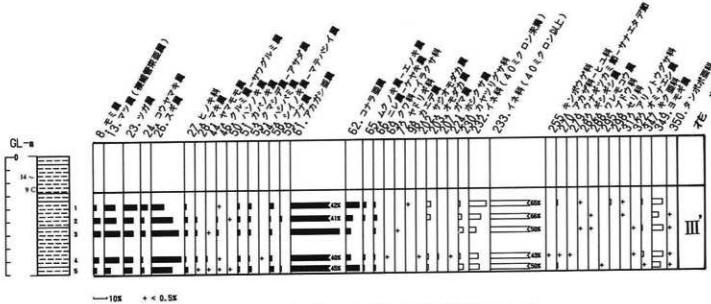


図267 （その４）溝118の花粉ダイアグラム

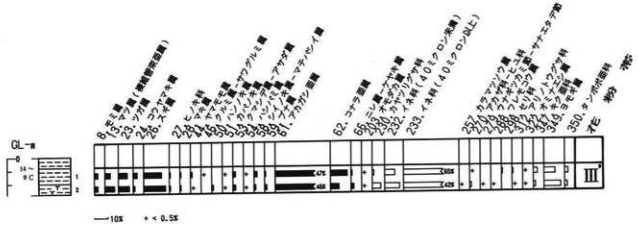


図268 （その４）溝119の花粉ダイアグラム

図269　（その1）No. 1地点の珪藻ダイアグラム

図270　（その1）No. 1地点の珪藻総合ダイアグラム

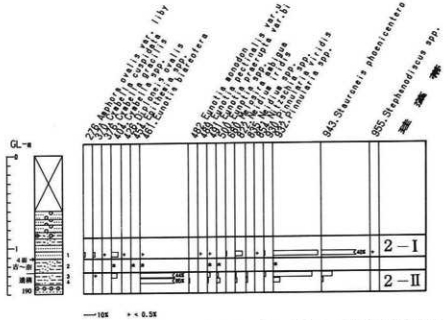


図271　（その1）No. 2地点の珪藻ダイアグラム

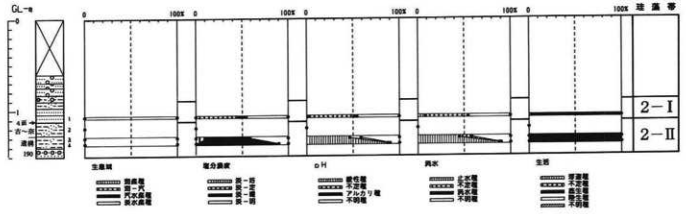


図272　（その1-）No. 2地点の珪藻総合ダイアグラム

図273　（その2）458溝（No. 2地点）、143溝（No. 3地点）、280溝（No. 4地点）の珪藻ダイアグラム

図274　（その2）458溝（No. 2地点）、143溝（No. 3地点）、280溝（No. 4地点）の珪藻総合ダイアグラム

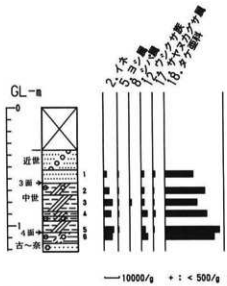


図275 （その1）No. 1地点のプラント・オパールダイアグラム

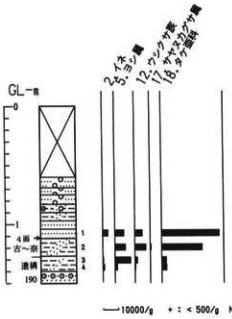


図276 （その1）No. 2地点のプラント・オパールダイアグラム

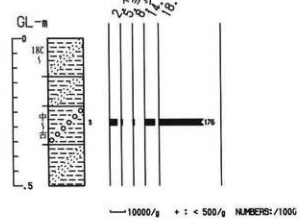


図277 （その2）No. 1地点のプラント・オパールダイアグラム

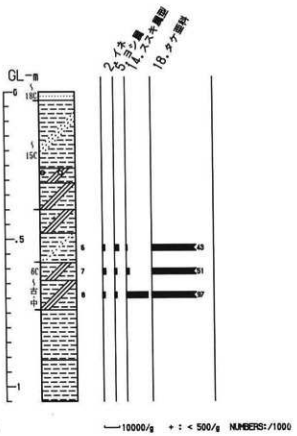


図278 （その2）No. 6地点のプラント・オパールダイアグラム

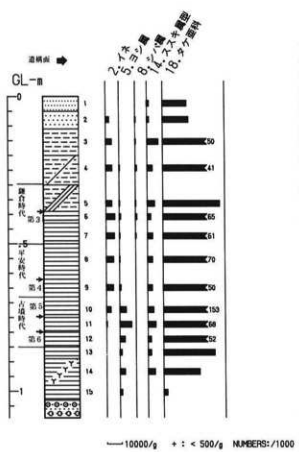


図279　（その3）No. 1地点のプラント・オパールダイアグラム

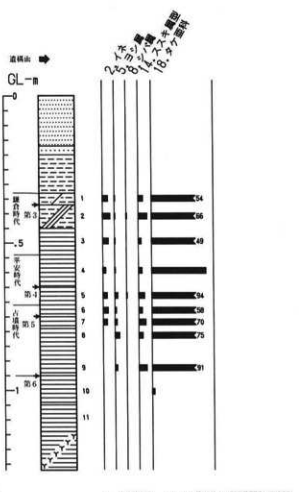


図280　（その3）No. 2地点のプラント・オパールダイアグラム

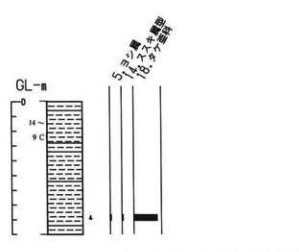


図281　（その4）溝118のプラント・オパールダイアグラム

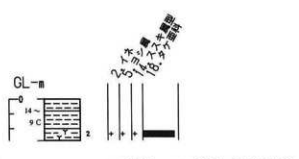


図282　（その4）溝119のプラント・オパールダイアグラム

第3節　大和川今池遺跡出土動物遺体について

大阪市立大学　安部みき子

大和川今池遺跡（その1・2）出土　自然遺物（動物遺体）の同定結果

表9　動物遺体一覧表

	調査区	面・層位	地区・遺構	種	左右	部　位	備　　考
1	（その2）	第4層	C16c 3	イヌ	右	寛骨	恥骨枝破損
1	（その2）	第4層	C16c 3	イヌ	左	寛骨	恥骨枝破損
1	（その2）	第4層	C16c 3	イヌ	左	踵骨	最大長43.37㎜
2	（その2）	第4層	C16d 2	不明		仙骨	椎体の一部
3	（その2）	第5面	31溝	ウシ	右	踵骨	踵骨隆起部の骨端は融合していない
4	（その2）	第6面	57溝	ウマ	右	下顎小臼歯	
5	（その2）	第6面	65溝	ウシ	不明	上顎臼歯	
6	（その2）	第6面	86溝	ウシ	右	上顎臼歯	
7	（その1）	第3面	4溝	ウシ	左	上顎臼歯	

（所見）

（その2）第4層（C16c 3地区）から出土したイヌの寛骨は同一個体のものと思われる。寛骨は全体的に骨の表面や骨端の風化が進んでいたため計測はできなかったが、寛骨臼と踵骨の大きさから推定すると、中型犬の中でも大きい部類に属すると思われる。

第4節　大和川今池遺跡出土植物遺体について

㈶大阪府文化財調査研究センター　山口誠治

1．はじめに

大和川今池遺跡（その2）から検出された植物遺体について報告する。同定した植物遺体は、以下の通りである。

【被子植物】

1．イネ科	Gramineae	イネ（炭化米）　*Oryza sativa*
2．カヤツリグサ科	Cyperaceae	スゲ属　*Carex* sp.
3．クワ科	Moraceae	カナムグラ　*Humulus scandens*
4．クワ科	Moraceae	ヤマグワ　*Morus australis*
5．タデ科	Polygonaceae	タデ属　*Polygonum* sp.
6．ヒユ科	Amaranthaceae	ヒユ属　*Amaranthus* sp.
7．ナデシコ科	Caryophyllaceae	ハコベ属　*Stellaris* sp.
8．バラ科	Rosaceae	スモモ　*Prunus salicina*
9．バラ科	Rosaceae	ウメ　*Prunus mume*
10．バラ科	Rosaceae	モモ　*Prunus persica*
11．カタバミ科	Oxalidaceae	カタバミ　*Oxalis corniculata*
12．ミカン科	Rutaceae	カラスザンショウ　*Zanthoxylum ailanthoides*
13．センダン科	Meliaceae	センダン　*Melia azedarach*
14．ブドウ科	Vitidaceae	ブドウ属　*Vitis* sp.
15．ブドウ科	Vitidaceae	ノブドウ属　*Ampelopsis* sp.

【双子葉植物】

1．シソ科	Labiatae	イヌコウジュ属　*Mosla* sp.
2．ウリ科	Cucurbitaceae	マクワウリの仲間　*Cucumis melo*
3．ウリ科	Cucurbitaceae	ヒョウタンの仲間　*Lagenaria leucantha*
4．キク科	Compositae	メナモミ属　*Siegesbeckia* sp.

同定結果は、一覧表にして報告する。

2．同定結果

表10　植物遺体一覧表

	調査区	遺構面	遺構名	時　期	同　定　結　果
1	（その2）	第6面	34土坑	5世紀後半	ヒユ属2個、タデ属1個、炭化米1個、イヌコウジュ属1個
2	（その2）	第6面	128井戸	12世紀	カナムグラ1個、ウメ核1個、クスノキ1個、マクワウリの仲間2個、タデ属2個、ハコベ属3個、ソジ属越冬芽4個
3	（その2）	第6面	128井戸	12世紀	ヒユ属3個、ナデシコ科2個、センダン1個、タデ属5個
4	（その2）	第6面	427井戸	5世紀前半	タデ属3個、イボクサ9個、カナムグラ2個
5	（その2）	第6面	460井戸	6世紀	タデ属33個、カナムグラ46個、ヒユ属6個、マクワウリの仲間2個、ナデシコ科1個、カタバミ2個、スモモ核3個、ヒョウタンの仲間1個、ノブドウ属1個、キイチゴ属1個、モモ核1個、モモ核半分1個
6	（その2）	第6面	442土坑	12世紀後半	タデ属1個
7	（その2）	第6面	1299井戸	6世紀後半	カナムグラ42個、イヌコウジュ属27個、ヤマグワ290個、ヤブジラミ11個、カタバミ11個、タデ属9個、ノブドウ属4個、カラスザンショウ1個、ヒユ属18個、メナモミ1個、ハコベ属7個、スミレ科4個、スゲ属2個

3．まとめ

出土した植物遺体で食用になる植物は、モモ、スモモ、ウメ、カラスザンショウ、草本のイネ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間などであり、食料残渣として遺構に残っていたと考えられる。

さて、5世紀から12世紀の遺構から出土した植物遺体の調査結果から、局地的ではあるが遺跡地の古環境を推定すると以下のようになる。

（1）畑作雑草としてのカナムグラ、ハコベといった比較的乾燥した場所にも生育する植物の検出から、遺跡付近に畑作地があった可能性が高いことを示唆している。

（2）水田雑草や水田周辺の湿地に生育したと考えられるタデ属は、比較的検出個体数が少ないため、この時期には（1）の結果と同じく、水田よりも畑作地が多かったことを実証している。

（3）畑では栽培植物である、ウメ、モモ、マクワウリ、ヒョウタン、ヤマグワなどが植えられていたと考えている。

（4）温帯から亜熱帯に分布するヤマグワが多数出土することから、山間部の桑畑を連想できる。現時点では養蚕用のクワが栽培されていたとは考えにくいが、暖温帯以南に分布するセンダンも含まれていることから、当時の気候として温暖な時期であったことも想像できる。

参考文献
大井次三郎・北川政夫　1983　『新日本植物誌　顕花編』至文堂　東京

第6章　まとめ

第1節　難波大道基礎分析

はじめに

難波大道は『記紀』に記載される南北直線道路で、1980年大和川今池遺跡調査会[1]及び1994年大阪府教育委員会の調査[2]でその存在が確認されている。難波大道は周知のとおり、古代国家の基盤を整える上で、統治システムを支える事業の一つであり、大和と難波を結ぶ計画的に配備された直線道路であった。この難波大道は大和川今池遺跡を縦貫しており、（その1）1996年調査区においても想定ライン上にあることから検出される予定であった。ところが、再三の精査作業にも関わらず、難波大道はついに検出されることなく終わった。

難波大道に関しては森村氏と藤田氏により文献史学も援用しながら詳細な検討がなされており、ここ

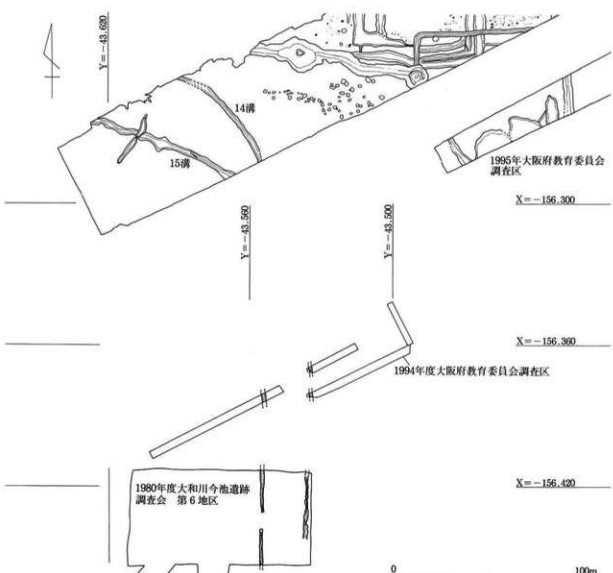


図283　難波大道既往の調査と（その1）調査区 (1/2000)

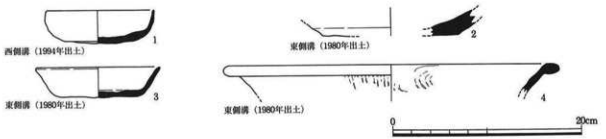


図284　難波大道両側溝出土遺物

では両氏の業績に裨益しつつ、難波大道の考古学的事実に眼を向け、（その１）調査で検出されなかった難波大道について、その原因を考えてみたい。その方法として、先に日本書紀の難波大道関連記事を提示し、既往の調査で難波大道がどのように認知されたかを明らかにしたうえで、その後（その１）調査区の比較検討を行うことにする。

日本書紀「難波大道」の関連記事と難波大道の比定

難波大道に関連して日本書紀にみえる記事は以下の資料である。

a）仁徳十四年条「是歳、作大道於京中。自南門直指之、至丹比邑。」

b）推古二十一年条「又自難波至京置大道。」

c）白雉４年条「修治處々大道」

c）の記事は前期難波宮に対応して、前後の文脈から百済・新羅の入朝に伴う官道整備の記事と考えられており、重要視されてきた記事である。

森村氏の難波大道の比定作業は以下の手順で行われた。まず、１）難波大道に関連する文献史学の成果をまとめ、次に２）難波大道ルートの復元作業をされた。これは地形・字名に配慮しつつ、難波宮と1980年に検出した難波大道の基礎分析を行ったものだった。一方、藤田氏は森村氏の成果及び文献史学の成果を含めて難波大道を総合的に検討し、1994年に検出した難波大道の位置付けを行われている。以下でこの２つの作業について記述してみよう。

難波大道の既往調査

1980年大和川今池遺跡調査会の調査

1978年の第１地区、1980年の第６地区、1980年の第７地区ではそれぞれ難波大道の側溝が検出された。特に、第６地区では「轍・たたきしめ・側溝肩の杭」はないとされながらも、整地土及び難波大道両側溝が確認され、同時に既往調査の溝についても難波大道の両側溝として認知されるに至った。ここでは難波大道の設置について具体的な作業工程が復元されている。西側溝では、隆起のある地山について水平の削り取りを行い、その上に灰黄褐色粘質土をおいて整地し、側溝が掘り込まれる。東側溝でも部分的に未整地のままの箇所もあるが、西側溝部分と同じく整地がなされた後、側溝が掘られたようだ。整地層上面はT.P.＋8.5mである。

両側溝は幅0.4～2.0m、深さ0.05～0.2mで、全長40mが検出された。道部分の幅は17.2m～18.0mである。部分的に消滅しているところもあった。平面形は南北に直線的なところがあるが、溝掘形のラインは不整形ということができる。幅・深さともに最小値と最大値が大きく開くことから、最大値を基準とした場合には、相当の部分が削平されていたということができる。また、これは整地土上面が水平

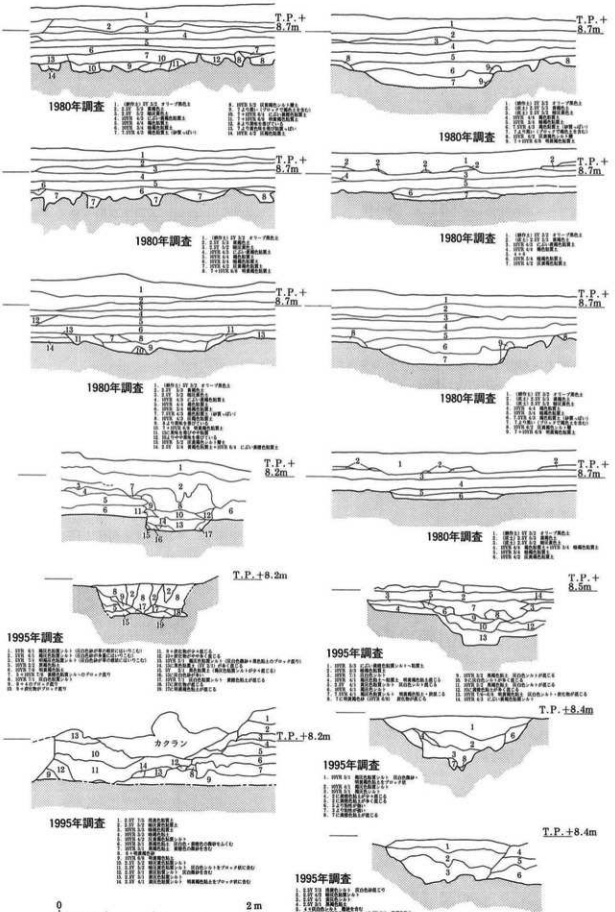


図285　難波大道両側溝断面図

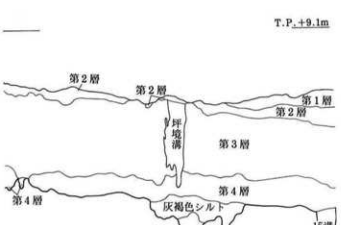


図286　（その１）南壁断面模式図（縦1/20、横1/400）

であったことからも指摘できよう。溝底部の標高はT.P.＋8.1mであり、ほぼフラットであったとされる。埋土は粘質土で下層にブロックをやや含むところがある。少なくとも最終堆積に流水性の堆積物は認められない。また、道路側において幅0.7m、高さ0.1mの堤状遺構が確認されている。出土遺物にはサヌカイト製石匙・石鏃が東側溝から出土したほか、陶邑Ⅲ－２段階とされる坏身・甕などが出土した。

1994年大阪府教育委員会の調査

1994年に大阪府教育委員会の藤田氏が行われた調査（以下、1994年調査）は（その１）から南へ80mにあたり、幅８mの北東から南西にかけての細長い調査区が設けられた。1980年の調査区からは北へ32mの位置にあたる。

東側溝は94－３区と94－２区の２箇所で検出された。94－３区で検出された東側溝は幅1.0m、深さ0.4mである。南北1.5m分が検出された。平面形は直線的ではなく不整形。溝の掘り込みはT.P.＋8.2mである。溝最深部はT.P.＋7.6mを測る。溝底部から灰白色微砂、褐灰色シルト、灰白色シルトの順に堆積する。94－２区で検出された東側溝は南北2.4m分が検出された溝の掘り込みが灰黄褐色粘質シルトからで、掘り込み面の標高はT.P.＋8.3mである。溝最深部はT.P.＋7.9mを測る。また、溝底の凹凸が顕著である。

西側溝は94－３区で検出された。幅1.5m、深さ0.2～0.5mである。平面形は東側溝と同じく直線的ではなく不整形である。南北３m分が検出された。溝の掘り込みは整地土から行われており、検出面の標高はT.P.＋8.4mである。埋土は褐灰色粘質シルトを基本とする。陶邑編年Ⅲ－２段階の坏身が「溝肩に投げ込まれたような状態」で出土した。また、側溝が埋没した後、掘り込まれたピットから銅製の鈴が出土している。整地土は灰白色微砂～シルトで大道設置時期の整地土とされる。溝最深部はT.P.＋7.6～7.9mである。溝の検出面はT.P.＋8.3m。溝底面の標高は設定された断面観察用の畦によれば北端がT.P.＋7.9m、中央がT.P.＋7.9m、南端はT.P.＋8.2mと北側が低い。ただし、溝底面は凹凸が顕著である。

藤田氏は1994年調査で検出した難波大道を「雨水排水機能程度」とされ、掘り込み面はT.P.＋8.4mであるが深さは北側が深いとされた。そして、整地土は溝掘削土のシルトとされ、道の幅を18.5mに復元された。

難波大道に関連して既往調査で確認された事実は、

１）両側溝（1980年・1994年調査）

２）整地土（1980年・1994年調査）

３）堤状遺構（1980年）

である。溝検出面の標高はT.P.＋8.5m（1980年）からT.P.＋8.4m（1994年）と0.1m低くなっている。側溝は整地土上面から掘り込まれ、底面には凹凸がある点で共通し、北側へ向かうほど低くなるよ

うだ。埋土は粘質土（シルト）という点で共通し、流水性の堆積物はみられない。出土遺物は陶邑編年Ⅲ－2段階に位置づけられる須恵器と、土師器細片である。

道路における側溝機能は排水・境界（土地区画）の明示・灌漑等の機能が考えられ、第1章の既往調査で記述した通り、大和川今池遺跡において溝の検出が顕著になるのは次の8世紀の段階である。

これらを踏まえた上で、次に（その1）の検討を行う。

（その1）調査と既往調査の比較

Y＝－43.535～Y＝－43.552内で難波大道の検出が想定された（その1）調査区は1994年調査区から80～100m北に離れる。ここでは上記1）～3）に該当する遺構は確認できなかった。同範囲内の層序に関しては第4章基本層序の項目で記述を行ったため、ここでは改めて記述しない。最終調査面である地山の標高はT.P.＋8.2mであり、1980・1994年調査の両側溝の掘り込みが行われた整地土上面の標高より低いことが分かる。当該期の出土遺物に関しても（その1・2）を通じて包含層資料の一部に認められたのみで積極的には評価できない。ただし、（その1）及び（その2）ではやや前後するものの当該期の遺構を確認し、1995年の大阪府教育委員会の調査（以下、1995年調査）では井戸が飛鳥時代の遺構として確認されて（その1・2）及び1995年調査区を中心とした遺構・遺物の分布を第1章既往の調査で指摘しており、当該期の生活痕跡は皆無というわけではない。ただし、出土遺物の定量分析は行っていないため、当該期の遺構・遺物の意義については今後の課題として残すところとなった。

また、難波大道は検出されなかったものの、摂津と河内の国境、今の堺市と松原市の市境では15世紀以降と考える坪境溝が検出された。本文中で指摘した通り、複数回の掘り直しがなされており、その内地山層まで掘り直される段階もあったことから、より以前の段階がどこまで遡りうるか不明であるものの当地に境界性の意識が皆無ではなかったことが指摘できよう。ちなみに、（その1）地山直上で検出された溝は14溝と15溝である。両者から少量の遺物が出土しており、年代を須恵器に依るかぎり消極的に6世紀以降の年代が与えられ、この時14溝がやや新しい。15溝は灰白色シルトから掘り込まれており、調査当初、難波大道西側溝かと考えた溝であるが、Y軸は大きくずれ、北西に円弧を描いており該当の溝ではない。

（その1）における難波大道の評価

以上の検討を踏まえて、調査担当者の見解を含めたうえで、（その1）の調査で難波大道が検出されなかった理由は以下の2点を原因と考えた。

1）側溝機能を重視しない、道のみの存在であった。

根拠－両側溝が検出されなかったこと。

2）削平されていた。

根拠－1980年調査及び1994年調査の難波大道検出標高はT.P.＋8.3mを上下し、これは（その1）調査区では第3層内にあたる。第3層の形成は中世後半期以降であり、整地土及び両側溝が検出されない事実について削平を主因として考える。（その2）調査区で検出した22溝以南がこの第3層で削平されていることが判明し、（その1）調査区東端で検出した古墳時代土坑も遺構検出面までの削平と第3層等に由来する踏み込みを確認しており、第3層による広範囲の削平を想定できよう。ただし、1980年から1994年の調査区の検出面は10㎝の比高があり、これを1994年調査区と（その1）調査区の距離間の変

数として一定に下がっていったとすると（その１）ではT.P.＋8.0mとなり、溝の底となりが（その１）で残らなかったのかという問題がこの説を弱くする事実となろうか。

難波大道は本遺跡内でも一大画期となる遺構であり、その後の土地開発・条里を考える上でも重要であるが、（その１）の調査では検出されなかったのは上記の１)、２）に理由を考えた。１）については単に想起を前提としているため根拠があるわけではない。

今後、難波大道は大阪市側および1994年調査の空間地、特に（その１）調査区に接した南側で発掘調査されることにより、今回の調査成果の検証が望まれる。

本来であれば最新の文献史学の研究成果を踏まえつつ、他地域との比較検討など難波大道に関係して何らかの理論的作業を行うべきであったが、（その１）における難波大道の非在理由を考古学的事実にのみ着目して検討を行った。今後、難波大道に関して問題意識を持ち続けることで、（その１）での調査の責を果たしたいと思う。

註

条里・難波大道に関しての基本的な文献は第１章の字名・条里に示した。

１）森村健一編　1981『大和川・今池遺跡Ⅲ―第６地区・「古道」発掘調査報告書』大和川・今池遺跡調査会

２）藤田道子　1995『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅻ大阪府教育委員会

第2節　大和川今池遺跡密集土坑の事例分析

はじめに

一定の範囲内に営まれる土坑の集合は、群集土坑あるいは密集土坑とよばれる。この土坑の集まりは、古墳時代前期から平安時代にかけて存在し、それぞれ短期あるいは長期に営まれる。通常、墓あるいは粘土取り穴・不明土坑として報告されることが多く、原口正三氏[1]が高槻市弧塚古墳群を墓制として論じて以来長く検討されてきた。

密集土坑・群集土坑の名称は、群集土坑は古墳時代後期の「群集」墳を想起しやすく、土壙群が古墳時代墓制のヒエラルヒーの中で末端に位置づけられることから、呼称としての「群集」はあらかじめ古墳研究の歴史的解釈を土坑群の理解に敷衍させる可能性が高い。つまり群集と名付けたところですでに史的解釈を施してしまった感がある。これに対し、密集土坑は土坑の単なる存在形態（有様）を示す言葉として把握でき、先入観による土坑群のイメージの固定は行われないため本稿では密集土坑の用語を採用する。また、「土壙」の壙の字義には墓の意味があり、「土坑」の坑は穴の字義であることから、後者の「土坑」を使用したい。

この密集土坑について何をもって密集すると見做し、これを称するかという問題がある。字義に則って一定の面積に限定し、土坑の数量を定めたとしても土坑・土坑群には個性があり、画一的な評価を下すことができない以上、土坑群全体の評価についても数量的定義は必ずしも有効ではない。しかも、密集の言葉が示す通り、密集は数量名詞ではなく、文字通り解釈すれば密に集まった土坑以上の意味はない。勿論、面積・数量の限定は無視できない観察視点ではある。が、ここでは密集土坑を一定範囲内に有機的関係を持ちつつ同時代的に存在する土坑のまとまりあるいは連続して営まれた土坑の集合と定義しておきたい。言い換えると、密集土坑とは、空間・時間制限の中で土坑単体ではなく、周辺土坑と関連づけて解釈することが妥当な土坑の集合とすることができよう。この見解は密集現象をとらえる主体の感覚を重視するものであり、突き詰めれば密集土坑と複数の土坑の集まりの境界は極めて曖昧なものだ。

これに立脚して密集土坑を考えれば、密集土坑の評価とは土坑それぞれの個別分析と土坑群の全体についての総合分析に分けることができる。つまり、土坑に関して単数形で評価する場合が前者、複数形の土坑群で評価する場合が後者の議論となる。なお、ここでは、大和川今池遺跡（その1）で検出した古墳時代中期の土坑群の検討を行うため古墳時代を中心に論を進める。なお、本文中において森本氏が詳細に事実報告を記述されており、ここでは土坑理解の基礎分析と密集土坑解釈の主観的な選択に主眼を置いて記述を行う。

研究史と土坑の観察点

まず、密集土坑に関して研究史をまとめ、その作業を通じて土坑の分析視点を検証する。

密集土坑は既述のとおり墓制あるいは粘土取り穴のカテゴリーの中で解釈されてきている。研究の初期には、倒木痕も含めて論じられることも多かったが、類例が増えるに従い、墓制か粘土取りかと二極化して判断されることが多くなった。密集土坑は古墳時代研究の延長上で考えられることが多く、これは密集土坑の現象が当初古墳時代の現象として耳目を集めたことと、密集土坑が古墳時代階層社会[2]の中で論じやすいためでもあった。このため、密集土坑の研究史は性格不明の場合を除いて、墓制か粘土取り穴かという二者択一的な判断のいずれが有意かという問題に焦点が絞られて論じられてきたと言って

よい。密集土坑を墓制として論じた福永伸也氏[3]は密集土坑を一般庶民の墓として、前方後円墳の被葬者を頂点とした階層社会の末端に位置づけている。

一方、密集土坑を粘土取り穴として論じた京嶋氏[4]は長原遺跡で検出した弥生時代後期後半～庄内式期の密集土坑の検討を嚆矢として既報告の調査事例の再検討を行い、土壙墓説への批判を展開し、密集土坑に「整合的な理解」を目指して、粘土取り穴とする自説の考古学的根拠を民族事例でも補強しながら検討された。

京嶋氏はまず、作業前提として、自ら調査を行った長原遺跡の密集土坑を分析し、出土土器の分類、断面観察の所見から、土坑掘削の順序をＨ１区にはじまり、次に西にひろがり、弥生時代後期初頭にＩ調査区からⅢ調査区にいたって北のG区に及び、次いで、南部Ⅳ・Ⅴ区及び長原遺跡４次・86－60次調査地に中心を移し、それが後期末まで営まれた後、庄内式期には城山（その３）Ｉ区に少数認められるとして、密集土坑形成の過程を詳細に検討された。この際、土坑底面の標高と微地形の相関関係に注目し、これが粘土層の深度や層厚に由来するものとした。土坑の形成にはじまり、各土坑の観察点の提示など墓制として捉えられがちだった密集土坑の固定概念から自由に論じられた点で卓見であった。

後に、京嶋氏は分析視野を全国に広げて、墓制として論じられてきた密集土坑が実は粘土取り穴であるという自説を展開された。

京嶋氏が粘土取り穴説に示された根拠は以下のとおりである。

１）土坑の分布が地形・地質に規制される。

２）規格性がない。形状に関しても統一性がない。

３）出土遺物が少ない。出土状況は多様である。

表11　（その１）灰色シルト土坑一覧表

遺構番号	断面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	切り合い	遺構番号	断面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	切り合い
18	A２	0.36				43	A１	0.82	0.67	0.24	○
19	A２	0.57	0.46			44	A１	1.43	1.21	0.3	
20	A２	1.42	1.15	0.37		45	A１	1.66	1.31	0.19	
21	A１	1.14	1	0.34		46	A１	0.54		0.17	
22	A１	1.83	1	0.23		47	A１	0.92	0.32	0.19	
23	A１	1.38	1.3	0.23		48	A１	3	0.87	0.4	○
24	A２	0.7	0.7			49	A１	1.75	1.19	0.17	○
25	A２	0.94	0.7			50		1.66			○
26	A１	0.96	0.55	0		53		0.88	0.37	0.16	
27		0.78	0.64	0.48		57	E	0.42		0.05	
28		1.57	0.98	0.11	○	58		0.86	0.66	0.19	
29		Z0.68		0.33		59	B	0.82	0.77	0.14	
30	A１	2.4	1.51		○	60	E	0.35	0.2		
31	A１	Z1.85			○	61	E	0.35			○
32		0.81	0.65	0.55		64	A１	0.96	0.94	0.38	
33	B	1.4	1.33	0.11		65	E	Z0.35	Z0.67		○
34		0.58	0.54	0.24		66	A１	1.5	1.18	0.5	○
35	C	2.25	1.65	0.2		68	A１	Z2.00		0.19	○
36		0.72	0.64			68		Z0.62		0.19	○
37	B	1.03	0.81	0.28		71	A２	1.28	0.64	0.34	
38	A２	0.68	0.62	0.1		72	A２	2.43	1.27	0.32	
39	A２	1.31	0.91	0.16		84	C	1.37	1.35	0.16	
40	A１	1.8	1.76	0.32		54～56	A２	2.02		0.32	○
41		0.66	0.46	0.11		62・63	C	Z1.6	1.06		○
42	A２	1.59	1.09	0.34	○						

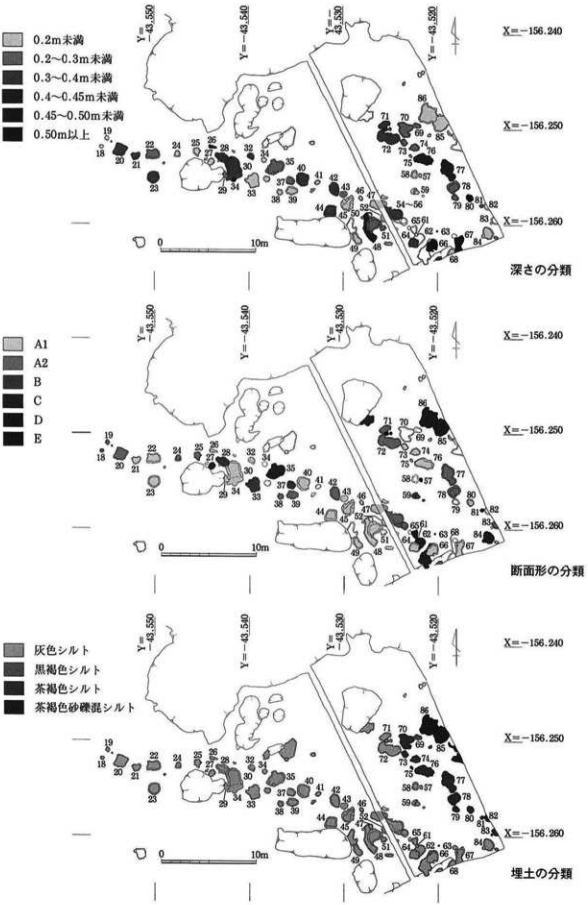


図287　（その１）土坑　深さ・断面形・埋土分類図

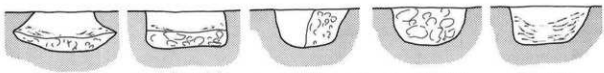


図288 土坑断面模式図

4）土坑掘削の道具が出土する場合がある。

5）窯業の盛んな地域にあることが多く、土坑群の存在は生産行為と連動する。

そして、弥生時代～古墳時代までの粘土採掘を自給的かつ伝統的な習俗に則った土器作りが、布留式期に衰退し、6世紀以後の再開を指摘された点が本論と関係のある部分であろう。京嶋氏が提出された密集土坑理解における理論的方法は、各地で密集土坑の事例が増加して、各遺跡単位で論じられる際の重要な視点となった。

以上が密集土坑の研究史の雑駁なまとめである。次に密集土坑の各説の考古学的根拠について絶対条件と十分条件を交えながら整理すると以下の通りになる。

a）墓制説

骨出土

葬送儀礼の道具（装置）の出土

高等生物脂肪酸検出

b）粘土取り穴説

既述した京嶋氏が指摘された条件と同じである。なお、出土遺物については粘土取り穴から出土する土器は地鎮め等土地改変に伴う祭祀行為として把握することが可能であり、完形土器出土＝墓制説と短絡はできない。

c）風倒木説

平・断面の形状・埋土が特異であり、事例が少ない頃は混同が多かった。一般に平面的には半円形の黒色系シルトと地山層が合わさって円形を呈し、埋土は黒色系シルトが地山層を巻き込む。

d）祭祀土坑説

祭祀性を認めた土坑一般の総称であり、通常は他遺跡との比較・祭祀関連遺物の出土が根拠となる。ただし、祭祀土坑とすることにより、意味不明＝magicalとして祭祀全般に問題が解消されることがあり、密集土坑の問題も例外ではない。

e）不明

特定解釈困難な場合。

d）祭祀土坑とe）不明に関してはa）とb）の条件に合致しない土坑であり、大和川今池遺跡の密集土坑の解釈を、本文での事実報告より解釈をより積極的に押し進める本論にあっては有意の条件を見極めることが基本的な作業となろう。なお、埋め戻しに伴うブロック土の形成は墓制及び粘土取り穴いずれにも認められる現象であるかぎり、どちらか一方のみの根拠にはならない。出土遺物の傾向にある差異・等質性についてもいずれかの説を根拠づける条件にはならない。また、大庭寺・伏尾遺跡[31]で検出された密集土坑のように脂肪酸分析を行った結果、「高等生物の脂肪酸」が検出される事例があり、同じ遺跡内同一地域にあっても墓制及び粘土取り穴の二極化によるどちらかの解釈が密集土坑形成の単一

の原因とする言説に終始できるわけではないことを示すものと考える。この際、各土坑の個別性を重視して全体の多様性を認めることが重要であり、密集するすべての土坑を一元的に理解することの困難が自覚される。すなわち、密集土坑の検討には各土坑の性格を整理して、各説の蓋然性について照合する要素があるだろう。このとき当然のことながら蓋然性は各領域に跨がって判断されねばならない場合がある。

分析手法（図287～289）

ここで密集土坑の各分析視点の抽出を行う。観察点を明確にしておくことで、密集土坑理解の視座を明らかにする。ここでは土坑分析の基本的な視点として京嶋氏の観察点を参考にする。京嶋氏の理論が基本的に粘土取り穴説であるため論点先取りされていないかという杞憂に対しては、土坑一般の属性分析手法が解釈には規制されない通有の手法であることを断っておこう。

密集土坑の分析視点は土坑の立地・平面形・法量・埋土・断面形状・形成過程の復元・密集形態（密集度・切りあい関係）・出土遺物内容・遺物出土状況がある。

これによって、大和川今池遺跡（その1）の密集土坑に対して行った分析作業を各項目ごとに示す。なお、以下の分析は形成・埋没過程をほぼ同時期と考えた灰色シルトを中心として行う。

1）平面規模は長軸・短軸の計測値を示した。円形の場合は直径を示す。（表11では長軸に記載）

2）平面形については円形・方形・不整形に分類した。なお、形状の一部に方形箇所がある場合はそれも分析対象とした。

3）土坑の深さの分類を行い、0.2m未満、0.2～0.3m未満、0.3～0.4m未満、0.45～0.5m未満、0.5m以上の5類とした。

4）調査所見をもとに埋土の分類を行い、灰色シルト、黒褐色シルト、茶褐色シルト、茶褐色砂礫混シルトの4類とした。なお、本文中の埋土記述を正としてここで行った埋土分類は土質の便宜的な分類の意味合いしかもたない。

5）断面の形状及び埋土の堆積環境を調査所見をもとに分類を行った。A類を上半灰色シルト・下半ブロック土とし、オーバーハングする土坑をA1類、オーバーハングしない土坑をA2類とした。B類は片側にブロック土の単位が認められた土坑、C類はブロック土のみの土坑、D類は灰色シルトのみの土坑、E類はその他の土坑である。なお、灰色シルトにはラミナが顕著な土坑が多い。

6）遺物の出土状況を調査所見をもとに、断面形状A類の灰色シルトにまとまって土器が出土した土坑とそれ以外に分けた。ただし、調査時にすべての土坑について土器出土状態を記録したわけではないので成果は若干の異同がある。

7）土坑のベースとなる地山層の検討

また、出土遺物については細片が多く、遺存状況が不良な個体が大半である。点数カウントを当初行ったが、土坑・出土遺物の傾向を抽出できないばかりではなく、点数が膨大になりかえって土坑本来の意味から遊離する

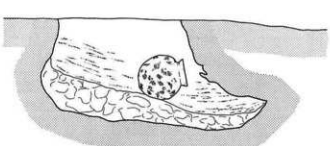


図289　A1類土坑断面模式図

結果となった。そこで、口縁部の抽出を行い、実測器具（マコ）を使用して傾きは任意に断面の形状を簡単に計測した。土器形状の線のみの表現となるが、比較的残りのよい土器資料との比較をこれで行い、各土坑の土器の出土傾向を分析した。出土した土器資料については本文中で詳述したためここでは改めて行わないが、表12に示した。

密集土坑の分析結果

上記の分析を行った結果、以下の結論が得られた。

1）長軸・短軸の検討は有意な結果がなかった。土坑の大半は不整形なためである。

2）平面形による分類は不整形な土坑が多いため有意な結果はなかった。ただし、直径約0.15～0.35mの小円形土坑については不整形土坑を切るという現象をもち、出土遺物は土師器細片で、埋土も灰色シルトの単一土層であり、形成時期が一段階遅れることが指摘できる。

3）深さによる分類で深浅による傾向は看取できなかった。

4）埋土による分類では、形成時期の違うことが指摘できた。埋土分類は基本的に遺構形成期に対応しており、灰色シルトとした土坑は北西から南東にかけて集中する。北東側の土坑は6世紀代の須恵器などを含んでおり形成時期は同期と認められないものも多い。また、3）の結果及び遺構検出面上面の包含層出土遺物の検討を含めて上部の削平が認められた。

5）断面の形状に関しては地山ブロック土の埋め戻しが一様ではないことが指摘できる。遺物の出土は上半のラミナが顕著な灰色シルトからまとまった個体が出土しており、下半の地山ブロック土から

表12　古墳時代土坑出土遺物一覧表

遺構番号	土師器壺	甕口縁	甕体部	甑	短脚壺	長脚壺	小型丸底壺	高坏	有脚高坏	鉢型高坏	小型丸底鉢	鉢	土師器体部	須恵器	不明	鍛冶
19				○口縁有段				○脚部								
20		○						○?								
21																
22		○											○			
26			○	○1完形				○					○			
30	○			○体部1・底部1・口縁1				○脚部1・坏部1	○					坏身		○
31		○	○	○				○	○			○? 把手				○
33				○				○						坏蓋	○	
36													○			
37				○												
38								○坏部								
39		○2		○				○	○							
40		○	○	○4		○?		○3						坏蓋		○
40	○															○
41				○口縁部												
42		○													○	
43		○?		○	○									壺・坏蓋6ヶ中～後		
44				○2												
45				○2												
49													○			
50													○			○
54～56																
54～56	○			○										壺体部		○
57																
58																
64		○		○									○			○
64	○	○	○											壺体部		○
65																
66	○	○4		○	○5		○2	○						壺体部		○
67	○	○2		○										壺体部		○
68		○														
69																
70	○2				○8					○口縁						
71		○						○	○					壺体部	○	
72			○	○												
74				○				○					体部	壺体部		
78				○									○			○
79																
80	○	○1	○3 完形		○3			○脚部								○
82					○3											
83	○	○		○	○口縁				○							○
84																
85								○脚部					○	坏蓋		
86														壺2・坏身		
203		3		○	○2?		○		○					坏身・脚台部・初期須恵器無蓋高坏・坏蓋		

は個体の識別の困難な土師器細片が出土する傾向がある。（図289）

6）A類の灰色シルトから完形土器を含めた土器がまとまって出土した土坑は5基あった。ちなみにA類の埋土パターンは全体の44%である。先にふれた通り、この土器の出土パターンが本密集土坑の一つの特徴と言えよう。また、土師器甕・壺などは土坑中央から出土した資料があり、すべてではないが、これらの土坑の中に土器の埋納行為があったことが示唆できる。

7）土坑は礫層上面に堆積した黄色粘質シルトに掘り込まれており、今回の調査区内で際立った特徴はない。この黄色粘質シルトは下層ほど砂礫の含有率は高い。この下には白色粘質シルトがあるが遺構はこれを掘り込まない。また、地山の標高はおおむねT.P.+8.3mでありほぼ平坦面に形成される。

出土遺物の組成は細片に関しては可能な限り個体識別を行って表12に示した。器種は土師器甕・長頸壺・短頸壺・高坏・小型丸底壺・甑？が出土した。壺に関しては頸部と口縁の接合部が明瞭ではないために不明のものが多い。これらの資料は器形は扁平、厚ぼったく、焼成不良、内・外面調整も粗略にしか行われない個体が多かった。灰色シルトの土坑から須恵器の出土はない。土師器甕に関しては土圧により押圧されていたことと土中での劣化が顕著であったために完形品であったかどうかの判断は不明といわざるを得ないが、完形品に近い資料を「完」を接頭語として表に示した。土師器甕・長頸壺は被熱を受けた資料が多く実用・非実用の判断は兎も角、埋納前に使用した可能性がある。本文中に指摘のあったとおり土師器甕の相対的な出土量が多いといえよう。

大和川今池遺跡の密集土坑事例の評価

以上の検討を通じて（その1）で検出した密集土坑の事例はどのように位置づけられるであろうか。ここでは、これまで「大和川今池遺跡の密集土坑」として検討されてきた、大和川今池遺跡調査会[6]が第4地区（以下第4地区）で検出した密集土坑について、両者の比較を行った後に、先に提示した各説について結論を示す。

第4地区では総数200基の土坑が検出された。平面形は円形・楕円形・不整形があり、埋土は黒色粘質土を基本とする。深さはおおむね0.1～0.2mである。検出面はT.P.+8.7～8.8mである。土坑の断面形状が地山と不整合な面をなさず基本的にU字形である。出土遺物には須恵器・黒色土器・瓦器があり、時期的には6世紀代の遺物が中心となる。土坑と遺構検出面を覆った土層は連続しない。森村氏によりこれらの土坑を耕作関連として位置づけがなされている。

（その1）で検出した灰色シルトを基本とした密集土坑とは時期・遺構の状況等共通するところはないが、この土坑より北東にある（その1）85・86土坑及び（その2）56土坑と記述から判断した属性は似る。つまり、灰色シルトを基本とした密集土坑と第4地区の土坑の性格は同列に論ずることはできないと考える。時期的にも6世紀以降に掘削されており、中世段階の土坑もあるところから密集形態を以って画一的に第4地区土坑の評価はできない。両密集土坑の同質性より差異こそ顕著である。

次に、（その1）密集土坑に関して、a）～e）の各説の検討を行う。墓制として考えた場合、骨は検出しておらず、葬送に具体的に結びつく出土遺物はない。脂肪酸分析に関してはこれを行っていないため断定はできない。埋土はA類で下半がブロック土であり、人為的に埋め戻されたことを想定しており、ここに遺骸が葬られた可能性がある。土師器甕などを墓標・副葬品とみたてることも可能である。ただし、完全に埋め戻さずに、あるいは、土饅頭を築いてその上に土器を献納したとし、内部腐朽後の

陥没により、ラミナがあるA類が形成されたとすることは埋没に至るまで土坑が埋まらないという長期の管理が必要であり非現実的である。

粘土取り穴として考えた場合は、土坑の分布は、北西から南東にかけて列状をなしており、土坑掘削の場所の選定が行われたのかもしれない。地形・地質による規制については黄色粘質シルトをベースとした以外に、（その1・2）の調査区内で地形・地質の突出した条件はない。平面形に関しては不整形な土坑が多く、円形土坑を除き、一部に隅丸方形状を示す土坑もある。断面の形状は規則性と認めるか否かの問題はあるがA類の土坑が全体の44%を占める。埋土は灰色シルト埋土の土坑が列状をなして集中することが指摘できる。土坑の埋土上半を特徴づけるA類の灰色シルトは水成堆積層であり、A1類ではオーバーハングの頂点と接点をもっており、その成因は不明である。切り合い関係をもつ土坑は円形土坑を除いて20基で、全体の25%である。この数字は切り合い関係をもつ土坑を複数回を含めているから、実際はその半分12%以下である。粘土採掘の効率性を考えた場合には切り合い関係は少なければ少ないほどよい。しかし、切り合い関係を好まないという現象を以て粘土取り穴とすることは出来ない。墓制も当然そうなのだから。また、出土遺物の器種構成は全体としては多様であり、土坑を個別に見た場合は甕・壺・高坏などに偏りがある。高坏の脚部は遺存度が影響していようが、数量的な把握は坏部分より多数である。遺物量としては66土坑が突出して出土していることが指摘できる。

以上の検討により、墓制としての可能性も否定はできないが、粘土取り穴の理解に合致する点が多いと考える。つまり、筆者は後者の粘土取り穴の蓋然性の方をより積極的に評価している。

森本氏が本文中で指摘されたとおり、密集土坑が形成された延長上には16・17土坑（井戸）があり、両者を連続して考えた場合、16・17土坑と密集土坑の形成に当時の生活・政治的条件が影響した可能性がある。土坑形成の時期差の問題を小さく考えた場合、初期須恵器の出土が確実な16・17土坑の土器資料の密集土坑との質・量的差異はどのように解釈されるか。古墳時代の祭祀体系として古墳がその頂点にあるのはいうまでもない。そこで古墳時代の祭祀体系における各祭祀の重要度・差異を問題として、古墳祭祀＞井戸祭祀＞粘土取り穴祭祀の順に当時の祭祀秩序が反映した結果、各祭祀の道具・装置に違いが生じたのではないだろうか。以上は、16・17土坑と関連づけて密集土坑を考えた場合の想像である。

今回行った作業は出土した土師器の細片を目の前にした、土坑理解のための一つの作業として認知されたい。今後、（その1）調査区の南東部を掘ることで、密集土坑の続きが検出されるはずであり、その時総合的な評価が可能となるはずである。

註

1）原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』1－1

2）都出比呂志1991「前方項円墳体制の提唱」『日本史研究』343号

3）福永伸哉1989「古墳時代の共同墓地－密集土壙群の評価について－」『待兼山論叢』第23号、1989「共同墓地」『古代史復元－古墳時代の王と民衆』第6巻

4）京嶋覚1991「第3章遺構と遺物の検討－第1節群集土壙の性格と意義－」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、京嶋覚1995「群集土壙の再評価－集団墓説への批判－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3－設立10周年論集－』また、粘土取り穴として検討した論文に竹原一彦1889「第2節　三宅遺跡の土壙群について」『京都府遺跡発掘調査報告書』第18冊がある。また、粘土取りに関して栗原文蔵1998「粘土及び用土の採掘」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻を参考とさせて頂いた。

5）市本芳三1994「大庭寺遺跡検出の『密集型土壙群』について」『大坂文化財研究』第6号、中野益男・中野寛子・明瀬雅子・長田正宏1994「大庭寺遺跡から出土した土壙に残存する脂肪の分析」『大阪文化財研究』第6号

6）森村健一編1980『大和川・今池遺跡Ⅱ―第3・4・5発掘調査報告』大和川・今池遺跡調査会

第３節　軒瓦の基礎分析

はじめに

大和川今池遺跡ではその調査の初期から瓦の出土が少量ながらも継続してあった。1995年の調査[1]では Ⅲ区とされた調査区から瓦溜り２基が検出され、そこから大量の瓦が出土したことにより、同地に遺存した「観音堂」の字名とともに衆目を集めることになり、「観音堂廃寺」とする寺院がにわかに実在性を帯びることとなった。「観音堂」の字名はこれまでにも寺院の存在が指摘されてきたところであり、その考古学的事実の確認がなされたのである。以上は前章までに繰り返し述べてきたことである。

ここでは観音堂廃寺に創建期から密接に関係したと考える軒瓦及び道具瓦、丸・平瓦に焦点をあててその基礎分析を行うことにする。1995年大阪府教育委員会の調査では第４章第３節で記述した通り、概要と本報告で西口氏と地村氏により詳細に検討されており、これを素地として報告を行うことにし、成果はそこに包括されるものである。なお、先に指摘したとおり、西口氏と地村氏による軒瓦の分類案は、西口氏の分類の細分が地村氏の分類案であり、（その１・２）で出土した軒瓦Ｃ３型式の認識などの点で有効であったため、地村氏の分類に従って作業を行い、記述中の分類記号はすべて地村氏による。なお、道具瓦は鬼瓦と塼であり、熨斗瓦などの分類は行っていない。分析作業としては、まず、ａ）（その１・２）で出土した軒瓦・道具瓦の概括を行い、ｂ）丸・平瓦の分布傾向を明らかにした後、ｃ）大和川今池遺跡で出土した軒瓦の集成を行うことにする。本文の軒瓦型式名はｃ）の作業を前提にする。本来ならば製作技法・他事例の比較等について多角的に論じなければならないが、問題の局在的な分析となることを予め断っておく。

（その１）軒瓦・道具瓦

軒丸瓦は10点（内、近世１点）、軒平瓦は12点（内、近世１点）である。また、道具瓦は鬼瓦２点・塼１点が出土した（表13）。

軒丸瓦は、Ａ１型式１点、Ｃ１型式１点、Ｃ４型式２点、単弁蓮華文１点、複弁蓮華文１点である。軒丸瓦は２溝・土坑から５点が出土し、包含層資料はいずれも２溝・土坑の南側から出土している。なお、単弁蓮華文・複弁蓮華文軒丸瓦は既往調査にない資料である。軒平瓦はＢ２型式は１点、Ｂ３型式は２点、Ｂ４型式は５点が出土した。内、一点は瓦当面を欠損しており、分類できないが製作技法の特徴からＣ型式と判断できる。中央飾りが菱形に２点珠文を配す軒平瓦も既往調査にはない資料である。軒平瓦は６土坑及び２溝からの出土が多数を占め、包含層資料も２溝・土坑と関連して把握できる。鬼瓦は２点出土した。分布は軒瓦の解釈と変わるところはない。

（その２）軒瓦・道具瓦

軒丸瓦は43点（内、近世４点）、軒平瓦は39点出土した。道具瓦は鬼瓦７点（内、近世１点）が出土した。軒丸瓦は、Ａ型式12点、Ｃ１型式13点、Ｃ２型式８点、Ｃ３型式１点、Ｃ４型式１点、Ｃ７型式１点、Ｃ８型式１点である。瓦当面が欠損した個体があるが、製法からみてＣ型式に含まれると考える。出土した遺構は（その１）の２溝と関連して把握できる２溝・11落ち、22溝、その他区画溝・井戸・ピットの中世遺構から出土した。

軒平瓦はＢ１型式８点、Ｂ２型式３点、Ｂ３型式10点、Ｂ４型式６点、Ｃ型式２点が出土した。出土した遺構は１粘土取り穴、２溝・11落ち、22溝、その他中世の溝・井戸などに伴って出土した。軒平瓦には隅切瓦が４点含まれ、焼成前に平坦に面を整える隅切瓦と凸凹面から打敲を加えて面を整える瓦と

表13　（その1・2）軒・道具瓦一覧表

種類	報告	整理	遺構	分類	備考	調査年次	種類	報告	整理	遺構	分類	備考	調査年次
軒丸瓦		1	2層	C1		(その1)	軒丸瓦		45	22	C1	全体摩滅	(その2)
軒丸瓦	31	2	2層	C6?	瓦当面被熱	(その1)	軒平瓦	34	1	2土坑・溝	E		(その1)
軒丸瓦		3	2土坑・溝	c4		(その1)	軒平瓦	33	2	2土坑・溝	c		(その1)
軒丸瓦	32	4	2層	近世巴		(その1)	軒平瓦	26	3	6土坑	B4		(その1)
軒丸瓦		5	2層	近世巴		(その1)	軒平瓦	24	4	6土坑	B2	全体摩滅	(その1)
軒丸瓦	30	6	2層	C7		(その1)	軒平瓦		5	105	B4		(その1)
軒丸瓦		7	3層	B4		(その1)	軒平瓦		6	第3層（2層を含む）	B4		(その1)
軒丸瓦		8	54	近世鳥衾	道具瓦	(その1)	軒平瓦	17	7	2土坑・溝	B4		(その1)
軒丸瓦	16	9	2土坑・溝	A	瓦当面被熱	(その1)	軒平瓦	19	8	2土坑・溝	B3		(その1)
軒丸瓦	15	10	2土坑・溝	E		(その1)	軒平瓦		9	2土坑・溝	C型式か?	瓦当面欠損	(その1)
軒丸瓦		11	2土坑・溝[illegible]	D		(その1)	軒平瓦	25	10	6土坑	B3		(その1)
軒丸瓦		1	攪乱	近世巴		(その2)	軒平瓦	18	11	2土坑・溝	B4	瓦当面・凹凸割れ口被熱	(その1)
軒丸瓦		2	攪乱	近世巴		(その2)	軒平瓦		12	171	近世珠文		(その1)
軒丸瓦		3	攪乱	近世巴		(その2)	軒平瓦		13	第4面精査	近世平瓦		(その1)
軒丸瓦		4	1	近世桟瓦	道具瓦	(その2)	軒平瓦	227	1	1	B2	瓦当面・凹凸被熱	(その2)
軒丸瓦	474	5	92	C1		(その2)	軒平瓦	479	2	120+140	B2	瓦当面凹面先端被熱	(その2)
軒丸瓦	467	6	65	C2		(その2)	軒平瓦	472	3	127	B3	凹凸被熱	(その2)
軒丸瓦		7	65	C2		(その2)	軒平瓦	471	4	65	B1		(その2)
軒丸瓦	469	8	66	A		(その2)	軒平瓦		5	127	B3	隅切	(その2)
軒丸瓦		9	120	C2	瓦当面・凹面被熱	(その2)	軒平瓦	624	6	170	B1		(その2)
軒丸瓦	470	10	86	C2	瓦当面・凹面被熱	(その2)	軒平瓦		7	92	B3	瓦当面被熱	(その2)
軒丸瓦	466	11	127	A		(その2)	軒平瓦	478	8	487	B3		(その2)
軒丸瓦	473	12	92	C3		(その2)	軒平瓦	925	9	601	B4		(その2)
軒丸瓦		13	92	A		(その2)	軒平瓦		10	601	B1		(その2)
軒丸瓦	477	14	487	C1		(その2)	軒平瓦		11	601	B4		(その2)
軒丸瓦	476	15	487	C1		(その2)	軒平瓦	625	12	170	B1		(その2)
軒丸瓦		16	601	C1		(その2)	軒平瓦	228	13	11	B1	隅切・凸面・割れ口被熱	(その2)
軒丸瓦	927	17	601	C1	瓦当面・凹凸面断面被熱	(その2)	軒平瓦	230	14	11	B1	隅切	(その2)
軒丸瓦		18	143	A		(その2)	軒平瓦	249	15	22	B1		(その2)
軒丸瓦	1001	19	503	C2		(その2)	軒平瓦		16	22	B4		(その2)
軒丸瓦		20	57	C1		(その2)	軒平瓦		17	127	B3		(その2)
軒丸瓦		21	11	A	全体摩滅	(その2)	軒平瓦		18	457	B3	瓦当面被熱	(その2)
軒丸瓦	959	22	1451	A		(その2)	軒平瓦	178	19	2層	B4	凹面・瓦当面被熱	(その2)
軒丸瓦		23	504	C1		(その2)	軒平瓦		20	86	B3		(その2)
軒丸瓦	229	24	11	C2		(その2)	軒平瓦		21	2	B4		(その2)
軒丸瓦	475	25	458	A		(その2)	軒平瓦		22	11	B3	摩滅	(その2)
軒丸瓦		26	458	C型式か?	瓦当面欠損　割れ口・凸面被熱	(その2)	軒平瓦		23	22	B3	凸面被熱	(その2)
軒丸瓦		27	22	C2		(その2)	軒平瓦		24	120	B4	瓦当面被熱	(その2)
軒丸瓦	468	28	65	A		(その2)	軒平瓦		25	520	C	隅切	(その2)
軒丸瓦		29	65	A	全体摩滅	(その2)	軒平瓦		26	5層	B2	凹面被熱瓦当面被熱隅切り部被熱	(その2)
軒丸瓦	592	30	129	A		(その2)	軒平瓦		27	601	B3		(その2)
軒丸瓦	445	31	457	C1	瓦当面・珠文外れた後・凸瓦当面割れ口被熱	(その2)	軒平瓦		28	457	B1	摩滅	(その2)
道具瓦		32	攪乱	近世隅瓦		(その2)	軒平瓦		29	2	C		(その2)
軒丸瓦	204	33	4層	C2		(その2)	道具瓦		1	第3層	丸瓦		(その1)
軒丸瓦		34	4層	C1	全体摩滅	(その2)	道具瓦		2	54	丸瓦		(その1)
軒丸瓦		35	5層	A		(その2)	道具瓦		3	2土坑・溝			(その1)
軒丸瓦		36	22	A		(その2)	道具瓦		1	66	丸瓦		(その2)
軒丸瓦		37	22	A		(その2)	道具瓦	936	2	601	丸瓦		(その2)
軒丸瓦		38	22	C4		(その2)	道具瓦		3	11	転用円形瓦		(その2)
軒丸瓦		39	2	C2	全体摩滅	(その2)	道具瓦		4	1層	近世丸瓦		(その2)
軒丸瓦		40	2	C1	全体摩滅	(その2)	道具瓦	206	5	4層	丸瓦		(その2)
軒丸瓦		41	22	C1		(その2)	道具瓦		6	11	丸瓦		(その2)
軒丸瓦		42	127	C1		(その2)	道具瓦		7	5層	丸瓦		(その2)
軒丸瓦		43	5層	C1		(その2)	道具瓦		8	65	丸瓦		(その2)
軒丸瓦		44	2	近世巴文		(その2)	道具瓦		9	22	丸瓦		(その2)

2タイプあった。隅切瓦が多い点が1995年調査及び（その1）とは違う（その2）特徴の一つである。鬼瓦は7点出土した。分布の傾向は軒瓦と同じである。また、平瓦を転用し円形にした瓦も出土している。

22溝は埋没の最終段階に周辺が耕作地帯であったことが、区画内部で検出した溝群と土層断面の検討を根拠として推測できるが、ここに丸・平瓦を含めた分布が集中することと1995年調査で検出された1・2溝や井戸等から出土した瓦を重視すると観音堂廃寺の消長は時間的断絶ではなく、構築物としての再編を経て単に空間的断絶という点で＞形に衰微した可能性もある。

被熱・摩滅痕跡

（その1・2）で出土した軒瓦には被熱痕跡のある軒瓦があった。被熱した箇所を仔細に観察すれば、軒丸瓦では凹凸面両方1点、凸面2点、凹面1点、軒平瓦では凹凸面両方3点、凸面1点、凹面3点であり、点数が少ないため比較の対象にならないが、強弁すれば軒丸瓦は凸面、軒平瓦は凹面に被熱痕跡が多い。ただし、割れ口断面や瓦当面文様が剥がれた箇所に被熱のある個体もあった。C7型式とした個体（31）は近世に位置づけており、このため被熱という属性のみですべての軒瓦に同一の視点でその意味は外延させることができない。

また、摩滅痕跡については当然の結果ではあるが、時期の新しい段階の遺構出土の個体ほどその移動に比例して顕著である。

表14　1995年調査・（その1・2）軒瓦点数

型式	1995年調査	（その1）	（その2）	合計
A	50	1	13	64
B	5		1	6
C1	22	1	13	36
C2	13		9	22
C3	2		1	3
C4	21	2	1	24
C5	1			1
C6	1		1?	2
C7			1	1
D		1		1
E		1		1
合計	115	6	40	161
軒平瓦				
A	1			1
B1	17		8	25
B2	8	1	3	12
B3	10	2	10	22
B4	5	5	6	16
B5	4			4
B6	4			4
B7	6			6
C	9	1	2	12
D	1			1
E			1	1
合計	65	9	30	104

1995年調査との総合

既述のとおり、軒瓦の点数は1995年調査の方が（その1・2）よりも多い。長期使用に耐え再利用も行われる瓦の出土量をそのまま当時の観音堂廃寺の姿影と短絡することはできないが、当面この量比が当時の実像を如実に反映するものとして論じることにしたい。

軒丸瓦は総計161点が出土した。A型式とC1型式の突出が指摘できるが、（その2）では両者は同数である。A型式は計64点出土しており、全体では一番多い。創建期に関わる瓦であり、堂宇を構築するに際し、他の軒丸瓦より占める割合は高い。B型式は梵字文軒丸瓦であり、計6点が出土した。量的には少なく、屋瓦として用いられるに際し、独特の箇所に用いられた可能性がある。C1型式は計36点である。A型式と同期かさらに遡る段階の軒丸瓦とされ、A型式との和は99点である。量比はA型式の方が圧倒的に多いが、瓦当面の依存率からいえば立体的なC1型式は残りが悪く、それに対しA型式は瓦当面が平面的でありこれが遺存点数に影響した可能性もあながち無視できないと考える。C2型式は計21点出土しており、創建期からやや時期を経た段階の軒丸瓦として注目できよう。C3型式はC5型式以降よりも数量がやや多く補修瓦として位置づけることができるかもしれない。C4型式は計24点出土

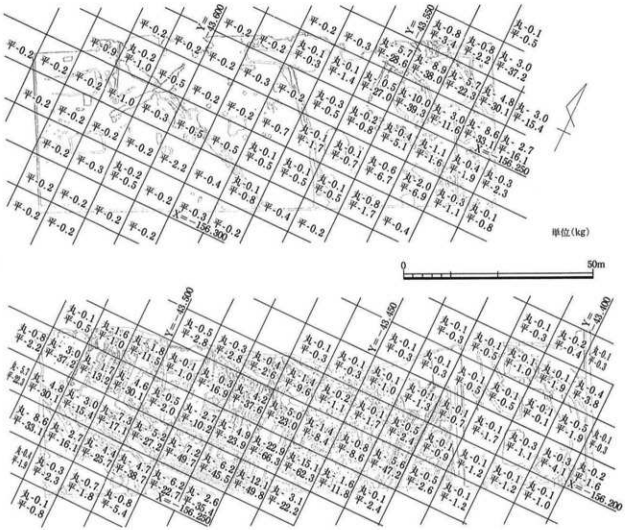


図290　丸・平瓦重量分布図

した。観音堂廃寺の過渡期であり、ここに一つの画期が見いだせよう。C5型式は1点出土した。C6型式は地村氏の報告では実測図を掲載されていないため具体的な対照ができないが、近世巴文軒丸瓦とされる。C7・8型式は（その1）2土坑に堆積した細砂から出土している。

軒平瓦はB1～B4型式まで各調査区に見いだすことができる。B1・2型式とB3～B6型式で分けられ、B1・2型式はA・C1型式と組み合わされることが想定されている。この場合、B1・2型式は37点でありA・C1型式の総和99点より少なく、この99という数字はB1～B4型式を合わせた90点でやっと釣り合う数である。数量を根拠とすれば軒丸瓦C4型式に対応する軒平瓦はB5型式ないしB6型式かもしれない。C型式は計12点の出土があり、軒丸瓦におけるC4型式の量比に対応する現象として指摘できる。また、A型式は軒丸瓦D型式とともに1点ずつ出土している資料である。鬼瓦は1995年調査で出土したものの方がやや残りが良い。1995年調査では細片が多く出土したようで、点数の比較はできないが出土の傾向はほぼ同じようである。

丸・平瓦の分布傾向

地村氏の丸・平瓦の分類が行われていたにもかかわらず、今回はこれを行っていない。また、量比が四隅計測法などを通じて、計量作業を交差させて本来行わなければならない作業であることもこれから記述する丸・平瓦の分布には不可欠の作業であった。

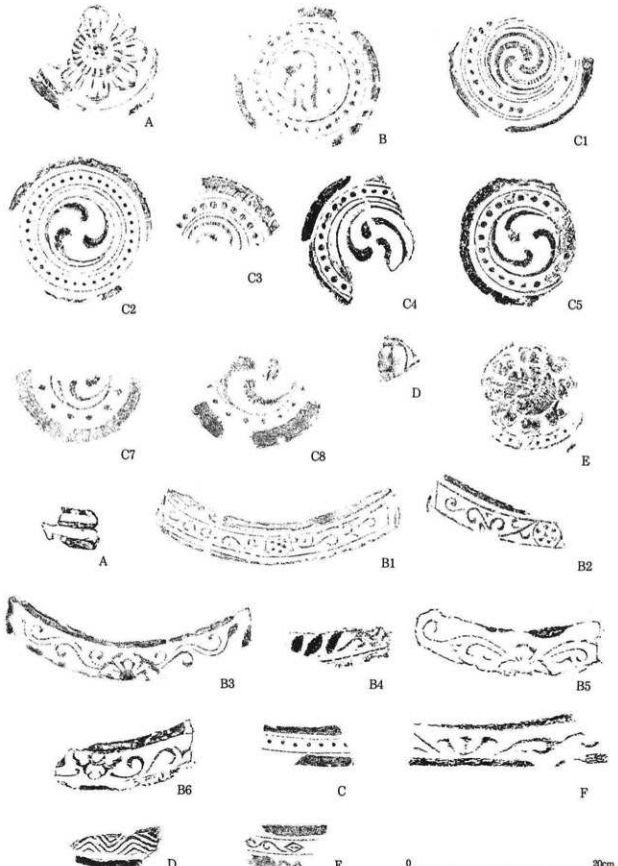


図291　大和川今池遺跡出土軒瓦（S＝1/4）

以下、丸・平瓦という二極分類による重量分布についてその傾向を記述する。まず、（その２）における丸・平瓦の分布は区画溝に沿って集中する傾向を指摘できる。また、22溝では区画溝より丸・平瓦が相対的に多く出土しており、重量比でみると平瓦が丸瓦より多い。（その１）では２溝・土坑及び６土坑から丸・平瓦が集中することが指摘でき、その他の地区は（その２）の東半・拡張区の傾向と変わらない。土器資料に関しては重量分布を行っていないが、（その１・２）同様の結果となることを想定している。平・丸瓦の分布傾向はそのまま観音堂廃寺の動向を反映するように考える。

また、1995年調査で注目された飛鳥時代の瓦について記述したい。丸・平瓦の説明で述べた通り対象資料の細分を行っておらず、眼についた資料（17点）のみを取り上げたため調査区内での資料は今後若干増えるものと考える。地村氏は凸面調整の格子目タタキと斜格子タタキに分類されているが、格子目タタキは調整に使用した原体の違いにより細分が可能である。

大和川今池遺跡の軒瓦

第１章既往の調査で記述したとおりであるが、再整理を行いつつ記述を行う。大和川今池遺跡では大阪府教育委員会の処理場内調査で軒瓦２点が出土している。２点の軒瓦は各概報（以下、概－該当概要番号で記述）に報告されており、概－Ⅲ[2]包含層資料として軒丸瓦１点、概－Ⅶ３[3]地区ＳＫ89から軒平瓦が一点が出土している。概－Ⅲの軒丸瓦は梵字文Ｂ型式であり、本遺跡出土資料としては南端の資料である。Ｂ型式軒丸瓦のほか、中世丸・平瓦の出土が多い点と、Ｂ型式軒丸瓦の移動の定点として注目できる。概－Ⅶの軒平瓦は蓮華系の中心飾りの唐草文である。段顎の形態であり、顎はＣ類と同じか発達した段階にあたる。1995年調査・（その１・２）での出土はなく、調査地点からみて薬師堂廃寺に関係すると考える。

地村氏の型式分類は古い段階からアルファベットをＡＢＣの順に付す方法をとられているが、今後調査の進展による新出資料の増加とともに、分類の細分を行っていく必要も出てこよう。ここでは西口氏と地村氏の分類基準によることを明記したうえ、新出資料には新たに型式番号を付け替えることによる無用な混乱は避け、法隆寺等[4]の整理で用いられた型式番号付与の方式を参考としつつ、地村氏の分類の枠組に付加する形で新出資料に対し型式番号を付すことにする。単弁蓮華文軒丸瓦をＤ型式、複弁蓮華文軒丸瓦をＥ型式、近世の31巴文軒丸瓦をＣ７型式、同じく近世の30巴文軒丸瓦をＣ８型式とする。報告した中心飾りを菱形とする軒平瓦34はＤ型式、大阪府教育委員会Ⅶ年調査で出土した軒平瓦はＥ型式とする。これによって、具体的な対照を行っていない（その１）と（その２）で出土した近世軒丸・平瓦以外の軒瓦、観音堂廃寺と薬師堂廃寺の軒瓦について総覧することが可能かと考える。軒丸瓦Ｄ型式とＥ型式、重弧文軒平瓦Ａ型式については、（その２）での飛鳥から平安時代後期までの遺物出土により本遺跡での意味を1995年調査及びその周辺の成果と合わせて今後検討しなければならないだろう。

註

1）西口陽一1996『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅻ大阪府教育委員会、地村邦男1998『大和川・今池遺跡』大阪府教育委員会

2）松岡良憲・黒田淳1986『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅲ大阪府教育委員会

3）岩瀬透1990『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅶ大阪府教育委員会

4）毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩1992『法隆寺の至宝－昭和資材帳－』第15巻

第４節　陶磁器の基礎分析

大和川今池遺跡では多くの陶磁器が出土し、中でも白磁碗底面に「寺」と書かれた15世紀代の墨書土器が出土し、観音堂廃寺の消長に関わって重要な知見を得ることとなった。ここでは、出土遺物の中で初期須恵器・瓦質土器などと同様に他の土器資料と単離することが容易で、集落にとっては搬入品である陶磁器の基礎分析を行う。資料は細片が多く、完形個体は皆無であるが、分析の主眼は断片資料の調査区内での個体毎の関係性を示す意味論的な接合作業である。その具体的手続きとして、まず、１）抽出作業をし、一点登録を行った。次に、２）森村氏に個体同定作業をしていただいた。この作業を通じて、ここでは、各時期ごとに出土した陶磁器の概観を行いたい。なお、実際の個体同定作業は森村氏によっており、森村氏にしていただいた作業を検討に活かせない場合はすべて筆者の責である。時期区分については、森村氏に示していただいた区分を優先し、新たに解釈を施した個体はない。以下の構成は、ａ）陶磁器の分析対象群を12世紀から19世紀までとし、各時期毎に記述（時期細分していただいた個体については個体別に記述した）、次にｂ）分布状況について10mの調査単位に各個体の分布図を作成しこれの評価を行った。なお、本文中の地区名は第３章調査の方法の地区割を参照されたい。

（その１）

12世紀

常滑焼11点、内甕１点が出土した。景徳鎮？小壺蓋１点、白磁碗Ⅱ類２点、内Ⅱ－１類１点、白磁皿Ⅷ－1c類１点が出土した。12世紀後半では常滑甕１点が出土した。

分布の傾向は２土坑を中心として把握できる。12～14世紀までの出土遺物は軒瓦、丸・平瓦の分布と同じく、（その２）第３・４層及び２土坑、６土坑の形成要因と密接に関係した分布傾向を示す。

13世紀

白磁碗６点（内Ⅳ－２類１点、Ⅴ類１点）、白磁皿２点（内Ⅸ－1c類１点、Ⅷ－1b類１点）、龍泉窯系青磁碗１点、龍泉窯系青磁小型水注１点、常滑焼７点、内甕６点、壺１点が出土した。13世紀前半では、厦門碗窯系白磁碗Ⅳ－２類３点、白磁碗Ⅳ類２点、Ⅳ－1b類２点、Ⅳ－２類６点、Ⅴ－2a類１点、Ⅴ－３類１点、Ⅴ－3c類？１点、Ⅷ－３類２点、Ⅸ－1c類１点、Ⅻ－３類１点が出土した。13世紀後半では、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5b類５点、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類３点、Ⅰ－2a類１点、無文碗３点が出土した。

分布の傾向は２土坑、６土坑を中心として把握でき、２溝南側に第３層から11点青白磁が出土しており、耕作に関係して移動したか。また、第４層中からも７点出土しており、第３層による第４層攪拌のあったことがわかる。

14世紀

白磁碗１点が出土した。

15世紀

瀬戸灰釉瓶子１点、朝鮮王朝粉青沙器象嵌瓶１点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。15世紀前半では龍泉窯系青磁皿が出土した。15世紀後半では、龍泉窯系青磁碗５点（内線描蓮弁１点、スタンプ字紋１点）、備前焼擂鉢１点が出土した。

分布は２土坑に関連させて把握できる。

16世紀

景徳鎮ボタン唐草文青花皿1点、同青花皿（碁笥底）1点、青花文碗3点、めんこ転用の白磁皿1点、信楽擂鉢1点、瀬戸灰釉皿1点、備前甕1点、壺3点、とっくり1点、擂鉢3点、甕2点、白磁端反皿1点が出土した。16世紀前半では備前焼3点、内壺1点、擂鉢1点が出土した。16世紀中頃では龍泉窯系青磁碗1点が出土した。16世紀後半では丹波？（おろし目あり）1点、備前壺1点、擂鉢10点が出土した。16世紀末葉では丹波擂鉢2点が出土した。16世紀末～17世紀初めでは漳州窯系白磁端反皿1点、景徳鎮窯系青花皿1点、漳州窯系青花碗5点、同青花碗草花文2点、同五彩皿1点、同碗1点、信楽擂鉢2点、唐津皿2点、同碗2点、備前擂鉢1点が出土した。

この段階は2土坑、6土坑の下層堆積物である灰色粘質シルトからの出土が特徴的な段階である。特に16世紀末～17世紀初めにかけての資料分布に顕著な事象であり、この段階では2土坑中心に資料は集中する。また、6土坑からの最終堆積段階に近い箇所から出土した球形にちかい土師質擂鉢2点に着目できよう。

17世紀

唐津碗2点、内野山窯系碗2点、波佐見碗2点、波佐見染付蓋1点、肥前焼筒茶碗1点が出土した。17世紀初めでは、唐津焼盤1点、景徳鎮窯系青花杯1点、丹波焼擂鉢2点、唐津焼皿2点、唐津焼碗3点、備前焼擂鉢2点が出土した。17世紀前半では唐津皿4点が出土した。17世紀中頃では伊万里皿1点、唐津皿1点が出土した。17世紀後半では波佐見碗1点が出土した。17世紀前半では唐津窯系皿1点が出土した。17世紀後半～18世紀初めでは二彩唐津焼鉢1点が出土した。17世紀後半～18世紀前半では唐津系大盤1点が出土した。

分布は2土坑を中心とする。大和川付け替え前の現象として、遺物分布の偏向は前代を踏襲したままである。

18世紀

京焼系碗2点、波佐見焼とっくり2点、一重網目文碗4点、皿2点、波佐見青海波文碗1点、染付2点、染付草花文碗3点、染付碗22点、網目文碗3点、肥前系碗3点、同褐釉碗1点が出土した。18世紀前半では肥前京焼系碗1点が出土した。

分布は17世紀と同じである。2土坑では埋土上層、大和川流水砂からの遺物出土が顕著になる段階である。

19世紀

第1層～第2層から瀬戸系染付の出土が顕著になる段階で、分布は2土坑を中心とする。伊賀信楽窯系の土瓶も1点出土した。（その2）1粘土取り穴上層堆積物からも同時期の土器が出土しており、第2層の形成時期の違い、第1層の形成による上層からの攪拌を主因として出土資料の把握が可能である。

（その2）

12世紀

白磁皿6点（内白磁皿Ⅵ－1a類1点、Ⅶ類1点、Ⅸ－1c類1点、白磁輪花皿1点）が出土した。常滑甕は10点出土した。12世紀前半では、白磁碗Ⅱ－1類は1点出土した。12世紀中頃では、白磁碗Ⅳ－2類が2点出土した。12世紀中ごろ～後半では白磁碗Ⅳ－1類が1点出土した。12世紀後半では白磁皿Ⅸ－1c類1点が出土した。常滑甕は7点出土し、内、4型式は1点、2型式は2点、3型式は3点である。

12～13世紀では常滑1点、白磁1点、灰釉陶器山茶椀1点が出土した。

分布はC15・C16のc・dラインを中心に分布し、147井戸の白磁碗Ⅳ－2類・白磁皿の出土が眼を引き、65・127溝の出土遺物もC15・C16のc・dライン上からの出土として指摘できる。

13世紀

青磁碗3点（内龍泉窯系1点）、同安窯系青磁皿Ⅰ－1b類1点、景徳鎮窯系青磁梅瓶2点が出土した。白磁碗5点（内Ⅳ類2点、Ⅳ－2類1点）、白磁皿5点（内Ⅵ－1a類1点、Ⅷ－2b類1点、）、四耳壺1点、輪花皿1点、青磁盤1点が出土した。常滑甕は111点、常滑壺1点が出土した。13世紀前半では常滑甕6a型式1点が出土した。白磁碗は67点出土し、白磁碗Ⅳ類5点、同Ⅳ－2類は32点、同Ⅳ－2a類は2点、同Ⅴ類3点、同Ⅴ－4b類2点、同Ⅷ類4点、同Ⅷ－3類は6点、白磁皿はⅧ－2b類が1点、Ⅲ－1類2点、ⅢⅨ－1c類6点、Ⅸ－3類1点、白磁杯は2点が出土した。13世紀中頃～後半では同安窯系青磁皿Ⅰ－5b類1点が出土した。13世紀後半では常滑甕6b型式2点が出土した。青磁碗19点、青磁碗Ⅰ－5b類19点、同Ⅰ－2a類4点、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類3点、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5a類2点、同安窯系青磁碗Ⅰ－1b類1点、龍泉窯系青磁皿Ⅰ－5類1点、龍泉窯系青磁皿Ⅷ－1b類1点、龍泉窯系青磁無文碗1点が出土した。白磁碗Ⅳ類1点、Ⅴ類1点が出土した。

分布は区画溝、36・129・214・466・504などの井戸資料、65溝以南の包含層資料、東半C15bライン上の遺構・包含層に分布する。13世紀前半では、120溝、65・127溝及び区画溝東西方向とC16c3・d3に相対的に集中する傾向がある。第5層からの資料も相対的に多く、分布の傾向は逸脱しないことから第5層出土資料の分布解釈の一つの方向を示すものであろう。

14世紀

常滑甕は16点が出土した。14世紀初めでは、龍泉窯系青磁碗Ⅲ－2類が2点出土した。14世紀前半では龍泉窯系青磁碗Ⅲ－2類が1点出土した。

分布は92・458溝、C15b・cライン上の遺構を中心とする。相対的な遺物量は少ない。

15世紀

白磁碗1点が出土した。龍泉窯系青磁端反碗3点が出土した。瀬戸系灰釉陶器2点が出土し、内1点は碗である。龍泉窯系青磁碗が1点、線描櫛描蓮弁の碗が2点出土した。

15世紀前半では、青磁雷文帯碗1点が出土した。15世紀中葉～後半の白磁碗が1点出土し、底部には「寺」の文字が墨書されていた。白磁皿1点も出土している。15世紀後半では龍泉窯系青磁碗2点、備前甕1点が出土した。

分布はC15c7・8の包含層、C15c7の22溝、C16c1・d1・e2・f2の包含層から各1点、C16d1の65溝から「寺」墨書の白磁碗が出土している。994ピットは13世紀に属する常滑焼甕底部とともに青磁雷文帯碗が出土している。

16世紀

備前焼21点、内とっくり体部2点、壺6点、甕11点、盤1点が出土した。景徳鎮窯系青花皿1点、碗1点？が出土した。同安窯系白磁端反皿5点、美濃系鉄釉天目碗1点が出土した。16世紀前半では備前擂鉢3点が出土した。16世紀前半～中頃の備前擂鉢1点が出土した。16世紀後半では美濃系灰釉菊皿1点、天目碗1点、備前擂鉢1点が出土した。16世紀後半～17世紀初めでは漳州窯系青花碗1点、白磁端反皿2点が出土した。16世紀後半～末葉では美濃系鉄釉天目碗1点が出土した。16世紀末～17世紀初めでは景徳鎮白磁端反皿4点、同杯2点、漳州窯系碁笥皿2点、青花碗3点、白磁皿1点、端反皿1点、

唐津碗１点、唐津皿４点、唐津壺？１点、備前擂鉢３点が出土した。

分布は19・20溝、22溝、２溝・11土坑、15井戸の単位を抽出でき、包含層資料はC15a4・b4、２溝・11土坑上を中心に分布する。（その１）に連動して、土地利用が変遷したと考えられる。22溝では漳州窯系白磁皿、備前焼壺、景徳鎮窯系白磁杯、漳州窯系碁笥皿が出土しており、22溝の機能段階に一つの画期を設けることができる。

17世紀

瀬戸系灰釉筒茶碗１点、唐津系皿１点、唐津碗１点、波佐見焼５点、内波佐見菊皿１点、同皿１点、筒茶碗（蛸唐草）１点、碗１点、肥前系碗４点が出土した。17世紀初めでは丹波焼４点、内擂鉢２点、常滑焼擂鉢１点、景徳鎮青花皿（コウモリ文）１点が出土した。17世紀後半では丹波擂鉢１点、京焼系碗１点、波佐見焼１点、唐津焼６点、碗２点、壺蓋１点、皿３点、備前擂鉢６点が出土した。17世紀前半では志野焼３点、内皿１点、杯１点、碗１点、唐津焼皿５点、内溝縁皿１点、美濃焼鉄釉皿１点、美濃鉄釉茶入れ１点が出土した。17世紀中～後半では唐津焼３点内碗２点、溝縁皿１点、美濃鉄釉天目碗１点が出土した。

分布は２溝・11土坑、包含層資料としてC15a4・c5、２溝・11土坑上、C15dラインと以南を中心とする。２溝を中心に考えると（その１）に比べ分布が南側に広範になっていることが指摘できる。２溝は南東が低くなるが、資料の集中傾向は（その１）２土坑にある。これを踏まえると、これらの土器を使用した集落は、（その２）２溝以北の可能性が高いと考える。

18世紀

信楽焼とっくり１点、唐津焼３点、内皿１点、鉢１点、碗１点、波佐見焼60点、内一重網目文碗４点、皿３点、青磁碗１点、染付草花文碗１点、同筒茶碗１点、同杯１点、白磁碗１点、波佐見碗48点、肥前系鉢１点、同碗３点が出土した。

出土遺物の量比が（その１）と均衡するのは２溝・11落ち及び１粘土取り穴があるためである。分布は11落ち、１粘土取り穴の２単位の抽出が可能。河川敷内にある（その１・２）の土地利用の画期は大和川付け替えの1704年であり、当該期の出土遺物中、陶磁器類が最も敏感に反応する。

19世紀

１粘土取り穴及び第１層出土遺物が大半を占め、分布は第１層では耕作土という性格のため分散傾向となる。１粘土取り穴から伊賀信楽窯系土瓶把手、同灯明皿、瀬戸蓋、同皿、同碗が出土した。

陶磁器の個体同定に際して、森村健一氏にご協力・ご教示を賜った。記して謝意を述べるものである。

参考文献
土橋理子1995「初期貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』
山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』
統伸一郎1995「中世後期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』
藤沢良裕1995「古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』
中野晴久1995「常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』
木戸雅寿1995「信楽」『概説　中世の土器・陶磁器』
伊藤晃1995「備前」『概説　中世の土器・陶磁器』

第５節　大和川今池遺跡木製品の基礎分析

大和川今池遺跡では木製品が計594点出土した。古墳時代の木製品は130点ですべて井戸からの出土である。中世の木製品は454点で、遺構別にみると井戸から449点、溝から３点出土した。また、これより新しい段階の11落ちで６点、近世の井戸４点がある。これらの木製品に対して以下の整理を行った。作業の主眼は悉皆記識にあった。１）登録番号毎のネガ写真撮影、２）各個体に通し番号を記入（一部細片はまとめて番号を付けた）及び台帳の作成。３）個体の分類作業及び実測記録作業。１）～３）の作業を経て、ここでは各遺構別に基礎分析を行いたい。その具体的方法として、ａ）大和川今池遺跡出土木製品の個体識別と調整の分類及び上原真人氏の一連の作業の参照、ｂ）各遺構別の木製品組成及び検討を行う。なお、木製品の用語は出土した木質遺物すべてに該当させて使用することにする。また、報告した木製品の大半はＰ.Ｅ.Ｇ保存処理を行い、その他は一部を自然乾燥にし大半は水漬にして保管している。なお、各個体の番号は本文に対応する。

木製品の時間的経過による解釈

本遺跡から出土した木製品は原料入手時からおおまかにいえば以下の手順で大和川今池遺跡の集落に存在し、井戸・溝などの埋没を経て出土に至ったと考える。

原材採取の段階－製材の段階－（用材貯蔵の段階）－加工の段階－使用段階－（修復及び再使用段階）－使用済段階（この段階では、消費財として使用した後の廃棄または祭祀の終了段階）。各段階には選別・廃棄もしくは祭祀行為のために処分される時を含む。これにより、用材は皮材が付着するなど原材からの進展が余り認められない木製品とする。加工木は使用痕の認められる木製品を示し、未成品はこれとは逆に製作過程にあり使用痕の認められない木製品と定義する。

大和川今池遺跡で出土した木製品の調整

木製品の調整を分類するにあたって、上原真人氏の1993年奈良国立文化財研究所史料第36冊『木器集成図録近畿原始篇（解説）』[1]（以下原始篇）及び1984年同第27冊『木器集成図録近畿古代篇』[2]（以下古代篇）を参照する。古代篇では調整に関する語彙は平滑、そぎ落とし、削り、斜ハツリ、整ハツリなど詳細に記述される。原始篇では「加工痕の観察は不徹底で、工具刃先が当たった境界や稜線を実測図に書き込むのが現在の到達点」とされ、「木器の加工痕の観察・分析という視角を踏襲し、発展させる」ことはできなかったとされ、原始篇での調整の記述は、本のスタイルの相違も大きいが古代篇に比べて少ない。調整・加工痕の技術検討に関する言及困難が原始篇では指摘されているが、大和川今池遺跡の木製品もこれに例外ではなく、加工痕の境界・稜線を実測図に記載するのみで加工技術の同定に遡及できない個体もあった。次に、以上を踏まえた上で、本遺跡出土の木製品の調整・加工痕に関して古墳時代と中世に分けて記述を行う。なお、木取りに関しては断面図に木目を書き込むことにより表現した。

古墳時代の木製品の調整・加工痕はケズリ痕、ワリ痕、被熱痕（火熱による加工法を以下火熱法と呼称する）等である。460井戸・1299井戸の木製品は、34土坑等に比べて残りがよく、加工痕の痕跡が明瞭であった。また、460井戸出土の木製品には建築部材かと考えた個体が下層から出土しているが、この木製品の加工に鋸を使用した可能性があるが、断定はできない。

中世の木製品の調整・加工痕は斜ハツリ痕、整ハツリ痕、ワリ痕、ケズリ痕、鋸痕、被熱痕、塗布物

痕、切断痕、折損痕等である。釿ハツリ痕は、147井戸→819井戸→466井戸→214井戸の順に粗雑になる。また、木表面の加工を一定のピッチと幅で連続的に行った痕跡で、工具の特定が不明な加工痕は単にハツリ痕とした。466・214井戸では建築部材[3]廃棄の際、片端もしくは両端を打ち欠く個体があり、釿・鑿などの工具を用いた作業等の痕跡が該当する。鑿ハツリ痕は147井戸隅柱の枘の加工に使用したと考えており、釿等工具を使用した可能性もないではないがこの場合加工の効率性は鑿工具の方が優れる。ケズリ痕は幅の広狭やピッチによって各木製品製作に適合して行われた。また、ヤリガンナ痕は「釿の粗削り面を仕上げ削り面を仕上げする工具」[4]とされ、刃跡は浅いU字形を呈する。214井戸桶側、樽板裏面のケズリが該当するか。鋸痕は147井戸の建築部材転用加工の際に用いられたと考えるが、縦の木取りは例外なくワリによる方法であった。折損は1）使用時の折損、2）廃棄時の折損がみられ、466井戸・214井戸から出土した建築部材に2）が顕著であった。火熱による加工法は147・36井戸出土の刀子の刀身茎を木柄に貫入する際に用いられた。曲物・折敷底板の緊結法は二種あり、木釘もしくは植物繊維を用いる方法があった。側板内面の針書き刻線は3パターンあり、1．斜格子、2．斜格子と斜線付加、3．ランダムがあった。出土した木製品については心材・半截・板目・柾目・追柾目の5分類で木取りの統計を行ったが木表・木裏の確認、大半が年輪に沿って割れているため、中世では板目材が多数となり、分析視点としては有効ではなかった。また、法量について長さ・幅・厚みの計測を行ったが、主観的に古墳時代木製品は30～40㎝、中世は30～40㎝の個体が多い。ただし、土中での腐朽（いわゆる痩せ）に左右されることが多く、古墳時代資料については成果はないが、中世では各井戸毎に廃棄時の長短がある程度揃っている場合が多かった。これは同一遺構から出土した木製品の樹種がある程度同じであることや建築部材であったことなどが原因したと考えており、そして廃棄行為における実質的な作業が短期になされた結果だと思う。

また、各木製品のその他の観察事項は風化痕・摩滅痕・遺存状況・樹皮の付着・炭化物、調整及び木目の美観等があった。建築部材片と考える木製品は断面の形状（丸形、方形、三角形、不整形）が4タイプに分かれ、出土した木製品には個体別にそれぞれ個別の観察事項を設けた。本文中の記述で木製品の属性を示す用語として、「加工木」は加工痕のある木製品、「木片」は加工痕のない木製品、「自然木」は立木と変りのない木質遺物、「板材」は断面長方形ないし正方形の加工木で、主に建築部材の端材と考えた木製品を示す。以下で各遺構毎に木製品の記述を行う。なお、下記の木製品以外に第4層、中世・古墳時代のピット各1基からそれぞれ木片が1点出土した。

近世遺構別の木製品

近世の素掘り井戸から木製品4点が出土した。木片3点と板材1点である。木質の鮮度はよく、細片ではありながら遺存状況もよい。（その2）で検出した素掘り井戸の大半が（その1）と違い止水堆積層でそこから出土したためであろう。

中世遺構別の木製品

36井戸

刀子柄1点、建築部材？1点、曲物底板1点、加工木3点、木片4点、自然木4点が出土した。刀子柄は刀身は折損、茎は柄に遺存する。刀身は断面鋭角の三角形厚み2㎜で幅2.4㎝である。柄は断面長方形、全体を5～8㎜幅のケズリにより平滑に整え、下端部は片方からケズリ込んで丸くしている。刀

身と柄の固定は2箇所目釘を使用する。柄中央より下側で2箇所ケズリ欠きがあり、いずれも被熱痕跡が明瞭である。握り易く加工したのか。建築部材？とした個体は台形を呈し、上部は鋸引きによる切断と考える。曲物底板は木釘痕跡が側面になく、側板との緊結法は不明。表面は黒褐色を呈し、147井戸で出土した底板と同じく、渋を染込ませて加工する。加工木には厚さ0.2㎝の板材がある。

65溝

板状の材が一点出土した。破損が顕著であるが、建築部材等の一部と考える。

76ピット

柱根が1点確認された。（その2）で検出したピットの中で柱根が遺存したのはこのピットのみである。

92溝

木片1点が出土した。

128井戸

638瓦器椀の中の黒褐色粘質シルトから出土した木片である。ケズリが全体で観察され、木製品製作時の端材か。当初、香木の可能性を考え、樹種鑑定を行った結果、松と判断された。

129井戸

木片1点が出土した。

147井戸

隅柱4点、不明木製品2点（隅柱先端部に似た個体1点、隅柱先端部に類似し先端が尖鋭な個体1点）、枠板85点、建築部材15点、杭状木製品3点、下駄3点、下駄状木製品1点、毬杖状木製品1点、栓2点、曲物側板5点（内1点未成品）、同底板7点、竹2点（内1点は根）、刀子1点、刀子柄1点、荷札状木製品1点、木簡1点、木錘1点、椀（未成品）1点、加工木18点、炭化木片1点、木片18点、自然木13点（内9点棒状）が出土した。

隅柱は4点（内1点は乾燥のため2個体に分離）で、断面は五角形を示し、先端部に向かって反る。記述は隅柱が直立していた147井戸内での上下を基準にして行う。先端部は鋸引きによると考える平坦な面をなしており、758と相違する点である。稜を持つ面は新によるハツリ痕が明瞭で、先端部から斜位に表面を整え、中央部で正位になることから、上端部が腐食していることを考慮すると、表面の加工工程は2～3単位となる。隅柱転用前は植物繊維で葺いた堂宇の構築材である尾垂木とされ、稜の角度の組み合わせにより方形の建物ではなく、入り組みの構造となる建物と指摘していただいた。この場合の植物繊維とは桧皮等をさす。また、井戸枠転用時の枘は2面に対してなされ、粗雑な加工をして枠板を落とし込んでいた。井戸枠転用時には先端部に対してもハツリを加えて、先端部稜の反りを落とす。不明木製品とした2点は、形状が隅柱に似ていた。当初、隅柱先端部に該当すると考えたが、先端の尖鋭は表裏からなされる点が異なる。757には加工痕跡の刃こぼれの認定により隅柱稜面の調整と同じ加工痕が見いだされる。757・758とも転用時には粗雑な加工を加えられるが、758は北西隅柱下端に添わせた状態で出土しており、隅柱自立の支持材として認識できた。

枠板は85点出土した。ほとんどが板材の範疇で解される。遺存状況の悪い個体も多い。ワリを用いて材を加工し、隅柱が建築部材であったため、板材の大半が転用前建築部材だという見当を最初に付けた。次に、樹種の類似・ワリ面の断面形を手がかりとして接合の目安をつけ、仮に完形個体を60点として遺存度等からその50％約880通りについて接合関係の有無を分析した。基本的にワリ面と年輪、節の接合

関係のチェックとなるが、その結果、表裏面が上下に接合した個体が3組、側面縦横に接合した個体が1組あった。なお、縦横に接合した個体は出土時に分離した個体である。表裏面が接合した個体によってもともとの角材と円材が復元され、それぞれ建築部材として機能後枠板に転用したと考える。枠板には隅柱の稜をなす2面に施されたと同じ釿ハツリ痕が表面・側面にある個体759や枘の痕跡と考える凹部を裏（ワリ）面にもった枠板が8点あった。建築部材とした15点は断面長方形の板材などを指し、枘加工等具体的痕跡を見いだしたわけではないが、大きさ等から建築部材もしくはその端材と認識した。杭状木製品は先端の尖鋭加工を基準に分類した。ただし、いずれもケズリ調整の稜線は潰れておらず、未使用だった可能性がある。下駄は3点出土し、内一点は細片である。やや反りのある台をなした735はケズリ調整により面を整え、後歯に使用痕跡が明瞭でないことから、実際に使用されたとは考えない。緒穴には植物繊維の付着物があった。それに対し735は後壺が紐擦れにより摩耗することと、前後歯ともに摩耗して隆起が低い。また、台には豆粒状の圧痕があり、足裏痕と考える。また、下駄状木製品とした個体は、使用樹種・形状ともに下駄に近い個体である。台上面は腐食が進んでいたが、平滑に整えるようであった。裏面はワリにより欠損しており、下駄と断定することは困難であるが、形状的に下駄状製品と分類した。

毬杖状木製品は未成品である。上下に互い違いに円錐状の穴を配し、中央に貫通孔を開ける。側面に穿たれた穴の周囲には1㎝大で円形の隆起を作る。調整は細かなケズリによる。穴周囲の隆起を作るためのケズリは、断面半円形である。上部と下部は貫通孔を中心に円形にケズリ込み、上部・下部は平坦な面をなす。側面の穴のあたりを針刻するのみで、穴を穿たない箇所があることが未成品の根拠となる。用途は不明であるが、中央貫通孔・円錐形の側面穴に棒状木製品を差し込み、相対的に平坦な面をなす上部に貫通孔に挿し抜けた棒状木製品の蓋を装着したのかもしれない。側面穴に差し込む棒状木製品は短いものか、長いものであれば弾力性のある木材を使用しなければ折損しやすかったであろう。用途として傘骨という案もあった。

栓2点は、739は完形に近く、738は半分が折損していた。上・下部はケズリにより平坦な面をなし、側面は縦方向にケズる。中央の円孔は心部分を抜いたものである。いずれも中央の孔には白い付着物があり、使用した際の液体付着物か。

曲物は730が完形品で出土し、その他は側板・底板の単体で出土した。730は曲物側板である。直径24.7㎝、高さ9.75㎝である。側板は二重構造で桜皮により緊結されている。内面は縦方向の線刻をいれて曲げている。7㎜幅の桜皮を緊結に使用している。側板内面は黒い。下端部には、底板と側板を固定するための木釘の痕跡が確認できた。底板には被熱痕跡・不定方向線刻のある733や中央に半割線刻のある732、側板の細片727、線刻があるが挽めていない側板未成品？728などがある。728は線刻は乱雑に施され、147井戸出土の側板としては厚手に属し、側板ではない可能性もある。なお、733に伴う木釘はケズリにより先端を尖らす。

竹は竹根2点・竹身部破片が出土した。竹細工に使用した際の不要分か。

刀子は2点出土し、721は柄の一部を欠損するもののほぼ完形、722は柄のみの出土であった。721は刀身が柄に装着した状態で出土した。刃と柄は目釘により固定。刀身は全体に湾曲し、外湾する方が刃部で断面は鋭角な三角形をなす。刃部の断面形は均等ではなく、使い込まれた結果であろう。柄は断面長方形をなし、ケズリ調整により平滑に整えたと考える。刀身の鉄錆部分には斜行に植物繊維の圧痕があり、鞘は編物であった可能性がある。722は断面楕円形、茎孔上部に被熱痕跡があり、茎孔加工は火

熱による貫入法かもしれない。柄頭の一部が欠損する。柄全体の調整はケズリにより、上・下端には細かなケズリで面を整える。柄側面には植物繊維の付着物が一部にある。柄頭には緊結痕跡はなく、柄側面にも摩耗等がないことから未成品であった可能性が高い。表裏面は平滑に面を整える。荷札・木簡などの用途を考えたが、物忌み札の可能性もある。

729は表裏面に墨書のある木簡である。転用前後、木簡として使用されたようで転用前の用途は不明。墨書の内容については判読不明。中央から下端部にかけて転用時のケズリが施され、上端側面に切り込みあり。切り込みの断面はV字状を呈する。このケズリは墨書を切る。上面は平らに面を整え、裏面は転用時のワリ面。737は木錘で片端は折損。全体はケズリ調整、中央に切り込みを入れる。使用痕はなく、未成品の可能性もある。724は椀未成品で底面に轆轤爪跡が円錐状に2箇所残る。縦木取り。内面は平滑、外面は粗雑なケズリを加える。口縁部は平坦面をつくる。加工木は木製品製作時にできた端材が多いと考え、ケズリなどの調整痕が明瞭な個体も多い。木片には先端に火熱痕跡のある個体もあった。自然木には直径1.5cm大の木棒があった。

170井戸

木片が1点出土した。

190井戸

建築部材？1点、板材17点、木片1点が出土した。建築部材かと考える木製品は直径8cm、残存長33cmで被熱痕跡がある。枘等の加工はない。板材は厚み2～3cmで、40cm以上が8点出土した。家屋架構材として、板葺きの材を想像したが、用途不明。

214井戸

建築部材40点、板材（桶側）22点、加工木12点、木片6点、自然木1点が出土した。建築部材は円材と角材、板材が出土し、円材5点、角材3点、板材28点で、ほか不明。845と846は形状が同じで、両端の貫穴は互違いにあり小屋束、853は壁の下地（木舞）、857は母屋垂木（根太のあたりあり）という指摘を受けた。建築部材の特定は困難な作業であるが、加工木を含めた本井戸出土の木製品は法量・調整等を根拠に建築部材が大半を占めると考える。建築部材852は板材で釿ハツリ痕が明瞭、これを含めた1mを越える個体は2点出土した。また、角釘のある個体3点、線刻のある個体4点が出土した。線刻のある個体は狙板転用が従前指摘されており、建物解体などに伴う作業台等、台機能を重視する。また、建築部材廃棄時は両端の粗雑な切断痕が顕著である。847・848は先端を緩やかな円形にし、貫穴等の充填材に使用したと考える個体。板材（桶側）は断面は内湾した長方形、表面は縦方向ケズリ、裏面は斜行ケズリが一部にあるほか平滑。表面の線刻は横方向に細かく観察でき、裏面の線刻とともに一部は板材を緊縛した桜皮の位置に対応する。桜皮の緊縛は上下2段である。下端部は地面に支持しやすいよう、切り込みを入れ薄く仕上げる。加工木は建築部材端材が一部を占める。

458溝

自然木が1点出土した。

465井戸

建築部材7点、加工木17点、木片5点、曲物側板2点、底板6点が出土した。817は底面に圧痕のある建築部材で、上屋構造の荷重がかかり、木目が押圧される。また長方形の枘が7箇所あり、枘は3×3cmと6×3～4cmのタイプに分かれる。枘の深さは2～3.5cmである。裏面はワリ面。ほかには、2cm厚の板材がある。加工木は板材厚み0.5cm以下5点、0.5～2cmが7点、2cm以上が5点出土した。廃

棄時の折損が明瞭な個体が多い。側板の内面は縦方向の線刻。底板は補修孔のある813、被熱痕跡のある812、線刻のある815がある。

466井戸

建築部材14点、曲物底板２点、加工木１点、木片５点が出土した。建築部材は９点が板材で、厚み1.1～1.5㎝が５点、2.0～2.5㎝が４点である。807は両端にコの字形の作り出しをもち、中央に2.2㎝大の凹みがある。809は長方形の枘が５箇所あり、枘は大７×３×4.5㎝が３箇所、小３×３×1.5㎝が２箇所である。底面の木目は押圧されており、荷重がかかった痕跡と指摘していただいた。808はワリにより折損するが、断面円形に復元できる個体で根太受けかもしれないとの指摘を受けた。法隆寺舎利殿及び檜殿では、床は柱に抱き合わせて打ち付けた大引き及び根太により構成され、腰貫の手法を使用した建築部材が本遺跡から出土していないことから、寺社建築に必ずしも当てはまらないが「古様」の建築様式[81]だったかもしれない。806は板材で釿ハツリが表面で顕著である。その他は、枘のある円材１点と板材９点で、板材の内１点は釘痕跡があり、破風材かもしれないと指摘を受けた。底板は２点で、側板との緊結は木釘による。

601井戸

板材13点、加工木２点、建築部材２点、不明木製品１点、木片３点が出土した。

板材は長さ14.0～46.3㎝と多様で、厚さは１㎝未満である。家屋架構材の内、板葺き材かと考えたが詳細は不明。不明木製品は一端を台形状につくりなす板材で用途は不明。表裏面は平滑で、先端台形の加工はケズリによる。

819井戸

隅柱４点、枠板51点、曲物側板１点、加工木１点が出土した。

877隅柱は側面に横桟を渡すための枘を２箇所穿つ。下部には枠板と同じ釿ハツリ痕があり、下端部は打ち欠いて長さを整えていることから、転用材と考える。転用前の用途は不明。

枠板は879のように方形の作り出しをもつ個体、下端部に円・方形孔を穿つ個体があった。すべて転用材である。878には下部に釿ハツリ痕が明瞭で、147井戸隅柱に次いで丁寧である。879は建築部材というより組物として機能したかもしれない。厚さは３～４㎝である。これらの枠板の内、円孔のある個体は５点、方形孔のある個体は１点である。厚みは概ね0.5～1.0㎝で、878・879の群に比べ薄い。転用前の用途が全く別用途であったのだろう。

848井戸

曲物１点、側板１点、折敷底板１点が出土した。曲物は取り上げ時に損壊させてしまった。曲物は直径18.0～19.0㎝に復元でき、底板と側板の緊結法は木釘による。側板内面は縦と斜行の線刻。もう１点の側板は内面に縦方向の線刻を施す。

11落ち

11落ちから木製品は６点出土した。木片と木皮、板材で、板材の内１点は釘痕跡が認められたため建築部材端材を廃棄したのかもしれない。

古墳時代遺構別の木製品

34土坑

34土坑から琴２点、不明木製品７点、木片12点が出土した。琴２点は同一個体と考え、もう１点は脚

食の進んだ上板身部分で接合を試みたが、分離した面での接合はできなかった。楕形を備えた琴は綴穴とは逆の側面のワリ面が顕著。綴穴の緊結痕跡はない。全体は腐食しており、表面の調整は不明。上板身部分の腐食は叉状になっており、厚みは2.4㎝で琴と同形ではあるが、腐食叉状の痕跡を人為と考えた場合、組物あるいは転用加工の可能性も考慮しなければならない。不明木製品は７点出土したが内４点はその後の接合作業で一個体となったため、実質３点となる。表面の風化がいずれも進むが、表面の平滑な個体もあり、製品として使用されたと考える。基本的に長方形の板材であるが一辺の加工が直線的で、一角を隅丸方形に作りなす。組物としての機能を考え箱形木製品と通称したが緊結・接合痕跡はなし。木片の内、２点は断面長方形の板材である。また１点には被熱痕跡があったが加工法によるものではない。

124黒褐色シルト（遺物包含層扱い）

木片が１点出土した。

197土坑

木皮１点が出土した。

426井戸

木片１点が出土した。

427井戸

木片が11点出土した。

460井戸

桶底板１点、釣瓶１点、斎串１点、建築部材片？８点、加工木13点、木片31点が出土した。桶底板は全体の腐食が顕著。下面を拡張して側板と組み合わせる。緊結方法は植物繊維に依っており、孔は計５箇所存在する。半円中央に穿たれた孔は、植物繊維が遺存していた。補修孔と考える。釣瓶は容器・把手部分が破損しており、片側部分のみが出土した。全体はケズリによって面を整え、容器・把手の凹部の加工痕は面に対し直線的な工具を用いたためか加工痕が明瞭な痕跡として残る。凹部の加工の終端は線状の痕跡として残る。容器部分の先端は鋸引きのような折れがあり、相対的に新しく廃棄時のものかもしれない。斎串は、ケズリによって側面を整え、ピッチの痕跡が稜線となって観察できる。表面に加工痕跡はなく、裏面はワリ面であり、ワリ材を用いて製作したのか。加工木・建築部材片？とした木製品は断面長方形７点・円形７点であり、ケズリによる加工痕跡が明瞭となる個体が１点あった。基本的には不明の範疇で解釈した木製品ではあるが、建築部材その他木製品であった可能性がある。加工木・木片のほとんどは井戸底面直上に近いところから出土した。

778井戸

加工木１点、木片１点が出土した。加工木は断面長方形、５㎜厚の板材である。

1299井戸

鍬柄１点、縄止め形木製品１点、剣形木製品１点、鎌形木製品４点、棒状木製品１点、木皮付き棒状木製品１点、板材２点、加工木３点、木片７点、自然木４点が出土した。鍬柄は節部分で叉状に分かれる材をケズリによって仕上げる。有溝の装着面や握りは部位ごとにケズリを行い、装着部と握りの接点の内側には線刻がみられた。握り基部には木皮が付着し、装着痕もないことから未使用だったと考える。縄止め形木製品は長楕円形に３孔を縦に配した木製品で、縄止めもしくは鼻ぐりなどの用途を伊藤氏に指摘していただいた。断面は楕円形。全体の調整はケズリによっており、表裏は平滑に、側面は調整境

が稜線となって確認できる。3孔は、上の孔は1.2㎝、中の孔は直径1.8㎝、下の孔が直径1.2㎝である。この孔には、加工時か使用時か判別のつかない線刻が放射状にある。孔は円形に整えられるが、表裏の形状は破損して拡がっており、個体全体では遺存度がよいことから、これを使用痕跡と考えた場合、上下の孔が左右に拡がるのが顕著であるのに対し、中央の孔が均等に拡がることが指摘できる。また、表裏面には細かい擦痕があった。剣形木製品は上下端を側面からの削りにより尖鋭させる。上端部は木目に沿って裂けていたが、下端部の一部を除きほぼ完形である。鎌形木製品の形状と違うのは中央の抉りの有無であり、樹種も同じであることから製作企図は同じであったと考える。上下の先端加工は長辺と短辺が互違いになる。鎌形木製品は、4点出土し、3タイプに分かれる。木目のラインが平行に入り、木取りに際し意識したと考える。1201は下端部を折損していたが、長さ23.5㎝で抉りは上端よりである。1203は下端部の大半は失損したが、抉りは上位にあり1201と同形と考える。1202は抉りは下端部寄りにあり、長さは21.3㎝の完形品で中サイズ。1204は1186土師器壺内の埋土洗浄により出土した個体で長さ7.2㎝で小サイズ。抉りの位置は上端寄りである。（なお、この個体は洗浄後自然乾燥）調整は側面をケズリによって行い、表裏は木目が圧壊した部分がないことから、側面調整前の状態のままである。棒状木製品は表皮を剝ぎ、一端をケズリ出して尖鋭にする。洗浄後に8個体を接合した。鍬柄等と同じ広葉樹を使用し、掘り棒の用途も考えるが、先端及び棒部分に使用痕はない。ただし、微細に観察すれば表面に繊維質の付着が交差する部分があり、緊縛固定して使用していたかもしれない。しかし、未使用の蓋然性が高い。また、皮が付着した状態の棒状木製品も出土した。実測時には木皮がこぼれて一部にのみに遺存したが、本来は全体に付着していた。節の切削のみ行われそのほかは未加工。接合作業の結果、個体としては2個体になる可能性もある。1209板材は腐食が進んだ個体であるが下端部に被熱痕跡があった。この板材の上には須恵器坏蓋・坏身が重なった状態で出土している。また、1209より小さく、被熱痕跡のある板材がもう1点出土している。加工木は断面長方形と半截円形の個体があった。

整理の過程で伊藤健司、上原真人、大城哲也、福本都治各氏にご教示・ご協力を賜った。記して謝意を述べるものである。

参考文献

1）奈良国立文化財研究所1993『木器集成図録近畿原始篇（解説）』資料第36冊
2）奈良国立文化財研究所1984『木器集成図録近畿古代篇』第27冊
3）建築部材に関しては147枠板の一部を除くすべてを財団法人　文化財建造保存技術協会大城哲也氏と福本都治氏に実見していただいた。本文中の建築用語はすべて大城氏と福本氏にお教え頂いたことである。また、西和夫1990『図解古建築入門日本建築はどう作られるか』、太田博太郎1982『奈良の寺々－古建築の見方－』岩波ジュニア新書43等の入門書を始めとして、法隆寺等寺社関連の書籍を参考としたが、一旦解体された建築部材の使用箇所を断定的にこれを論ずることは困難であると大城哲也氏と福本都治氏に指摘していただいた。なお、出土した建築部材は現存する社寺建築と比較すると総じて華奢な建物である。
4）成田寿一郎1984『木の匠－木工の技術史』鹿島出版会
5）大森健二1998『社寺建築の技術－中世を中心とした歴史・技法・意匠』理工学社

第６節　1299井戸と１井戸（大和川今池遺跡調査会1978年調査）の比較

1978年大和川今池遺跡調査会が調査を行った１井戸と（その２）1299井戸の祭祀形態の類似については本文で既述した通りである。ここでは、1299井戸と１井戸の具体的な比較を行うことで、本遺跡の井戸祭祀の典型的な事例を検討したい。

1299井戸

1299井戸については既述した通りであるが、まず、事実の再確認を行いたい。

1299井戸で出土した遺物は、実測図として示した個体は、須恵器坏蓋１点、坏身２点（内１点は坏蓋と１セットで出土）、提瓶１点、短頸壺１点、広口壺２点（内平底１点）、直口壺１点、土師器直口壺１点、高坏１点、壺（小）２点、短頸壺（大）１点である。また、図示していない破片として、広口壺口縁部１点、甕６点、壺４点、直口壺１点、短頸壺５点、甑２点（内把手１点）、焼土塊１点、須恵器甕３点、高坏２点、壺２点、杯蓋８点、坏身２点、そのほか器種を同定できなかった個体として土師器42点、須恵器１点がある。須恵器高坏脚部は脚部端部の細片であり、短脚長方形の透し入りの個体かと考えるが、細片で断定できない。砥石１点も出土している。木製品は木製品の基礎分析の項を参照されたい。

１井戸

１井戸は大和川今池遺跡調査会により1978年の第１調査区で検出されたやや東西に長い円形の井戸である。長軸2.8m、深さ2.0mを測る。断面形は漏斗形である。埋土は黒色粘質土を基本とする。ブロック構造をなす土層は上層の一部に偏った状態であったものの、人為的な埋め戻しなどは指摘されていない。出土遺物は細片といえど実測されており、出土遺物の組成の把握がされやすく実体が摑みやすい。この井戸からは須恵器杯蓋８点、坏身14点、高坏１点、鼈１点、壺蓋１点、長頸壺１点、台付長頸壺１点、平瓶１点、甕１点、土師器甕１点、高坏１点、壺（小）１点、壺（大）１点、長頸壺１点、甕１点、刀形木製品１点、鍬形木製品１点、板材１点、木片５点（内１点板材？）が出土した。井戸の調査は３段階に分けて掘削されており、上層に須恵器資料が、下層に土師器資料が集中するようである。出土遺物の内、鍬形木製品は長さ27.2㎝、幅0.6㎝、厚さ0.2㎝である。形態的には1201の鍬形木製品のタイプである。刀形木製品は下端部が折損している。残存長19.2㎝、幅1.3㎝、厚さ0.2㎝である。先端部の加工は削りにより、三角形の辺長は不均等である。遺物の出土は中層の土器資料が1299井戸とよく似た配置を示すが、下層は壺（小）と壺（大）の２個体を入子状態の土器があるほか、最下層では掘形に規制されて中央に集中した状態で出土している。

両者の比較

やや形状が違うものの、両者の組成で類似する土器資料は、土師器壺（小）２点、土師器壺（大）、土師器甕（1299井戸では細片であり、接合不可）、須恵器坏蓋・坏身各１点（ただし、量的には１井戸が多い）、須恵器平底広口壺１点、広口壺１点、板材、刀形木製品１点、鍬形木製品１点である。土師器壺（大）とした個体は１井戸では口縁部が直線的に外反する個体であり、厳密には違う。相違点はこれらの土器資料を除いたすべてであるが、１井戸にはⅠ－４～５段階の坏身は出土していない。また、須恵器高坏脚部、提瓶が１井戸には無いなど、出土遺物の組成で実際は相違点の方が多い。ただし、出土層位という文脈の中で把握するならば、1299井戸の上部が削平されているという条件付きで、１井戸最下層とされる資料に1299井戸資料の類似が偏ることに注目できよう。また、板材がそれぞれの井戸の

中で水平に置かれたような状態で出土する点と、1299井戸の板材が被熱により炭化している点で、板材に祭祀装置としての意味があったかもしれないことが指摘できる。

34土坑

この1299井戸から南に離れて34土坑がある。既述のとおり、調査終了時には井戸として把握が妥当かと考えた遺構である。井戸か土坑かという認知が必ずしも解釈の論理に矛盾しないことを前提として、琴を出土し祭祀性が強いと考える34土坑について少しく触れ、1299井戸・1井戸の比較材料としたい。

34土坑は実測図として示した土器に土師器甕（大）7点、甕（小）4点、甕（寸胴形）1点、壺2点、直口壺4点、手捏ね鉢1点、高坏16点（裾広とハの字の2タイプ）、製塩土器脚部1点、須恵器甕1点、須恵器坏身1点、須恵器高坏脚部1点、無蓋高坏坏部1点（高坏は同一個体か）、砥石1点が出土した。破片資料として、土師器甕49点、壺24点、長頸・直口壺口縁部6点、短頸壺口縁部18点（形態で分類可能）、高坏51点、製塩土器1点、坏（高坏坏部？）1点、甑？2点、焼土塊1点、須恵器甕18点、壺1点が出土した。須恵器資料の甕は、一個体に復元した個体と外面のタタキの違いにより別個体と考える個体の2個体を想定している。個体として全体の形状を復元できた須恵器は甕1点であり、そのほかはすべて細片資料である。遺物の出土状況は掘形に重なった状態ではなく中心部に向かって万遍なく出土しており、土器資料は投棄というより埋納されたように考える。木製品については、木製品の基礎分析の項目を参照されたい。34土坑では須恵器より土師器を多用しており、既述した1299井戸と1井戸とは違った土器使用の形態が瞭然であろう。

結び

ここでは1299井戸型祭祀が大和川今池遺跡内において、鏃形木製品・刀形木製品を使用した祭祀は2例であるため典型例というには逡巡しつつも、既出の一例である1井戸と符号する点を指摘した。今後、本遺跡内はもとより、他遺跡での類例増加を待って、1299井戸の検討を継続させたい。問題意識は、刀形・鏃形木製品と報告を行った木製品について調査した際に、2種の木製品の用途について刀・鏃の武器として戦闘的なイメージへの違和感にあった。1299井戸の出土木製品は農耕的風趣を感じさせ、このような文脈の下に斎串としての可能性を考えていたのである。460井戸には1299井戸の鏃形木製品とは形態が違う、斎串として報告を行った木製品が出土しており、今後の多面的なアプローチを課題としつつ擱筆する。

参考文献

1979『大和川・今池遺跡－第1地区発掘調査報告－』大和川・今池遺跡調査会

第7節　427井戸の基礎分析

427は調査区の東端、傾斜変換線ライン上で検出した井戸である。既述したとおり、平面形は不整形で、北西部を攪乱され緩傾斜に堆積した土層により上部は削平を受けており、やや掘り下げた部分から円形となることから、本来円形の井戸であった可能性が高いと考えた。この井戸の周辺には6世紀代のピットが北側にあるほか、南側には426・1291井戸などがある。以下、427井戸について事実報告を再確認しながら基礎分析を行う。

井戸の埋没過程

井戸から出土した土器資料は大きく分けて4層の埋土から出土した。最下層は地山ブロック土、下層は黒褐色粘質シルト、中層は黒褐色粘質シルト、上層は黒褐色シルトで、下層から上層までは均質な埋土である。下層ほど粘性の強い傾向があった。ラミナはみられず砂礫混入は上層で顕著である。

最下層では直口壺が出土した。この直口壺は頸部に植物繊維の付着があり、口縁の一部に欠損が認められることを根拠に釣瓶に使用したのではないかと考えた。植物繊維は幅5㎜程で細い。出土時に壺内に充填していた土は地山ブロック土である。

下層では土師器甕が5個体以上出土した。5個体以上と概数で記述したのは出土した口縁部の形状の違いから完形もしくは底部として復元した個体数が5を越える可能性があるからである。井戸中央ではほぼ重なるような状態で出土していた。筆者が取り上げを行ったが頸部には植物繊維等の付着物はなかった。土圧による圧壊が顕著である。出土した甕はほぼ接合関係を保っており、人為的な損壊は認めない。甕内部の埋土は外側と同じく黒褐色粘質シルトだった。

これに少しおいて上部中層では二重口縁壺の完形個体が口縁部を上向きにした状態で出土した。この個体は破片化していたものの接合関係を保っており土圧によって圧壊したと考える。注目すべきはこの二重口縁壺を取り巻くようにして出土した土師器壺体部片であって、この個体は上層で出土した二重口縁壺の体部片であった。内面を二重口縁壺に向けて包んでおり、粘質シルトであったため止水堆積層に落とし込まれた個体と安直に判断していたが、人為的に置かれた可能性の高いことがわかった。中層より上位では砂礫の混入が顕著となり、土の可塑性が低くなる。

上層では初期須恵器資料が出土した。北から樽形甕、二重口縁壺口縁部、甕、筒形器台の順番に並んでおり、井戸中央を宛然囲うようにして出土した。井戸周辺で祭祀を行った直後に埋納したのだろう。ただし、筒型器台の上に甕を据えて、それを現場で倒立させて祭祀行為の連続として埋めたわけではなく、配置を考えた上で新たに配置しながら埋納したというのが妥当な考えのように思う。中層以下からも複数の須恵器資料が出土しているが下層の土師器と上層の須恵器をほぼ二項対立的な祭祀装置と考えて使用したのであろう。脚付有蓋鉢は断面断ち割り時に埋土ともに取り上げてしまった個体であり、これらの初期須恵器資料に対置せしめて埋納していたと考える。包含層資料に口縁部の一部があったことから上部削平時に個体の流出が井戸外部にあったと推測する。須恵器資料の設置場所から祭祀行為はその埋納を確認しながら行ったと前提すれば西から東を向いて行ったのかもしれない。又、須恵器甕体部が窯変した資料も単体で出土した。この甕体部は完全に変形しており、窯資料と考えた資料であり、他の須恵器資料とは異質である。当初、この個体と少なからざる溶着資料が（その1・2）において出土していたこと、炉壁片と考えた資料が多いことから、瓦窯のみならず、須恵器窯の存在を古墳時代に憶

測したが、427井戸出土の須恵器資料について徹底的に実施した胎土分析においては陶邑産の結果が出ており、胎土分析の結果ではその可能性は否定されている。陶邑から本調査区は約12km離れており、これより北に展開するにせよ須恵器流通の基点としても位置的重要性は容易に指摘できる。

埋土・遺物出土状況から導き出せる井戸埋没過程は、最下層地山ブロック土で埋まる段階を始点として1）下層から上層までを一連の埋納行為とする2段階の過程と、2）下層の土師器甕を井戸機能段階の埋没として、中層から上層を一連の埋納行為とする3段階の過程を想定した。土師器甕を井戸の取水容器として把握し、土器の所属した土層を止水堆積層と前提した場合、後者の2）であった可能性が高い。一方、最下層の地山ブロック土を重視して、下層から上層までを埋め戻し行為と前提とするのであれば、前者の1）の考えが導きだせよう。すなわち、1）は祭祀行為の過程として埋没過程全体を一連の行為とした考え方であり、2）は井戸機能→祭祀行為として埋没過程を捉える考え方である。427井戸の調査に際し中層以下から完掘までを掘削したことによる経験的な感覚として、上層～中層と下層とそれ以下では分離した印象を抱いた。また、粘質シルトの粘性・堆積物の水平堆積が示す土粒構成と、中層以上に砂礫の混入が増加し、しまりが悪くなる現象がそれぞれ対比されたことを通じて2）の埋没過程を調査時から今に至るまで想定している。しかし、埋没過程には二様の考え方があることをここで提示しておくことで出土した土器資料のそれぞれの文脈が変容することを敢えて掲げた次第である。

土器資料

土器の組成は土師器甕、高坏、小型丸底壺、直口壺、二重口縁壺（大）、二重口縁壺（小）須恵器甕、樽形瓶、筒形器台、脚付有蓋鉢、弥生土器壺が出土した。

なお、上層において古墳時代包含層の除去を完全に行わなかったため、遺物混入という不適切な調査結果を残した。よって、個体の分離作業は整理によるものである。

土師器直口壺は体部外面はハケメ、底部内面は指おさえ後工具によるナデ、胴部内面はナデ調整、口縁部はヨコナデを施して丸く仕上げる。

二重口縁壺（上層資料）は胴部最大径以上から口縁部にかけて出土した。体部と口縁部に被熱痕跡があり、器表面の急激な温度上昇により破損したかもしれない。それは口縁部の被熱痕跡に特に顕著であり、口縁部のやや下側に加熱物が接触したのであろう。火気により被熱したのではなく、加熱した固体が接触したのかもしれない。また、口縁部凸帯の下には縦描き1本の線刻が2条ある。既述したように、口縁部と体部は上層と中層に分離した状態で出土している。

土師器甕長胴化が進んだ段階の資料である。外面にはハケメ、内面は指押さえ或いはハケメを施す個体があった。その中でも最も長胴化の進んだ個体は下層において土師器甕底部片の上にあった個体である。口縁端部内面にわずかな凹みがあるものの丸くおさめており、内外面のハケメも荒い。先に述べたように、口縁部の形態から図示した個体の実数より、若干増えるであろう。

脚付有蓋鉢は坏部に竹管文と櫛状工具による施文を施す。口縁端部は断面部分が僅かに遺存した部位により丸くおさめていたと考える。坏部の施文は凸帯により3段に分かれる。上段は竹管文と波状文を施文する。波形上部に二段の竹管文2箇所を施し、波形下部に竹管文1箇所を施す意識はあったようだが厳密ではない。中段は二条の波状文とその間に竹管文を上側波状文の波形下部に合わせて施文する。坏部下側の側面下部にはおそらく波状文を施文した工具と同じ工具を使用して、2条の紡錘形を連続した幾何模様を作りなし、その紡錘形に縦に1条あるいは2条の櫛描きを施して文様帯をつくる。縦1条、

2条は隣接する紡錘形で交互に施すことを指向する。施文全体の印象は幾何模様として均整のとれた布置ではなく、全体に乱れた感があるものの、平滑に整えられた器表面において紡錘形の連続は優美を作りなしている。脚部は凸帯により上下2段の施文を施す。上段は円形スカシ6方、下段は長方形スカシ3方にそれぞれ施される。上段の波状文帯は2条、下段の波状文帯は1条である。円形スカシは外面からの貫入法によるスカシであり、内面の余分な粘土は取り除かれずそのまま焼成されていた。一方、下段の長方形スカシは面取りにより丁寧に整える。坏部下段の櫛描き文は高坏形器台坏部に施文されるコンパス文あるいは組紐文と同じく特異な施文である。下段櫛描き文は円形による僻邪思想のような形状から眼球を表現した邪視文の一種かと考えた。古代の土師器甕に描かれた写実的な顔貌や、形象埴輪と違い、抽象度が高いものの、この紡錘形の連続は人間の眼球を表現したものか。拡張区緩傾斜では（その1）で出土したコンパス文高坏形器台の同一個体破片が出土しており、この傾斜変換線上で「重要」な古墳時代祭祀が連綿と行われていたことを想像するのは容易いことである。

筒形器台はほぼ完形品であり、脚部の一部に欠損がある。接合関係をほぼ保った状態で出土しており、土圧により埋土中で破片化したのであろう。凸帯はやや丸みはあるというものの鋭角である。脚部の一部が掘削時にみえたことにより、本遺構の特殊性が調査の過程で認識された。

須恵器甕は、口縁部は凸帯が一条巡り端部は丸くおさめる。内面は無文当て具を使用したと考える。内面体部上半はナデにより平滑に整える。外面は平行タタキ後、丁寧にナデを施して器表面を整えており、一部でタタキの痕跡が観察される。

土師器二重口縁平底壺は外面ヘラケズリ後ハケメ、器表面の損耗が顕著、内面はハケメである。外面体部下半は粘土接合痕跡が明瞭で、器表面の所見から総じて丁寧な調整があったとは考えられない。胴部の一部に被熱痕跡があり、これが器表面の損耗を促進したと考える。

須恵器樽形瓶は体部と円形に整えた粘土板を接合し、口縁は貫入法による接合法を取る。外面はナデ調整により平滑に整えて緑灰色の自然釉をかぶる。樽形瓶は他に2点の破片が出土し、この2点は同一個体の可能性もある。

出土した資料は、土師器の多い傾向のあった34土坑や土師器と須恵器の組み合わせを重視した1299井戸とは違い、井戸の埋没過程に合わせて、土師器と須恵器の量比が逆転することが指摘できる。微視的にみると出土した土師器・須恵器は特定器種に各埋没段階毎に偏る傾向があり、周辺の生活域から土器資料が埋没に合わせて井戸に落ち込むという環境より、選択された土器資料が井戸の埋没に連動して出土する傾向がこの点から言えるのではないかと考える。各井戸の差異化をはかることによって、出土遺物の組成を前提とすれば時期差もさることながら、祭祀形態が全く違うのである。

ここで、先の埋土による埋没過程を出土した土器に当てはめて単純な図式を作ってみよう。そうすれば埋没の変遷を一つの盾を両面から検討することができる。最下層から記述すると、土師器直口壺→土師器甕→土師器二重口縁平底壺→須恵器甕・須恵器筒形器台・須恵器樽形瓶・土師器二重口縁壺となる。先に記述した下層から中層の分断は、遺物の出土状況にも反映しており、土師器甕の掘形中央における集中性から、配列を意識した中層以上という単純な図式が完成し、わずか2.62mの深さの井戸であるため短絡の傾向があることは認めつつ、土師器直口壺から土師器甕、土師器甕から土師器二重口縁平底壺への、非連続性が指摘できる。

なお、脚付有蓋鉢の体部に施された櫛描き文を邪視文と推測したが、邪視は本来穢れを怯れて僻邪を目的としており[1)]、本例は抽象性が高く一考を要する。かような抽象性は具象性を忌めて故意に抽象的に

するか、稚拙なために図形認識が抽象的になるか、どちらかだと思うが、本例の場合規則的に配された竹管文をみても前者であった可能性が高い。土器に施文された図形が示す象徴的な世界観と、この場所で行われた祭祀にこめられた効果への予期的なメッセージが427井戸から認知できる。

類例比較及び残された課題についてはいずれ稿を改めて記述することにしたい。

註

1）南方熊楠1971『南方熊楠全集』第1巻　平凡社

第8節　128井戸の検討

128井戸及び170井戸では、最終堆積に近いと考える埋土から多量の遺物の出土があった。これらの井戸は、何らかの祭祀を行った結果と考える。128井戸が区画正面、170井戸が新旧の区画溝の交点に該当する場所に設置されており、井戸機能時は勿論のこと、井戸が廃絶され区画溝設置に際しても147井戸と同様に位置的に重要な場所にあったと考える。井戸で行われる祭祀行為を土器の一括性、完形に近い個体を目安とするとほぼすべての井戸で行われたことになるが、本文中実測図に示したとおり、井戸廃絶に伴う祭祀として出土遺物を把握できたのは128・170井戸の2基である。ここでは、128井戸について取り上げ、（その2）で検出した井戸の典型的な祭祀の実体に検討を加える。その方法としてまず、1）出土遺物の概観を行い、2）そこで行われた祭祀の実体について比較検討を行う。

128井戸の遺構説明に関しては筆者が本文の記述を行ったが、事実報告を主眼とした本文に比べて、以下の文章は大同の関係にあり、より主観性を強めて記述することを予め断っておく。なお、土器の個体番号は本文に対応する。

128井戸の基礎事実について

出土した瓦器椀はほぼ完形10点、70%以下の遺存率の瓦器椀は5点である。内、高台が剥離した個体が2点ある。見込みの暗文は斜格子が9点、斜格子に平行暗文付加2点、ハケメ後斜格子2点（内1点は摩滅のため斜格子か不明）、不定方向1点、不明1点である。

641瓦器椀は見込みに線刻が数条あり、針のような尖鋭な道具の痕跡と考える。

631瓦器椀は被熱痕跡が明瞭で、外面は器壁が炭化している。また、高台は火熱により剥離する。

こね鉢を中心とした土器資料群とやや遊離した関係にある632は土層の見解と合わせて考えるならば、同時期の埋納ではないかもしれない。ただし、こね鉢周辺の土質と632瓦器椀の所属した土層は根本的に変わるものではない。

瓦器破片は10点出土し、口縁部もしくは体部で、底部・高台はない。摩滅した個体もあるが、基本的には完形資料と同じく、遺存状況のよい資料であり、土層中の移動・使用による擦過痕などが認められない。完形もしくはそれに近い瓦器椀はすべて上層に集中しており、破片もこれに伴っている。

土師器脚台付皿が6点出土し、1点皿部が欠損する以外はほぼ完形の個体である。器表面のナデ痕跡及び粘土接合痕ともによく残っており、器表面も1点を除いて精微に整えられる。この内、欠損品1点は、破片となった皿部分が摩滅しており、脚完形品の土器より残りが悪い。しかし、全体的に作りは精緻になされ、白色の精良な粘土を使用した優品である。口縁部の屈折は土師器「て」の字状小皿にみられる手法と同じで、端部を皿内面に対し直立させて丸く仕上げる。

土師質羽釜は体部を欠損しており、口縁部から体部上半にかけての破片が出土した。被熱痕跡は明瞭である。このほか、細片で体部片と考える個体1点と羽釜と認知した細片1点がある。

土師器耳坏1点が出土した。一部欠損しているが、割れ口は新しく出土時のものと考える。

東播系こね鉢1点は注口を欠いた個体である。被熱痕跡が明瞭で全体が黝み、出土時には煤の付着があった。このこね鉢は出土時、内面にイネ科植物が輪状に付着し、こね鉢下にもイネ科植物が敷かれるような状態であった。

土師器皿は大皿と小皿に分別でき、大皿と考える個体は2点、小皿3点、分別できないが皿と考える

個体2点である。大皿の底部と考える個体1点は口縁部を欠いた円形の破片であるが、いずれも個体識別が困難な細片である。土器組成の中で積極的な評価はできない。

このほか、中世須恵器甕1点、黒色土器2点、飛鳥時代坏身1点、奈良時代甕破片1点、古墳時代須恵器7点、古墳時代土師器7点、須恵器片5点、土師器片20点が出土した。

これにこね鉢の中にあった瓦器椀の間から出土した木製品（削り木）1点が加わる。木製品の項で触れた通り、「香木」かもしれないという問題意識から樹種鑑定を行った結果、松と判断されて香木ではないことが判明した。

出土した土器資料はすべて上層に所属し、井戸下層、地山ブロック土出土として位置づけられる土器資料は細片とはいえ出土していない。

また、128井戸は微化石分析を行った。土壌サンプルはこね鉢底部直下の土層から採取した。井戸埋土の分析は128井戸一基であったため、（その2）内で検出した井戸と比較ができないが、分析の結果、ツユクサ属及びキュウリ属の花粉化石が大量に検出されており、「花は夏から秋にかけて咲く」ころの土器埋納の時期と、「多量の花」を井戸に入れた可能性が指摘されている。

128井戸の埋土は、遺物の出土状態とともに記述してきているが、中層から下層は地山ブロック土と黒褐色シルトの混合土である。埋没の断絶は認められず、最下層でも通常の井戸のように止水堆積層は確認できなかった。井戸浚渫や再掘がなければ、最終埋没段階の土層所見は下層から土器資料を包括する土層までほぼ一時に埋没したのでないかと判断される。こね鉢底部に接して土層は上下に分かれるようであるが、上層の黒褐色粘質シルトとの分界のようには明瞭ではなく、地山ブロック土に対する黒褐色粘質シルトの割合によるしかない。（実測図には想定線を描出していないが、断面の土層3に平行するラインが下層ブロック土との差異である。）ただし、こね鉢に接する瓦器椀の重なりはほぼ水平方向であることと、土器資料取り上げを行った際の所見から井戸埋め戻しと土器埋納の作業工程を分離して考えている。また、こね鉢より上層の埋土は黒褐色粘質シルトで、粘性がつよく有機質に富み植物繊維を多く含有していた。当初、止水堆積層かと考えた土層であったが、確証はない。土器資料がこね鉢と同位もしくは下ではなく、上部に固定してほぼ並んだ状態で検出されている以上は人為的な埋土の可能性もあるだろう。さらにその上で検出した瓦器椀資料632ではこね鉢内面のとは違う根状の植物繊維が付着しており、これを井戸埋土上面からの植物の根と考えるならば、先に記述した通り、632はこね鉢などの個体と別に考えなければならない。しかし、土器埋納行為の一過程と位置づけるならばこの分別も意味がなくなる。

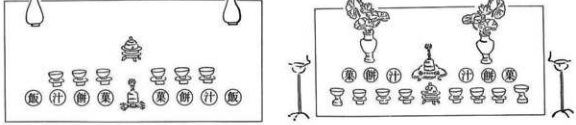


図292　密壇供配列図（左：天台宗、右：真言宗）

ここで、主観的判断であることを前提として、井戸埋没過程を論じれば、井戸掘削から埋没までは、土器埋納行為までの一連の作業を含めてきわめて短時日で行った可能性が高いと思う。これは、土器資料の細片と完形個体及びそれに準じた個体の出土層位が上層に集中し、下層資料が混入としてすら認められない点からも支持できるのではないかと考える。

128井戸をめぐって

128井戸の意味は一体何か。

次に、筆者が128井戸の評価に際して考えた事を類推的に考察してみたい。

考古学的には、出土した遺物の類例集成による位置づけを行って初めて当時の文脈の中で128井戸出土遺物の評価が可能となる。また、以下の記述中の各宗派及び各作法の教義において概念の把握等不十分な箇所が在るかもしれない。が、これらは今後の課題として128井戸に関して問題提起をここでは主目として記述を行おう。

中世では、信仰上はもとより、民間に広く行われた治病、除疫、除災、鎮宅など、生活の諸相に応じて祭祀が行われた。128井戸に関係して以下の意味が該当するのではないかと考える。

a）井戸鎮め

水野正好氏[2]は井戸の埋め戻しは「埋めた日が悪かったり、手続きが間違っていたら駄目」で、「災難の原因を井戸に起因し、慎重な呪いをやって不幸の起こらないよう」、埋め戻しに際して行った儀式とされた。128井戸は最終的な断ち割りにおいて湧水層と考える砂礫層まで掘削を行っていることから井戸であると考えており、普遍的に事例がある井戸鎮めを行った可能性は高い。

b）土公供

土公供とは木下氏[3]によれば、「密教の修法には六字河臨のように陰陽の儀式に習い、あるいは擬し、あるいは取り入れているものがあるが、「土公供」もまたその一つであろう。土公祭はもと陰陽道の鎮祭であり、方位神とともに土公をめぐる方位の犯土は命までうばうものとして忌み嫌った。したがって在家の居館邸宅を建てるにあたっては、まず陰陽師に地相を見さしめ、方位神のめぐる方位を見定め、土公の在所を確かめてから犯土の祟りがないように手厚く土公を祭り、土地を乞いうけてから、工を進めたのであった」とされ、陰陽道の土公祭が密教の地天供に影響して成立したとされ、「一般在家の地鎮」に多く用いられたという。土公供は居所を季節によって決め、土地改変に伴う禁忌を約定した。御幣を用いて五穀の粥を供するとされ、早くから在地の人々の要請に応じ密教の阿闍梨が地鎮めをつとめたとされる。

また、水野正好氏[4]は高野山金剛峯寺宝性院跡の発掘調査で検出した遺構を検討して河内千手寺・木下密運師架蔵本にかかる屋敷地取作法の実修ではないかと考えた。屋敷地取作法によれば、1）「屋敷地点定するこの作法は、まず家の大小により土地の四方と中央の五所に長さ八寸、広さ一寸二分の札が樹てられる」、2）中央と四方に梵字と各文句をしたため所定の位置に樹てる。3）「この四方・中央の札の許には五色一五穀粥、切華、抹香、散米、味支の五膳を盛った折敷を据える。中心には七条袈裟を敷き、中央の札を袈裟上に置き、別に膳を据え大土器一つを用いこの地の聖性を表示するとともに、特別な意味を持たせるのである。」4）導師は七条袈裟上に麾を執いて、呪儀が始まるとされ、一連の呪儀作業ののち、5）「屋敷地として画した四方の札のたつ各辺に七杭を指し、東西南北各七行、縦横に水縄を張り四九坪を作る呪作がなされる」とされ、吉坪と凶坪に土地を区分した後、6）「水縄を張り

出した四九坪には吉坪に白紙を挟んだ真野竹が、凶坪には青紙を挟んだ真野竹が指され、やがて凶坪の土を厭ですくい折敷に入れて玉女の方に捨て去り、悪土をもつ凶坪は善土を具えた吉坪と化する」とされる。

すなわち、中心と四方を点じて、屋敷地を画して地神に乞い、後、地を東西七行、南北七行、計四十九坪に分かち十二運に配して、吉凶の坪に分け、凶坪の悪土を除くことで全坪－屋敷地全体が吉地－善土と為るという呪儀に屋敷地取作法の作業として水野氏はまとめておられる。水野氏は考古学の事例及び文献の事例を幅広く渉猟された一連の作業により、土公供その他のまじない・まつりについて論及されており、高野山金剛峯寺宝性院の事例はその一例である。12世紀後半から13世紀前半は観音堂廃寺の創建など同地を巡って周辺環境が激変する一大画期にあたり、128井戸はその段階にあって、土公供として行われた可能性は十分あると考える。

c）宅鎮・安鎮

宅鎮・安鎮は家に関係して行われ、後述する完形土器出土ピットが該当すると考え、128井戸についてはその位置的重要性について指摘できるのみである。

d）結界・境界

土地の境界線をめぐっては道饗の祭りとか四至のまつり等が行われることが水野氏[5]により指摘されており、結界・境界で特定の地域と他の地域の境界を画すために行われる。128井戸は堤防近くで検出し、11落ち掘形で検出された上、127溝の存在など後世の攪乱が顕著な地域にあり、位置的重要性については、区画溝南正面にあるということが指摘できるに過ぎない。

e）地鎮・鎮壇

嶋谷氏によれば[6]、「一般に地鎮・鎮壇と組み合わせた語で呼ばれるが、真言系（東密）では厳密には基壇を築き、建物を構築する以前の土地そのもの（更地）を開拓する際の修法を地鎮、土地を拓いた後、基壇を築き、建物の床板を張る直前の修法を鎮壇と区別され、天台宗（台密）では地鎮のみであり、鎮壇の用語は使用」しないとされ、用語は区別して使われる。『建物建立曼荼羅及棟撰地法』には五宝、五薬、五穀、五香を賢瓶に入れ、五色の糸を使用して土地の中央に埋めるとする事例が記載されるが、密教の社会的浸透に伴って密教諸派が細分化しており同書の事例もその一事例として把握することができるであろう。岡崎氏によれば密教法具は平安時代後期には現在に近い大壇供の成立があったとされる。密教は空海による体系化の過程を経て、大衆化・庶民化していき、祈禱法や法具とて例外ではなく、「あらゆる庶民信仰と習合」していくことを木下氏は論じた[7]。また、嶋谷氏は11世紀以降真言系の地鎮と鎮壇が簡略化されて一括されることを指摘されている。

密教法具[8]は殊更申すまでもなく壇立てとともに加持祈禱の修法を行うための法具である。128井戸から出土した瓦器椀・土師器脚台付皿は密壇供の上に火舎とともに用いる六器に似る。六器は火舎から閼伽、塗香、華鬘の順に盛って供養するとされる。六器の形は大体において類似するとされ、高台付きの小鋺に茶托様の台皿を具し金銅鋳造の素文で、蓮華文で装飾するものもあるとされる。閼伽は功徳水とも呼ばれて仏前に献じられる一種の聖水である。井泉から閼伽桶でこの水を汲みこの六器（閼伽器）に盛られる。ただし、128井戸出土の土器資料は土師質・瓦質であり、金属製ではない。火舎は香炉の一種で、四面器（火舎１、六器６、花瓶２）中の焼香炉である。瓦器椀の中には、被熱により炭化した個体と見込みに線刻の使用痕のある個体があることは既述したが、この場合、瓦器椀被熱痕跡の原因は外面から強烈な火気を受けたためであり、これに関係するのかもしれない。井戸中央から出土したこね鉢

は、一括して出土した土器資料の中心的な位置を占め、既述した「大土器」の問題を含めて埋納に際し象徴的に操作して用いられている。このこね鉢は被熱痕跡が明瞭であった。口縁部の欠損は破砕痕跡がないため個体表面のどこに圧力がかかって割れたか、また、欠損が被熱に依るかは不明であるが、土師質羽釜とともに火気に触れたことは間違いない。また、六器と同時に用いられる花瓶は本来宝瓶の意で香水を入れる器であったとされ、火舎香炉と同じく修法に用いられる。法具と否とにかかわらず、花瓶は65溝から出土した瓦質土器が該当するかと考え、器表面の調整はナデの痕跡明瞭、高台は手捏ねによって一部整形し、胎土は白色石粒を含有する。総じて作りが荒く128井戸から出土した土器資料とは異質である。

ただし、ここで述べた瓦器椀・土師器脚台付皿が六器に似るというのは形状の認知の問題であり、修法との関係は類推以上を出ない。ただ、この前提が有効であるならば微化石分析によるキュウリ・ツユクサ属の花粉検出も夏期限定の意味のある修法に関係したかもしれない。

既述したとおり、破片を含めた土器一括資料が上層に集中する現象は、裏返せば長期使用による土器の混入を目安とした生活痕跡が井戸埋土とともにほとんど認められないわけで、土器埋納に至る一連の埋め戻し行為完結は、祭祀性が強く感じられるという点において提示したａ）～ｅ）の解釈の中で調査と分析を進めたのであった。

128井戸の位置あるいは墓・「地鎮・宅鎮」ピットについて

128井戸の「位置的重要性」について指摘したが、それではその他の遺構についてはどうだろうか。墓・「地鎮・宅鎮」ピットについて最後に少しく触れてみたい。

墓として把握できる可能性ある遺構は442土坑である。442土坑は65（東）溝肩に接して検出されており、南側を溝埋土に切られた状態にあった。位置的には後の区画溝南面といえるが、特定位置として重視して考えられる要素はない。この土坑は二重の曲物の中に刀子と考える鉄製品１点、土師器・瓦器小皿完形品を納める。骨片の出土はなく、脂肪酸分析は行わなかったため確証にかけるが、主観的判断を推し進めれば、所謂屋敷墓として小児棺の可能性があると考えた遺構であった。土坑底に接して検出した砂礫は土砂加持に関連するかということも合わせて考えていた。442土坑は65（東）溝掘形に南部分を削平されており、少なくとも溝掘削段階で重視されたとは考えられない。

完形土器出土を発掘調査の作業工程に左右されない（勿論出土状態を把握して掘削したピットが大半であるが、例外的に出土状況の把握を行う前に遺物を取り上げたという条件に影響されない）、地鎮・宅鎮ピットの把握の目安として用いるならば、このピットの分布は第３節に示したとおりである。これらのピットは一個体から複数個体を納めるピットがあり、また、ピット法量の分類によって細分が可能である。区画溝に沿った箇所や東半ピット集中部での完形土器出土ピットはあるが、位置的重要性に関連して記述できる内容をもつピットは把握していない。地鎮・宅鎮の範疇で考えたピットで、分散こそ指摘できるものの、集中性、方位、位置的特質などの属性では特筆すべき傾向はなかった。

結

ａ）～ｅ）までが128井戸の意味について考えたことである。述べてきたところは、現在までのところ単なる土器形状の認識論に留まっている。ｂ）あるいはｅ）についてはこれを前提とした場合に、例えば128井戸の解釈、例えばその後の観音堂廃寺の変遷に関して飛躍した話が可能ではある。が、今後

の類例収集作業、自らの力量の蓄積を以って結論を出すことにする。

註

1）蔵田蔵編1967「仏具」『日本の美術』第16号
2）水野正好1978「まじないの考古学」『どるめん－特集中世のまじないの世界－』第18号
3）木下密雲・兼康保明1976「地鎮めの祭り－特に東密土公供について」『柴田實先生古稀記念日本文化史論叢』、木下密雲1984「呪符資料にみる密教の庶民化」『密教美術大観　第４巻』、木下密雲1984「中世の地鎮・鎮壇」『古代研究特集地鎮・鎮壇』28・29
4）水野正好1982「屋敷地取作法と地鎮の考古学－高野山宝性院発見の遺構をめぐって－」『高野山発掘調査報告書－奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門－』また、これ以外に水野正好1983「屋敷と家屋の安寧に－そのまじなひ世界－」『奈良大学紀要12』、水野正好1992「「土」と地鎮と」『長岡京古文化論叢II』等、近世に至る考察があり検討に際しての基本文献とさせていただいた。
5）水野正好1978「まじないの考古学」『どるめん－特集中世のまじないの世界－』第18号
6）嶋谷和彦1992「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究』III
7）木下密雲1984「呪符資料にみる密教の庶民化」『密教美術大観　第４巻』
8）岡崎譲治1984「密教法具」『密教美術大観　第4巻』、阪田宗彦1989「密教法具」『密教法具』第282号、蔵田蔵編1967「仏具」『日本の美術』第16号、関根俊一1989「菩薩と堂内の荘厳」『日本の美術』第281号

第９節　１粘土取り穴の検討

近世粘土取り穴は２箇所で検出された。（その１）では２土坑の以北で、（その２）では西半中央でそれぞれ地山粘質シルトの採取を目的として掘削されている。

（その２）では１粘土取り穴と11落ち・２溝の切り合い関係を確認できなかったが、（その１）東壁断面において、２土坑が埋まった後、粘土取り穴が掘削されたことが判明している。また、（その１）粘土取り穴は（その２）の１粘土取り穴と同じく、不要分の地山ブロック土を埋め戻しに使用していた。（その１）２土坑及び（その２）11落ち、２溝に対して、位置的に異なる場所でそれぞれの粘土取り穴が設定された点にも着目でき、類似点が複数あることが指摘できる。

（その２）の遺構説明において、事実報告と若干の類例比較を本文中で行ったが、ここでは（その２）１粘土取り穴について、粘土採掘を主題として記述を行う。

まず、粘土取り穴で採掘された粘土の量について記述する。粘土取り穴底面には長方形を単位とする地山隆起を検出しており、これをもとに掘削した土量の算定を行ったものと考える。粘土取り穴の計算式は二通りを試算した。１）底面で検出した地山隆起の長方形を単位として土採掘対象外だった箇所の標高差によって土量を出す方法、２）底面で検出した地山隆起の長方形を単位として地山の隆起の標高差による区画部分の土量と全体を巨大な立方体として試算した土量を合算する方法である。この方法によって粘土取り穴上に図形を作成して二通りの計算式を作って作業を行った。周辺地山の平均標高はT.P.＋8.57mとして計算を行う。全体土量は１）では288.85㎥、２）では350.75㎥となる。実数値は２）では各立方体の計算式が煩雑であり、底面の標高が不均一な数字となることから１）計算式の方が実数値に近いと考える。また、各長方形の小単位の土量は、各面積と比例の関係にあるから、面積の相違により土量は違う。

実際の土量検測作業の数式としては１）の方が把握しやすい。これは当時にあっても同じであったと考え、土量試算にあたって長方形の単位をまず個別計算した後、総量の計算を行って、全体的な数量の把握が行われたのであろう。つまり、土採掘という目的を達成するための計画は長方形を基準とした単位として行われ、総和（目的土量）から各単位をつくって作業したのではなく、各単位の累積を総和として掘削したと考える。２）の場合では、全体を掘りだしてから一旦土量試算のための長方形の単位を個別に作っていかねばならず総量として土量獲得目的が達成される工程で度々中断しなければならない。その点、１）の作業では一切の無駄が排除されて、労働を集約して行うことができるであろう。

注目すべきは、粘土取りをするにあたって、中世の区画溝部分と重なる部分がなかったことである。まるで、あてはめたかのように溝埋土がある箇所は忠実に避けて掘削されており、粘土取りの目的でおおよそ無駄となる溝埋土の掘削は行わず、作業は粘土が遺存した箇所で経済的に行われている。大和川堤防外で粘土取りを行った場合は周辺耕地への影響があって制約が大きく、地主・地権者の了承を得にくいものと思われ、これが河川敷内であればその点の懸念は減少するわけだが、きわめて効率的に掘削対象が選好されていたといえる。試算１）土量288.85㎥として一人一日1.2㎥とすれば作業に要した延べ人数は240.70人であり、一日20人の作業では12日間の作業量である。断面の所見により粘土取り穴埋没過程で自然堆積物を確認していなかったことから実際の作業は雨期・増水期を避けて短期間に一気呵成に掘削されたのであろう。その際、労働者の管理という点でも当然集約的管理は行われた筈である。選地から労働集約に至る各工程が綿密に計画されたことが実証されるように考える。

また、（その1）粘土取り穴は、（その2）と同じく長方形を単位として掘削が行われており、調査区より北側は攪乱により不明であるが、2土坑に近接して掘削している点が注目できる。この場合、厳密には、2土坑の掘形北側を切って掘り込まれているため、作業としては地山シルトの掘削から少し外れた場所で作業を行っている。しかし、2土坑に該当する場所を避けて掘削されている点で注目でき、2土坑の埋土観察から粘土採掘試掘坑の痕跡を確認していないため、2土坑と粘土取り穴の位置関係についてはその認識が施工者にはあったかもしれない。これは2土坑に沿って効率的に掘削がなされていること、2土坑の上層堆積である細砂は大和川が供給源であり、一部には18～19世紀の土器が出土することから、少なくとも細砂により埋没するまでには地形的な凹部としての溝の認識があったかもしれないということを前提としている。また、溝・土坑（落ち）を使用した世代と粘土採掘した世代がそう離れないことも原因かもしれない。ただし、（その2）で検出した2溝を切る151溝は2溝の直上であった。溝と呼称した151溝の埋土は地山・シルトブロック土であり、しまりが悪く新しい感のある土であったため、こういった遺構が当時の「試掘坑」であった可能性もあながち否定できないのではないかと考える。

粘土取り穴の埋土は（その1・2）ともに3層を基本とすることは先に記述したが、大和川流水砂が不均一に堆積した箇所はなく、下層ではブロック土が顕著であったため、不要粘土及び不要土の埋め戻しがきわめて迅速に行われたと推測する。また、埋め戻し後の転圧作業はせいぜい人夫の体重程度であったと思われ、これが後々まで地盤沈下の現象を引き起こしたのではないかと考える。つまり、粘土取り後の土地利用（耕作）をたいして意識しない最小限の労力による埋め戻しだったのではないかと換言できるかもしれない。

ことほどさように粘土取りの効率性を重視した集約型の作業をここにみるのだが、掘形のラインで考えても、蛇行ではなく直線的に計画して単位の基準を重視しており、計量しやすい直方体という形状の規制が働いたのだろう。

終わりに

粘土取りに際しての作業は、選地・目的土量の決定－表土の除去－粘土掘削－土量把握－埋め戻し－放置の順にあったことが想定される。そして、土取り作業の数量化は粘土使用目的の条件合致のほかに、人夫の作業量確認の視覚化が目的であることがわかる。既述のとおり、粘土採掘における目的は多様であり、それぞれ個別に検討されなければならないが、大和川今池遺跡で検出した事例では特に作業の集約・効率性が重視された点が指摘できるのではないかと考える。同地において土地変遷の過程を考える上で本遺構は重要な位置を占めており、「大坂」での粘土取りの一事例と念頭において記述を行った。

参考文献
五十川伸也　1991　「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ－京都大学病院構内遺跡の調査－』

第10節　調査成果のまとめ

（その１）まとめ

（その１）の調査成果をまとめると、以下のようになる。

1．弥生時代以前の自然流路を検出した（87溝）。遺物は出土しなかった。

2．弥生時代の石鏃が出土し、この時期の狩猟の場として利用されたことが推測された。

3．古墳時代中期の土坑群を検出した。

4．古墳時代中期の井戸とおもわれる土坑を２基検出した。内部から土器類とともに滑石製臼玉が出土した。内部に炭化物を含み、周辺に住居など確認されていないことから祭祀用土坑である可能性が考えられた。

5．包含層から初期須恵器が出土した。

6．条里地割り以前の溝２条を検出した。時期は不明であるが、埋没後掘り直されていることがわかった。

7．７世紀の土坑から須恵器杯が出土した（12土坑）。

8．南北方向の柵列がみられた（13柵）。条里地割りによると考えられるが性格は不明である。

9．難波大道は条里坪境以外には関連の遺構が確認されなかった。

10．はやければ古代、遅くとも中世段階には条里水田化されていることがわかった。また、東側の集落に関連すると考えられる土坑（11土坑）内部から13世紀頃の瓦器椀が多数出土した。

11．中世の坪境に接して大型の土坑を検出し、水溜と考えられた（６土坑）。埋土から出土した擂鉢により埋没の時期は16世紀前半と考えられた。

12．中世以降の南北坪境（摂津・河内の国境）として畦畔が、東西坪境として溝がみられた（４溝）。水路として利用されたと考えられる。また坪境交点には溝に接続する大型の土坑がみられ（２土坑）、やはり水溜として利用されたと考えられた。

13．1704年の大和川付け替えにより、条里水田は放棄されたことがわかった。以降に遺構面で畝立てを確認し、河川敷を畑として利用したと考えた。

（その２）まとめ

1．縄紋草創期の有舌尖頭器が出土した。

2．包含層等から弥生式土器が出土した。

3．（その１）で検出した古墳時代前期～中期の土坑群の続きを検出した。

4．５～６世紀の井戸・土坑・ピットを検出した。これまでの調査では５世紀前半の段階の土器資料は確認されていたが、今回の調査で集落を同地で営んだことが確認された。

5．７世紀の溝・ピットを検出した。1995年大阪府教育委員会の調査で検出された井戸を含めて同地で飛鳥時代の集落の存在が推測された。

6．８世紀の溝が検出された。

7．10世紀のピットが検出された。また、９世紀代の遺物も少なからず見いだせることから、（その２）微高地上に中近東に見出されるテルの如く、連綿と集落を営んでいたことが分かった。

8．11～12世紀の井戸・ピット、13世紀～14世紀の区画溝・溝・土坑・ピットが検出され、平安時代末

から観音堂廃寺を紐帯として徐々に集村化していく過程が明らかとなった。14世紀中葉から後半にかけて方形区画溝は廃絶され、15世紀に条里に沿った溝が廃絶された後、新たに溝が掘り込まれて、この溝が17世紀初頭頃の完全に埋没する段階には周辺一体が耕地化されていることが明らかとなった。この後、（その１）に連続する灌漑用水路及び井戸の機能も合わせ持った水溜施設が設定され、大和川が同地へ付け替えられるまで田地の光景が拡がることが想像された。